

櫛形町文化財調査報告 No.3

六科丘遺跡

——山梨県中巨摩郡櫛形町六科丘遺跡発掘調査報告書——

1985

櫛形町教育委員会
六科山遺跡調査団

六科丘遺跡正誤表

項・行	誤	正
例 言	御教示	御教示いたいたいた。
掲図目次	14号住居址〔1/80〕 14号住居址掘り方及び炉址 〔1/80・1/40〕 15号住居址〔1/80〕 古墳出現の地もある	14号住居址〔1/100〕 14号住居址掘り方及び炉址 〔1/100・1/40〕 15号住居址〔1/60〕 古墳出現の地である
P 5 L15	掘方底面	掘方底面
P 43 L7	掘方は	掘方は
P * L10	側方	側方
P 51 L11	14号住居址〔1/80〕	14号住居址〔1/100〕
P 64 キャブション	14号住居址掘り方及び炉址 〔1/80・1/40〕	14号住居址掘り方及び炉址 〔1/100・1/40〕
P 65 キャブション	15号住居址〔1/80〕	15号住居址〔1/60〕
P 67 キャブション	●横円形	○横円形
P 163 キャブション(図165)	最後にC類は	最後にC類は
P 168 L19	六科山古墳	六科丘古墳
P 184 L1	北極区	北極區
P 187 L25	残っている。は込み得なかった。	傍点部削除
P 188 L6	出上の物と	出上の遺物と
P * L23	までと交互に	までを交互に
P 199 L3	強かった。	強まった。
* L12	同時性の決定しえぬ	同時性と決定しえぬ
P 209 L1	六科山遺跡	六科丘遺跡
P * L6	原体しP甲節縄文	原体しR甲節縄文
P 41 25図 スケール	0 2 m	0 1.5 m
P 42		
P 56 39図 "	0 2 m	0 1.5 m
P 64 45図 "	0 2 m	0 2.5 m
P 65 46図 "	0 2 m	0 2.5 m
P 67 49図 "	0 2 m	0 1.5 m

櫛形町文化財調査報告 No.3

六科丘遺跡

——山梨県中巨摩郡櫛形町六科丘遺跡発掘調査報告書——

1985

櫛形町教育委員会
六科山遺跡調査団

MUJINA-OKA

AN ARCHAEOLOGICAL SURVEY OF ANCIENT

SETTLEMENT AT MUJINA-OKA

YAMANASHI-PREFECTURE, JAPAN

KUSHIGATA-CHO EDUCATION COMMITTEE

AND

THE ARCHAEOLOGICAL EXPEDITION

OF MUJINA-YAMA

1985

序 文

六科丘遺跡は楠形町の西部に位置する平岡地内に所在し、通称六科丘とよばれています。本町では新長期総合計画に基づきこの六科丘の開発(住宅団地造成事業)に取り組む事になり、それに伴って教育委員会ではこの遺跡の発掘調査を実施する事になりました。その結果今から約1400年前の古墳や1500年～1600年前の住居跡が確認され、そこから縄文、弥生、中世、各期の土器・石器・鐵製品が多数発見されました。これらの貴重な資料は過去から現在そして未来を結ぶかけはしとして大きな意味を持つものと考えます。そして本町の歴史をひもとき、町の発展を願う町民意識の向上に役立つものと確信しております。

最後に今回の調査ならびに報告書作成にあたり、ご指導ご協力下さったみなさまに心から感謝申し上げる次第でございます。

昭和60年3月31日

楠形町教育委員会

教育長 河野 勝

例　　言

1 本書は山梨県中巨摩郡横形町平岡字六科山1947他、に所在する六科丘遺跡及び六科丘古墳の発掘調査報告書である。

2 遺跡の名称について。土地台帳では平岡字六科山と記載されているが、地元では從来六科丘と呼称されている。本報告書では、慣例的な呼称に従って、「六科丘」を遺跡名称とした。

3 調査は横形町教育委員会からの委託をうけ六科山遺跡調査團が実施した。調査團の構成は以下の通りである。

団　長　　関根孝夫（東海大教授）

副団長　近藤英夫（東海大助教授）

主任調査員　清水 博（横形町教委）

調　査　員　白居直之（赤崎西中学教諭）大森降志・田村大器（明治大卒）秋田かな子・桑折礼子・百瀬忠幸（東海大卒）山崎和也（駒沢大卒）浪川幹夫（国学院大卒）成瀬晃司・堀内秀樹（日大卒）外岡 進・間口昌和

発　　稿　　上川みな子

調査協力者　鈴木八司（東海大学教授）、野瀬元興・松田晴義・白沢一彦・長瀬 勝・長谷川博・幸 俊（株式会社大本組）、山梨セキスイハウス㈱

行政指導　木木 健（山梨県教育委員会文化課）

4 発掘調査は昭和58年5月1日から同年12月27日まで8ヶ月間に亘って実施した。また出土品等の整理及び、報告書の作成は昭和59年1月10日～同年5月19日、昭和59年8月7日～同年12月28日、昭和60年1月4日～同年3月31日まで延12ヶ月間に亘って実施した。

5 発掘調査、出土品等の整理及び報告書の作成については以下の方々の御指導御助言を賜った。記して謹意を表する次第である。

八幡一郎、岩崎貞也、松浦有一郎、古里節夫、中田 英・御堂島正・伊丹 徹、漆畠 敏、佐々木藤雄、守屋幸一、坂本美夫、中山誠二、新津 健・保坂康夫（山梨県埋蔵文化財センター）

6 本書の編集は調査員の協議のもとに、関根・近藤・清水の3名が行なった。

7 原稿の執筆は各調査員が分担して行ない、遺構関係を清水が、土器関係を白居・百瀬が、石器関係は大森が絶括した。執筆者名は各文末に記した。

8 本書作成に関わる業務分担は下記の通りである。

弥生式土器の実測・トレースは、小口・吉岡・出口・渡辺・浪川が行ない白居が総括した。

凡 例

I、本書の遺構・遺物の挿図及び表の指示は次の通りである。

(1) 挿図縮尺は原則として次の通りである。

遺構分布図 1/1000 穴穴性剖面及び断面図 1/100 墓立柱遺物造構・空穴式造構 1/100 住居址 1/100 石造構 1/100 土壌 1/100 溝状造構(平面) 1/100 同(断面) 1/100 古墳全体図 1/100 同トレンチ配置図 1/100 同トレンチ平・断面図 1/100

土器実測図 1/100 同拓影 1/100 石器 1/100, 1/1000 鉄製品・石製品・土製品 1/100

(2) 穴穴住居址等の記述・挿図について。

遺構実測図の水系レベルは海拔高を示す。

主軸方位は直交する柱穴間線から得た長軸と真北とのなす角度を示す。

規模は相対する壁の最長距離である。

平面図中——は床面残存部、——は推定線を示す。

焼土・炭化物範囲図版中……は炭化物範囲、——は炭化材範囲、——は焼土範囲を示す。

スクリントーン及びインスタントレターリングの指示は次の通りである。

■ 炉 ● 土器 □ 金屬製品 ○ 石製品 ▲ 土製品

遺物は大数字で遺物番号を、小数字で床面からのレベルを示す。大数字は本文・挿図・表・写真図版と一致する。

(3) 遺物の記述・挿図について

土器実測図のスクリントーンは赤色塗彩部位を示す。

土器統計表は各遺構出土の土器のうち、図示した土器を除いた絶破片数・総重量数を示す。

土器観察表中、法量の()内は推定値である。

弥生式土器の土器観察表は、吉岡が作成し、白居がまとめた。

縄文式土器の拓影・トレースは、深沢・中沢・齊藤・上田が行ない白瀬が總括した。

石器の実測・トレースは、大森が行なった。

鉄製品・その他の実測・トレースは、清水が行なった。

古墳出土の須恵器については守屋氏に御教示

遺構図版の作成、出口・渡辺が行なった。

9 写真撮影については、遺構関係を各遺構担当調査員が、遺物関係を近藤が担当した。

10 確認調査時における遺構番号と、本報告書での遺構番号との対称を下に記しておく。

本報告書遺構番号

確認調査時遺構番号

9 号住居址

1 号住居址

搅乱

2 号住居址

16号住居址

3 号住居址

17号住居址

4 号住居址

21・22号住居址

5 号住居址

30号住居址

6 号住居址

3 号住居址

7 号住居址

2 号住居址

8 号住居址

5 号住居址

9 号住居址

3 号集石遺構

1 号配石遺構

遺構と認定せず

2 号配石遺構

地山の落ち込み

1 号土壤

搅乱

2 号土壤

搅乱

3 号土壤

11 発掘調査にあたっては山梨セキスイハウス（株）、（株）大木組から調査事務所・宿舎・土木機械等の便宜を受け、更に（株）大木組には、発掘時の基本割量、作業員の確保等にも協力を頂いた。

12 発掘調査によって作成された記録図面、及び出土遺物等は都形町教育委員会において保管している。

凡 例

I、本書の遺構・遺物の挿図及び表の指示は次の通りである。

(1) 挿図縮尺は原則として次の通りである。

遺構分布図—1%。竪穴住居址及び塔り方—1%。掘立柱建物遺構・竪穴状遺構—1%。住居址炉—1%。集石遺構—1%。土溝—1%。溝状遺構(平面)—1%。同(断面)—1%。古墳全体図—1%。同トレンチ剖面図—1%。同トレンチ半・断面図—1%

土器実測図—1%。同拓影—1%。石器—1%。同・1%。金製品・石製品・土製品—1%

(2) 竪穴住居址等の記述・挿図について。

横横実測図の水系レベルは海拔高を示す。

主軸方位は直交する柱穴間線から得た長軸と真北とのなす角度を示す。

規模は相対する壁の最長距離である。

平面図中——は床面残存部。——は推定線を示す。

焼土・炭化物範囲図版中……は炭化物範囲、——は炭化材範囲、——は焼土範囲を示す。

スクリーントーン及びインスタントレターリングの指示は次の通りである。

■ 炉 ● 土器 □ 金属製品 ○ 石製品 ▲ 土製品

遺物は大数字で遺物番号を、小数字で床面からのレベルを示す。大数字は本文・挿図・表・写真図版と一致する。

(3) 遺物の記述・挿図について

土器実測図のスクリーントーンは赤色塗彩部位を示す。

土器計測表は各遺構出土の土器のうち、図示した土器を除いた總破片数・總重量数を示す。

土器観察表中、法量の()内は推定値である。

六科山遺跡調査委員会

委員長 河野 豊 (梅形町教育長)
(前任者) 上田幸吉 (前梅形町教育長)
副委員長 浅野貢一 (梅形町文化財審議委員会委員長)
委員 杉山人蔵 () 委員
石川徳広 () " "
横内重孝 () " "
河野正己 () " "
関根孝夫 (六科山遺跡調査会会長)
事務局長 鶴田一雄 (梅形町教育委員会社会教育係長)
(前任者) 小林喜也 (前梅形町教育次長)
事務局 横内広記 (梅形町教育委員会主事)
石川利夫 () "

関係者名簿

関係者

梅形町教育委員会、梅形町企画課、山梨県教育委員会文化課、六科山遺跡調査委員会、六科山遺跡調査会、山梨セキスイハウス㈱、鷺大本組

調査参加者

松下信一(医学大学卒)、齋場仁(農林高卒)、鳴村友子(早稲田大学卒)、青木流奈、赤松茂、施上正一、銀沼亮志、伊久美公彦、泉尚子、伴藤公明、井上誠司、井上由美子、鈴木隆、白武美音子、梅原香奈美、桜山美奈子、榎本愛彦、大沢恭喜、大島慎一、大橋留光、池崎美紗、小笠浩子、神谷哲司、川瀬正枝、上西厚郎、菊田宗、城所修、黒沢冴子、小林宇壱、佐々木季美子、静谷誠治、島田孝雄、辻尾誠敏、高田勝、多賀登、多田久江、立花実、千田早苗、坪井裕司、寺田春夫、德田清行、反戸ゆり子、奈原四有里、成田千鶴子、福田卓志、藤川直子、松島由行、宮脇勇、山川倫世、山田克樹、吉岡弘樹、和田恵、木下智意(東海大学)、小口妙子、加田隆志、守屋薫(経営大学)、松木保、芹沢肇生、中沢俊之(国学院大学)、藤本和弘、猪地賢、森本芳雄(山梨学院大学)、浅利哲(玉川大学)、名取寿彦(山梨大学)、河野英人、河西宏(農林高校)、沢登章弘(幾山高校)、長沼聰人(創価大学)、米山満廣、小尾光一(巨摩高校)、出口真由美(武藏野美術大学)、渡辺順子(番瀬女学校卒)、齋場うさぎ、齋場よしみ、石川光蘿、石川芳子、寺田雅子、上野広美、川崎菊美、川崎すず子、川崎努、川崎花代、川崎みや子、川崎義造、川崎雪江、河野栄子、河野かおる、河野定子、河野つや子、河野豊文、河野寅児、河野万子、桜田菊江、桜田みさ江、桜田いのじ、齊藤きみえ、塙沢翠、佐古幸枝、中込季子、中込清尊、中込かやの、野中早苗、野中新市、野中つる江、古矢なみ、古矢百合子、總坂今朝秋、松田政子、向山光江、横内しげ子、横内みや子、横小路國広、横小路まひみ、依田けきえ、依田春子、山本うしの、山本喜子春、齋場杏子、齊藤みや子、深沢道子、中沢栄、松尾利江、河野節子、河西俊雄(一般)。

目 次

序 文

例 言

第Ⅰ章	調査に至る経緯と経過	1
第1節	発掘調査の経緯	1
第2節	発掘調査の経過	1
第Ⅱ章	遺跡の概観	4
第1節	地理的環境	4
第2節	歴史的環境	6
第Ⅲ章	調査の方法と層位	11
第1節	調査の方法	11
第2節	層位	11
第Ⅳ章	発見された遺構と遺物	17
第1節	竪穴住居址・掘立柱建物遺構・小竪穴遺構	17
1)	竪穴住居址	17
2)	掘立柱建物遺構	103
3)	小竪穴遺構	105
第2節	集石遺構と土壙	108
1)	集石遺構	108
2)	土壙	119
3)	石棒を伴うピット	135
第3節	その他の遺構	136
1)	溝状遺構	136
2)	竪穴状遺構	144
3)	不整形土壙とローム土壙	146
4)	II区北拡張区ピット群	148

第4節	遺構外出土の遺物	149
1)	土器	149
2)	石器	151
3)	鉄製品・土製品	153
第V章	弥生時代の成果と課題	155
第1節	弥生時代後期から古墳時代前期の土器について	155
第2節	集落について	161
1)	住居址の様相	161
2)	掘立柱建物遺構	170
3)	集落の変遷と構成について	172
第VI章	六科丘古墳	184
第1節	調査に至る経緯	184
第2節	古墳の立地	184
第3節	古墳の形状と規模	185
第4節	発掘調査	185
1)	調査の方法	185
2)	発掘調査の概要	187
第5節	出土遺物	199
第6節	まとめ	201
第7節	山梨県に於ける六科丘古墳の位置	203
第VII章	結語	208
付 章	周辺採集の遺物	212
引用	参考文献	217

挿 図 目 次

第1図 遺跡附近地形図(1/20000).....	5	第30図 9号住居址出土土器(1/4・1/3).....	48
第2図 周辺遺跡分布図(1/50000).....	7	第31図 10号住居址(1/80).....	50
第3図 基本土層概念図.....	12	第32図 10号住居址出土上土器(1/3).....	50
第4図 道構配置図(1)I区(1/600).....	13・14	第33図 11号住居址及び掘り方(1/80).....	51
第5図 道構配置図(2)II区(1/600).....	15・16	第34図 11号住居址出土土器(1/3).....	51
第6図 1号住居址出土土器(1/4).....	17	第35図 12号住居址・掘り方及び炉址 (1/80・1/40).....	52
第7図 1号住居址・炉址及び2号住居址掘 り方(1/80・1/40).....	19・20	第36図 12号住居址出土土器(1/4).....	54
第8図 2号住居址及び炉址 (1/80・1/40).....	21・22	第37図 12号住居址出土上土器(2)(1/3).....	55
第9図 2号住居址出土上土器(1/4・1/3).....	23	第38図 12号住居址出土青銅製品(1/2).....	56
第10図 3号住居址(1/80).....	25・26	第39図 13号住居址焼土・炭化材分布図 (1/80).....	56
第11図 3号住居址遺物分布図(1/80).....	27	第40図 13号住居址掘り方及び炉址 (1/80・1/40).....	57・58
第12図 3号住居址炉址(1/40).....	27	第41図 13号住居址(1/80).....	59
第13図 3号住居址出土土器(1)(1/4).....	28	第42図 13号住居址出土土器(1)(1/4).....	61
第14図 3号住居址出土土器(2)(1/4・1/3).....	29	第43図 13号住居址出土上土器(2)(1/4・1/3).....	62
第15図 3号住居址出土石製品(1/2).....	31	第44図 13号住居址出土土製品(1/2).....	64
第16図 4号住居址・炉址(1/80・1/40).....	33・34	第45図 14号住居址(1/80).....	64
第17図 4号住居址出土土器(1/4・1/3).....	35	第46図 14号住居址掘り方及び炉址 (1/80・1/40).....	65
第18図 4号住居址出土七鉄製品(1/2).....	35	第47図 14号住居址出土上土器(1/3).....	66
第19図 5号住居址・炉址(1/80・1/40).....	36	第48図 14号住居址出土鐵製品(1/2).....	66
第20図 5号住居址出土土器(1/4).....	37	第49図 15号住居址(1/80).....	67
第21図 6号住居址及び炉址(1/80・1/40).....	38	第50図 15号住居址出土土製品・鐵製品 (1/2).....	67
第22図 6号住居址出土土器(1/4・1/3).....	39	第51図 16号住居址及び掘り方(1/80).....	68
第23図 6号住居址出土石器(1/4).....	40	第52図 17号住居址及び炉址(1/80・1/40).....	69
第24図 8号住居址・焼土・炭化材分布図 (1/80).....	40	第53図 17号住居址掘り方(1/80).....	70
第25図 8号住居址及び7・8号住居址掘 り方(1/80).....	41・42	第54図 18号住居址及び掘り方(1/80).....	72
第26図 8号住居址出土土器(1/4・1/3).....	44	第55図 18号住居址出土石器(1/2).....	72
第27図 9号住居址(1/80).....	46	第56図 19号・20号住居址及び炉址 (1/80・1/40).....	73
第28図 9号住居址炉址(1/40).....	46		
第29図 9号住居址掘り方(1/80).....	47		

第57図	19号・20号住居址掘り方(1/80).....	75
第58図	20号住居址出土土器(1/4・1/3).....	76
第59図	20号住居址出土鐵製品(1/2).....	78
第60図	20号住居址出土石器(1/4).....	78
第61図	21号住居址及び22号住居址掘り方 (1/80).....	79
第62図	21号住居址出土土器(1/4).....	79
第63図	22号住居址・同炉址・21号住居址炉址 (1/80・1/40).....	80
第64図	22号住居址出土鐵製品(1/2).....	81
第65図	22号住居址出土土器(1/4・1/3).....	81
第66図	23号住居址焼土・炭化材分布図 (1/80).....	82
第67図	23号住居址及び炉址(1/80・1/40).....	83
第68図	23号住居址出土土器(1/4・1/3).....	83
第69図	24号住居址焼土及び炭化材分布図 (1/80).....	84
第70図	24号住居址及び炉址(1/80・1/40).....	85
第71図	24号住居址掘り方(1/80).....	86
第72図	24号住居址出土石製品(1/2).....	86
第73図	24号住居址出土土器(1/4・1/3).....	87
第74図	25号住居址(1/80).....	88
第75図	25号住居址掘り方(1/80).....	89
第76図	26号住居址及び掘り方(1/80).....	89
第77図	26号住居址出土土器(1/4).....	90
第78図	27号住居址(1/80).....	90
第79図	27号住居址掘り方(1/80).....	91
第80図	27号住居址出土土器(1/4・1/3).....	91
第81図	28号住居址・掘り方及び炉址 (1/80・1/40).....	92
第82図	28号住居址出土土器(1/4).....	93
第83図	29号住居址・掘り方及び炉址 (1/80・1/40).....	94
第84図	29号住居址出土土器(1/4・1/3).....	95
第85図	29号住居址出土鐵製品(1/2).....	96
第86図	30号住居址(1/80・1/40).....	96
第87図	30号住居址出土土器(1/4).....	96
第88図	31号住居址及び掘り方(1/80).....	97
第89図	31号住居址出土土器(1/4・1/3).....	98
第90図	31号住居址出土鐵製品(1/2).....	98
第91図	32号住居址・33号住居址及び掘り方 (1/80).....	99
第92図	32号住居址出土土器(1/4).....	99
第93図	32号・33号住居址掘り方(1/80).....	100
第94図	33号住居址出土土器(1/4・1/3).....	101
第95図	1号壠立柱建物遺構(1/60).....	103
第96図	1号壠立柱建物遺構出土土器 (1/3).....	103
第97図	2号壠立柱建物遺構(1/60).....	104
第98図	3号壠立柱建物遺構(1/60).....	104
第99図	4号壠立柱建物遺構(1/60).....	105
第100図	1号小堅穴遺構及び掘り方 (1/60).....	106
第101図	2号小堅穴遺構(1/60).....	106
第102図	2号小堅穴遺構掘り方(1/60).....	107
第103図	2号小堅穴遺構(1/20).....	107
第104図	2号小堅穴遺構出土土器(1/4).....	107
第105図	2号集石遺構(1/20).....	108
第106図	1号集石遺構(1/40).....	109-110
第107図	3号集石遺構(1/20).....	111
第108図	4号集石遺構(1/20).....	112
第109図	5号集石遺構(1/20).....	112
第110図	6号集石遺構(1/20).....	113
第111図	6号集石遺構出土土器(1/4).....	113
第112図	7号集石遺構(1/20).....	114
第113図	7号集石遺構出土土器(1/4).....	115
第114図	8号集石遺構(1/20).....	115
第115図	9号集石遺構(1/20).....	116
第116図	1号土壤(1/30).....	119
第117図	2号土壤(1/30).....	119

第118図	3号土壙(1/30).....	120	第152図	2号溝状遺構(Ⅰ)～(Ⅲ) [1/120・1/30].....	139-140
第119図	4号土壙(1/30).....	120	第153図	2号溝状遺構(Ⅳ)～(Ⅴ) [1/120・1/30].....	141
第120図	5号土壙(1/30).....	121	第154図	3号・4号溝状遺構 [1/120・1/30].....	143
第121図	6号土壙(1/30).....	121	第155図	1号竪穴状遺構(1/60).....	144
第122図	7号・8号土壙(1/30).....	122	第156図	2号竪穴状遺構(1/60).....	145
第123図	9号土壙(1/30).....	122	第157図	不整形落ち込み(1/60).....	146
第124図	10号土壙(1/30).....	123	第158図	1・2号ローム土壙(1/60).....	147
第125図	11号・12号土壙(1/30).....	124	第159図	II区北拡張区ピット群(1/80).....	148
第126図	13号土壙(1/30).....	124	第160図	遺構外出土の土器(1)绳文時代の土器 [1/3].....	149
第127図	13号土壙出土土器(1/4).....	124	第161図	遺構外出土の土器(2)中世以降の土器 [1/4].....	150
第128図	14号土壙及び5号不整形落ち込み (1/30).....	125	第162図	遺構外出土の石器 [1/3・2/3・1/4].....	152
第129図	15号土壙(1/30).....	126	第163図	遺構外出土の鉄製品・土製品 [1/2].....	153
第130図	16号土壙(1/30).....	126	第164図	住居址上軸方位図.....	161
第131図	17号土壙(1/30).....	127	第165図	住居址規模別形態比較図.....	163
第132図	18号土壙(1/30).....	128	第166図	規模別住居址分布図.....	167
第133図	19号土壙(1/30).....	128	第167図	振り方模式図.....	167
第134図	20号土壙(1/30).....	129	第168図	第I期の集落.....	173
第135図	21号土壙(1/30).....	129	第169図	第II期の集落.....	174
第136図	22号土壙(1/30).....	129	第170図	第III期の集落.....	175
第137図	23号土壙(1/30).....	129	第171図	トレンチ配溝図(1/400).....	186
第138図	24号土壙(1/30).....	130	第172図	第1トレンチ(1/60).....	187
第139図	25号土壙(1/30).....	130	第173図	第5トレンチ(1/60).....	188
第140図	26号土壙(1/30).....	131	第174図	第2トレンチ、同南・北拡張区及び 第3トレンチ(1/60).....	189-190
第141図	27号土壙(1/30).....	131	第175図	第6A・Bトレンチ(1/60).....	192
第142図	28号土壙(1/30).....	132	第176図	第7トレンチ(1/60).....	193-194
第143図	29号土壙(1/30).....	132	第177図	第8A・Bトレンチ(1/60).....	195
第144図	30号土壙(1/30).....	132	第178図	第10トレンチ(1/60).....	196
第145図	31号土壙(1/30).....	133			
第146図	32号土壙(1/30).....	133			
第147図	石棒を伴うピット(1/30).....	135			
第148図	石棒(1/2).....	135			
第149図	1号溝状遺構(1/120・1/30).....	136			
第150図	1号溝状遺構(1/2).....	136			
第151図	2号溝状遺構全体図(1/200).....	137-138			

第179図	第4トレンチ(1/60).....	197
第180図	古墳出土土器(1/4).....	199
第181図	古墳出土鉄製品及び石製品 (1/2・1/4).....	200
第182図	古墳公園(案)(1/400).....	206
第183図	遺跡周辺出土の遺物(1)土器(1/3).....	211
第184図	遺跡周辺出土の遺物(2)土製品 (1/2).....	212
第185図	遺跡周辺出土の遺物(3)石器 (2/3・1/3・1/4).....	213

附 図 目 次

- 附図 1 六科丘遺跡全図(1/1000)
 附図 2 六科丘遺跡土器変遷図(1/8)
 附図 3 六科丘古墳全図(1/200)

表 目 次

第1表 1号住居址出土土器計測表	17	第24表 13号住居址出土土器観察表(4)	64
第2表 1号住居址出土土器観察表	18	第25表 14号住居址出土土器計測表	65
第3表 2号住居址出土土器計測表	18	第28表 14号住居址出土土器観察表	66
第4表 2号住居址出土土器観察表	23	第27表 15号住居址出土土器計測表	66
第5表 3号住居址出土土器計測表	27	第28表 16号住居址出土土器計測表	68
第6表 3号住居址出土土器観察表(1)	29	第29表 17号住居址出土土器計測表	71
" 3号住居址出土土器観察表(2)	30	第30表 18号住居址出土土器計測表	71
" 3号住居址出土土器観察表(3)	31	第31表 19号住居址出土土器計測表	74
第7表 4号住居址出土土器計測表	32	第32表 20号住居址出土土器観察表	74
第8表 4号住居址出土土器観察表(1)	32	第33表 20号住居址出土土器観察表(1)	76
" 4号住居址出土土器観察表(2)	35	" 20号住居址出土土器観察表(2)	77
第9表 5号住居址出土土器計測表	37	第34表 21号住居址出土土器観察表	80
第10表 5号住居址出土土器観察表	37	第35表 22号住居址出土土器計測表	81
第11表 6号住居址出土土器計測表	38	第36表 22号住居址出土土器観察表	82
第12表 6号住居址出土土器観察表	39	第37表 23号住居址出土土器計測表	84
第13表 8号住居址出土土器計測表	43	第38表 23号住居址出土土器観察表	84
第14表 8号住居址出土土器観察表(1)	43	第39表 24号住居址出土土器計測表	86
" 8号住居址出土土器観察表(2)	44	第40表 24号住居址出土土器観察表(1)	87
" 8号住居址出土土器観察表(3)	45	" 24号住居址出土土器観察表(2)	88
第15表 9号住居址出土土器計測表	47	第41表 26号住居址出土土器計測表	90
第16表 9号住居址出土土器観察表	49	第42表 26号住居址出土土器観察表	90
第17表 10号住居址出土土器計測表	50	第43表 27号住居址出土土器計測表	91
第18表 10号住居址出土土器観察表	50	第44表 27号住居址出土土器観察表(1)	91
第19表 11号住居址出土土器計測表	52	" 27号住居址出土土器観察表(2)	92
第20表 11号住居址出土土器観察表	52	第45表 28号住居址出土土器計測表	93
第21表 12号住居址出土土器計測表	53	第46表 28号住居址出土土器観察表	93
第22表 12号住居址出土土器観察表(1)	53	第47表 29号住居址出土土器計測表	95
" 12号住居址出土土器観察表(2)	55	第48表 29号住居址出土土器観察表(1)	95
" 12号住居址出土土器観察表(3)	56	" 29号住居址出土土器観察表(2)	96
第23表 13号住居址出土土器計測表	60	第49表 30号住居址出土土器観察表	96
第24表 13号住居址出土土器観察表(1)	60	第50表 31号住居址出土土器計測表	98
" 13号住居址出土土器観察表(2)	62	第51表 31号住居址出土土器観察表	98
" 13号住居址出土土器観察表(3)	63	第52表 32号住居址出土土器計測表	99

第53表	32号住居址出土土器観察表	100	第58表	2号掘立柱建物遺構柱穴規模	104
第54表	33号住居址出土土器計測表	101	第59表	3号掘立柱建物遺構柱穴規模	105
第55表	33号住居址出土土器観察表	102	第60表	4号掘立柱建物遺構柱穴規模	105
第56表	1号掘立柱建物遺構柱穴規模	103	第61表	2号小窓穴遺構出土土器観察表	107
第57表	1号掘立柱建物遺構出土土器観察表		第62表	時期別住居址一覧表	176
			第63表	六科丘遺跡住居址一覧表	182

写 真 図 版 目 次

図版1	六科丘遺跡遠望	号掘立柱遺構
図版2	北東部の調査 南西部の調査 作業風景	図版14 1号・2号・3号集石遺構
図版3	1号・2号住居址 3号住居址 4号住居址	図版15 4号・5号・6号集石遺構
図版4	5号住居址 6号住居址 8号住居址 8号住居址遺物出土状況	図版16 7号・8号集石遺構
図版5	9号住居址 1号小窓穴遺構 11号住居址	図版17 9号集石遺構 石棒出土状況 II区塗張区ピット群
図版6	13号住居址 13号住居址出土状況 15号住居址塗り方	図版18 2号溝状遺跡
図版7	12号住居址 12号住居址遺物出土状況 16号住居址	図版19 1号・3号・4号溝 5号・6号土壤
図版8	17号住居址 18号住居址 19号・20号住居址	図版20 10号・15号・18号土壤
図版9	21号・22号住居址 23号住居址炉 22号住居址遺物出土状況 23号住居址	図版21 26号・30号・31号土壤
図版10	24号住居址炭化材および遺物出土状況 24号住居址遺物出土状況 24号住居址	図版22 六科丘古墳
図版11	26号住居址 27号住居址 29号住居址	図版23 六科丘古墳の調査 5号トレンチ 5号トレンチ遺物出土状況
図版12	33号住居址炭化材および遺物出土状況 33号住居址遺物出土状況 28号住居址	図版24 1号・3号・5号・6号・7号・8号トレンチ
図版13	28号住居址遺物出土状況 1号小窓穴遺構 2号小窓穴遺構 1号掘立柱遺構 2号掘立柱遺構 3号掘立柱遺構 4	図版25 出土土器 磁
		図版26 出土土器 磁
		図版27 出土土器 磁・小型壺
		図版28 出土土器 台付壺
		図版29 出土土器 台付壺
		図版30 出土土器 級・蓋 繩文時代土器 カワラケ
		図版31 弦文時代遺物(石器・鉢器・土製品) 繩文時代遺物(石器)
		図版32 占墳出土遺物

第Ⅰ章 発掘調査の経緯と経過

第1節 発掘調査の経緯

本遺跡は、甲府盆地の西縁、中巨摩郡梅形町平岡字六科山に位置する。遺跡の所在する梅形町では、昭和55年を初年度に昭和64年度を目標年度として、新長期総合計画が策定された。同計画では、社会的・経済的な水準向上に直接関連する基本的要素である人口問題について、目標年度には、標準年度より5800人多い22000人とすることを考えている。この人口増に係わる事業の一つとして本町西地区への住宅政策の推進が計画されている。

住宅に関する事業は、西地区の過疎対策として取り上げられたが、相俟って、西地区的平岡より六科丘開発の陳情がなされ、町の事業計画と地域の要望が一致して六科丘開発(住宅地造成事業)に着手することになった。それに伴い、文化財保護法に基づき埋蔵文化財調査を実施することとなった。

町教育委員会では、昭和57年11月22日から昭和57年12月5日までの日程で、六科丘の28000m²を対象に確認調査を実施した。その結果、約25000m²については、遺構・遺物の分布が認められ、発掘調査が必要であるとの結論がえられた。

これをうけて、町教育委員会は六科山遺跡調査団を組織し、昭和58年5月1日から同年12月27日までの約8ヶ月間の日程で発掘調査を実施することになった。さらに本調査をすすめるなかで、遺跡北側部で新たに古墳(六科丘古墳)が発見され、昭和58年10月1日より同年10月31日まで、墳形確認調査があわせて行なわれた。

発掘調査は、予定した期日に完了した。その後調査団は、昭和59年1月10日から昭和60年3月31日までの約14ヶ月間の日程で調査報告書作成に着手した。

一方、六科丘古墳については、昭和58年11月30日に町文化財審議委員会にその処置を計ったところ、同委員会から、「保存し活用していくべく考えてほしいとの答申が出された。答申をうけ、町教育委員会では保存する事を決定し、山梨県教育委員会文化課の指導を得て、当初の造成設計を一部変更し公園として保存し、活用することとなった。設計変更に関しては、造成工事を担当しているセキスイハウス(株)、(株)大本組の文化財保護に対しての充分な理解のうえに成り立ったものである。

(鶴田 一雄)

第2節 発掘調査の経過

発掘調査は、前述のごとく昭和58年5月1日に開始した。調査区は広大な範囲にわたるために

確認調査の成果に従って、I・II区に区分して発掘調査を行なった。すなわち、II-J区から14-M区の南北方向対角線を結ぶ線を基準とし、それ以東をI区、以西をII区とした。

発掘にあたっては、耕作土(20~40cm)を重機によって耕上し、以下の層を、遺構確認を行いつつ人力で盛り下げる。表土剥ぎはI区からグリッドに従い順次行なっていった。

I区での遺構の調査を開始したのは、5月下旬からである。この時期、丘頂部の土壤は極度に乾燥し、調査は難渋を極めた。I区の調査では縄文時代の集石7基、土塙12基が発見された。また6月初旬には円頂丘の西側中腹に、径60mを超す環状溝を発見したが、この溝の調査には約1ヶ月を要した。この溝の時期は不詳である。I区の調査が完了したのは、8月11日である。

II区での遺構の調査を開始したのは、8月18日からである。II区の調査は、各学校の夏期休暇にあたったため、東海大学・山梨学院大・日本高校等の学生多数の参加を得て活況を呈した。II区では、33軒の弥生時代終末から古墳時代初期に帰属する住居址および、該期の北立柱建物遺構4棟、小駒穴遺構2基等が発見され調査された。ただ、新面部下端近くでは、新作は深く遺構底面までおよんでいた。ために、住居址等の損壊はひどく、遺物の残存状態も良好とは言えないものであった。II区の調査は12月27日に完了した。II区での調査は冬期にかかったため、遺構の凍結、壁の崩落にも悩まされることがしばしばであった。

また、設定した調査区域外でも土地改変を行なう個所については、工事担当者の理解を得て、抜根・耕作土排除後に、遺構・遺物の確認作業を行なった。為に実際の調査面積は、約35,000m²におよぶ。その過程で、丘の北側に張り出した小尾根から鉄剣を発見し、その後の調査で古墳(六科丘古墳)の存在を確認した。さらに同古墳については、7月26日より7月31日まで墳形測量調査を、10月1日より10月31日までの期間に墳形確認調査を行なった。一方、II区に近接した二箇所で落ち込みを検出した。それぞれをII区北拡張区、II区南拡張区として遺構の調査を行なった。その他の工事区域では、遺構・遺物の分布は認められなかった。

調査期間及び面積と発見された遺構は以下の通りである。

各区の調査の期間と面積

I区	58年4月28日~同年8月11日	13,000m ²
II区	58年8月18日~同年9月末日	
	58年11月2日~同年12月27日	11,000m ²
II区北拡張区	58年5月27日~同年5月29日	200m ²
II区南拡張区	58年10月1日~同年10月5日	100m ²
六科丘古墳	58年10月1日~同年10月29日	1,300m ²

一方出土品等の整理作業は、何回かの中止をはさみつつ、下記の通り行なった。

59年1月5日~同年5月19日

59年8月7日~同年12月28日

60年1月4日~同年3月31日

発見された遺構

a) 竪穴住居址	33軒
b) 土壙	32基
c) 集石遺構	9基
d) 小竪穴遺構	2基
e) 挖立柱建物遺構	4棟
f) 溝状遺構	4本
g) 竪穴状遺構	2基
h) ローム土壙及び性格不明の落ち込み	9基
i) ピット	多数
j) 古墳	1基

(近藤 英夫)



保存整備後の六科丘古墳

第II章 遺跡の概観

第1節 地理的環境

六科丘遺跡は山梨県中巨摩郡檍形町平岡字六科山に存在し甲府盆地西縁に位置している。

甲府盆地はその地理的位置によって陝西・陝北・陝中・陝東等々と呼ばれている。そのうち陝西と呼ばれる地域は、盆地中央やや西寄りを北から南へ鈍い弧状を呈して貫流している荒川以西の地域を指している。檍形町はこの陝西のほぼ中央に位置し、その西半部を檍形山及びその東麓に発達した市之瀬台地が占め、東半部は盆地床縁辺に発達した扇状地形となっている。

甲府盆地の西縁には北岳・間の岳・農鳥岳といった3,000m級の山々が南北に連なっており、通称「南アルプス」と呼ばれる赤石山脈を形成し、国立公園に指定されている。その前衛「巨摩山地」は糸魚川一静岡構造線によって南アルプスと隔離されこれも南北に連なる。巨摩山地の主峰檍形山は2,000m内外の高度を有し、その名の示す様に美しい櫛の形をとつてそびえているが、檍形町の町名はこの檍形山に由来するものである。

ところで巨摩山地は壯年期山地の地貌を示しているが、その東側はいく条かの断層崖地形によって盆地床へと至っており、山地の中央を占める檍形山にもその東麓に伊奈ヶ湖断層、下市之瀬断層が存在する。市之瀬台地は伊奈ヶ湖断層前面に発達した洪積扇状地が、甲府盆地形成に与かった最も新しい地殻変動によって形成された丘陵状の地形である。台地の平面形はほぼ扇状を呈し、南北4km、東西2.5kmの規模を持ち標高400~500mを示している。台地前面は比高差100~120mを有する下市之瀬断層崖を経て盆地床へと至る。また台地前端には、断層運動に伴って発達した小円頂丘が並びこれらの西側は緩かな逆傾斜面を経て西方山麓へ向い順次高まっていく。台地基盤は檍形山塊から流れ出した古い扇状地堆積物でその上面を火山性堆積物に覆われている。六科丘で見られる火山性堆積物は、その柱状図によると上部から、伝嗣院ローム層・黄白色輝石層・上野山ローム層と統一している。伝嗣院ロームは新期信州ロームに、上野山ロームは中期信州ロームに相当し、黄白色輝石層は木曾古御岳の第一浮石層(P_{m-1})であり、甲府盆地における鍵層(Key bed)とされている(「檍形山の自然」編纂委員会、1976)。

ところでこの市之瀬台地上面には北から高室川・深沢川・漆川・市之瀬川・秋山川等が流れ、山地においては壮年期、台地に於いては幼年期の侵蝕地形を呈している。これらの河川は盆地床に流れ出ると急激に流勢を弱め、谷の出口から扇状地を造る。また高室川・深沢川は台地北から流れる大和川と合流して滝沢川となり、市之瀬川・漆川は合流して坪川となるがこれら諸河川は、有名な御動使川の形成する扇状地などと相まって複雑な「複合扇状地」形をなしている。檍形山を水源とするこれら諸河川は上流では $18^{\circ} \sim 22^{\circ}$ という急激な勾配を有し、従って大量の土砂を削



第1図 遺跡附近地形図 [1/20000]

り流し、下流の盆地床では、坪川・深沢川等にみられる「天井川」地形を呈する。これら扇状地の扇尖部にあたる桃園・小笠原・下市之瀬では地下水位が低く、極めて水に乏しい乾燥地となり、豪雨時には洪水におそわれる全く水田経営に不適な地勢である。地下に滲みこんだ水は扇端部では再び湧き出して、若草町の鏡中条・十日市場、甲西町の江原・古市場・鮎沢等と連なる弧状の湧泉列をなしている。この湧泉列より低位は極めて水の豊富な一帯となり、釜無川の形成する氾濫原へ連なっている。以上述べた地形上の制約は現在の土地利用にも如実に反映されている。扇尖部は古来「原方」と呼ばれ桑畠・果樹園に利用されている。また扇頂附近は「根方」と呼ばれ山から流れ出す谷川の水を利用して水田経営が行なわれ、湧泉列外の氾濫原は「田方」と呼ばれ水田として利用されている(柳形町誌編纂委員会、1966)。

六科丘遺跡は、先述した台地前端の円頂部から西向逆傾斜面上に占地している。東は比高差100~120mを有する断層崖によって盆地床と画され、西は逆傾斜面を経てなだらかな起伏を示す台地に連なっている。北は深沢川、南は漆川によって開析された谷が刻まれている。

丘頂上からは甲府盆地を一望できその夜景の見事さや眼下に広がる桃畠の花時のすばらしさは目をみはらすものがある。また武田氏の換った郡陽ヶ崎、後期群集墳の占地する盆地北縁の山麓を北東に、甲斐に於ける古墳出現の地もある曾根丘陵を南東方向に見渡す好所でもある。遠

く北西には巨摩山地の鞍部を隔てて白峯連峰の一部を、北に八ヶ岳を望み、また東方には金峰山から甲武信ヶ岳を経て「秩父山塊」が望まれる。南東には御坂山地を越えて冬には雪をいたいた富士がそのコニード型の姿をみせている。

以上の様に六科丘遺跡周辺の地理的・自然的環境は、近年ようやく甲府盆地にもおしよせた都市化の波に耐え、遺跡が機能していた当時の姿と環境を現在にまでよく伝えているといえよう。

(清水 博)

第2節 歴史的環境

遺跡の存在する柳形町は南隣の甲西町とともに駿河のほぼ中央を占め、また多数の遺跡の認められる地域でもある。しかしこれらの遺跡のなかで正式に発掘調査が実施されたものは五指にも充たない。まず沖積低地に所在する遺跡として甲西町古市場に存在する住吉遺跡(住吉遺跡調査団1981)が、次いで洪積台地下部、台地上にそれぞれ占地する柳形町曾根遺跡(柳形町教委、1984)、上の山遺跡があげられるが、これらは農道開設工事等に伴う比較的小規模な調査であった。また柳形町上野の台地先端に占地する物見塚古墳(柳形町教委、1983)が保存の為の確認調査を受けている。

ところで「山梨県遺跡地名表」(山梨県教委、1979)によれば柳形町・甲西町にはあわせて60ヶ所程の遺跡が記載されている。その詳細はあきらかにされていないものの時代順に概観したい(第2図)。

柳形町東麓にひろがる台地上では旧石器時代から、縄文時代中期を中心とする遺物が多量に採集されている。旧石器時代の遺物は今回発掘調査を受けた六科山門頂丘上からナイフ型石器が1点採集されている。

甲西町塚原地内に所在する、疊喰場遺跡①からは縄文時代早期後半の土器片が採集され、同町秋山の土居平遺跡②は縄文時代前期～中期の遺跡として注目されている。更に六科丘遺跡から西方へ続く台地上からは縄文時代以降の遺物が採集され(数野他 1977)、特に平岡には長田口遺跡③、中畠遺跡④、東原遺跡⑤などが集中している。平岡から漆川を隔てた田頭の台地あるいは市之瀬川をはさんだ上野・中野の台地上にも縄文時代の遺跡が存在している。柳形町上野に所在する上の山遺跡⑥では、台地先端に近く弥生時代末の集落が、また台地中央に近く早期末から晩期にかけての土器を伴う縄文時代遺構群が検出されている。

弥生時代～古墳時代の遺跡としては前述した住吉遺跡⑦があげられる。住吉遺跡は扇端部の湧泉列上に並ぶ遺跡群の一つで、弥生時代後期末葉に属する住居址1軒と平安時代に属する溝状造構等が発見されている。この他には洪積台地先端にのる、上ノ東遺跡⑧、御前山遺跡⑨などがあげられる。

弥生時代～古墳時代以降になると、台地先端に占地する遺跡に加えて甲西町江原の久保沢遺跡⑩、鮎沢遺跡⑪、清水遺跡⑫等扇端部の湧泉列上に占地する遺跡が主流を占める様になる。

一方古墳は、台地上から扇状地上に占地している。昭和56年に確認調査を受けた物見塚古墳⑬



第2図 周辺遺跡分布図 [1/50000]

No.	遺跡名	No.	遺跡名
1	曲輪田遺跡	41	後出遺跡
2	高尾遺跡	42	坂上遺跡
3	伊奈ヶ湖遺跡	43	丸池古墳、刀塚古墳
4	北新居遺跡	44	上ノ平遺跡
5	神明遺跡	45	住村2号墳
6	御坂B遺跡	46	住村1号墳
7	御坂A遺跡	47	御前山遺跡
8	曾根遺跡	48	古屋敷遺跡
9	伝廟院原遺跡	49	上ノ原遺跡
10	東原A遺跡	50	土岩半遺跡
11	東原B遺跡	51	中野(雨鳴)城跡
12	長田口遺跡	52	平林向林遺跡
13	中畠遺跡	53	平林大平遺跡
14	平岡遺跡	54	丸山塚古墳
15	十五所遺跡	55	北沢遺跡
16	新田遺跡	56	熊野神社遺跡
17	(伝)小笠原長清遺跡	57	秋山経塚
18	上杉林遺跡	58	角屋敷遺跡
19	原田遺跡	59	山居遺跡
20	(伝)椿城跡	60	大明神塚古墳
21	上の山遺跡	61	小林竹重遺跡
22	下河原遺跡	62	春米北原遺跡
23	上ノ東古墳	63	法華塚古墳
24	上ノ東遺跡	64	春米上平遺跡
25	物見塚古墳	65	狐塚古墳
26	大畑遺跡	66	藤塚古墳
27	狐塚1演跡、狐塚2遺跡、河原遺跡	67	塚穴古墳
28	富士塚古墳	68	二十三夜塚古墳
29	御崎北1号墳・2号墳・3号墳・4号墳	69	長沢新町安清の池遺跡
30	下宮地遺跡	70	長沢平池遺跡
31	久保沢遺跡	71	長沢長池遺跡
32	點沢遺跡	72	大門遺跡
33	条里遺跡	73	青柳遺跡
34	清水遺跡	74	春米中尾田遺跡
35	古市場住吉遺跡	75	大久保広見遺跡
36	御崎前古墳	76	最勝寺平野遺跡
37	鶴物郎屋古墳	77	最勝寺西の八遺跡
38	川上道上遺跡、道下遺跡、道上遺跡	78	城勝寺人塚田遺跡
39	塚原上村古墳	79	藤塚古墳、塚穴古墳、大塚古墳
40	豊嶽場遺跡	80	最勝寺馬門古墳

は柳形町上野の台地先端に占地している。盆地西縁では最も古く5世紀代前半の古墳とされ、全長46mを測る前方後円墳である。内部主体は粘土被らしくまた埴輪をもたない。副葬品として珠文鏡・管玉・鉄劍・直刀が出土している。増穂町では法華塚古墳⁽²⁾が台地先端に占地し、甲西町秋山には熊野神社古墳(平西町誌編纂委員会 1973)が存在している。また物見塚の西300mの円頂丘上には上ノ東古墳⁽³⁾が占地しており、径25~30m程の円墳で墳頂部からは須恵器細片が採集される。
〔註2〕
また物見塚の南側に対する塚原山山顶には刀塚(甲西町誌編纂委員会 1973)が存在したとされるが現在は消滅している。

上野山丘陵を一段降った甲西町塚原・柳形町下市之郷には、上村古墳⁽⁴⁾・鎌物師屋古墳⁽⁵⁾などがありし共に横穴式石室を内部主体とする後期古墳であるが、後者は既に墳滅している。また上村古墳の周辺は「塚原」という字名が示す様に、かつては多くの群集墳が存在していたと考えられるが現在は数基を残すのみである。また鎌物師屋古墳周辺の扇状地にも積石塚古墳群が存在したとされ、現在も畑の中に積石塚様のものが見うけられるが詳細は明らかではない。
〔註3〕

さて湧泉列のみられる柳形町・甲西町・増穂町一帯は和名類聚抄に甲斐國・巨摩郡の九郷の一つとして所載されている「大井郷」に比定されている。その地内、現在の甲西町山島地区一帯には条里造構⁽⁶⁾が埋没しているとされている。

周辺一帯は加賀美(若草町)・雨湖(奈古)・秋山(甲西町)・小笠原(柳形町)などの地名が示すように甲斐源氏の一族がその居館を定めた地でもあり、現在の小笠原小学校附近は小笠原氏館があったとも伝えられている。また中野の城山には秋山氏が据つたとされる雨鳴城⁽⁷⁾があり土星・堀切が残されている。上野本重寺附近には大井氏が据つたという椿城⁽⁸⁾があったとされるが今日その痕跡をみるとすることはできない。

最後に山梨県内に於ける弥生後期~古墳時代初頭の遺跡のうち発掘調査をうけた代表的なものとしては以下の例があげられる。まず盆地北縁には、敷島町・金の尾遺跡(末木他、1980)・韭崎市・久保屋敷遺跡(山梨県教委、1984)・坂井南遺跡(韭崎市教委、1984)・長坂町・柳坪遺跡(山梨県教委、1975)などが存在する。盆地東部では塩山市・西田遺跡(山梨県教委、1978)・御坂町・二の宮・姥塚遺跡(坂本他、1981)が、また盆地南縁では境川村・京原遺跡(山梨県教委、1974)・物見塚遺跡、中道町・岩清水遺跡(山梨県教委、1979)・上の平遺跡(小林他、1980)・三珠町・一城林遺跡(山梨県教委、1980)等があげられる。これらの遺跡は立地も扇端湧水帯、台地先端部と様々であり、内容も集落跡・方形集溝墓群等と多様性を示している。一般的には東海系の上器とされるS字状口縁甕を主体とする土器群を出土する遺跡は、湧水地や河川の氾濫原を控える自然堤防上などに占地し、それに先行する時代の遺跡は谷木田などを臨む低台地や丘陵先端に占地する傾向にある、とされている。

(清水 博)

- 註 1 楊形町教育委員会によって1984年に発掘が行なわれた。弥生時代終末～古墳時代初頭の住居址5軒、縄文時代中期に属する住居址3軒、土壇・溝等が検出されている。報告書は1984年度末に刊行。
- 註 2 実査による。
- 註 3 実査による。尚、坂本美夫氏は「篠原塚3号墳」(篠原塚3号墳発掘調査会、1979)のなかで、甲西町・御崎古墳群・増穂古墳群についても、積石塚古墳である可能性を留保されつつも、明確な判断をさけられている。
- 註 4 佐々木藤雄氏の御教示による。弥生時代後期の住居址1軒が確認されているとの事である。

- 補註 1 本稿脱稿後に、保坂氏(県埋文センター)から若草町に於ける分布調査の成果を御教示いただいた。それによると湧水列上の微高地を中心として100ヶ所以上に及ぶ遺物散布地が確認されている。時代的には弥生時代後期から、中世にまで及んでいるが、その中心は五鏡期及び10世紀以降のものである。五鏡期(S字状口縁甕)の分布は湧水列上からやや北寄りにかけて認められ、中世のものは湧水列より南(氾濫原側)へ進出している、との事である。
- 補註 2 山梨県内に於ける最近の弥生時代末～古墳時代初頭にかけての編年的研究の成果としては「熊久保遺跡出土の弥生土器」(田代・中山、1984)がある。楊形土器を中心としてその編年を試みている。尚、氏らの論文で引用されている『六科山遺跡28号住居址』は本遺跡発掘時の住居番号であり、本報文中では13号住居址としているものである。

第III章 調査の方法と層位

第1節 調査の方法

本遺跡は、前記したとおり、甲府盆地西縁の丘陵先端に占地する。

調査方法はグリッド法を採る事とし、調査区全域に10m方眼のグリッドを設定した。グリッドは確認調査時のものを踏襲することとした。すなわち造成工事用に設定していた基準軸を利用し、北西—南東方向に、北西から算用数字で0…26、それと直交する北東—南西方向に、北東からアルファベットでA～Vと定め、例えば1-A、10-V区等と呼称した。尚工事用基準軸はM列・N列の境界線にあたり、方位はN-56°51'16"-Wにとるが、遺構主軸等の計測においては、便宜上N-57"-Wとした。

調査範囲は確認調査時の調査区域を基本としたが、すでに第1章で述べたように、確認調査の結果から多少の異同をみた。すなわち発掘区南端の26列以南及び、同南西部急斜面の16列以南、N列以西を調査対象から除外し、逆に円頂丘頂部東半部を調査区域に加える事とした(附図1)。

発掘に際しては、機械力と人力とを併用した。第一層(耕作土)を重機によって排除し、以下の層を人力で精査し、遺構・遺物の発見につとめた。

(近藤 英大)

第2節 層 位

本遺跡の基本土層は次のとおり観察された。

第I層：褐色土層(耕作土)

第II層：褐色土層。粘性・しまり共になくI層の影響を受け土質は不均一である。

第III層：明茶褐色土(ローム層)

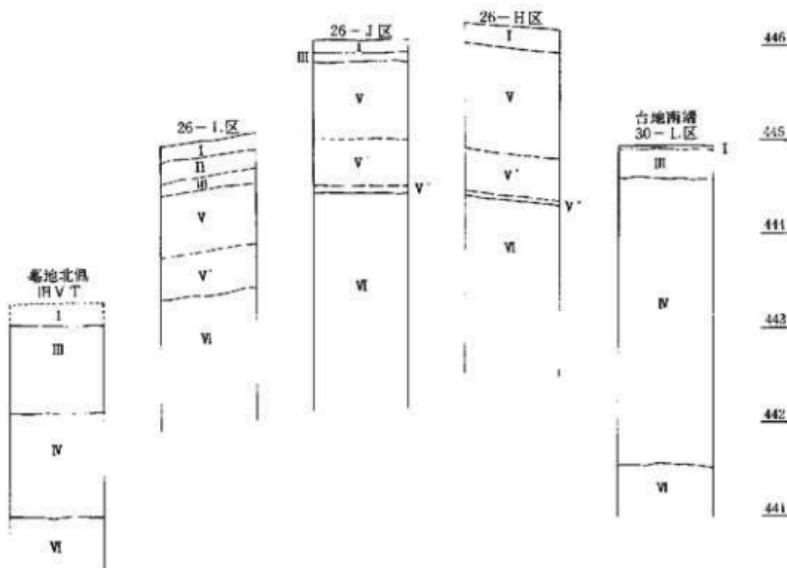
第IV層：黄白色輕石層。古御岳に由来する輕石層と考えられる。

第V層：赤褐色土層

第VI層：茶灰色土層

発掘区南端、26-H・26-J・26-L区で各1ヶ所、円頂丘上南端30-L区・同北部(武保時第Vトレンチ南端)の計5ヶ所で基本土層を観察した。概念図(第3図)を以下に示すが、図より明らかなように堆積は部分的にかなり異った様相を呈している。

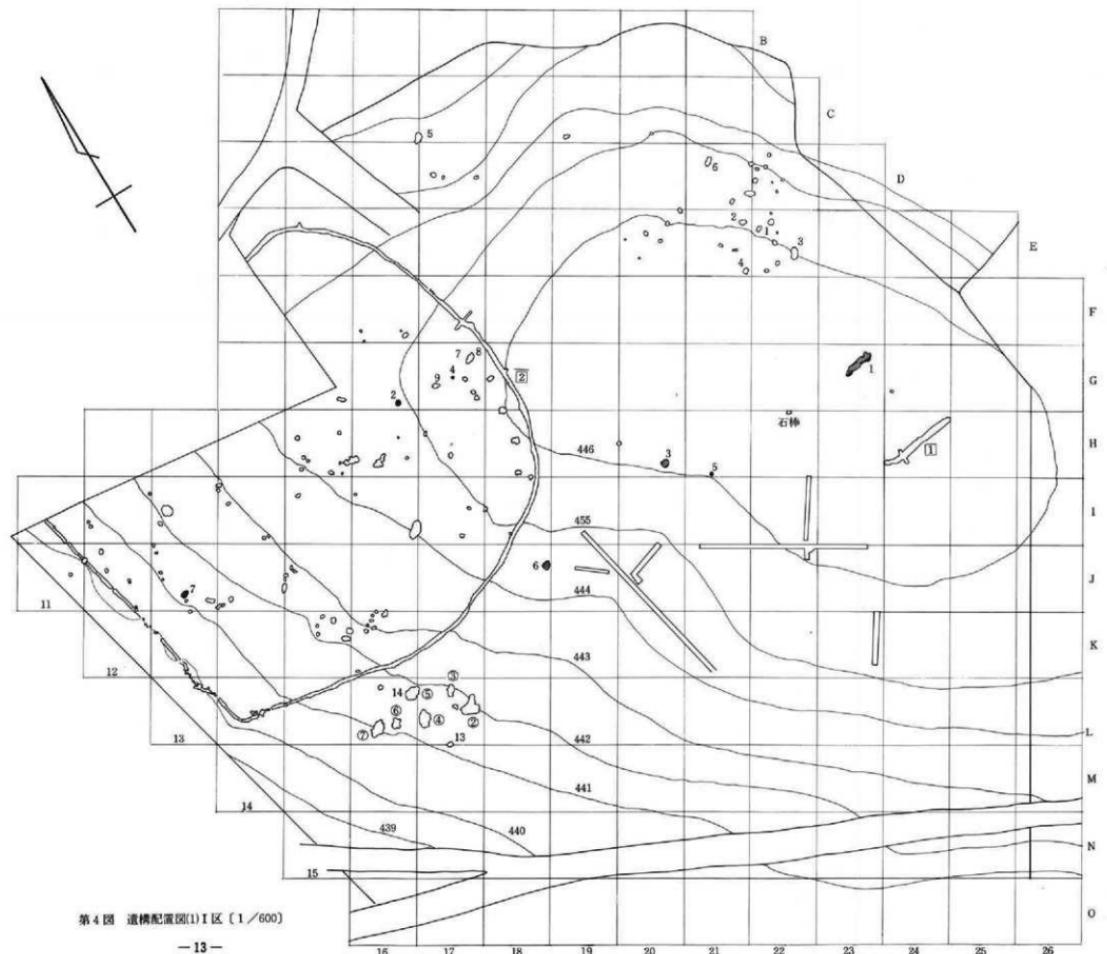
遺物はI・II層中に分布し、遺構はII層中からIII層に切りこんで検出された。円頂丘頂部南北と六科丘古墳の北側小支丘ではII・III・IV層がほとんど確認されず、薄い耕作土層の下部に第V層が続く。このため、23-G区で検出された集石遺構は、V層上面まで掘りこまれた遺構基



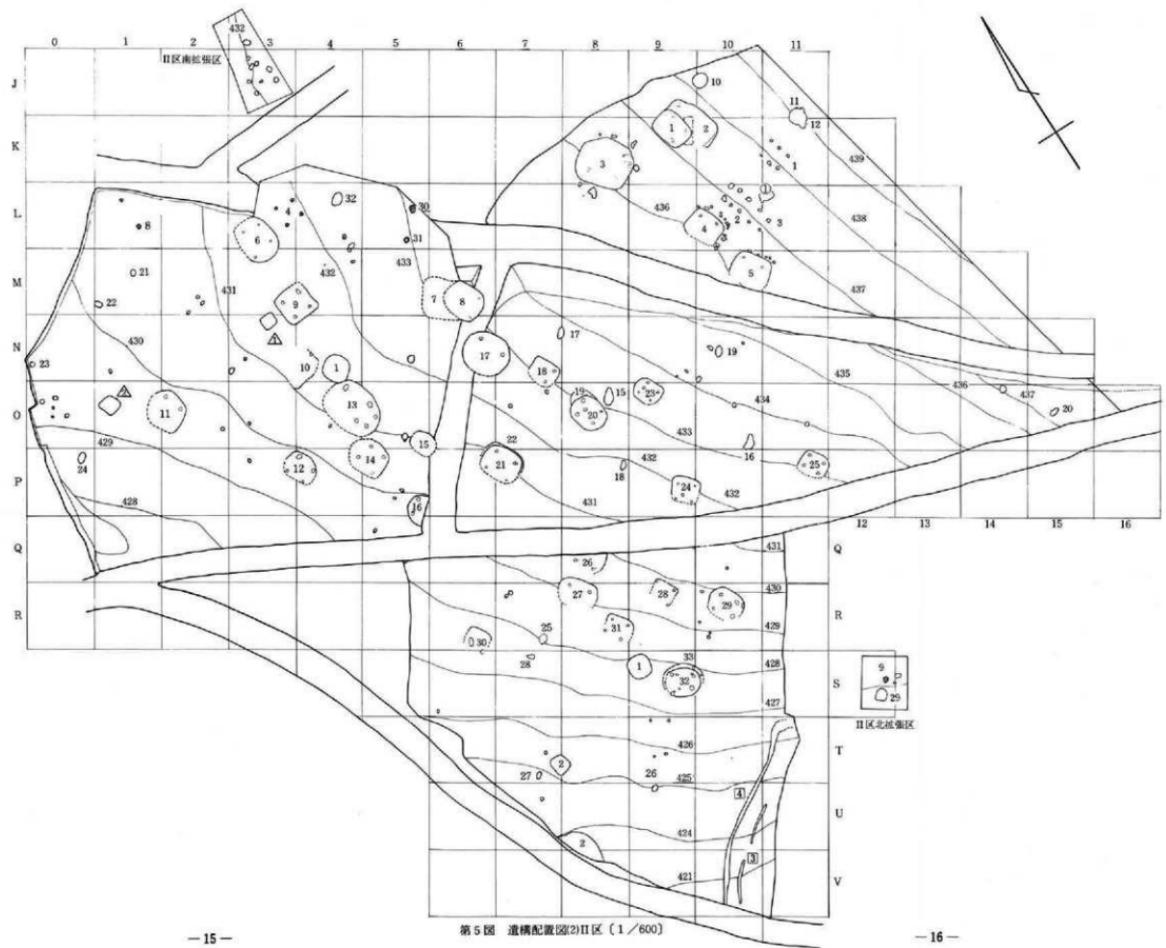
第3図 基本土層概念図

部が残存するのみである。これらの部位は本来、III・IV層の堆積が薄く、かつ流失が著しかったものと考えられる。円頂丘南半に認められる赤褐色土層(第V層)は20-K~23-E区を東~西に結ぶ線で北方向へ急激に傾斜を深め、II・III層の下部へもぐりこんでいく事が看破される。調査区南側では明確にはしないが、30-L.区に於ては、III・IV層の厚い堆積が確認できる事から、26列~30列の間においても、23-E区以北と同様にIII・IV層の下部へもぐりこんでいくものと推定される。尚、試掘時に検出された1号土壇(落ち込み)はこの基本V層のもぐりこみ部である。円頂丘北半部及び、台地南端部においては、III層・IV層の堆積が認められ、特に幼生期集落の占地する西向逆傾斜面ではIII層が厚く堆積、耕作土下位には褐色土層(II層)も認められる。しかし諸遺構の削平状態から、遺構の本米的な掘り込み面(生活面)は現存する褐色土層上面よりも更に上位に存在したものと推定される。以上の様に本遺跡においては、遺物包含層及び生活面の流失、また耕作による削平・搅乱の為遺構の把握が必ずしも良好に行ないえなかった。

(清水 博)



第4図 遺構配置図(I) I区 [1/600]



第IV章 発見された遺構と遺物

第1節 壇穴住居址・掘立柱建物遺構・小壇穴遺構

1 壇穴住居址

1号住居址（第6～8図、図版3、第1・2表）

斜面中央部の9-J・K区に位置する。2号住居址と重複し、本址上位に2号住居址床面が構築されている。

主軸方位を、N-16°-Wにとり等高線に平行する。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は、5.7×4.2 mを測る。掘り込みはローム層まで達し、壁高は東壁で30cm、西壁で7cmを有する。上部に載る2号住居址床面と本址床面との高低差は約40～45cmを測るが、2号住居址の説明で述べる如く、調査手順を前後している為、その時間関係は明らかでない。

覆土は11層に分かれ自然堆積をなす。

床面は堅密な粘床で、ほぼ平坦だが北内隅では若干の盛り上がりを見せる。

ピットは5ヶ所検出されP₁～P₄が柱穴である。深さはそれぞれ15cm、47cm、39cm、33cmを測る。P₅が貯蔵穴で平面橢円形を呈し規模は55×22cmを測る。深さは38cmを有し、平底を呈する。

周溝は、住居址西半部を半周し、幅は20～25cm、深さは5～10cmを測る。調査者の所見によると、東半部も周溝状の浅い掘り込みが一巡する可能性がある。

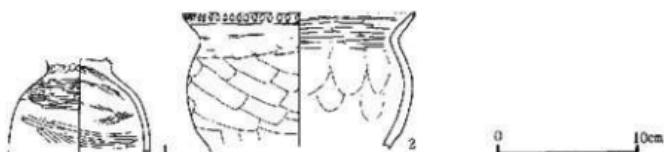
炉は住居址中央や北寄りに位置する。平面橢円形を呈し、規模は45×33cm、深さは13cmを測る。覆土は4層に分かれ第3層が火床面と考えられる。

掘り方は、斜面上方（住居址東半部）が僅かに深く掘り込まれるが、ほぼ同一レベルで底面は凹凸が激しい。埋土は3層に分かれ第12層が貼土である。

出土遺物は少なく、1は貯蔵穴周辺床面を中心
心に、2は西半部覆土下層から出土している。

（伊藤 公明） 第1表 1号住居址出土品目別計測表

	真	壺	その他不明
	109片 990g	23片 560g	5片 160g



第6図 1号住居址出土土器(%)

第2表 1号住居址出土土器観察表

1 盆	法量：頸部径4.27cm。現在率：頸部付近%。 調整：外面一頸部指頭圧痕が残る。側部へラミガキ。内面一側部横方向のハケの後にヘラミガキ。口縁付近横方向のヘラミガキ。胎土：密。焼成：良。色調：茶褐色。
2 台付裏	法量：口縁部径16.63cm、頸部径14.10cm。現在率：頸部下半から底部を全て欠く。他はほぼ完形。 調整：外面一口唇部、キザミを有する。底部～口縁部ナデ。胴部・底部一側部付近は縱方向のヘラケズリ。他は横方向のヘラケズリ。内面一口縁部～頸部横のヘラミガキ。胴部指頭で整形した後にナテを施す。胎土：密。焼成：良好。色調：棕茶褐色。

2号住居址（第7～9図、図版3、第3・4表）

斜面上部の9・10・J・K区に位置する。西半部で1号住居址と重複し、西5mに3号住居址が、南西7mに4号住居址、南東8mに1号掘立柱建物遺構が存在する。

住居址西半部に削平を受け遺存が悪く、また調査時の不手際もあり、本住居址に切られている1号住居址の調査を先行してしまった。そのため、本址西半部は床面の痕跡を確認したにすぎないが、規模・形状等はほぼ全容を把握する事ができた。

平面形は隅丸長方形を呈し、長軸8.3mで短軸は推定で5.8mを測る大型住居址である。土塗方位はN-26°-Wにとり等高線にやや斜行する。掘り込みはローム層まで達し、壁高は東壁で45cmを測る。壁は急激に立ち上がる。

覆土は10層に分けられ自然堆積を示す。

床面はほぼ平坦だが軟弱である。ピットは、12ヶ所検出したが、内4ヶ所（P₁・P₃・P₁₁・P₁₂）は掘り方で確認されたものである。P₁～P₄が柱穴で深さは各々、57cm、20cm、27cm、25cmを測る。P₁₂は深さ13cmを有し、梯子穴の可能性も持つ。貯蔵穴も現状では確認されず、位置関係等からも本来貯蔵穴を有しない住居址である可能性が強い。

開溝は本来全周したものと思われ、幅10～20cm、深さ3～9cmを測る。

炉址は住居址北半部中央に位置する。平面形は不整方形を呈し、規模は50×37cm、深さ20cmを測る。覆土は4層に分けられ、第1層は飛散土、第4層は被熟ローム層（火床）である。

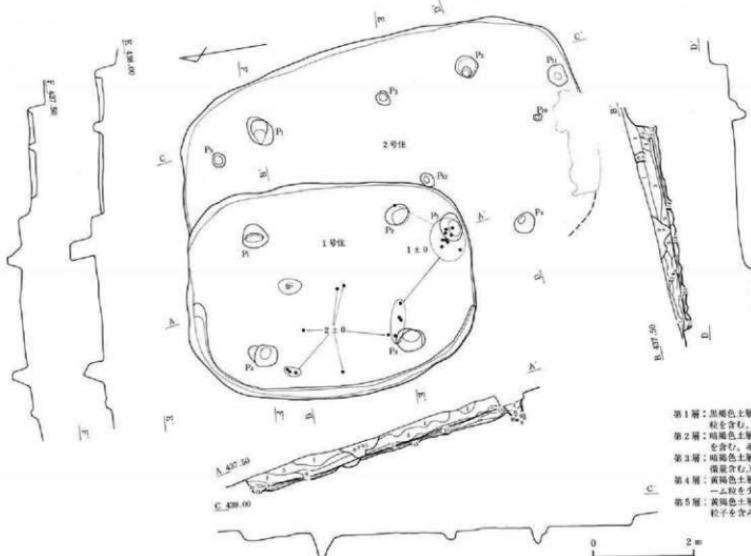
掘り方は床下全面に及び、底面には凸凹が見られる。床面からは5～7cmの深さを持つ。

出土遺物は少なく南東隅に若干認められたのみである。2は覆土下層、他は覆土中から出土している。

（伊藤 公明）

第3表 2号住居址出土土器計測表

蓋	壺	その他不明
25片	82g	10片 180g



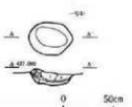
第7図 1号住居址・炉址及び2号住居址掘り方(古・古)

1号住跡窓穴

- 第1層：黒褐色土層（粘性無く、しまりはやや弱い。ローム粒を含む。黒褐色粒子を少量含む。）
第2層：黒褐色土層（粘性無く、しまりはやや強め。黒褐色粒子を含む。赤色スコリアを微量含む。）
第3層：黒褐色土層（粘性無く、しまりはやや弱い。ローム粒を含む。黒褐色粒子を少量含む。）
第4層：黒褐色土層（粘性無く、しまりはやや強め。ローム粒を含む。黒褐色粒子を含む。）
第5層：黒褐色土層（粘性無く、しまりはやや強め。黒褐色粒子を含む。）
第6層：黒褐色土層（粘性無く、しまりも強め。ローム粒を多量に含む。黒褐色粒子を少量含む。）
第7層：黒褐色土層（粘性やや強く、しまりもやや強い。ローム粒を含む。黒褐色粒子を少量含む。）
第8層：黒褐色土層（粘性無く、しまりはやや弱い。ローム粒を含む。黒褐色粒子を少量含む。）
第9層：黒褐色土層（粘性やや強く、しまりは普通。ローム粒を少量含む。黒褐色粒子を微量含む。）
第10層：黒褐色土層（粘性やや強く、しまりもやや強い。ローム粒を多量に含む。黒褐色粒子を微量含む。）
第11層：黒褐色土層（粘性やや強く、しまりはやや弱い。ローム粒を含む。黒褐色粒子を微量含む。）
第12層：黄褐色土層（粘性無く、しまりも弱い。ローム粒、黒褐色粒子を含む。）
第13層：黄褐色土層（粘性やや強く、しまりもやや弱い。ローム粒を含む。黒褐色粒子を含む。）
第14層：黄褐色土層（粘性やや強く、しまりもやや弱い。黒褐色粒子を少量含む。）

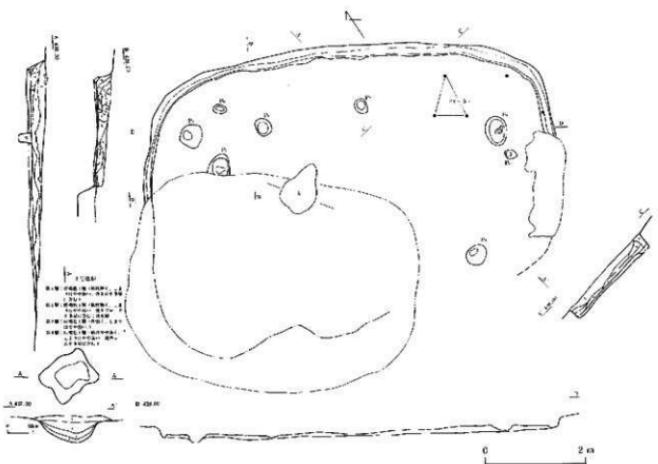
1号住跡炉

- 第1層：暗褐色土層（粘性無く、しまりはやや弱い。ローム粒を含む。黒褐色粒子を少量含む。）
第2層：暗褐色土層（粘性無く、しまりはやや弱い。炭化物、地土を多量に含む。）
第3層：暗褐色土層（粘性無く、しまりはやや弱い。地土を含む。）
第4層：黄褐色土層（粘性無く、しまりはやや弱い。）

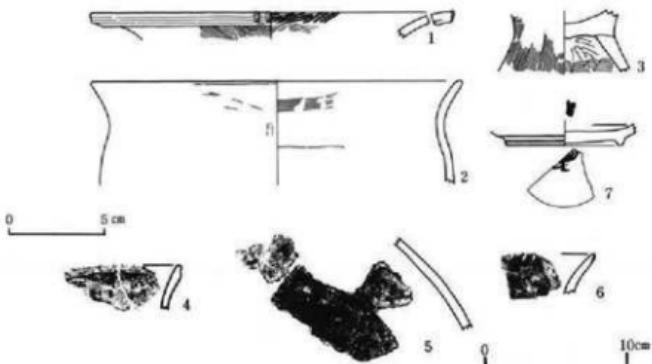


2号床

- 第1号：赤土色（赤色無く、しまりはやや弱い）。黒褐色
斑子を多量に含む。
- 第2号：複数褐色上層（赤色弱く、しまりはやや弱い）。黒褐
色斑子を多く含む。黒褐色斑子を含む。
- 第3号：複数褐色上層（赤色強く、しまりはやや弱い）。黒褐
色斑子を含む。
- 第4号：黒褐色（赤色無く、しまりはやや弱い）。黒褐
色斑子、赤色スカリテを含む。
- 第5号：黒褐色（赤色無く、しまりはやや弱い）。黒褐
色斑子、レッドヨウタケ斑子を含む。
- 第6号：黒褐色（赤色無く、しまりはやや弱い）。ロ
ーム色を多量に、黒褐色斑子、赤色斑子を含み、赤色
スカリテを含む。
- 第7号：赤褐色土層（赤色弱く、しまりはやや弱い）。ローム
色を多量に、黒褐色斑子を含み、赤色スカリテを含
む。
- 第8号：褐色土層（赤色強く、しまりはやや弱い）。ローム
色を多量に、赤色スカリテを含む。
- 第9号：褐色土層（赤色弱く、しまりはやや弱い）。ローム
色を多量に、黒褐色斑子を少量含む。
- 第10号：黒褐色土層（赤色やや強く、しまりはやや強い）。黒
褐色斑子、赤色スカリテを微量含む。



第8図 2号生層及び产地(山・山)



第9図 2号住居址出土土器〔%・%〕

第4表 2号住居址出土土器観察表

1	臺	法量：口縁部径(25.60)cm。現存率：口縁のみ%。調整：外面一口唇部棒状貼り付け。折り返し口縁。指で整形しナデを施す。口縁部、縱方向のハケを呈す。内面一口縁部。LRの細繩文。穿孔を有する。胎土：密。焼成：良。色調：赤褐色。
2	臺	法量：口縁部径(26.40)cm。調整：外面一口縁部ハケ。他磨滅がひどく不明。内部一口縁部ナデ。頭部：横方向のハケ。他磨滅がひどく不明。胎土：白色粒子を含む。密。焼成：良。やや軟質。色調：淡赤褐色。
3	台付臺	法量：接合部径8.32cm。現存率：脚部のみ%。調整：外面一縱方向に細かいハケ。内面一横方向の太いハケと斜め方向のヘラミガキ。全体に磨滅している。胎土：白色粒子を多量に含む。密。焼成：良。やや軟質。色調：赤褐色。
4	臺	現存率：口縁部～頭部%。調整：外面一口唇部爪でつけたと思われる凹状のへこみ。口縁部ナデ。頭部縱方向のハケ。内面一口縁部～頭部横方向のヘラミガキ。胎土：密。焼成：良であるかやや軟質。色調：赤褐色。
5	臺	現存率：脚部上半%。調整：外面一胴部上半細繩文を施す。その下部は、横方向のハケの後横方向のヘラミガキ。内面一胴部上半横方向のハケ。胎土：密。焼成：良。色調：淡茶褐色。
6	台付臺	現存率：口縁部のみ%。調整：外面一口唇部工具を用いた刻目有する。口縁部～頭部縱方向のハケ。内面一口縁部横方向のハケ。胎土：白色粒子を多量に含む。焼成：良。色調：赤褐色。
7	染付	法量：底部径(8.28)cm。現存率：底部のみ%。調整：外面一高台の一部を除き全てに釉がかかる。底面に絵。内面一全てに釉がかかる。底面に絵。胎土：密。焼成：良。色調：青白灰色。

3号住居址（第10～15図、図版3、第5・6表）

斜面上部の8-K・L区、9-K区に位置する。東3mには1号・2号住居址が重複して、南11mには4号住居址が存在する。ほぼ完存する住居址であるが西半部は壁・床面共に遺存状態が悪い。

主軸方位はN-40°Wにとり、等高線にやや斜行する。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は8.3×7.0mを測る大型の住居址である。掘り込みはローム層まで達しており、壁高は東壁78cm、西壁では5cmを測る。壁は急角度で直線的に立ち上がる。

覆土は17層に分けられ、レンズ状の自然堆積を示す。第11～13層・第17層はビット覆土である。床面は平坦であるが東半部がやや高く構築される。また全体的に堅硬であるが西壁沿いでは軟弱で、本來的なものであるか、削平の影響であるかは明確にしない。南西隅では壁沿い4m程に亘って床面が盛り上がりを見せ、周囲からの立ち上がりははだらかであるが、明確に段差を意識して築かれている。住居址内での位置・形状等で相違を示すが、ベッド状遺構の様相を示すものである。またこの部位では、掘り方埠塁内に掘り込まれ、かつ上面を貼床で覆われる、ビット（P₁～P₄）が3ヶ所検出され、共に興味深い。

ビットは計21ヶ所検出された。P₁～P₄が立穴で、深さはP₁-37cm、P₂-28cm、P₃-33cm、P₄-29cmを測る。P₅が貯蔵穴、平面形は円形を呈し規模は径60cmで43cmの深さを有する。P₆の周囲は幅40～50cmの土堤状の盛り上がりが半円状に巡り、内側には小ビット（P₇・P₈）が設けられており、貯蔵穴に付属するものであろう。南壁中央部寄りにはP₉・P₁₀が設けられており、位置からは入口施設の可能性を窺わせる。壁外にはP₁₁～P₁₂がほぼ住居址を一巡りしている。各々、19cm、21cm、50cm、26cm、48cm、28cmの深さを持つ。規模・形態とも様々であるが、位置関係から一応住居址に付設されるものと認定した。

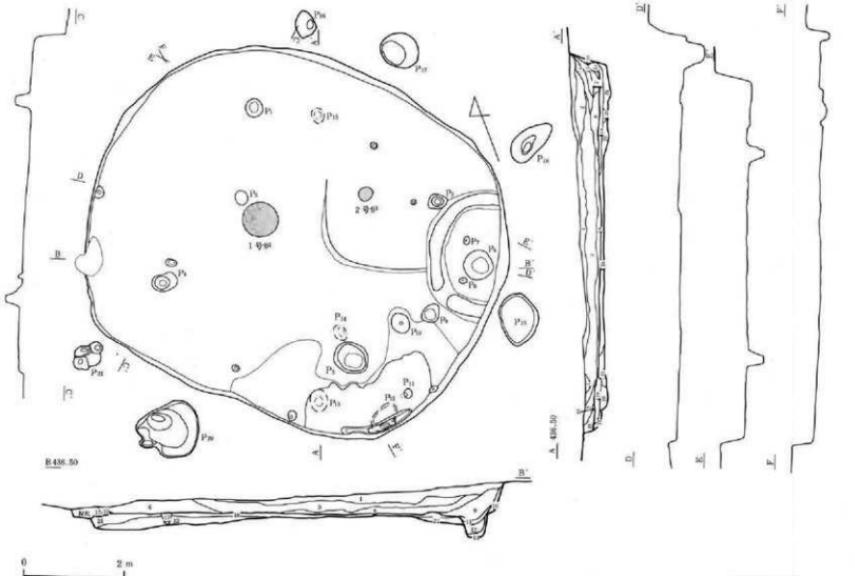
炉址は2ヶ所検出された。1号炉址は中央やや北寄りに、2号炉址は住居址東半中央寄りに位置する。2号炉址は30×24cmの楕円形を呈し、深さ15cmの浅鉢状断面を有し覆土は2層に分けられる。1号炉址は72×64cmの楕円形を呈し、深さ45cmのポール状断面を有し、覆土は4層に分けられる。1号炉址北にはP₁₃が設けられ、内部には焼土・炭化物が充填していた。

溝は認められなかった。

掘り方は壁際が深く中央が凸レンズ状に浅く、凹凸が少ない。床面からは5～34cmの深さを有し、埋土は5層に分かれ。うち第18・19層を突き固めて貼床とし、第20層はビット覆土である。

掘り方内からは4ヶ所（P₁₃～P₁₆）のビットが検出された。全て先述した如く、掘り方埋設後に設けられ、上面を床面で覆うものである。

出土遺物は豊富であるが、ほとんどの個体は原形を止めず細片化している。出土位置は、住居址東半部、特に南東隅（貯蔵穴周辺）から多く出土しているが、これは床面の遺存状態と同様、本來的な有様か、削平の影響か判然としない。出土レベルは覆土下層から覆土中にかけて認められ、一定程度まとまりを見せながらも互いに入りまじって散在している。24は磨製石器で北西



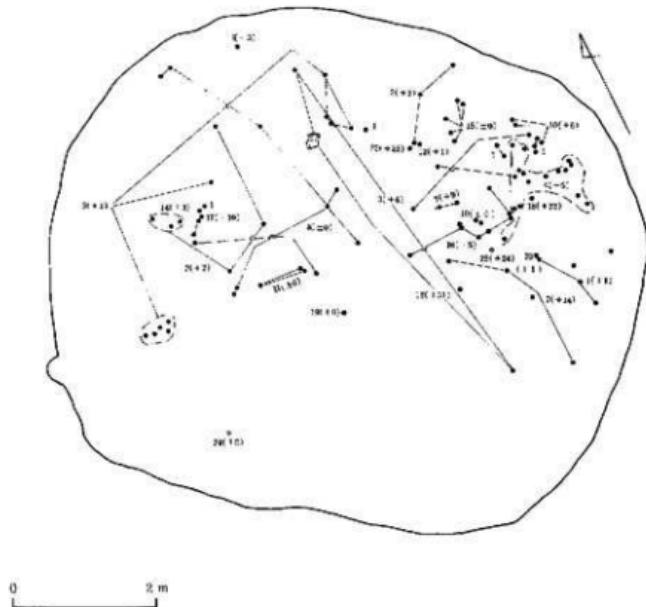
第10図 3号住居 (3号)

- 26 -

- 3号住
- 第1層：黒色土層（粘性無く、しまりは弱い。ローム粒を少量含む。）
第2層：褐褐色土層（粘性無く、しまりは普通。黒褐色粒子を含み、ロームロックを少量含む。）
第3層：褐褐色土層（粘性無く、しまりは普通。黒褐色粒子を含み、土塊化を少部分含む。）
第4層：茶褐色土層（粘性強め、しまりはやや強い。黒褐色粒子を多く含む。）
第5層：茶褐色土層（粘性強め、しまりは普通。黒褐色粒子を含む。）
第6層：黄褐色土層（粘性強め、しまりは普通。黒褐色粒子を含む。）
第7層：茶褐色土層（粘性強め、しまりは普通。黒褐色粒子、ロームを多量含む。）
第8層：茶褐色土層（粘性強め、しまりは普通。黒褐色粒子を含む。）
第9層：茶褐色土層（粘性普通、しまりは普通。黒褐色粒子を含む。）
第10層：茶褐色土層（粘性強め、しまりは強い。ロームロックを多量に含む。）
第11層：明茶褐色土層（粘性強め、しまりは弱い。黒褐色土層、ローム粒を含む。）
第12層：茶褐色土層（粘性強め、しまりは普通。黒褐色粒子を含む。）
第13層：明茶褐色土層（粘性強め、しまりは普通。ローム粒を含む。）
第14層：茶褐色土層（粘性やや弱く、しまりはやや弱い。ローム粒を多く含む。）
第15層：黑色土層（粘性強く、しまりは弱い。黒褐色粒子を含み、ローム粒を微量含む。）
第16層：暗茶褐色土層（粘性強く、しまりは弱い。黒褐色粒子を含む。）
第17層：茶褐色土層（粘性強め、しまりは弱い。黒褐色粒子を含み、土塊化を少量含む。）
第18層：茶褐色土層（粘性強く、しまりは強い。黒褐色土層、ローム粒を多量に含み、土塊化を少量含む。）
第19層：茶褐色土層（粘性強め、しまりは普通。黒褐色粒子を含む。）
第20層：茶褐色土層（粘性強く、しまりは弱い。黒褐色粒子を多く含む。）
第21層：茶褐色土層（粘性弱く、しまりは弱い。黒褐色土層を含む。）
第22層：茶褐色土層（粘性強め、しまりはやや弱い。黒褐色粒子を含み、土塊化を少量含む。）

3号住 2号炉

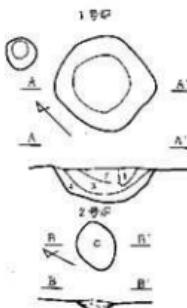
- 第1層：褐褐色土層（粘土質無く、しまりは普通。黒褐色粒子を含む。）
第2層：赤褐色土層（粘性無く、しまりは弱い。黒褐色土層を含む。）
第3層：褐褐色土層（粘性無く、しまりは強い。）
第4層：明茶褐色土層（粘土質強め、しまりは普通。黒褐色粒子を含む。）



第11図 3号住居址遺物分布図(右)

部覆土下層から出土しているが、堅緻な床面を検出しえなかつた部位であり、床面との関係は明らかにしえなかつた。

(編牛一書)

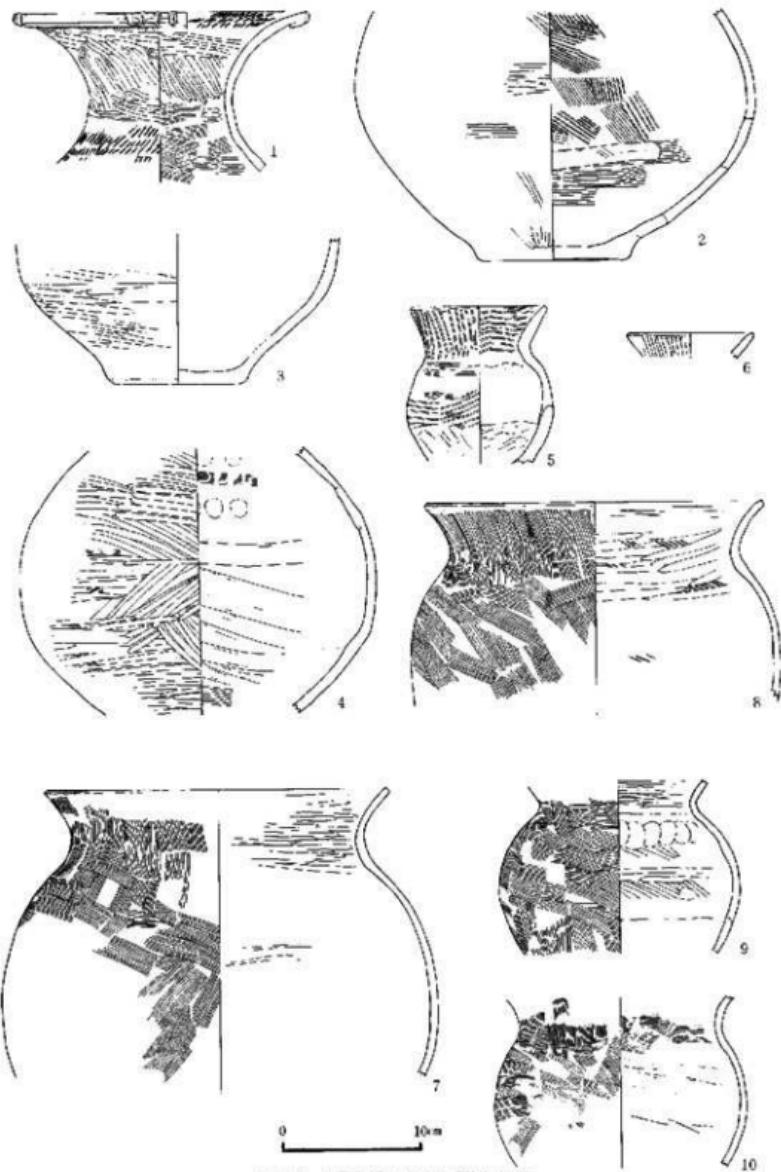


第5表 3号住居址出土土器計測表

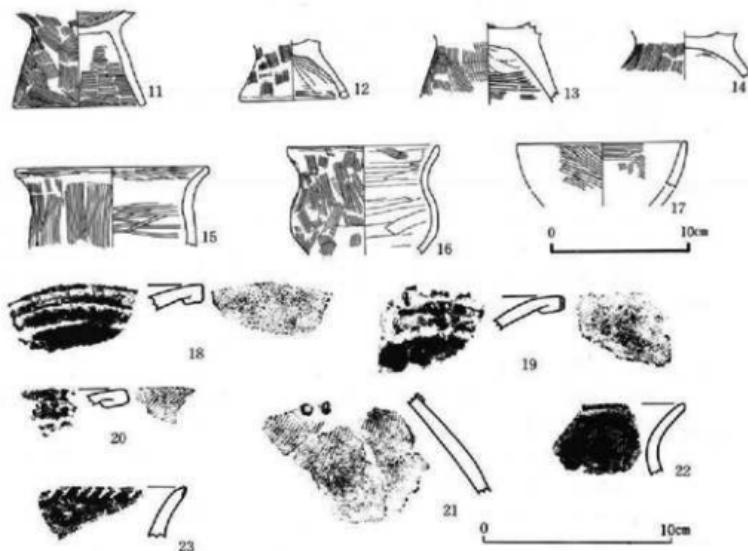
表	並	その他不明
426 片	2740 g	63 片 1020 g 5 片 70 g

50km

第12回 3号住居用・炉址(古)



第13圖 3號井勘探出上部(1~10)



第14図 3号住居址出土土器(2)〔%・%〕

第6表 3号住居址出土土器観察表(1)

1	壺	法量：口縁部径20.85cm、頭部径10.03cm。現存率：頭部より上は完。下は欠落。 調整：外面一口縁端部折り返してあり指で整形しそのあとナデしている。折り返し口縁線上に4条の棒状貼り付けを有す。頭部上半部はヘラミガキ、下半部は細繩文帯S字結節が入る。内面一口縁部約3cmの幅で細繩文帯が入る。頭部上半分横方向のハケの上をヘラミガキしている。下半分は横方向のハケ目を施す。胎土：密。焼成：良。色調：淡赤褐色。
2	壺	法量：胴部径28.22cm、底部径10.65cm。現存率：胴部底部のみが%残る。 調整：外側一全体に磨滅しておりミガキと思われるが不明。内面一胴部横方向のハケ底部簡単にナデしている。胎土：白色粒子が多く混入、密。焼成：やや軟質。色調：赤褐色。
3	壺	法量：底部径9.29cm。現存率：底部完存。胴部下半%、他は欠損。 調整：外面一全胴部下半横方向のミガキ。内面一胴部下半底面磨滅がひどい。所々にナデの痕跡を見ることがある。胎土：密。焼成：軟質。色調：赤褐色。
4	壺	法量：胴部径25.14cm。現存率：口縁部頭部底部を欠く。胴部のみが%残る。 調整：外面一胴部上半横方向のハケの後ヘラミガキを加える。下半縦方向のハケの後ヘラミガキを加える。黒斑が2ヶ所でみられる。内面一胴部上半ハケの上をわずかにナデする。指頭圧痕もみられる。下半ヘラケズリ。胎土：密。焼成：良。色調：赤褐色。

第6表 3号件跡址出土土器観察表(2)

5	小型蓋	法量：口縁部径9.1cm、脇部径10.2cm。現存率：胴下半～底部欠損。 調整：輪積み痕を残す。外面一口縁条幅の広いハケ調整、のちヨコナデ。胴部上半口縁同様のハケ後ヘラミガキ。脇部下半ヘラナデ。内面一口縁ハケ後ヨコナデ後ヘラミガキ。胴ヘラナデ。胎土：赤褐色粒子・白色粒子を含む。密。焼成：良。色調：褐色。
6	小型蓋	法量：口縁部径(8.55)cm。現存率：口縁部のみ約。他は欠損。 調整：外面一口脇部指で押圧。口縁～脇部横方向のハケの後にナデを早している。内面一口縁～頸部横方向のハケの後ナデを加える。胎土：密。焼成：良。色調：暗赤褐色
7	台付鏡	法量：口縁部径(24.43)cm、頭部径(20.69)cm、脇部径(30.85)cm。現存率：口縁をわずかに残す。胴部を残しそれより下欠損。 調整：外面一口脇部指でナデて整形している。口縁～頸部横方向のハケが入る。頸部横方向のハケ。内面一口縁～頸部ヘラケズリの後に粗いヘラミガキを加える。胴部ヘラケズリの後にナデしている。胎土：密。焼成：良。色調：暗茶褐色。
8	台付鏡	法量：口縁部径(24.80)cm、頭部径(19.36)cm。現存率：胴部上～口縁外。 調整：外面一口縁部～頸部横方向のハケ。胴部横方向のハケの上を簡単に大きくナデする。内面一口縁部～頸部横方向のハケの後ナデを加える。胴部ヘラケズリの後簡単にナデする。胎土：白色粒子を混入。密。焼成：良。色調：薄茶褐色。
9	台付鏡	法量：頭部径(11.04)cm、胴部径(17.02)cm。現存率：頸部～胴部下半。 調整：外面一口縁～頸部ナデヘラ押え。胴部上半横方向と横方向のハケ。中位斜方向のハケ。下半横方向のハケ。内面一口縁～頸部横方向のヘラミガキ。胴部上半指頭压痕が残る。中位斜め方向のヘラミガキとナデを施す。下半指頭压痕が残る。胎土：密。焼成：良。色調：淡褐色。
10	台付鏡	法量：脇部径(17.92)cm、頭部径(13.88)cm。現存率：脇部のみ約。他は欠損。 調整：外面一頸部口縁部方向の縦ハケ。脇部横方向を主としたハケ。内面一頸部横方向のハケの後にナデ。胴部横方向のヘラミガキ。胎土：密。焼成：良。色調：赤茶褐色。
11	台付鏡	法量：脚底部径9.4cm、脚高5.4cm。現存率：脚部完存。 調整：輪積み。外面一ハケ内面一ハケ。脇底部内面ハケ（脚とは別原体）。胎土：白砂粒・黒色砂粒を含む。密。焼成：良。色調：赤褐色。
12	台付鏡	法量：脚部底径7.63cm、脚高3.50cm。現存率：脚部のみ完存。 調整：外面一縦方向のハケの後簡単にナデする。内面一横方向のハケ所々ヘラにて整形を加える。輪積み。胎土：密。焼成：良。色調：赤褐色。
13	台付鏡	法量：接合部径7.31cm。現存率：脚部のみ約。 調整：外面一縦方向のハケ。内面一胴内底面わずかに斜め方向のハケが残る。脚上半ナデ。脚下半横方向のハケ。胎土：密。焼成：良。色調：薄黄褐色。
14	台付鏡	法量：接合部(6.98)cm。現存率：脚部のみ約。 調整：外面一縦方向のハケ。内面一ナデ（横方向を主とした）。胎土：白色粒子を含む。密。焼成：良。色調：淡茶褐色。
15	小型蓋	法量：口縁部径10.81cm、脇部径8.26cm。現存率：少残。脇は欠損。 調整：外面一口縁～頸部ナデを呈す。胴部上半縦方向のハケ調整。胎土：密。焼成：良。色調：茶褐色。

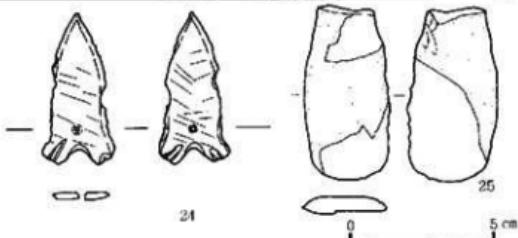
第6表 3号住居址出土土器観察表(3)

16	小型甕	法量：頭部径13.83cm。頸部径11.39cm。現存率：口縁～頸部上半を残す。調整：外面一口縁～頸部ナデ、頸部上半縦方向のハケ。内面一口縁ナデミガキ。頸部ナデ。頸部上半ミガキ(横方向)。胎土：密。焼成：良。色調：暗赤褐色。
17	甕	法量：口縁部径(12.19)cm。現存率：%。調整：外面一ナナメのハケの後にヘラミガキを施す。内面一横方向のハケの後にナデする。胎土：密。焼成：良。やや軟質。色調：淡褐色。
18	壺	法量：口縁部径(17.78)cm。現存率：口縁部のみ%。調整：外面一口唇部指で整形した後にナデしている。口縁部わずかにハケを呈しナデしている。内面一細繩文を呈している。胎土：密。焼成：良。色調：淡赤褐色。
19	壺	法量：口縁部径(13.32)cm。現存率：口縁部のみ%。調整：外面一折り返し口縁わずかにハケ。内面一細繩文を呈す。胎土：密。焼成：良。色調：淡赤褐色。
20	壺	現存率：口縁部のみ%。調整：外面一折り返し口縁。口唇部は指で整形しナデを呈す。内面一ナナメのハケを呈す。胎土：密。焼成：良。色調：淡赤褐色。
21	壺	現存率：頭部から頸部にかけて的一部分しか残っていない%。調整：外面一内形浮文2.3cm幅の縄文帯S字結節を有する。その下方はヘラミガキ。内面一横方向のハケの後にナデを呈す。胎土：密。焼成：良。色調：暗赤褐色。
22	甌	法量：口縁部径(18.27)cm。現存率：口縁部のみ%。調整：外面一口唇部は口縁部を整形した後にナデを加える。口縁部から頸部にかけては横方向のハケの後にナデを呈す。内面一横方向のハケの後にナデを加える。胎土：密。焼成：良。色調：暗赤褐色。
23	甌	現存率：口縁部のみ%。調整：外面一ハケの上にナデを加える。この後に口唇部を指で整形。内面一ハケの後にナデしている。口縁一斜面。胎土：粗。焼成：良。やや軟質。色調：薄茶褐色。

石製品 24は磨製石鎌。石質：粘板岩。全長5.4×最大幅3.6cmを測る。

基部には径0.2cmの孔が認められ、断面図で上方から下方へ向け穿孔され、穿孔側に面とりを施される。

25は磨製石製品。石質：凝灰岩。表面ともよく磨かれている。覆土中からの出土である。



第15図 3号住居址出土石製品(3)

4号住居址(第16~18図、図版3、第7・8表)

斜面上部、9・10-L区に位置する。北11mに3号住居址が、南4mに5号住居址が存在し、南東2mには2号・3号孤立柱建物遺構が連なっている。

西壁から南西隅にかけては削平のため遺存しない。土軸方位をN-21°-Wにとり等高線と平行する。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は5.6×4.3mを測る。掘り込みはローム層まで達し、壁高は東壁で55cmを測る。壁はほぼ直立に立ち造り部の状態は良好である。

覆土は16層に分けられれば自然堆積を示すが、全体的にローム粒が、また上層にロームブロックが混入し不自然さを残す。

床面は堅致な貼床ではば平坦であるが、壁際は貼床が施されていない。これは壁際小ピットの存在と共に何らかの施設の痕跡を示すものであろう。

ピットは多数検出された。P₁~P₃が主柱穴で、深さはそれぞれ25cm、19cm、30cmを測る。P₅が貯蔵穴と思われ、深さ30cmを測る。P₄~P₆は組で使用された可能性があり、深さはそれぞれ37cm、17cm、8cmを有する。P₉~P₁₁はそれぞれ40cm、25cm、26cmを測る。他に不定間隔ではあるが壁際に小ピットが巡る。住居址外には壁から1mの範囲で不定形ピット P₁₂~P₁₆が並ぶが、間隔は不ぞろいである。深さは P₁₃が38cmを有する他は10~20cmの範囲内にある。

腐泥は認められなかった。

炉址は住居址中央部北壁寄りに位置する。本炉址は二度にわたって構築されており、旧炉址面に地山土を貼り、新炉としたものである。平面は共に不整円形を呈し、75×62cmの規模である。深さは旧炉で30cm、新炉で15cmを測り、覆土は共に3層に分けられる。

掘り方は中央が浅く、壁際が深く埋りこまれ、深さは床面から4~25cmを測る。埋土は2層に分けられ、上層が貼床である。掘り方粘着中、北壁寄り中央部からP₂₇を検出した。これは掘り方埋土内に埋り込まれ覆土上層にロームブロックをリング状に持ち、上面には貼床が施される。

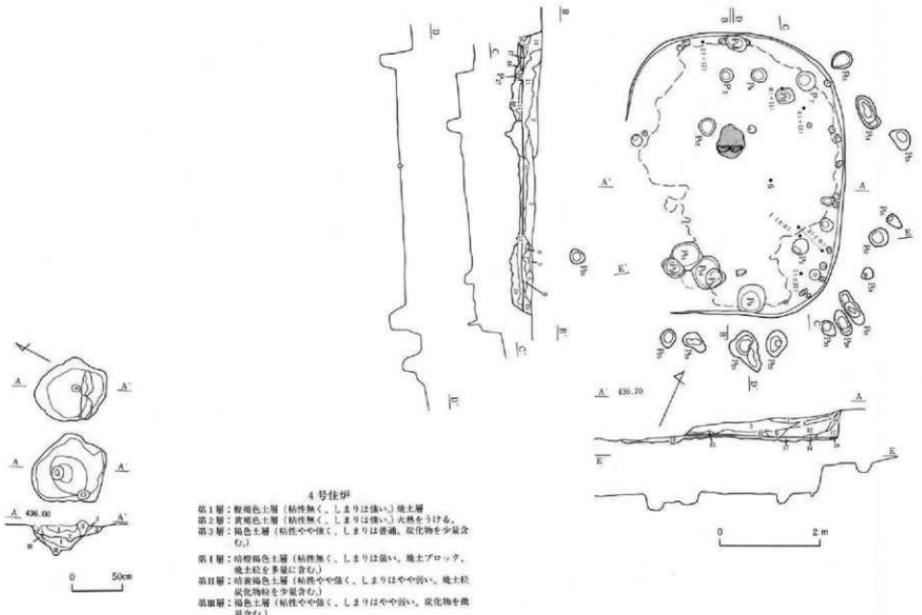
出土した遺物は少量で、床面から出土したものは、南東隅に見られた1・3のみである。他は覆土中からの出土である。(青木 達宗)

第7表 4号住居址出土土器計測表

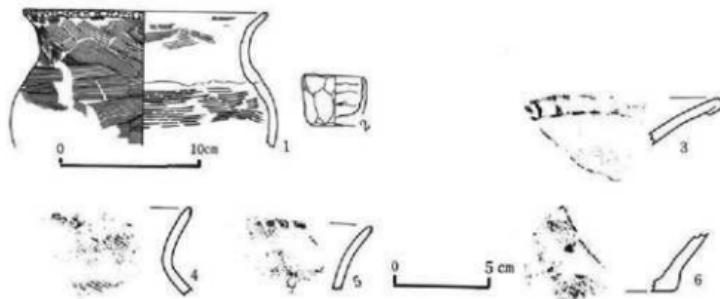
表	蓋	壺	その他不明
	77片 460g	14片 240g	4片 40g

第8表 4号住居址出土土器観察表(1)

1 台付壺	法量: 口縁部径(16.90)cm、肩部径(18.80)cm、頸部径(14.64)cm、現存率: 口縁~肩部% 脚部欠損。 調整: 外面一口唇部不潔いの刻み目をもつ。口縁部所々横方向の細かいハケ。頸部縦方向の細かいハケ。肩部横方向のハケ。内面 口縁部ナデ。頸部横方向のハケの後にナデを呈す。肩部横方向のハケの後を簡単にナデる。胎土: 密。焼成: 良。色調: 略茶褐色。



第16図 4号住居址・焼跡【古・古】



第17図 4号住居址出土土器〔3・5号〕

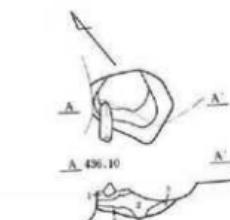
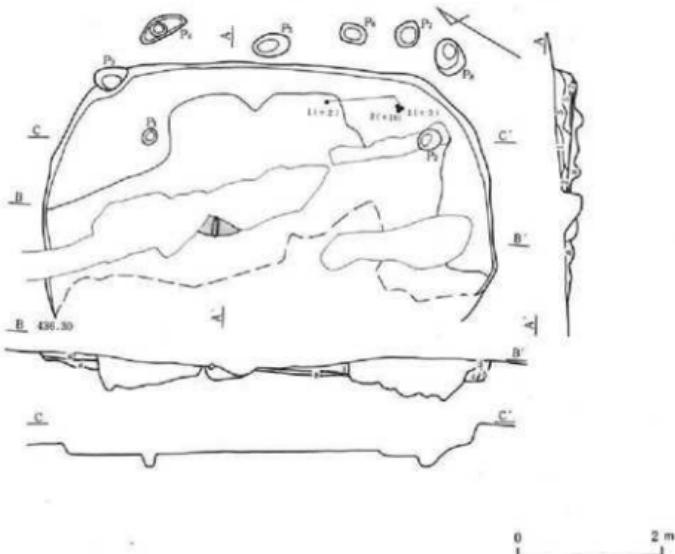
第8表 4号住居址出土土器観察表(2)

		法量：口縁部径3.95cm。胴部径4.50cm。器高3.67cm。底部径3.55cm。現存率：%。 調整：輪積み痕を残す。外面一口唇部指で整形した後に簡単なナデを施す。口縁部指頭圧痕を残す。胴部指頭圧痕を残す。底部指で整形した後に簡単なナデを施す。内面全体が指で整形した後に簡単なナデを施す。胎土：密。焼成：良。色調：明茶褐色。
2	手づくね	現存率：口縁部のみ%。 調整：外面一折り返し口縁、指で整形しナデする。口縁部～頭部縫のハケ。胎土：密。焼成：良。色調：赤褐色。
3	壺	現存率：口縁部のみ%。 調整：外面一口唇部わずかに刻み目をもつ。口縁部～頭部斜め方向のハケ。内面一口縁部～頭部横方向のハケの後わずかにナデを施す。胎土：密。焼成：良。色調：薄茶褐色。
4	甕	現存率：口縁部のみ%。 調整：外面一口唇部刻み目。口縁部磨滅がひどく不明。内面一口縁部ナデ。胎土：密。焼成：良。色調：茶褐色。
5	甕	現存率：底部のみ%。 調整：外面一縱方向のハケの後にみがきを加える。内面一横方向のハケ及びナデ。胎土：密。焼成：良。色調：明茶褐色。
6	壺	

鉄製品 棒状鉄器。現長16.5cm、
0.4×0.5cmの方形断面を有する。
一端は1cmにわたって二肢に裂かれ、0.8×0.3cmの偏平面を示す。壁外P26覆土中より出土している。

5号住居址（第19～20図、図版4、第9・10表）

斜面上部の、10・11-M区に位置する。北4mに4号住居址が存在し、北東3mに2号・3号掘立柱建物遺構が連なる。主軸方位はN-30°-Wにとり、等高線とやや斜行する。耕作及び道路に



5号住戸	5号住
第1層：棕褐色土層=地土。	第1層：褐色土層
第2層：明黄褐色土層=被熱ローム層。	第2層：褐色土層（粘性強、しまり強。ロームブロックを含む。）
第3層：暗黄褐色土層（粘性弱、しまり弱。ローム粒、黒褐色粒子を含む。）	第3層：暗褐色土層（粘性無、しまり強。黒褐色土、ローム粒を含む。）
第4層：暗褐色土層（粘性やや強、しまり強。）	第4層：暗褐色土層（粘性無、しまり強。ロームブロック、地土ブロックを含む。）
第5層：褐色土層（粘性無、しまり強。ローム粒を含む。）	第5層：褐色土層（粘性無、しまり強。ロームブロック、地土ブロックを含む。）
第6層：暗黄褐色土層（粘性強、しまり弱。ローム粒を含む。）	第6層：褐色土層（粘性強、しまり強。地土粒を含む。）
第7層：褐色土層（粘性強、しまり強。地土粒を含む。）	第7層：褐色土層（粘性強、しまり強。地土粒を含む。）
第8層：暗黄褐色土層=粘床。	第8層：暗黄褐色土層=粘床。

第19図 5号住居址・炉址【古・森】

よって削平を受け、西半部は遺存しない。遺存する東半部も敵が走り必らずしも良好ではない。掘り方残存部からの推定であるが平面形は隅丸長方形を呈すると考えられ、規模は6.3×(4.8)m程を測る。掘り込みはローム層まで達し、壁高は25~30cmを有する。壁は急角度でやや内溝気味に立ち上がる。覆土は7層に分けられ自然堆積を示す。

床面はほぼ平坦で、堅緻であるが、周辺部は軟弱である。

ピットは8ヶ所検出された。P₁・P₂が主柱穴で、深さはP₁-17cm、P₂-23cmを測る。P₃~P₆は住居址外に設けられ、それぞれ28cm、9cm、13cm、23cm、24cm、22cmの深さを有する。住居址東

壁外に不定間隔に並ぶ。

周溝は認められない。

が址は住居址中央やや北寄りに築かれるが故の為、半分程度されている。形状・規模は推定できるが、隅丸方形を呈し、60×50cm程と考えられる。炉石は1つ遺存しており枕石的に使用されたものであろう。覆土は3層に分けられる。

掘り方はほぼ全面に及ぶが、床面が軟弱であった東壁際は掘りこまれなかった可能性もある。底面は凹凸が激しく床面からは5~15cmの深さを持つ。埋土は1層である。

出土遺物は少なく、図示したのも2点のみである。1・2共に南東隅から出土し、1はほぼ床面直上に認められた。(吉岡 弘樹)

第9表 5号住居址出土土器計測表

	縦	横	その他不明
	22 片 150 g	4 片 90 g	2 片 10 g



第20図 5号住居址出土土器(2点)

第10表 5号住居址出土土器観察表

1	壺	法量：口縁部径(21.29)cm。現存率：口縁部のみ約%。 調整：外面-折り返し口縁を呈し棒状貼り付けを有す。口縁部に焼成前の穿孔が行なわれている。縦方向のハケを施す。内面-口縁部細繩文を呈す。胎土：密、焼成：良。色調：赤褐色。
2	壺	法量：口縁部径(17.00)cm。現存率：口縁のみ約%。 調整：外面-磨滅しており整形は不明。内面-横方向のハケの後にヘラミガキを施す。胎土：白色小粒子を多量に含む。密。焼成：良。色調：赤褐色。

6号住居址(第21~23図、図版4、第11・12表)

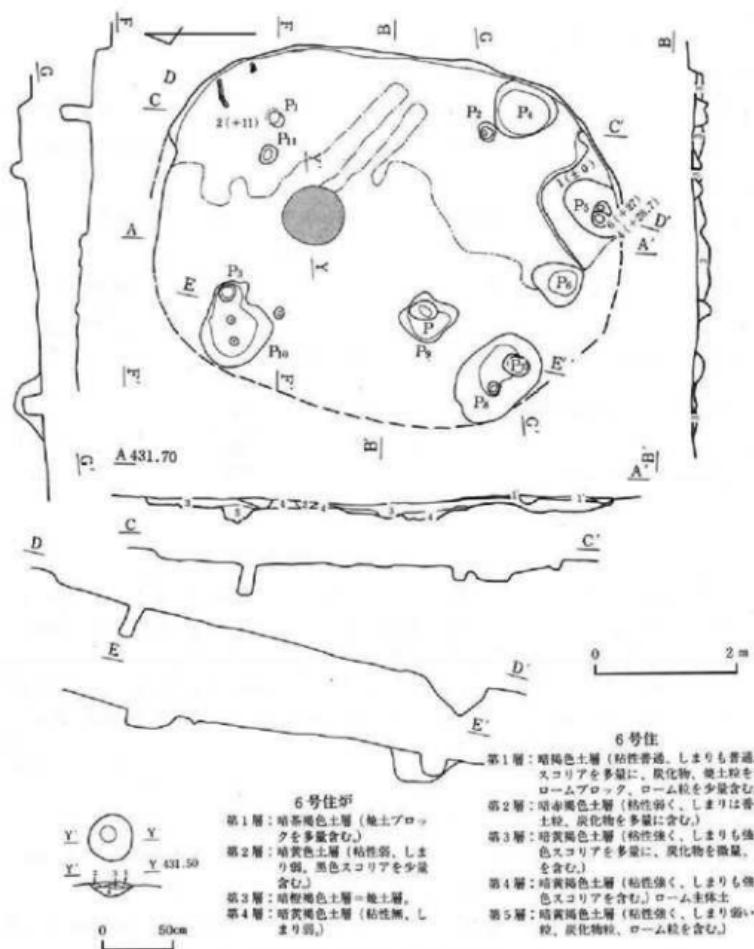
斜面中位、緩傾斜面の3-L・M区に位置する。東5mに4号掘立柱建物遺構が、南東25mに7・8号住居址が存在し、南5mには9号住居址と1号小窓穴遺構が立ち並ぶ。

耕作により削平され、東半部しか遺存しない。主軸方位をN~4°Wにとり、等高線に平行する。平面形は隅丸長方形を呈するものと推定され、規模は6.7×5m程と考えられる。

掘りこみはローム層中まで達しており、削平が激しく5~12cmの陥落を有するにすぎず、覆土は1層である。

床面は貼床が施され、平坦で遺存部は堅致である。

ピットは11ヶ所検出された。P1~P3が土柱穴で深さはそれぞれ45cm、16cm、24cmを測る。四本柱とすれば南西隅の柱穴が明らかでなく、P7~P9のうち1ヶ所が該当する可能性がある。P5が貯蔵穴と思われ、楕円形平面を呈し規模は95×70cmで40cmの深さを有する。ピット周間床面は2~4cm程盛り上がりをみせる。P6は出入口施設の可能性を窺わせる。



第21図 6号住居址及び炉址 [高・古]

周溝は検出されなかった。

炉址は住居址中央やや北寄りに築かれる。平面形は円形を呈し、規模は径34cm、30cm程の深さを有する。覆土は4層に分けられる。

堀り方は住居址全面を掘りこむものと思われ、底面の凹凸は激しいが、擾乱の為明確にしえない。

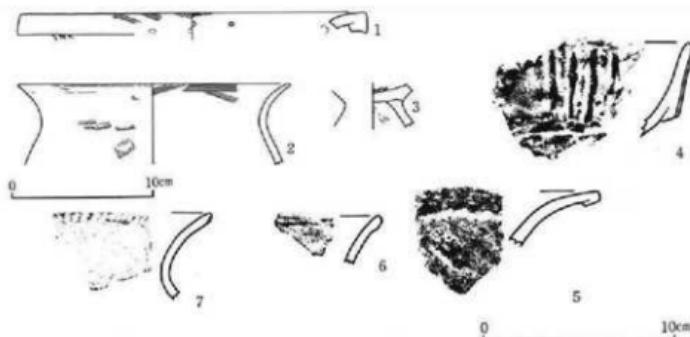
出土遺物は少量で、南東部、貯蔵穴周辺に集中している。床面から出土しているものは1つと少なく、他は覆土中の出土である。

第11表 6号住居址出土土器計測表

表	壺	壺	その他不明
	153片 705g	3片 40g	3片 25g

打製石斧はP₆覆土内からの出土である。

(山崎 和也)

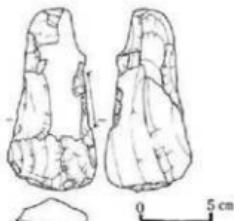


第22図 6号住居址出土土器〔左・右〕

第12表 6号住居址出土土器観察表

1	壺	現存率：口縁部 折り返し口縁ナデ。 調整：口縁部～頸部綫方向のハケ 2ヶ所の穿孔。 内面一口縁部～頸部ナデ。 胎土：粒子が多く粗い。 焼成：良。 色調：灰茶褐色。
2	台付甕	現存率：口縁部～胴部上半%。 調整：外面一口縁部ナデ。 口縁部～頸部綫方向のハケの後簡単にナデる。 胴部上半綫方向のハケの後簡単にナデる。 内面一口縁部～頸部ナデ。 胴部上半ナデ。 胎土：密。 焼成：良。 色調：暗赤褐色。
3	台付甕	現存率：脚接合部付近のみ%。 調整：外面一接合部付近簡単なナデ。 内面一胴底部斜め方向のハケの後ナデ。 脚上部斜め方向のハケ。 胎土：密。 焼成：良。 色調：暗赤褐色。
4	壺	現存率：口縁部%。 調整：外面一口縁部複合口縁棒状貼付を4本有す。 1区画。 内面一口縁部ナデ。 内外面ともに磨滅がひどい。 胎土：密。 焼成：良であるがやや軟質。 色調：明赤褐色。
5	壺	現存率：口縁部～頸部%。 調整：外面一口縁部、折り返し口縁。 口縁～頸部斜め方向のハケ。 内面一口縁～頸部ナデ。 内外面ともに非常に磨滅しており整形は不明な点がある。 胎土：小粒子を含む。 密。 焼成：軟質。 色調：淡橙褐色。
6	甕	現存率：口縁部%。 調整：外面一口唇部ナデ。 口縁部横方向のヘラミガキ。 内面一口縁部横方向のヘラミガキ。 胎土：密。 焼成：良。 色調：赤茶褐色。
7	甕	現存率：口縁部～頸部%。 調整：外面一口唇部刻み目。 口縁部綫方向のハケ。 内面一口縁部～頸部横方向のハケの後にナデ。 胎土：密。 焼成：良。 色調：淡赤褐色。

石器 打製石斧。平面楔形を呈し、 13×6 cmを測る。器厚は最大2.3cm、重量は230gである。一部に自然面を有し、右側縁に敲打痕を有する。



7号住居址（第25図）

斜面中位の緩斜面部、5・6-M・N区に位置する。 第23図 6号住居址出土石器〔石〕

南半部を8号住居址に切られ、上面を耕作によって削平されるため、掘り方の一部が遺存するにすぎない。当初、搅乱とも、また7・8号住居址両者で一軒の大型住居址になるかとも考えた。しかし8号住居址柱穴、及び北壁一部を検出した為後者の可能性を除外した。更に7号住居址北壁コーナー部が僅かながらも確認されたこと、細片化が進んでいるが遺物が出土している事等から一軒の住居址として認定したものである。

形状・規模等は明確にしえないが、隅丸長方形を呈し短軸は5m程である可能性が強い。また主軸方位は8号住居址とはほぼ同一にとるものと考えられる。 (吉岡 弘樹)

8号住居址（第24～26図、図版4、第13・14表）

斜面中位の緩斜面部、6-M・N区に位置する焼失住居である。北西27mに6号住居址が、西16mに13号住居址が存在する。南3mには17号住居址が、東には22m離れて3号住居址が存在する。7号住居址南半部を切って構築されている。

耕作による削平のため北半部では掘り方が遺存するのみである。南半部は偶々、上面を農道が走っていたため良好な遺存状態を示している。

主軸方位をN-32°-Wにとり、等高線にはほぼ平行する。掘り方面からの推定であるが、平面形は隅丸長方形を呈し、規模は 6.3×5 mを測るものと考えられる。

掘り込みはローム層中まで達し、壁高は55cm、壁は急角度で湾曲しながら立ち上がる。覆土は15層に分けられ、床面直上（第



第24図 8号住居址焼土・炭化材分布図〔古〕

7・8号住

- 第1回：黒毛牛・黒毛馬・黒い鳥・黒い魚など、黒いものでいっぱい。黒い色を黙りこなす。多々言ふ。ローム、ロームアーヴィングを黙りこなす。風景を黙りこなす。

第2回：黒毛牛・黒毛馬・黒い鳥・黒い魚など、黒いものでいっぱい。多々言ふ。ローム、ロームアーヴィングを黙りこなす。黒い色を黙りこなす（参考）。

第3回：黒毛牛・黒毛馬・黒い鳥・黒い魚など、黒いものでいっぱい。黒い色を黙りこなす。少々言ふ。ローム、ロームアーヴィングを黙りこなす。黒い色を黙りこなす。

第4回：黒毛牛・黒毛馬・黒い鳥・黒い魚など、黒いものでいっぱい。黒い色を黙りこなす。少々言ふ。ローム、ロームアーヴィングを黙りこなす。

第5回：黒毛牛・黒毛馬・黒い鳥・黒い魚など、黒いものでいっぱい。黒い色を黙りこなす。

第6回：黒毛牛・黒毛馬・黒い鳥・黒い魚など、黒いものでいっぱい。黒い色を黙りこなす。

第7回：黒茶色の鳥・黒茶色の魚など、黒いものでいっぱい。黒茶色を黙りこなす。

第8回：黒茶色の鳥・黒茶色の魚など、黒いものでいっぱい。黒茶色を黙りこなす。

第9回：黒茶色の鳥・黒茶色の魚など、黒いものでいっぱい。黒茶色を黙りこなす。

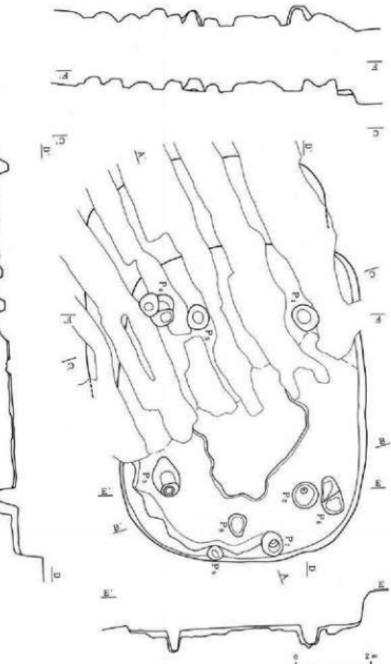
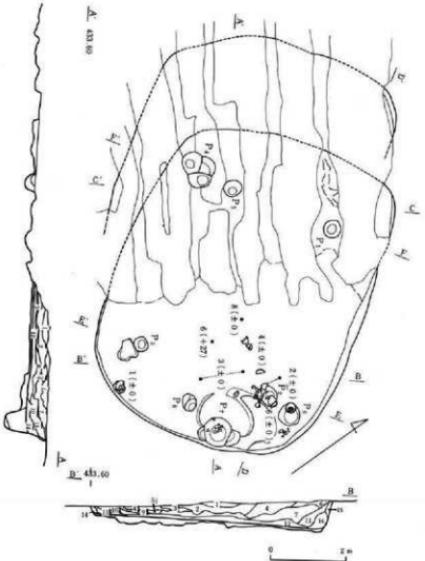
第10回：黒茶色の鳥・黒茶色の魚など、黒いものでいっぱい。黒茶色を黙りこなす。

第11回：黒茶色の鳥・黒茶色の魚など、黒いものでいっぱい。黒茶色を黙りこなす。

第12回：黒茶色の鳥・黒茶色の魚など、黒いものでいっぱい。黒茶色を黙りこなす。

第13回：黒茶色の鳥・黒茶色の魚など、黒いものでいっぱい。黒茶色を黙りこなす。

第14回：黒茶色の鳥・黒茶色の魚など、黒いものでいっぱい。黒茶色を黙りこなす。



第25回 8号住居址及び7・8号住居址掘り方(古)

12層)は大量の焼土・炭化材を主体とする層である。上層中には焼土粒・ローム粒・ロームブロックの混入が目立ち、層の乱れも人為的な堆積を示す。

床面は平坦で堅密な貼床である。床面上には多量の焼土・炭化材が認められた。ピットは9ヶ所検出され、P₁～P₄が主柱穴である。深さはそれぞれ27cm、18cm、42cm、23cmを測る。P₇が貯藏穴で、60×50cmの不規則形を呈し、深さ40cmで深鉢型断面を有する。両脇には小ピットが連結し、馬蹄床面は土手状の盛りあがりをみせP₇を巡るが住居址内部に向け開口する。P₈は深さ30cmを有し、出入り施設に関連するものであろう。P₉は掘方底面に設けられたものである。

炉址は検出されなかったが、位置関係から削平された住居址中央や北寄りに構築されていたと推定される。

掘方は床下全面に及び、中央が浅く周囲が深く掘りこまれながらかな凹凸をもつ。床面からの深さは5～15cmを測り、埋土は1層である。

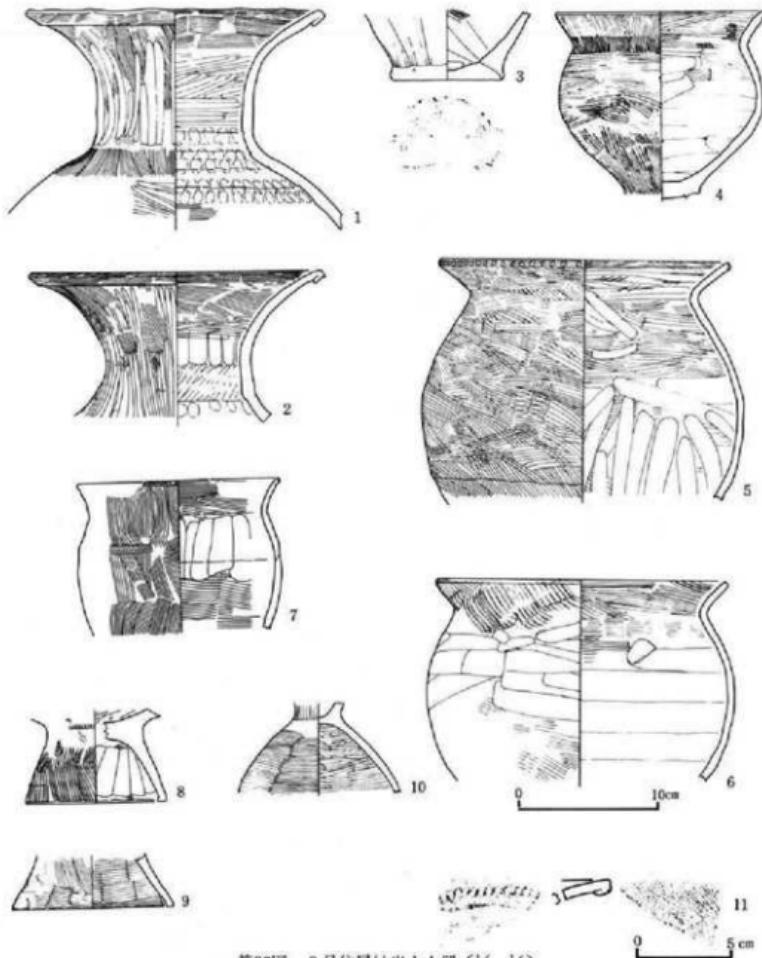
出土遺物は比較的多く貯蔵穴周辺に集中している。床面での出土状態を観察すると、壺2、瓶4・6、蓋10は貯蔵穴を巡る土堤部外縁から、東西壁際から壺1が出土している。更に細片化のため同示しえなかつたが貯蔵穴底部からも土器片が多数出土している。(吉岡弘樹)

第13表 8号住居址出土土器計測表

	壺	壺	その他不明
	129片	1200g	8片 180g 6片 80g

第14表 8号住居址出土土器観察表(1)

1 壺	法量：口縁部径20.33cm。底部径10.97cm。現存率：底部より下をすべて欠く。調整：外面一折り返し口縁、口縁部内面から外面に向てハケを施してから折り返す。この後ナデを加える。口縁部縦方向のハケ。頸部(上・中)横方向のハケの後縱方向のヘラミガキ。(下)縱のハケ。内面一口唇部横方向のハケ。頸部(上・中)横方向のヘラミガキ。(下)指頭による押圧。胎土：白色小粒子を多量に含む。密。焼成：良。色調：赤褐色。
	法量：口縁部径20.49cm。底部径10.21cm。現存率：頸部より下をすべて欠く。調整：外面一折り返し口縁、口縁部内面から外面に向てハケを施してから折り返している。この後ナデを加える。口縁部縦のハケの後簡単なヘラミガキ。頸部縦のハケの後縱方向のヘラミガキ。内面一口唇部横方向のハケ。頸部(上)横方向のヘラミガキ。(中)横方向のヘラミガキ。(下)斜めのヘラミガキの後にナデする。指頭による押圧。胎土：白色の小粒子を含む。密。焼成：良。色調：赤褐色。
2 壺	法量：底部径(7.13)cm。現存率：底部のみ%。調整：外面一胴部下半縱方向の大きなミガキ。底面ハケにて整形。内面一胴部下半ハケの上をナデする。底部ナデ。胎土：密。焼成：良。色調：暗褐色。
	法量：口縁部径14.65cm。底部径12.32cm。接合部径5.33cm。現存率：底部を除き%。調整：外面一口縁付近縱方向のハケの後にナデする。頸部縦方向のハケ。頸部横方向のハケ。胴部下半～脚接合部横方向のハケ。内面一口縁～頸部横方向のハケの後に横方向を主とするミガキ。胴部上半ヘラケズリで一部横方向のハケ。胴部下半ヘラケズリ。胎土：密。焼成：良。色調：明赤褐色。
4 口付瓶	法量：口縁部径14.65cm。底部径12.32cm。接合部径5.33cm。現存率：底部を除き%。調整：外面一口縁付近縱方向のハケの後にナデする。頸部縦方向のハケ。頸部横方向のハケ。胴部下半～脚接合部横方向のハケ。内面一口縁～頸部横方向のハケの後に横方向を主とするミガキ。胴部上半ヘラケズリで一部横方向のハケ。胴部下半ヘラケズリ。胎土：密。焼成：良。色調：明赤褐色。



第26図 8号住居址出土土器(1/4, 1/6)

第14表 8号住居址出土土器観察表(2)

5	舌付甌	法量：口縁部径(20.27)cm、頸部径(16.10)cm、最大径(22.75)cm。現存率：口縁～胴部 %。 調整：外面一口唇部刻み目。口縁～頸部横及び斜め方向のハケ。頸部斜め方向 のハケ。胴部横及び斜め方向のハケ。内面一口唇部横方向のハケの後にミガキ。頭部～ 胴部上半横方向のハケの後一部ナデ。胴部下半横方向のハケの後ナデる。胎土：白色粒 子を多く含む。密。焼成：良。色調：暗褐色。
---	-----	---

第14表 8号住居址出土土器観察表(3)

6	台付盤	法量：口縁部径(20.23)cm、頸部径(17.83)cm。現存率：口縁～胴部上半%。調整：外面一口唇部横方向の細いハケの後ナデる。口縁～頸部軸方向のハケ。胴部上半横方向のハケの後にナデる。胴部下半横方向の太いハケ。内面一口縁～頸部横方向の太いハケ。胴部上半横方向の細いハケ。胴部下半ナデ。胎土：白色粒子を多量に含む。密。焼成：良。色調：赤褐色。
7	台付盤	法量：口縁部径(14.00)cm、頸部径(12.50)cm。頸部最大径(14.32)cm。現存率：口縁～胴部%。調整：外面一口唇部刻み目。口縁～頸部縱方向のハケ。胴部縱方向を主とするハケ。内面 口縁～頸部横方向のハケ。胴部上半ナデ。胴部下半横方向のハケ。胎土：白色粒子を多量に含む、やや粗。焼成：良。色調：暗褐色。
8	台付盤	法量：脚底径(9.75)cm。接合部径(6.26)cm。現存率：脚のみ%。調整：外面 接合部付近縱方向のハケ。脚斜め方向のハケ。内面一横方向のハケの後に縱方向のヘラナデ。胎土：白色粒子を多く含む。密。焼成：良。色調：淡赤褐色。
9	台付盤	法量：脚底径(11.37)cm。現存率：脚部のみ%。調整：外面・脚中央部縱方向を主としたハケ。脚底部付近横方向を主としたハケ。内面一脚全体に横方向のハケ。胎土：白色粒子を含む。密。焼成：良。色調：赤褐色。
10	蓋	法量：縦部径3.29cm。現存率：%。調整：外面一頭部(上)縱方向のヘラミガキ。(下)横方向のヘラミガキ。内面一頭部全体に横方向のヘラミガキ。胎土：白色粒子を多量に含む。密。焼成：良。色調：赤褐色。
11	壺	現存率：口縁部のみ%。調整：外面一口唇部折り返し口縁に切り目を施す。口縁斜め方向のハケ。内面 口縁細面文を施す。胎土：密。焼成：良。色調：明赤褐色。

9号住居址（第27～30図、図版5、第15・16表）

斜面中位、緩斜面部の3・4-M・N区に位置する。西1mに1号小竪穴遺構が主軸を直交させて立ち並び、南東27mには7・8号住居址が重複して存在する。北5mには6号住居址が、南西5mには10号住居址が接する。

耕作により上部を削平され、實際に並ぶと想定されたピット及び床面の一部残存部によって規模・形状を推定した。平面形は方形を呈し、規模は4.9×4.8mを測る。主軸方位をN-8°-Wにとり、等高線にはほぼ平行する。

掘り込みはローム層まで達しているが、壁は削平が激しく東壁で僅かに検出されたにすぎない。床面も僅かしか遺存しないが、遺存部は堅緻であった。

ピットは多数検出された。P₁～P₄が主柱穴であるが掘り方底面で確認されたものである。床面

推定レベルからの深さ

はそれぞれ、45cm、68cm、54cm、48cmを測る。

P₆・P₇が衛藏穴である。

P₆は80×45cmの長方形

平面を呈し深さは50cm、

P₇は50×40cmの梢円形

平面を呈し深さ20cmを

有する。P₆を埋め戻し

た後P₇を構築した可能

性が強い。P₈・P₉は共

に40~50cmの方形平面

を呈し、深さはP₈が12

cm、P₉が54cmを測り、

用途不明であるが、P₉

は出入口施設に関連す

る可能性も持つ。P₁₀・

P₁₁は炉際に築かれた

ものである。他に壁際

に多数のビットが認め

られた。規模において

大小はあるがほぼ同じ

機能を持つものといえ

よう。住居址を一巡す

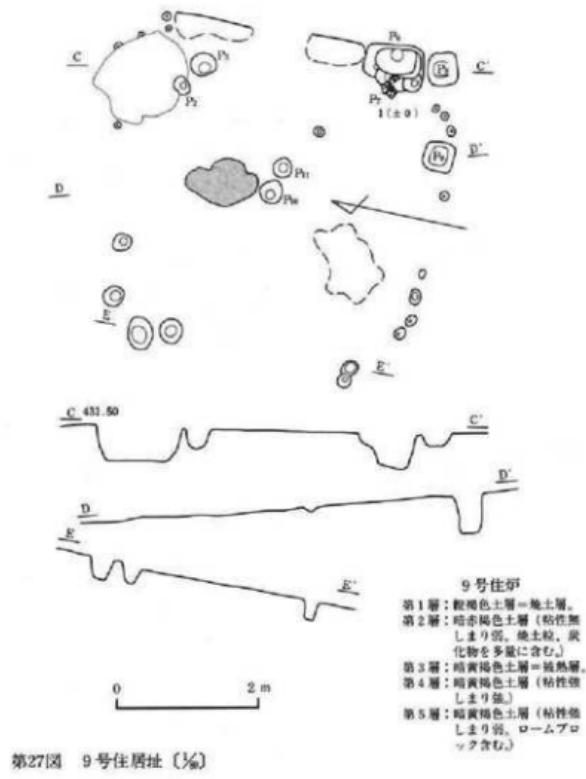
るとするより、各コー

ナーに配されているも

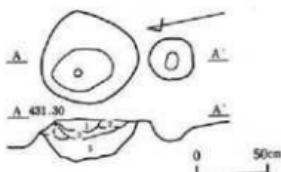
のと考えたい。

炉は住居址中央や北寄りに築かれる。北側の一部に
搅乱を受けるが、径67cm程の不整円形を呈し、深さは30cmを有する。覆土は5層に分けられる。

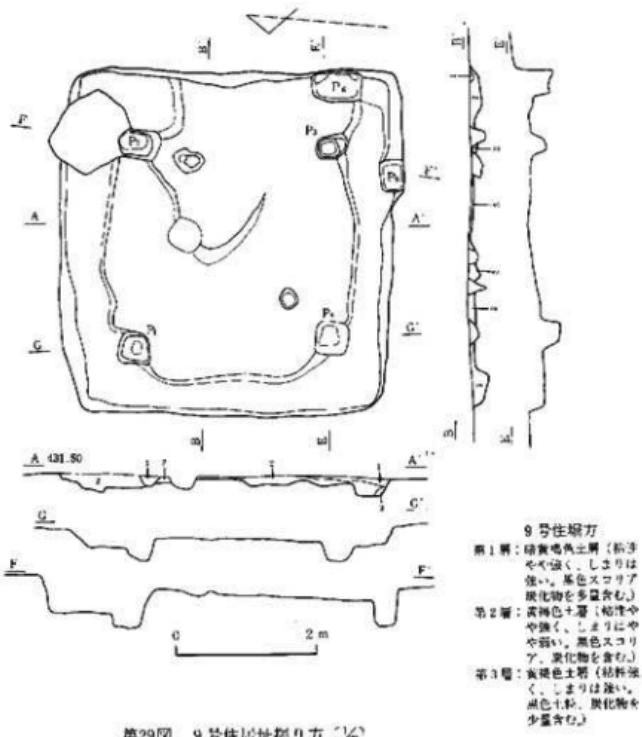
掘り方は床下全面に及ぶ。東壁沿いを除いて、壁際が深く中央が浅く掘りこまれ、更に全体的に東半部が浅くなる。底面はなだらかで床面からの深さは5~28cmを測る。埋土は3層に分けられる。



第27図 9号住居址 (9号)



第28図 9号住居址炉址 (9号)



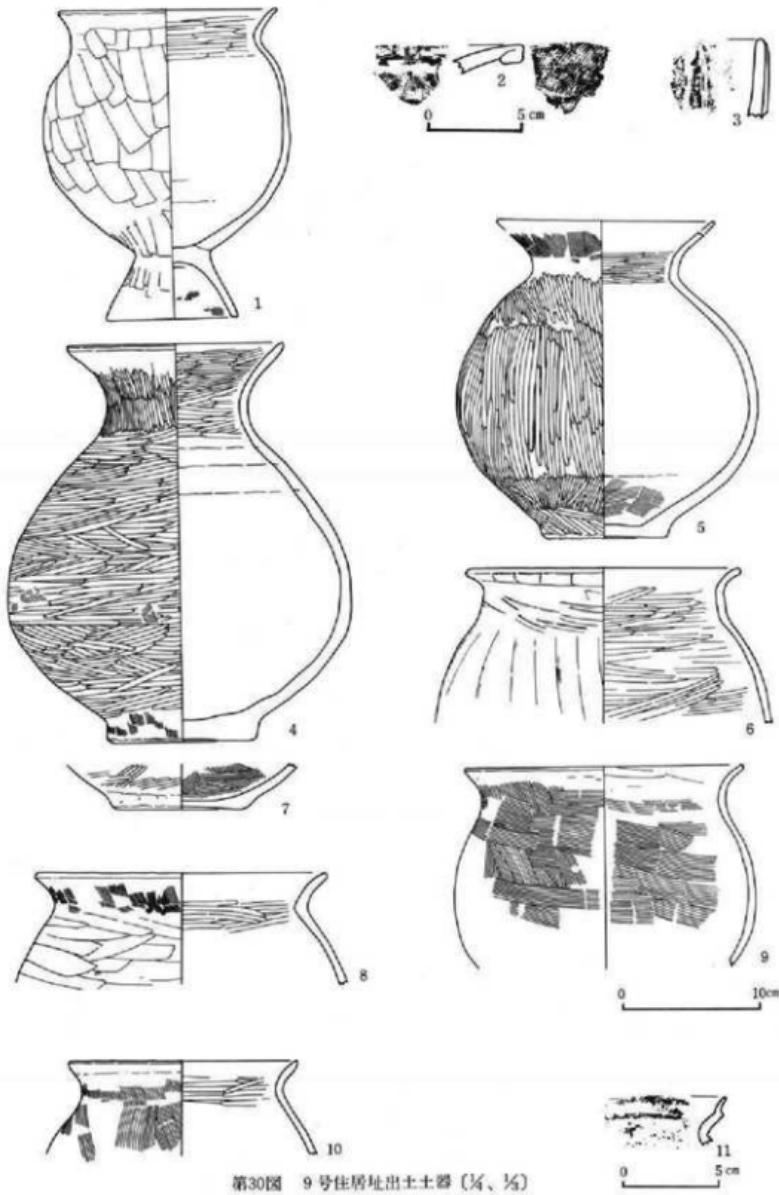
第29図 9号住居址掘り方 (3)

出土遺物は少なく図示したものも僅かである。1は貯蔵穴上面から出土している。尚本住居址は確認調査時の1号住居址にあたる。4~11は確認調査時に検出した遺物であり、全て造構確認面よりの出土である。

(伊藤 公明)

第15表 9号住居址出土土器計測表

裏		蓋		その他不明	
117片	500g	5片	40g	3片	40g



第30图 9号住居址出土土器(1/4、1/2)

第16表 9号住居址出土土器観察表

1	台付甕	法量：口縁部径13.87cm。頸部径12.12cm。胴部径15.80cm。接合部径4.74cm。底部径(脚)8.44cm。高さ20.2cm。現存率：約6%。調整：外面→口縁部横方向のヘラケズリ。頸部ナデ。胴部上半横方向のヘラケズリ。胴部中縦方向のヘラケズリ。胴部下半横方向のヘラケズリ。脚接合部縦方向のナデ。磨滅がひどく不明の点が残る。内面一口縁部ナデ。口縁～頸部横方向のヘラミガキ。胴部～底部簡単なナデ。脚ナデ。胎土：密。焼成：良。色調：暗褐色。
2	壺	現存率：口縁部のみ%。調整：外面一口唇部折り返し口縁。指で整形した後にナデする。口縁部ハケ(縦)、ナデ。内面一口唇部紺縫文を施す。胎土：密。焼成：良。色調：明赤褐色。
3	壺	現存率：口縁部のみ%。調整：外面一口縁部棒状貼り付けを有し、横方向のハケ。内面一ナデ。胎土：密。焼成：良。色調：明褐色。
4	壺	法量：口縁径13.7cm。胴部径22.0cm。底部径9.6cm。器高25.7cm。現存率：ほぼ完形。調整：口縁部～頸部ミガキのちナデ。胴部ハケのちミガキ。底部ミガキ。木葉痕。内面一口縁部～頸部ミガキ。脚上半部指頭痕。下部ナデ。胎土：密。焼成：良。色調：茶褐色。
5	壺	法量：口縁径14.0cm。胴部径19.5cm。底部径8.2cm。器高20.6cm。現存率：ほぼ完形。口唇部欠損。調整：口縁部～頸部タテハケのちミガキ。胴部ミガキ。内面一口縁～頸部ミガキ。脚部ナデ。底部ハケ。胎土：密。焼成：良。色調：暗赤褐色。
6	甕	法量：口縁部17.8cm。胴部(21.6cm)。現存率：口縁～肩部%。調整：口縁部ヘラピキのちハケ。一部指頭痕。脚部タテハケ。内面一口縁部ミガキのちナデ。胴部ミガキ。胎土：白砂粒を含み密。焼成：良。色調：黒褐色。
7	壺	法量：底部径8.7cm。現存率：底部破片%。調整：外面 脚下部ミガキ一部ヘラオサエ。底面ハケ。胎土：密。焼成：良。色調：外面一赤褐色。内面 黒色。
8	壺	法量：口縁部18.8cm。胴部(21.0cm)。現存率：口縁～肩部%。調整：口縁部タテハケのちナデ。胴部ケズリ。内面一口縁部ハケ。胴部ミガキのちナデ。胎土：白砂粒を含み密。焼成：良。色調：赤褐色。
9	甕	法量：口縁部18.0cm。胴部19.3cm。現存率：上半部%。調整：口縁部ヨコナデ。胴部タテのちヨコハケ。内面一ハケ。指頭痕。胎土：白砂粒を含み密。焼成：良。色調：暗茶褐色。
10	甕	法量：口縁部14.5cm。現存率：口縁部～肩部%。調整：口縁部ナデ。脚部ハケ。内面一口縁部ナデ。脚部ハケ。脚部指頭痕。胎土：密。焼成：良。色調：茶褐色。
11	壺	現存率：S字状口縁部破片。調整：口唇部ナデ段部刺突。脚部右方向の押引き。内面一ナデ。脚部ハケ。胎土：密。焼成：良。色調：暗黄褐色。

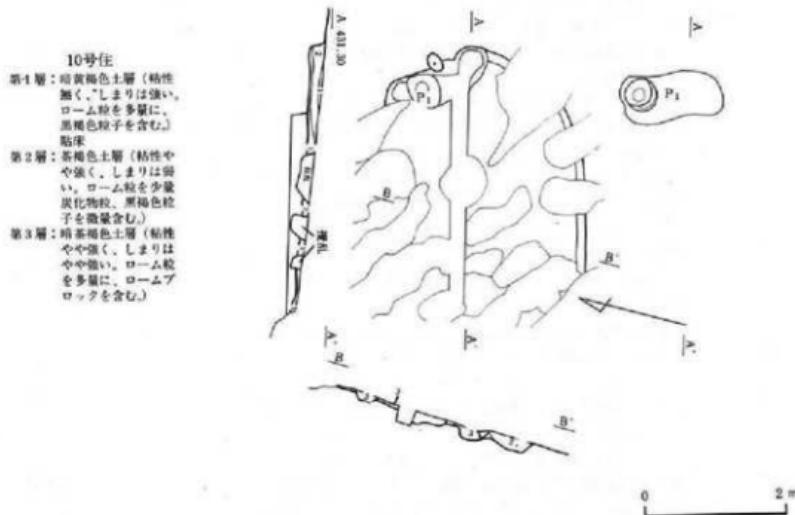
10号住居址(第31～32図、第17・18表)

斜面中位の級新面部、3・4・N・O区に位置する。北東5mに9号住居址が、南4mに13号住居址が近接する。北西20mに11号住居址が、南西11mに12号住居址が存在する。

耕作による削平の為、床面の極く一部と掘り方南東隅が遺存するにすぎない。その為、形状・規模とも明らかにしえない。主軸方位はN-76°-EあるいはN-14°-Wと思われるが、他の住居址でのあり方から後者の可能性が強い。

床面は極く一部しか遺存しないが堅緻な貼床である。

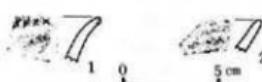
ピットは1ヶ所検出され、径50cm程の円形を呈し、深さは40cmを測る。



第31図 10号住居址(10%)

掘り方は深さ20cm程で埋土は2層に分けられる。
遺存部から推定すると南壁際が深く掘りこまれ、
中央部が浅くなるものであろう。
本址はとりあえず住居址として認定したが、竪穴状構造等、性格の異なる構造である可能性を否定しえない。

(山崎 和也)



第32図 10号住居址出土土器(10%)

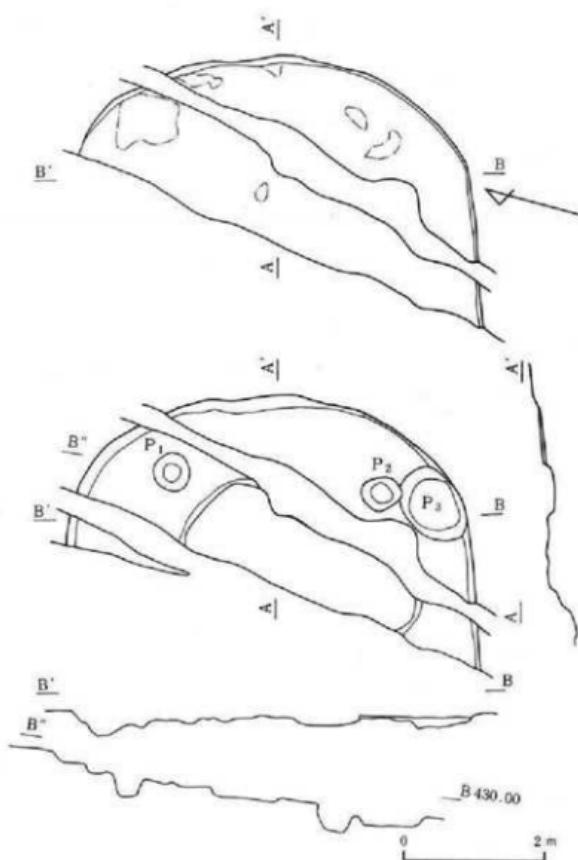
第17表 10号住居址出土土器計測表

	甕	壺	その他不明
	25片	160g	3片 10g

第18表 10号住居址出土土器観察表

1	甕	現存率：口縁部のみ $\frac{1}{2}$ 。 調整：外面一口唇部刻み目。口縁部ナデ。内面一凹縁部横 方向のヘラミガキ。胎土：雲母を含む密。焼成：良。色調：淡暗褐色。
2	甕	現存率：口縁部のみ $\frac{1}{2}$ 。 調整：外面一口唇部ナデ。口縁部ナデ。胎土：密。焼成： 良。色調：淡橙褐色。

11号住居址（第33～34図、図版5、第19・20表）



第33図 11号住居址及び掘り方 (3)

ったと推定されるがほとんど遺存しない。

ピットは3ヶ所検出されたが、全て掘り方底面での確認である。P₁・P₂が柱穴で、床推定面からはそれぞれ38cm、44cmを測る。P₃は貯蔵穴で115×80cmの楕円形平面を呈し、深さは30cmを有する。

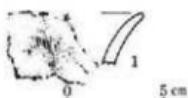
炉・周溝は確認されなかった。

掘り方は床下全面に及ぶものと考えられ、中央部が浅く、周辺が深くなる。底面はなめらかで床面からの深さは5～

斜面中位の緩斜面部、1・2-0区に位置し、集落の北西隅にあたる。北西5mに2号小堅穴遺構が、南16mに12号住居址が存在する。東20mには9号住居址、1号小堅穴遺構が隣接する。耕作による削平の為、貼床の一部と東壁が遺存するにすぎなく、西半部は掘方まで削平が進んでいる。主軸方位は明確にできないが柱穴間線はN-12°-Wをとり、主軸方位をほぼ示すものと考えられ等高線と平行する。平面形はほぼ椭円形をとるものと考えられ、規模は南北方向に5.7mを測るが、東西方向は判然としない。

掘り込みはローム層まで達し壁高は5cm程を測るのみである。

床面は堅緻な貼床であ



第34図 11号住居址出土土器 (3)

18cmを有する。

出土遺物は少なく、図示したのも掘り方から出土した1点のみである。(山崎 和也)

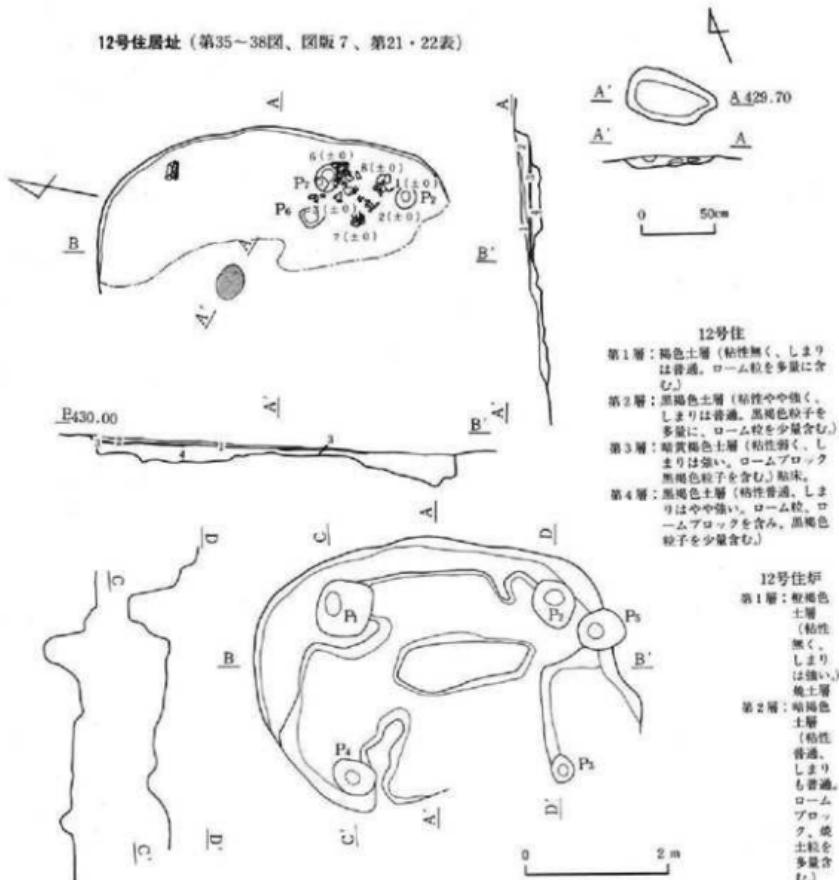
第19表 11号住居址出土土器計測表

実	虚	その他不明
13片 130g	2片 30g	

第20表 11号住居址出土土器観察表

1	實	現存率：口縁部～頸部%。調整：外面一口唇部横方向のハケの後にナデ。口縁部縦方向の太いハケ。内面一口縁部横方向のハケ。胎土：密。焼成：良。色調：淡赤褐色。
---	---	--

12号住居址(第35～38図、図版7、第21・22表)



第35図 12号住居址・掘り方及び炉址〔1/6・1/6〕

斜面中位の傾斜面部、3・4-P区に位置し、扇形に披がる集落の扇端部にあたる。北16mに11号住居址が存在し、東8mに13・14号住居址が近接する。南14mには16号住居址が位置する。

耕作のため削平され西半部は遺存しないが、掘り方などから推定すると平面形はほぼ梯円形を呈し、規模は長軸で5.4mを測るものと考えられる。主軸方位はN 15°-Wにとり、等高線と平行する。

掘り込みはローム層まで達しており、壁高は東壁で最長20cmを測る。覆土は2層に分けられ自然堆積を示す。

床面は堅緻な貼床でピットは7ヶ所検出された。うち床面で確認されたものはP₂・P₆・P₇の3ヶ所で、他は掘り方で確認されたものである。P₁～P₄までが柱穴で深さはそれぞれ床推定面から65cm、55cm、50cm、48cmを測る。P₅が貯蔵穴で、65×50cmの不整円形を呈し深さは45cmを測る。P₆・P₇は共に15～17cm程の深さを有するものである。

炉は中央部北寄りに位置する。60×35cmの不整長円形を呈し、深さは8cm程を有する。覆土は2層に分けられ、焼土ブロックが混在する。

周溝は認められない。

掘り方は床下は全面に及ぶ。中央が浅く周囲は一段深く掘りこまれるが、壁際は段部を有する。底面はやや凹凸が認められ、床面からの深さは5～55cmを測る。埋土は2層に分けられ第3層は貼床である。

出土遺物は豊富に認められる。壺1・2・3・6、甕7・8が住居址南東部柱穴脇に集中し、甕9は北東部壁際から、床面より3～5cm程浮いて出土している。また青銅製品15は甕8と床面に挟まれた状態で出土した。類例は管

見にふれず、当該期の遺物としうるか疑問が残る
が、出土状態からは本址に伴う可能性が強い。

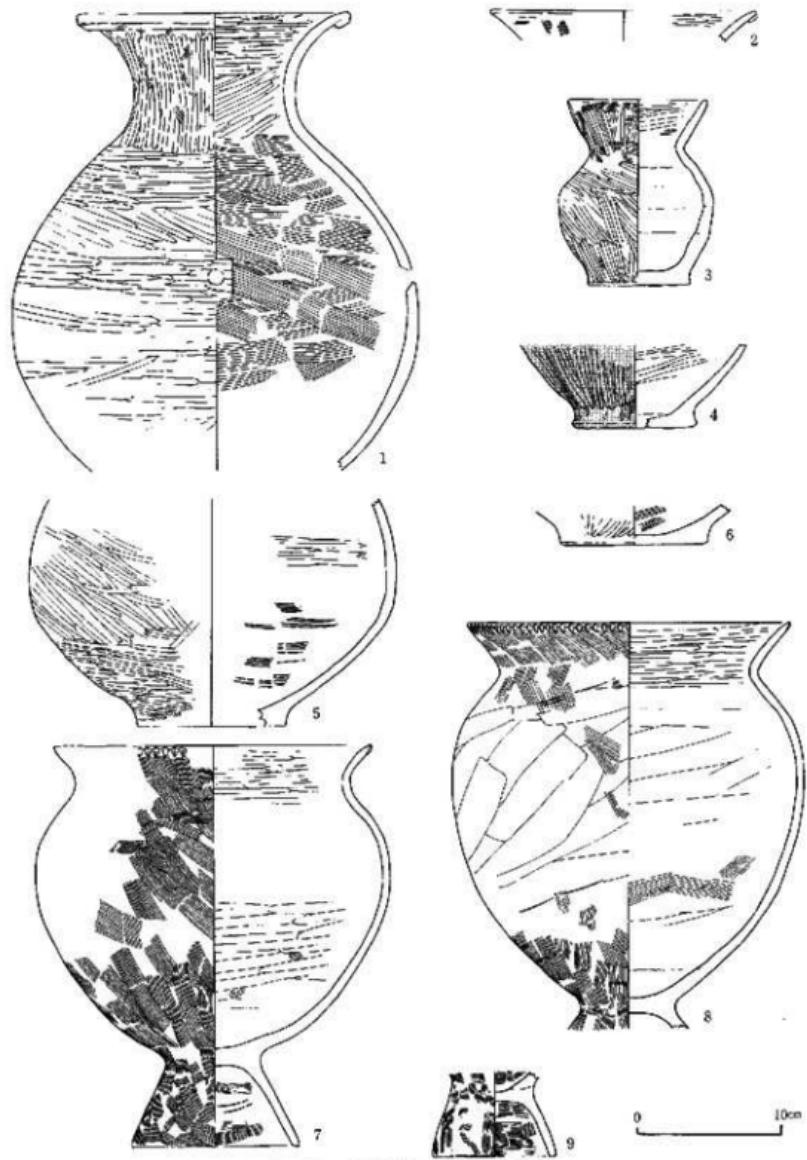
(山崎 和也)

第21表 12号住居址出土上器計測表

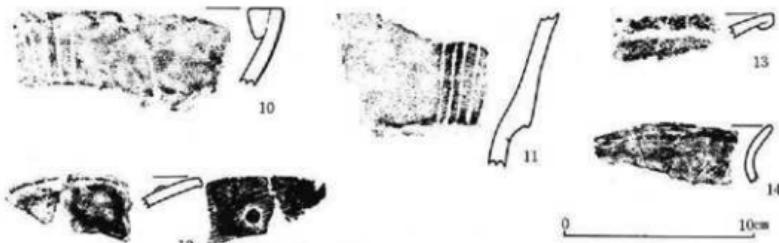
実	査	その他不明
179片	1580g	75片 1260g 2片 30g

第22表 12号住居址出土上器観察表(1)

1	壺	法量：口縁部径18.57cm、頭部径10.91cm、胴部径(27.78)cm。現存率：口縁～頭部完存。頭部壊。底部欠損。 調整：外面一口縁部折り返し口縁わずかに斜め方向のハケと指頭圧痕を残す。頸部斜め方向のハケの後縫方向のヘラミガキ。胴部上半横及び斜め方向のヘラミガキ。腹部中位横方向のヘラミガキ。直徑1.0cmの穿孔(焼成後に開けられたもの)。胴部下半横方向のヘラミガキ。内面～II縁部斜め方向のハケ。横方向のヘラミガキ。頭部横及び斜め方向のヘラミガキ。胴部上半横方向のハケ。胴部中位横及び斜め方向のハケ。胴部下半横及び斜め方向のハケ。胎土：密。焼成：良。色調：茶褐色。
2	壺	法量：口縁部径(17.81)cm。現存率：口縁部のみ。() 調整：外面一口縁部折り返し口縁を呈していたが折り返し部分が欠落している。縫方向のハケ。内面一口縁部ナデ。胎土：墨母及び白色粒子の混入がみられる。密。焼成：良。色調：赤褐色。



第36圖 12號住居址出土土器(1) [%]



第37図 12号住居址出土土器(2) [35]

第22表 12号住居址出土土器観察表(2)

3	小型壺	法量：口縁部径9.30cm。頭部径6.36cm。胴部径10.45cm。底部径6.97cm。器高12.86cm。現存率：完形。 調整：外面一口脣部ナデ。口縁部～頭部横方向縦方向のハケの後に縦方向のヘラミガキを施す。胴部上半斜め方向のヘラミガキ。胴部中位斜め方向のヘラミガキ。胴部下半縦方向のヘラミガキ。底部簡単なナデ。内面一口縁部～頭部横方向のヘラミガキ。胴部～底面簡単なナデ。胎土：密。焼成：良。色調：暗茶褐色。
4	壺	法量：底部径(8.41)cm。現存率：胴部下半～底部%。 調整：外面一胴部下半縦方向のヘラミガキ。丹彩あり。底部簡単なナデ。内面一胴部下半横及び斜め方向のヘラミガキ。全体的に磨滅が激しい。胎土：密。焼成：良。色調：明赤褐色。
5	壺	法量：底部径(10.62)cm。現存率：胴部中頃及び底部%。 調整：外面一胴部中頃斜め方向のヘラミガキ。胴部下半横方向のヘラミガキ。底部縦方向のハケの後横方向のヘラミガキ。内面一胴部中頃ナデ。胴部下半～底面横方向のヘラミガキ。胎土：密。焼成：良。色調：淡赤褐色。
6	壺	法量：底部径(10.00)cm。現存率：底部%。 調整：外面一胴部下半縦及び斜め方向のヘラミガキ。底面簡単なナデ。内面一胴部下半～底面斜め方向のハケ。磨滅が激しい。胎土：密。焼成：良。色調：赤褐色。
7	台付甕	法量：口縁部径(21.56)cm。頭部径(18.75)cm。胴部径(21.16)cm。脚接合部径6.39cm。脚底径11.38cm。器高27.50cm。現存率：口縁部～胴部%。脚部完存。 調整：外面一口脣部刻み目。口縁部～頭部縦及び斜め方向のハケ。胴部上半横及び斜め方向のハケ。胴部中頃斜め方向のハケ。胴部下半斜め方向のハケ。脚接合部縦方向のハケ。脚部斜め方向のハケ。内面一口縁部～頭部横方向のヘラミガキ。胴部～底面斜め方向の粗雑なヘラミガキ。脚部横及び斜め方向のハケ。胎土：白色小粒子をわずかに含む。焼成：良。色調：暗茶褐色。
8	台付甕	法量：口縁部径(21.95)cm。頭部径(17.59)cm。胴部径24.01cm。脚接合部径6.41cm。現存率：口縁部～脚上部%。 調整：外面一口脣部刻み目。口縁部～頭部斜め方向のハケ。胴部上半斜め方向のヘラケズリの後に縦及び斜め方向のハケ。胴部中位斜め方向のヘラケズリ。胴部下半斜め方向のヘラケズリ、縦方向のハケ。脚上部縦方向のハケ。内面一口縁部～頭部横方向のヘラミガキ。胴部上半～中位ナデ。胴部下半わざかに横及び縦方向のハケ。全体的に磨滅が激しい。胎土：密。焼成：良。色調：淡赤褐色。
9	台付甕	法量：脚接合部5.57cm。脚底径8.21cm。現存率：脚部のみは完形。 調整：外面一脚接合部～底部縦方向のハケ。内面一胴部底面横方向のハケ。脚部横方向のハケ。胎土：密。焼成：良。色調：淡黄赤褐色。

第22表 12号住居址出土土器観察表(3)

10	壺	現存率：口縁部%。 調整：外面一複合口縁。内側に折り返し口唇部に平端面を有する。口唇部ナデ。4本1区画の沈線。斜め方向のハケ。内面一口縁部ナデ。胎土：密。焼成：良。色調：明赤褐色。
11	壺	現存率：口縁部(口唇を欠く)～頸部。 調整：外面一複合口縁部横方向のハケ。縱方向の4本1区画の沈線有段口縁。頸部ナデ。内面一口縁部ナデ。頸部横方向のヘラミガキ。胎土：白色粒子を含む。密。焼成：良。色調：明赤褐色。
12	壺	現存率：口縁部のみ%。 調整：外面一口唇部ナデ。口縁部縱方向のハケ。縱方向のヘラミガキ。内面一口縁部細繩文S字結節。円形浮文を施す。胎土：密。焼成：良。色調：赤褐色。
13	壺	現存率：口縁部%。 調整：外面一口縁部折り返し口縁。摩滅が全体的に激しい。胎土：密。焼成：良。色調：暗赤褐色。
14	甕	法量：口縁部径(13.48)cm。現存率：口縁部～頸部%。 調整：外面一口唇部ナデ。口縁部～頸部斜め方向のハケ。内面一口縁部ナデ。頸部横方向のヘラミガキ。胎土：密。焼成：良。色調：暗茶褐色。

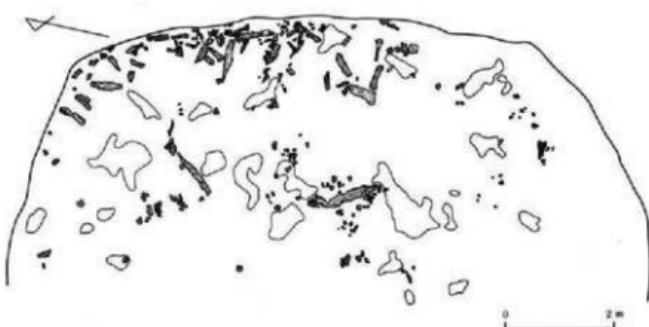
青銅製品。蛙の前肢部状を呈する青銅製品である。長さ2.7cm、幅0.8cm、厚さ0.1cmを測る。裏面は平坦である。指間に水搔きが、腕部にはイボが表現されている。類例は管見にふれず、本址に伴うか否か明確にはしえない。



15

第38図 12号住居址出土青銅製品(15)

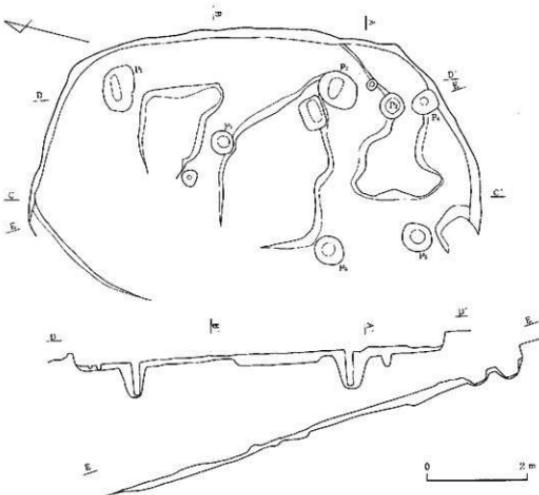
13号住居址(第39～44図、図版6、第23・24表)



第39図 13号住居址焼土・炭化材分布図(13)

斜面中位の緩斜面部、4-N・0区、5-0区に位置する焼失住居址である。

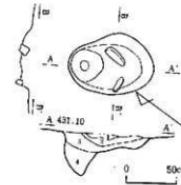
北4mに10号住居址が近接し、南西部で14号住居址とほとんど接している。西7mには12号住居址が、南6mに15号住居址が存在している。



第40図 13号住印地掘り方及び地盤 (1/6・1/6)

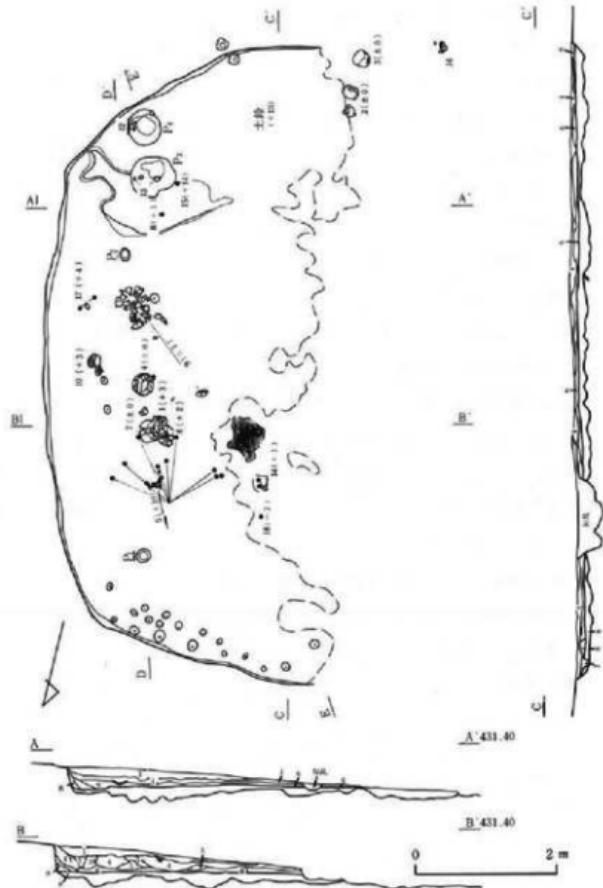
13号住印地

第1層：褐色褐色土層（粘性無く、しまりはやや強い。炭化物、塵土粒子を多量に含む。）
第2層：褐褐色土層（粘性弱く、しまりは強い。）
第3層：紅褐色褐色土層（粘性中や強く、しまりはやや弱い。炭化物、黑色粒子、幾十粒を少量含む。）
第4層：灰褐色褐色土層（粘性弱く、しまりはやや強い。炭化物、黑色粒子を微量含む。）



13号住

第1層：褐褐色土層（粘性無く、しまりは弱い。黑色粒子を多量に。ロームブロック、ローム粒子を少量含む。炭化物、塵土粒子を微量含む。）
第2層：褐褐色土層（粘性弱く、しまりは弱い。ロームブロックを少量含む。）
第3層：褐褐色土層（粘性中や弱く、しまりはやや強い。黑色粒子を少量。炭火物を微量含む。）
第4層：灰褐色褐色土層（粘性無く、しまりはやや強い。ローム粒子を含み。黑色粒子、炭化物、塵土粒子を微量含む。）
第5層：灰褐色褐色土層（粘性無く、しまりは強い。炭化物。）
第6層：褐褐色土層（粘性弱く、しまりはない。炭化物、塵土を多量に。ローム粒子を微量含む。）
第7層：褐色土層（粘性弱く、しまりはやや弱い。ローム粒、ロームブロックを少量含む。）
第8層：褐褐色褐色土層（粘性弱く、しまりはやや弱い。ロームブロック、ローム粒子を多量に。黑色粒子を微量含む。）
第9層：黑褐色褐色土層（粘性無く、しまりは普通。炭化物を多量にローム粒、塵土粒子を微量含む。）



第41図 13号住居址 (16)

削平を受け東半部が遺存するのみであるが、大型の住居址である。平面形は楕円形を呈するものと考えられ、規模は長軸が9mを有し、短軸も6m以上を測るものであろう。主軸方位は明確にしえないが、柱穴間線はN-14°-Wにとる。主軸方位もほぼ同値を示すものと考えられ等高線とほぼ平行する。

掘り込みはローム層まで達しており、壁高は東壁で40cmを測る。壁は急角度で直線的に立ち上がる。覆土は9層に分けられ、床面直上層（第6層）は焼土・炭化物を主体とする層である。全体的にローム粒・ロームブロックを含み、層序の状態等からも、人為的堆積の可能性も持つ。

床面は堅密な貼床で焼土・炭化材が一面に認められ特に北半部で著しい。ビットは多数検出され、P₁・P₂が柱穴である。深さはP₁が56cm、P₂が69cmを測る。P₃・P₄はそれぞれ16cm、27cmの深さを持つ。P₃は住居址内部の位置等、他住居址例から推しても貯蔵穴である可能性が強い。また両者と、住居址内部を画する様に弧状に存在する床面の盛り上がり部も、3号住居址、8号住居址の貯蔵穴周囲に認められるものと同例と考えられる。P₅～P₇は掘り方面で確認されたもので深さはそれぞれ42cm、41cm、25cmを測る。P₄・P₅・P₆は柱穴の可能性が強いが、P₄・P₅に関しては他柱穴（P₁・P₂・P₆）・貯蔵穴（P₃）との位置関係から疑問も残る。また特に北壁沿いに集中して多数の小ビットが検出された。

周溝は認められなかった。

炉は住居址中央やや北寄りに位置する。85×60cm程の規模を有し、楕円形平面を呈する。深さは20cmを測るが、西半部は一段深く40cm程掘りこまれる。炉址内ビットを開む様に枕石が「く」の字状に配される。覆土は4層に分けられる。

掘り方は床下全面に及び中央部・南半部がテラス状に浅く、他は一段深く掘りこまれる。底面は凹凸が激しく床面からの深さは8～24cmを測る。埋土は1層で上面が堅くしめられている。

遺物は多数出土した。床面からの出土状況は壺1・4・5、甕9が中央部東壁寄り柱穴間線上から、甕14は炉址脇から出土した。壺2・3小。

型甕16は南壁沿い中央部に認められ、甕13はP₃。

12はP₄覆土内から出土している。土鈴は南北部、覆土中位から出土している。

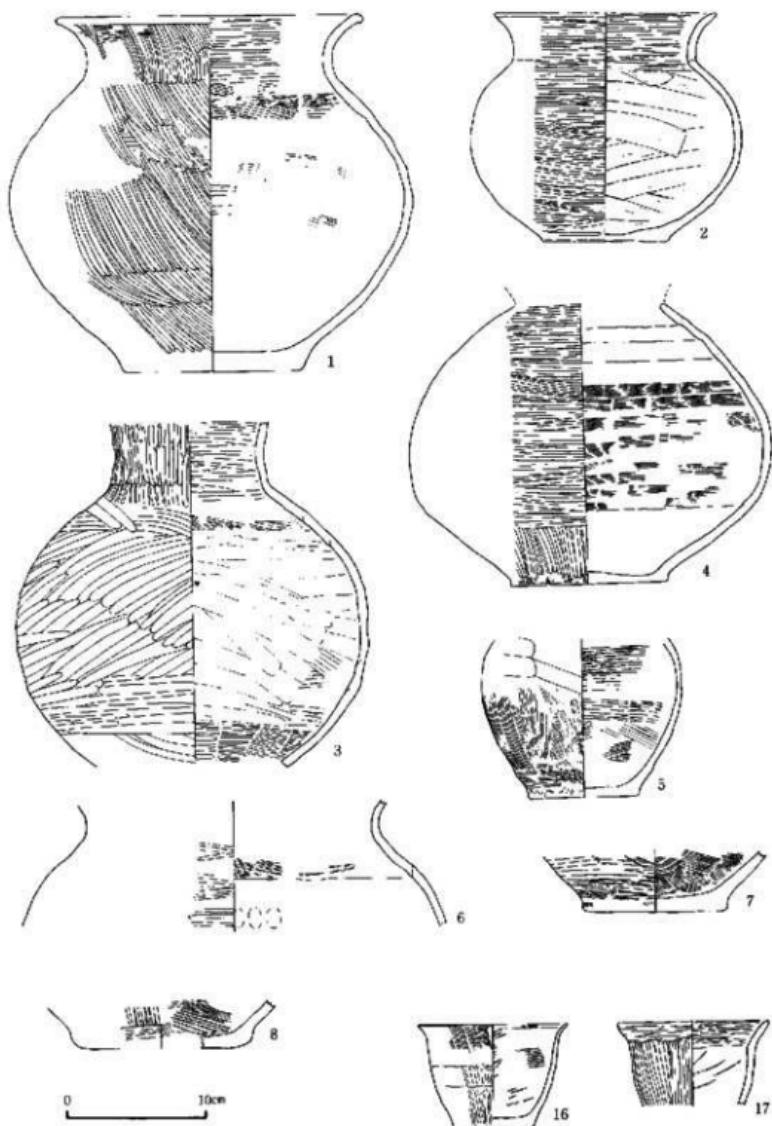
第23表 13号住居址出土土器計測表

	壺	甕	その他不明
	515片	2310g	112片 1580g 5片 50g

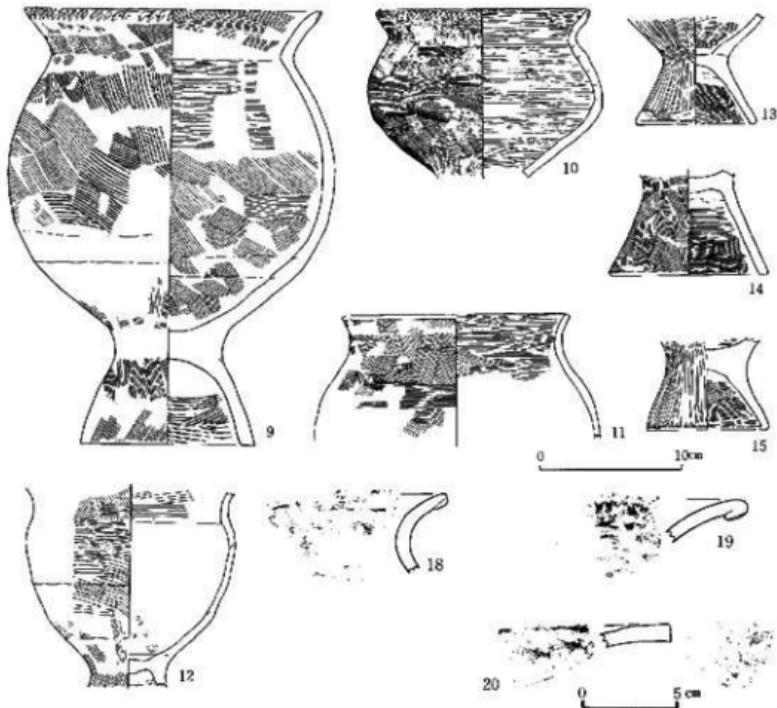
（山崎 和也）

第24表 13号住居址出土土器観察表(1)

1 広口壺	法量：口縁部径(20.10)cm、底部径(17.50)cm、胴部径24.05cm、底部径12.39cm。現存率：口縁～胴部を欠く。 調整：外面 口唇部ナデ。口縁部～頸部横方向のハケの後に横方向のミガキを施す。胴部上半横方向のハケの後、横方向のミガキを施す。胴部中央下部細い縱方向のミガキ。底部付近ナデミガキ。内面一口縁～頸部横方向のミガキ。頸部上横方向のハケ。胴部中横方向のハケの後ナデ。胴部下ナデ。胎土：小粒子を多量に含む。焼成：良。色調：法藍褐色。
2 広口甕	法量：口縁部径15.85cm、底部径13.12cm、胴部径19.48cm、底部径8.71cm。現存率：口縁部を欠くがほぼ完全。 調整：外側はとんど細かな横方向のヘラミガキ。底面に木葉痕あり。内面一口縁～頸部横方向の細いヘラミガキ。胎土：白色小粒子を多量に含む。密。焼成：良。色調：暗赤褐色。



第42图 13号住居址出土上部器(1)(另)



第43図 13号住居址出土土器(2) (Fig. 9, 10, 11, 12, 13, 14, 15, 18, 19, 20)

第24表 13号住居址出土土器観察表(2)

3	壺	法量：頸部径(10.58cm)。腹部径(25.29)cm。現存率：口縁部・底部を欠く。%。調整：外面-頸部縱方向のヘラミガキ。胴部上位横方向のヘラミガキ。胴部中位斜め方向の太いヘラミガキ。胴部下位横方向のヘラミガキ。胴部底部付近斜め方向のヘラミガキ。内面-頸部焼方向のヘラミガキ。胴部上・中ナデ。胴部下横方向のハケ。胎土：白色小粒子等が多く含む。焼成：良。色調：明赤褐色。
4	壺	法量：胴部径26.19cm。底径11.12cm。現存率：口縁部を欠く%。調整：外面-胴部上・中半横方向のヘラミガキ。胴部下半縱方向のヘラミガキ。底部付近縱方向のハケ。底面木素底。内面-胴部上半木調絞。胴部中横方向のハケ。胴部下半ナデ。底面ナデ。胎土：小粒子を多量に含む。密。焼成：良。色調：淡赤褐色。
5	壺	法量：胴部径(14.46cm)。底部径(7.75cm)。現存率：胴部%。底部完存。調整：外面-胴部上半ナデ。胴部中位ナデ。縱方向のハケ。胴部下半縱方向のハケ。横方向のヘラミガキ。底部ナデ。内面-胴部横方向のハケ。底面ナデ。胎土：白色粒子の混入がみられる。密。焼成：良。色調：茶褐色。

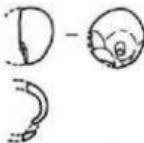
第24表 13号住居址出土土器観察表(3)

6	甕	法量：頸部径21cm。現存率：頸～肩%。 調整：外面 頸部ミガキのちナデ。肩横位のミガキ。内面 頸部ナデ。肩部横位のハケ。調指オサエ。胎土：白砂粒を含み密。焼成：良。色調：赤褐色。
7	壺	法量：底部径10.32cm。現存率：胴部下半底部のみ%。 調整：外面～胴下半横方向のヘラミガキ。最下部縱方向のハケの後指にて簡単にナデを加える。底面木葉痕を残す。内面～胴下半～斜め方向のハケ。胎土：白色粒子及び雲母小粒子を含む。密。焼成：良。色調：淡赤褐色。
8	壺	法量：底部径(12.34cm)。現存率：胴部下半及び底部のみ%。 調整：外面～胴最下部縱方向のヘラミガキ及び横方向のヘラミガキ。内面～胴最下部～底部斜め方向の太いハケ。全体に磨滅が進んでおり調整はよく分からぬ。胎土：密。焼成：良。色調：淡赤褐色。
9	台付罐	法量：口縁部径20.84cm。頸部径16.92cm。胴部径22.86cm。接合部径7.33cm。脚部底径12.09cm。器高31.80cm。現存率：口縁部を%。胴部上半を%欠く。 調整：外面～口唇部刮み目。II縁～頸部斜め方向の細かいハケ。胴部上半縱方向の太いハケ。胴部中位斜め方向の太いハケ。胴部下半縱方向の細かいハケ。磨滅がひどい。脚部上縦方向の細かいハケ。脚部下斜め方向の細かいハケ。内面～口縁～胴部中縦横方向の細かいハケ。胴部中頸～下半斜め方向の太いハケ。胴部横方向の太いハケ。胎土：密。焼成：良。色調：暗赤褐色。
10	台付甕	法量：口縁部径14.52cm。胴部径13.13cm。胴部径16.33cm。現存率：胴部を欠くが他は常存。 調整：外面～口唇部刮み目一部ハケ。口縁部～胴部横ハケの後縦方向のハケを施す。胴部上位縱方向のハケを主として横方向のハケが混じる。胴部中位横方向のハケ。胴部下縦方向のハケに一部縱方向のヘラミガキが入る。内面～全面横方向のヘラミガキ。胎土：密。焼成：良。色調：赤褐色。
11	台付甕	法量：口縁部径16cm。胴部径(20cm)。現存率：口縁～胴%。 調整：外面～口縁横ハケのちナデ。肩部縫ハケ。胴部横位ハケ。内面～口縁横ハケ。胴部斜位ハケ。胎土：密。焼成：良。色調：赤褐色。
12	台付甕	法量：頸部径(13.62cm)。胴部最大径(14.73)。接合部底径5.19cm。現存率：口部・脚部下部を欠く%。 調整：外面～口縁部～頸部縱方向のハケ(太)。胴部上半～中位横方向のハケ(太)。胴部下半縱方向のハケ。ナデ。脚接合部～脚上部縱方向のハケ。内面～口縁部～頸部横方向のハケ。胴部上半～中項ナデ。胴部下半～底面横及び斜め方向のハケ。脚上部横方向のハケ。胎土：密。焼成：良。色調：暗茶褐色。
13	台付甕	法量：接合部径4.57cm。脚底径(8.32cm)。現存率：脚部下半のみ%。 調整：外面～胴部下半縦方向のヘラミガキ。接合部簡単なヘラミガキ(縦方向)。脚部上・中縦方向のヘラミガキ。脚部斜め方向のハケ。ナデ。内面～胴部下半横方向のハケ。脚上半ナデ。脚中・下横方向のハケ。胎土：密。焼成：良。色調：赤褐色。
14	台付甕	法量：接合部径6.34cm。脚部底径11.36cm。現存率：脚部のみ完存。 調整：外面 接合部縦方向の細かいハケ。脚部縫及び横方向を主とする細かいハケ。内面～脚部横方向の細かいハケ。胎土：密。焼成：良。色調：淡黄褐色。
15	台付甕	法量：接合部径5.08cm。底部深8.41cm。現存率：脚部のみ完存。 調整：外面～脚部縦方向のヘラミガキ。内面～脚・脚部横方向の細かいハケ。脚横方向のハケ。胎土：密。焼成：良。色調：淡茶褐色。
16	鉢	法量：II縁部径(最大径)(10.76cm)。頸部径(9.57cm)。底部深5.70cm。器高7.55cm。現存率：%。 調整：外面～口唇部指でつまむようにしてナデする。II縁部～頸部縦方向のハケ。胴部上半縦方向のハケ。胴部中位～下半縦方向のヘラミガキ。底面ナデ。内面～口縁部～脚部横方向のハケ。底面ナデ。胎土：密。焼成：良。色調：赤褐色。

第24表 13号住居址出土土器観察表(4)

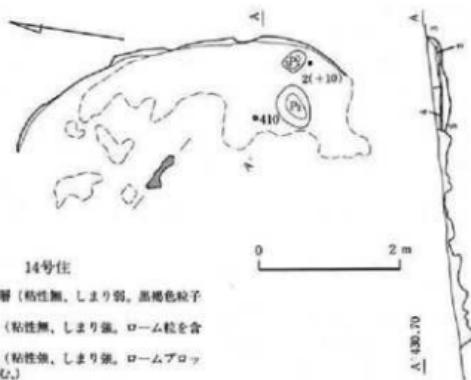
17	鉢	法量：口縁部径(最大径)(10.95cm)、頭部径(9.34cm)。現存率：口縁部～胴部中頃%。 調整：外面一口唇部ナデ。口縁部～頭部横方向のヘラミガキ。胴部上半～下半纏方向のヘラミガキ。内面一口縁部～頭部横方向のヘラミガキ。胴部上半～下半ナデ。胎土：密。焼成：良。色調：暗茶褐色。
18	壺	現存率：口縁部～頭部のみ%。 調整：外面一口縁折り返し口縁横方向のハケ。頭部纏方向の細いハケ。内面一口縁～頭部横方向のハケ。胎土：密。焼成：良。色調：暗赤褐色。
19	壺	現存率：口縁破片。 調整：外面一口縁ハケのち折り返し。刺み目。口唇ナデ。内面一口縁細綱文し。肩横方向ミガキ。胎土：白砂粒を含みやや密。焼成：やや良。色調：赤褐色。
20	壺	現存率：口縁破片。 調整：外面一口縁上部ハケ。下部ミガキのちナデ。内面一撻糸。胎土：白砂粒を含みやや密。焼成：良。色調：赤褐色。

土製品 土鉢 径2cm程だが2cm程しか遺存しない。色調は明赤褐色。焼成は甘く、胎土は密。器表には指頭痕。器厚0.3cm。穿孔は器外面より内部へ向けなされている。



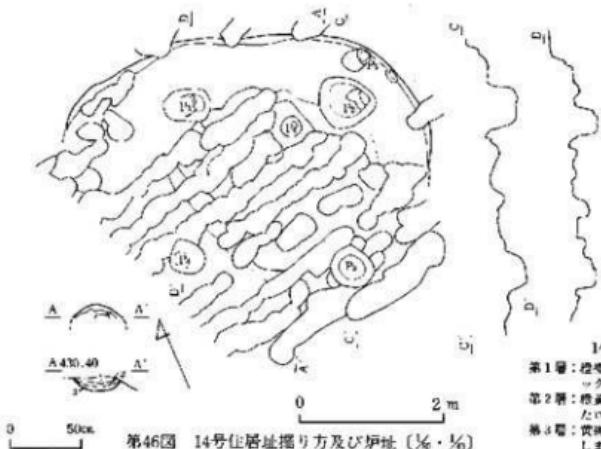
第44図 13号住居址出土土製品(分)

14号住居址（第45～48図、第25・26表）



- 第1層：暗茶褐色土層(粘性無、しまり強。黒褐色粒子を含む。)
 第2層：暗褐色土層(粘性無、しまり強。ローム粒を含む。)
 第3層：暗褐色土層(粘性強、しまり強。ロームブロックを多量含む。)
 第4層：明茶褐色土層=粘土。
 第5層：明茶褐色土層(粘性無、しまり無。黒褐色粒子、暗茶褐色土粒を含む。)

第45図 14号住居址(分)



斜面中位の緩斜面部、4・5-0・P区に位置する。北に13号住居址と接している。北西7mに12号住居址が、南東7mに15号住居址、南8mに16号住居址が存在する。

耕作の為削平を受け東半部の一部が遺存するにすぎない。掘り方残存からの推定であるが、平面形は隅丸長方形を呈し、規模は6.9×5.5m程と思われる。主軸方位はN-11°-Wにとり等高線とやや斜行する。

掘り込みはローム層まで達しており堆高は15cm程を残す。覆土は4層に分けられ、自然堆積を示す。

床面は搅乱が激しいが、堅緻な貼床である。

ピットは6ヶ所検出されたが、床面で確認されたものはP₂・P₅のみである。

P₁～P₄が柱穴で床面推定面からの深さはそれぞれ、54cm、63cm、69cm、69cmを測る。貯蔵穴・周溝は検出できなかった。

炉址は中央部やや北寄りに位置する。歟の為一部が遺存するのみで、長軸50cm程の橢円形平面を呈するものと思われる。深さは現存で13cmを測り、覆土は3層に分けられる。

掘り方は床下全面に及び、中央が浅く周辺が深く墨り込まれる。底面は比較的なめらかと思われ、床面からの深さは5～20cm程を測る。埋土は2層に分けられ、上層が貼床とされている。

出土遺物は少なく図示したものも僅かである。床面からは、鉄製品1がP₂脇から出土している。

第25表 14号住居址出土土器計測表

	実	表	その他不明
	70片 450g	9片 80g	4片 50g



第47図 14号住居址出土土器〔%〕

0 50cm

第26表 14号住居址出土土器観察表

1	甕	現存率：口縁部～頸部上部%。 調整：外面一口唇部ナデわずかに爪によって凹状にくぼむ。口縁部～頸部縱方向のハケ。内面一口縁部～頸部横方向のハケの後にナデ。胎土：密。焼成：良であるがやや軟質。色調：薄黄褐色。
2	甕	現存率：口縁部のみ%。 調整：外・内面ともに磨滅が激しく整形は分からず。胎土：白色小粒子を含む。密。焼成：良。色調：赤褐色。
3	甕	現存率：頸部のみ%。 調整：外面一肩部斜め方向のハケ。内面一肩部ナデ。胎土：青母。白色小粒子を含む。密。焼成：良。色調：茶褐色。

鉄製品 不明鉄板。2×2 cmで厚さ0.1cm程の鉄板
片である。住居址中央部床面から出土している。

(山崎 和也)



4

第48図 14号住居址出土鉄製品〔%〕

15号住居址（第49～50図、図版6、第27表）

斜面中位、緩斜面部の5・6-O・P区に位置する。北8 mに13号住居址が、北西7 mに14号住居址が存在し、南9 mに21号・22号住居址が重複して存在する。東15 mに17号住居址が位置する。

耕作及び道路によって削平され北東隅が遺存するのみであり、形状・規模・主軸方位等はあきらかにしえない。

掘り込みはローム面まで達し、壁高は残存部で20cm程を測り、壁は外反気味に立ち上がる。

床面も破損が激しく、貼床がブロック状に残存するのみである。

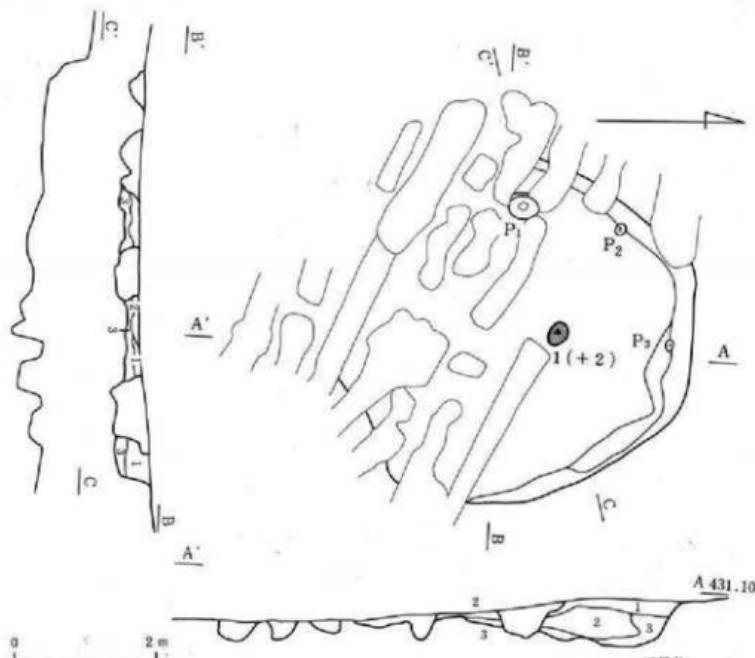
ピットは3ヶ所検出され、P1は深さ51cmを測る。住居址中央やや北寄りに20×15cmの範囲で焼土溜りが認められた。貯蔵穴・周溝は検出されなかった。

掘り方は床下全面に及ぶものと推定され、底面は凹凸が激しい。床面からの深さは20cm程を測り、埋土は2層に分けられ焼土粒・炭化物粒が混入している。

出土遺物は僅かであるが、焼土溜り上面から土製勾玉1が出土している。

第27表 15号住居址出土土器計測表

甕		壺		その他不明	
44片	452g	8片	140g	1片	8g



第49図 15号住居址(15)

土製品 土製勾玉。全長3cm、径0.8cmを測る。色調は暗褐色を呈し、胎土・焼成は普通である。表面は磨かれているが丁寧ではない。中央部の湾曲は浅く、内面・両端部は軽く面とりされている。孔は端部やや内側に位置し、両側から穿孔されている。

住居址中央部床面に認められた焼土溜り上面より出土している。

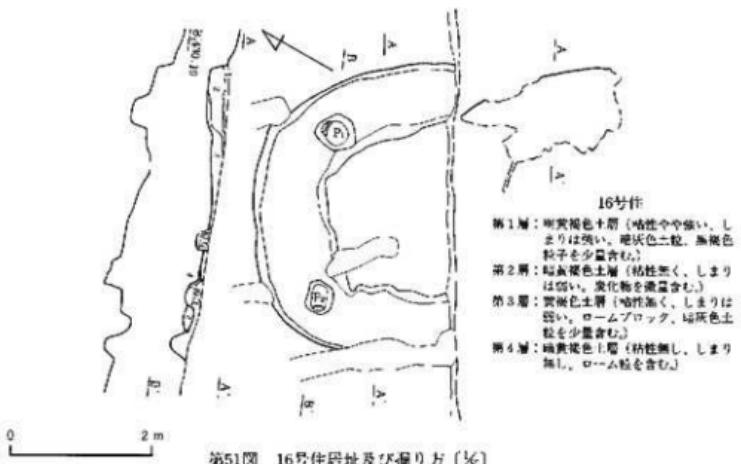
鉄製品 鉄環。平面環状を呈する鉄製品で径2.5cm程を測り、 0.2×0.7 cmの方形断面を有する。覆土中からの出土である。

(山崎 和也)

15号住
第1層：明茶褐色土層（粘性弱く、しまりはやや薄い、黒色土粒、ローム粒を含む。燒土粒、炭化物粒を少量含む。）
第2層：茶褐色土層（粘性やや強く、しまりもやや強い。黒色土粒、ロームブロックを多量に、炭化物を含み、燒土粒を少量含む。）
第3層：暗黃褐色土層（粘性やや強く、しまりは強い。黒色土粒を含み、燒土粒、炭化物を少量含む。）



第50図 15号住居址出土土製品・鉄製品(15)



斜面中位の緩斜面部、5-P・Q区に位置する。北東7mに15号住居址が、北8mに14号住居址が位置する。南東11mに21号・22号住居址が重複して存在する。

農道により南部は完全に破壊され、北部も耕作のため床面の一部が遺存するのみである。掘り方プランから推定すると、平面形には楕円形を呈し、規模は短軸で4m強を測るものと考えられる。主軸方位は、柱穴間隔から推定するとN-35°-WあるいはN-55°-Eをとるが、他住居址例からは前者と考えられる。

床面は一部が遺存するのみであるが残存部は堅緻な貼床である。

ピットは掘り方から2ヶ所が検出され、共に柱穴である。床推定面からの深さは、P₁が48cm、P₂が51cmを測る。

炉・貯藏穴・周溝等は検出されなかった。

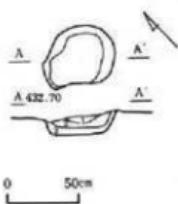
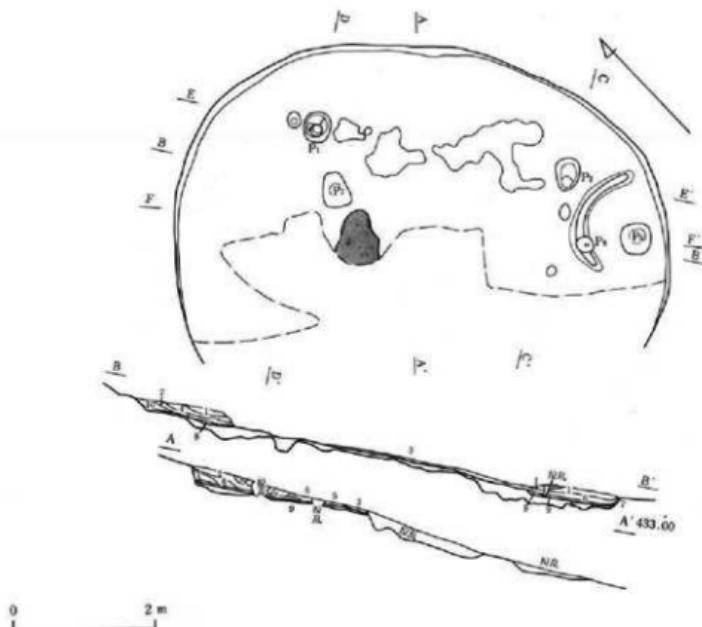
掘り方は床下全面に及ぶものと考えられる。中央が浅く、周辺が深く掘りこまれ底面の凹凸は少ない。床面からの深さは14~25cmを測り、埋土は4層に分けられる。

出土遺物は僅かで、図示したものはない。

(山崎 和也)

第28表 16号住居址出土土器計測表

種	表	その他不明
3片	70g	2片 10g

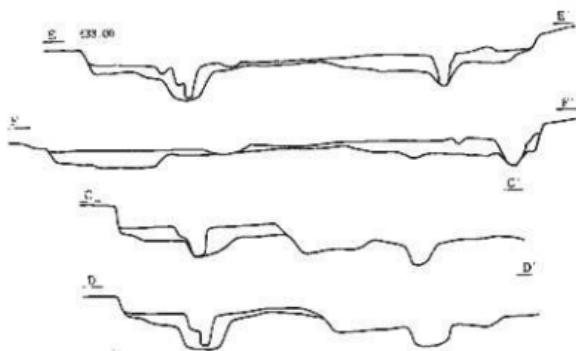
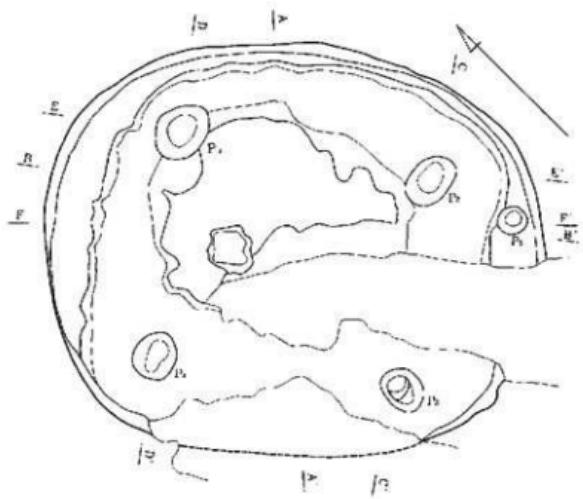


17号住居	17号住	17号住炉
第1層：黒褐色土層=燒土 ブロック層	第1層：黒褐色土層	第5層：黒褐色土層（炭化物 を少量含む。）
第2層：黄褐色土層=燒熱 ローム層。	第2層：黒褐色土層	第6層：茶褐色土層（炭化物 を少量含む。）
第3層：明黄褐色土層（ロ ームブロック、黑 色粒子を含む。）	第3層：黄褐色土層（炭化物 を含む。）	第7層：褐色土層（ローム粒、 炭化物を含む。）
	第4層：褐色土層	第8層：黄褐色土層（燒土を 含む。）
	第5層：黒褐色土層（炭化物 を少量含む。）	第9層：褐色土層（燒土、炭 化物を多量に含む。）
		第10層：暗褐色土層（ローム 粒含む。）

第52図 17号住居址及び炉址（%・%）

斜面中位の6・7-N区に位置する焼失住居である。北3mに7号・8号住居址が重複して存在する。南東5mに18号住居址が、西15mに15号住居址が位置する。

耕作による削平のため西半部は掘り方しか遺存しない。平面形は楕円形を呈し、規模は7.1×5.7mを測る。主軸方位はN-31°-Wにとり、等高線にやや斜行する。



第53図 17号住居址掘り方 (5)

0 2 m

掘り込みはローム層まで達し、壁高は残存部で20cmを測る。壁は崩落し、かなり外反して立ち上がる。覆土は10層に分けられ、床面直上層（第9層）は焼土・炭化物を大量に含む。上層（第3・7・8層）には大量のロームブロックが認められ焼失時窓枠に伴う投げ込みの可能性が高い。

床面は堅緻で、なだらかな凹凸を有し、中央部がやや高く凸状に構築される。床面上には焼土・炭化物が一面に認められる。

ピットは7ヶ所検出されP₁～P₄が柱穴である。深さはそれぞれ、44cm、43cm、60cm、54cmを測る。P₅が貯蔵穴で径45cmの不整円形を呈し、深さ35cmを測る。P₆の周囲は床面が幅20～30cmで弧状を呈して盛り上がり、小ピット（P₆）が設けられる。P₇は深さ21cmを測り炉脇に設けられる。馬溝は認められない。

炉は中央部や北寄りに位置する。西側に一部搅乱を受けるが、径50cm程の不整円形を示す。覆土は3層に分けられる。

掘り方は床下全面に及ぶ。中央が浅く、周辺が深く掘り込まれるが、壁際は段部を有する。底面はなめらかで床面からの深さは6～18cmを有する。

出土遺物は少なく、図示したものはない。

第29表 17号住居址出土土器計測表

尚6-N区出土とした刀子は17号住居址西半の 擾乱部から出土したものである。（山崎 和也）	甕	壺	その他不明
	84片 605g		3片 95g

18号住居址（第54～55図、図版8、第30表）

斜面中位の7-O-P区に位置し、焼失住居である可能性が強い。北西5mに17号住居址が近接する。南5mに19号・20号住居址が東13mに21号・22号住居址がそれぞれ重複して存在する。

耕作による削平が激しく、住居址内に敵が縦状に走り西壁部は全く遺存しない。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は4.4×3.6m程と考えられる。主軸方位はN-23°-Wにとり等高線とは平行する。

掘り込みはローム層まで達し、壁高は残存部で15cm程である。壁は急角度で立つ。覆土は5層に分けられ下層には焼土粒・炭化物粒が混入する。

床面は部分的にしか遺存せず脆弱である。残存部上面には焼土・炭化物が認められる。

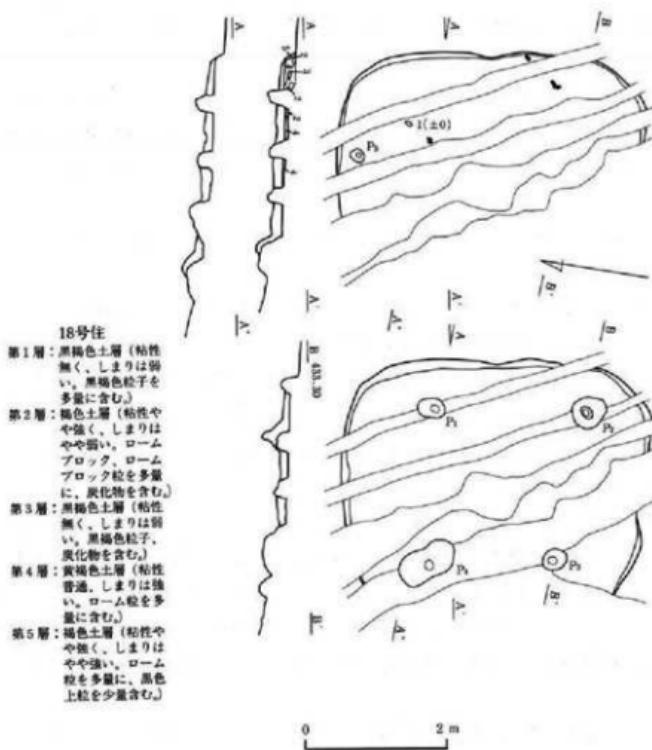
ピットは5ヶ所検出され、P₁～P₄が柱穴である。深さは床推定面からそれぞれ、28cm、49cm、40cm、41cmを測る。貯蔵穴・馬溝・炉址は検出されなかった。

掘り方は床下全面に及ぶ。中央がやや深い皿状断面を呈し、床面からは10～15cmの深さを有する。

出土遺物は少なく図示したものは磨製石斧

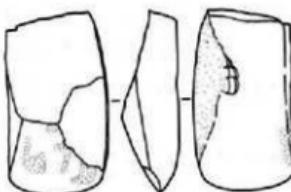
第30表 18号住居址出土土器計測表

1のみである。北東部床面から出土している。 (山崎 和也)	甕	壺	その他不明
	31片 280g	3片 40g	4片 40g

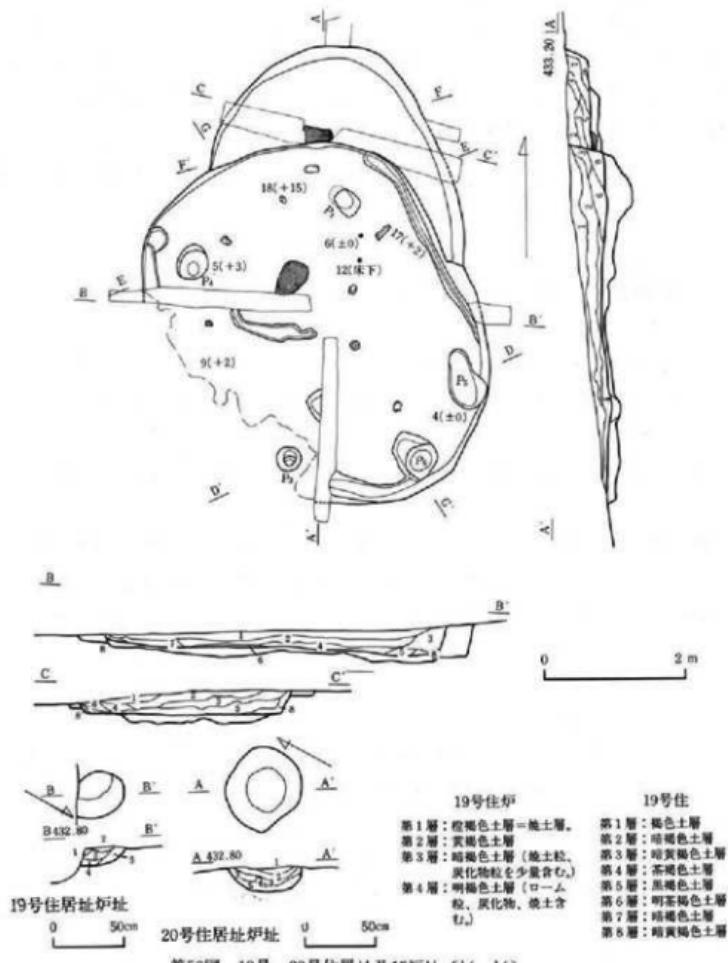


第54図 18号住居址及び掘り方 (3)

石器 磨製石斧。石質は緑色凝灰岩。刃部は蛤刀と平刀である。基部欠。平刀を有する面の刃部の鏽は破損のため不明。研磨は不完全で、一部分、敲打痕が残っている。



第55図 18号住居址出土石器 (3)



第56図 19号・20号住居址及び炉址 [1/6, 1/6]

19号住居址（第56～57図、図版8、第31表）

斜面中位の8-0区に位置する。北5mに18号住居址が近接し、南東7mに23号住居址が、南17mに24号住居址が存在する。西13mには21号・22号住居址が重複して存在する。

南北部を20号住居址に切られ、北東隅が一部遺存するにすぎない。平面形は橢円形あるいは隅九長方形を呈すると考えられるが、規模・主軸方位等はあきらかにしえない。

掘り込みはローム層まで達し、壁高は29cmを測る。壁は外反して直線的に立つ。覆土は8層に分けられ、自然堆積を示す。床面は軟弱で凹凸が認められる。

ピット・周溝は認められない。

炉址は中央北寄りに位置し、南端部を20号住居址によって切られる。40×30cm程の橢円形平面を呈し、深さは15cmを測る。覆土は5層に分けられる。掘り方は中央部が深く壁際は浅く掘り込まれる。出土遺物は少なく図示したものはない。（山崎 和也）

第31表 19号住居址出土土器計測表

縦	竪	その他不明
3片 60g		

20号住居址（第56～60図、図版8、第32・33表）

斜面中位、8-0区に位置する。

北東部で19号住居址と重複している。

平面形はほぼ橢円形を呈し、規模は5.4×4.4mを測る。主軸方位はN-24°-Wにとり等高線にやや斜行する。

掘り込みはローム層まで達し壁高は50cmを測る。壁は外反して直線的に立ち上がる。覆土は8層に分けられ、自然堆積を示す。

床面は貼床だが比較的軟弱でなだらかな凹凸を持つ。中央部が高く凸状断面を示す。

ピットは7ヶ所検出された。 $P_1 \sim P_4$ が柱穴で深さはそれぞれ30cm、55cm、52cm、49cmを測る。 P_5 が貯藏穴で、70×40cmの橢円形平面を呈し壁に接している。深さは25cmを測る。 $P_6 \sim P_7$ は位置的に出入口施設（梯子穴）と考えられ深さは $P_6=46cm$ 、 $P_7=50cm$ を測る。

周溝は断続的に検出され、西岸部分ではあきらかにしえないもののほぼ全周すると思われる。幅は10~30cm、深さは12~16cmを有する。

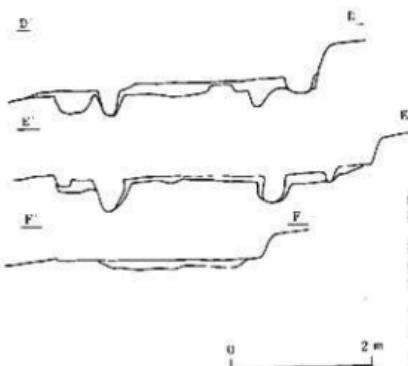
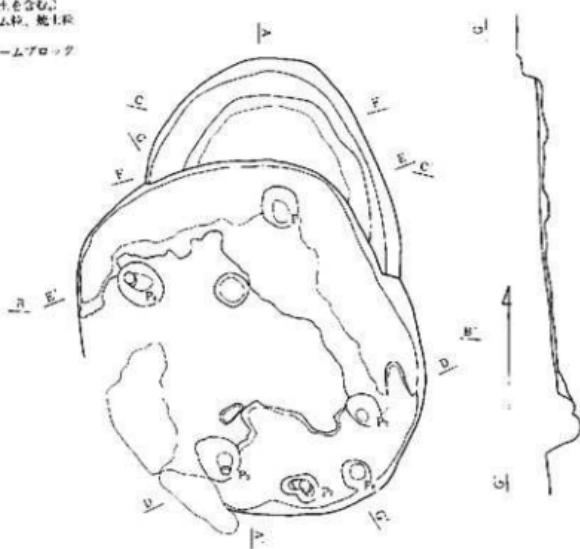
炉は中央部北寄りに位置し、径50cmの円形を呈し深さは18cm、覆土は5層に分けられる。炉南側床面に、幅10~20cmの溝が設けられる。掘り方は床下全面に及ぶ。基本的には中央部が浅く、周辺が深く掘り込まれるが、西壁沿いでは擾乱の為もあり判然としない。床面はなめらかで床面からの深さは5~20cmを測る。出土遺物は、細片化が進み、床面から出土したものは僅かである。縦5・6、竪4・9が床面から出土しているが、

第32表 20号住居址出土土器計測表

原位置を保つものではない。大型の打製石片17 は P_1 脇から出土している。	縦	竪	その他不明
	121片 1470g	9片 260g	7片 130g

20号住

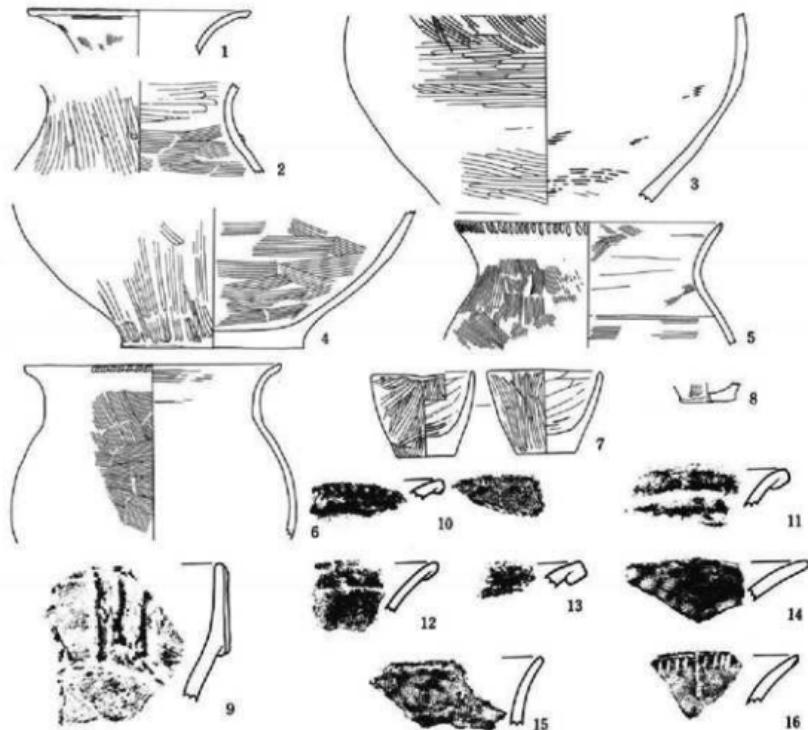
- 第1層：泥褐色土層（燒土、炭化物を含む。）
- 第2層：棕褐色土層—燒土層
- 第3層：黃褐色土層（燒土を含む。）
- 第4層：褐色土層（Y—ム種、燒土を多含む。）
- 第5層：黃褐色土層（ロームブロックを含む。）



20号住

- 第1層：暗赤褐色土層
- 第2層：茶褐色土層（燒土、炭化物を含む。）
- 第3層：茶褐色土層
- 第4層：紅褐色土層
- 第5層：褐褐色土層（燒褐色土層を含む。）
- 第6層：茶褐色土層（燒土を含む。）
- 第7層：暗褐色土層（コームブロックを含む。）
- 第8層：棕褐色土層（燒土を含む。）
- 第9層：茶褐色土層（黒褐色段子、ロームブロックを含む。）

第57図 19号・20号住居址掘り方 (1/6)



第58図 20号住居址出土土器〔1/4・1/6〕

第33表 20号住居址出土土器観察表(1)

1	壺	法量：口縁部径(15.67)cm。現存率：口縁部～頸部1/2。調整：外面一折り返し口縁であったと思われるが、折り返し部欠損。口縁部横方向の細いハケ。頸部付近斜め方向のハケ。全体的に磨滅がひどい。胎土：密。焼成：やや軟質。色調：赤褐色。
2	壺	法量：頸部径(12.81)cm。現存率：頸部のみ1/2。調整：外面一頸部縱方向を主とするミガキ。円形浮文を有する。内面一頸部上横方向のミガキ。頸部下横方向のハケ。胎土：密。焼成：良。色調：暗赤褐色。
	壺	法量：胴部径(28.48)cm。現存率：胴部のみ1/2。調整：外面一胴部中頃斜め方向のハケ及び横方向のミガキ。胴部下半斜め方向のミガキ。内面一胴部中位ナデ。胴部下半横方向のハケ。胎土：密。焼成：良。色調：暗赤褐色。
4	壺	法量：底部径(12.83)cm。現存率：胴部下半～底部1/2。調整：外面一胴部ミガキ、底部網代痕。内面一胴部ナデ及び横方向のハケ。全体に磨滅がひどい。胎土：密。焼成：良。色調：赤褐色。
5	台付甕	法量：口縁部径(18.65)cm。頸部径(15.69)cm。現存率：口縁～胴部上半1/2。調整：外面一口縁部刻み目。口縁～頸部ナデ。胴部上半横方向を主としたハケ。内面一口縁部～胴部上半横方向のハケ。胎土：密。焼成：良。色調：赤褐色。

第33表 20号住居出土土器観察表(2)

6	台付鏡	法量：口縁部径(17.78)cm。頸部径(15.09)cm。胴部深(20.03)cm。現存率：口縁部～胴部 約%。調整：外面～口縁部斜め目、口縁～頸部ナデ及び斜め方向のハケ。胴部上半横 方向のハケ。内面～口縁～胴部磨滅がひどい。胎土：密。焼成：良。色調：暗褐色。
7	鉢	法量：口縁部径7.30cm。胴部径7.75cm。底部径4.25cm。器高6.23cm。内深5.03cm。現存 率：%。調整：外面～全面に指頭压痕の後へラミガキ。底面ハケ。内面～口縁部折 頸ナデ。全面簡単な横方向のナデ。胎土：密。焼成：良。色調：暗褐色。
8	壺	現存率：底部のみ%。調整：外面～ナデ。内面～ナデ。胎土：密。焼成：良。色調 ：暗赤褐色。
9	壺	現存率：口縁部のみ%。調整：外面～複合口縁棒状貼り付け3本。内面～ナデ。胎 土：密。焼成：良。色調：赤褐色。
10	壺	現存率：口縁部のみ%。調整：外面～折り返し口縁で割み目をもつ。内面～細縄文 を施す。全体に磨滅が激しい。胎土：密。焼成：良。色調：橙褐色。
11	壺	現存率：口縁部のみ%。調整：外面～折り返し口縁を有する。わずかに斜め方向の ハケ。全体的に磨滅が激しい。胎土：白色粒子の混入が著しい。焼成：良好であるが やや軟質、色調：赤褐色。
12	壺	現存率：口縁部のみ。調整：外面～折り返し口縁磨滅がひどく分からぬ。内面 ～磨滅がひどく分からぬ。胎土：密。焼成：良。色調：赤褐色。
13	壺	現存率：口縁部のみ%。調整：外面～折り返し口縁で指頭压痕を残す。縱方向のハ ケ。内面～横方向のヘラミガキ。胎土：密。焼成：良。色調：暗茶褐色。
14	壺	現存率：口縁部のみ%。調整：外面～横方向のミガキ。内面～横方向のミガキ。内 外面に丹影を有す。胎土：密。焼成：良。色調：暗赤褐色。
15	甕	現存率：口縁部破片。調整：外面～口縫部ナデ。口縁部ヨコのちタテハケ。内面～ 口縁部ヨコハケ。胎土：密。焼成：良。色調：赤褐色。
16	甕	現存率：口縁部のみ%。調整：外面～口縁部割み目及び縱方向のハケ。内面～口縁 部横方向のハケの後横方向のミガキを施す。胎土：青母小粒子を多く含む。密。焼成： 良。色調：暗褐色。

石器 17は打製右斧。継長の礫を素材としている。両側縁は内溝し側縁先端部に、使用痕が認められる。形状は發形で、長さ26cmの大型品である。重量820g、石質は玄武岩。

18は磨製石製品。石質：凝灰岩。表裏ともよく磨かれ面とりがなされている。



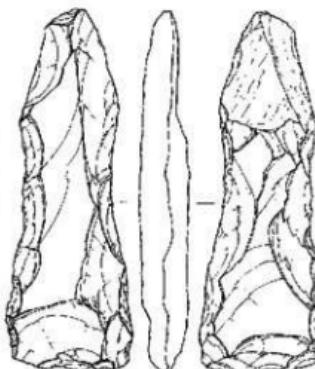
19

第29図 20号住居址出土鉄製品(1)

鉄製品 鉄環。平面環状を呈する鉄製品で径2.5cm程を測り、一部欠損する。断面0.4cm角の方形を呈する。

覆土中から出土している。

(山崎 和也)



17



18

第60図 20号住居址出土石器(2)

21号住居址(第61~62図、図版9、第34表)

斜面中位の6・7-O・P区に位置する。本住居址は22号住居址調査時に検出されたもので、22号住居址と重複し、その下部に構築されていたものである。

北9mに15号住居址が、北西11mには16号住居址が存在する。東13mには19号・20号住居址が重複して存在し、南には30m程離れて24号住居址が位置する。

耕作の為、西壁両隅部と床面の一部を削平されている。

平面形は隅丸長方形を呈し、規模は6×4.5mを測り、22号住居址に比し一回り小型である。主軸方位はN-32°-Wにとり、22号住居址と全く同一で等高線とはほぼ平行する。

掘り込みはローム層中まで達し、本住居址床面と22号住居址床面とのレベル差は5~10cmを有する。壁は緩やかに立ち上がる。

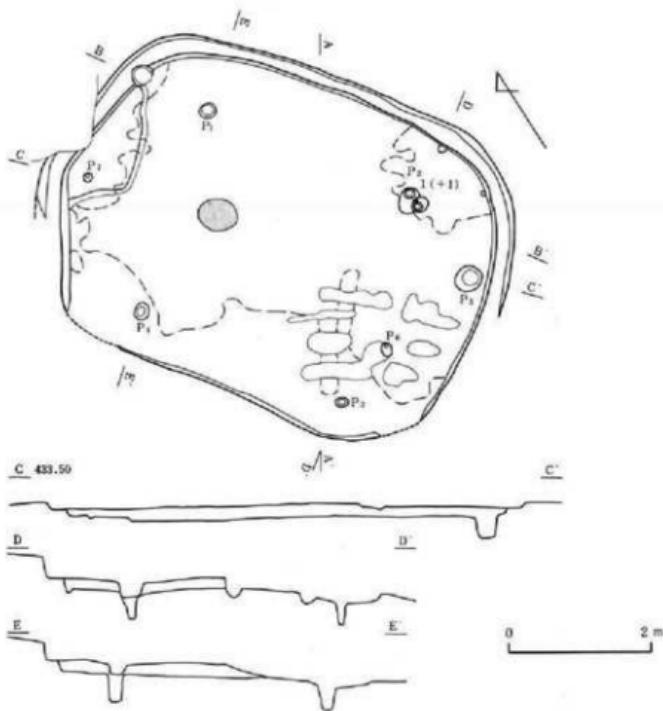
床面は貼床で、壁際部は状態が悪い。北壁沿い中央部は1.9×0.9mの範囲で床面が盛り上がりテラス状をなしている。周囲床面からの高さは5cmを測り、形状は不整円形を呈する。上面は貼床の痕跡が残り、位置等からもベッド状遺構との関連を窺わせる。

ピットは7ヶ所検出された。 $P_1 \sim P_4$ が柱穴で深さはそれぞれ、42cm、39cm、32cm、34cmを測る。 P_5 が貯蔵穴の可能性を持ち、径35cm程の円形平面を呈し、深さは34cmを測る。北壁沿いのテラス面上にも小ピット(P_7)が1ヶ所掘り込まれる。尚テラス部北端で壁を切っているピットは22号住居址に伴うものである。

周溝は検出されなかった。

炉址は中央部やや北寄りに位置する。径70cm程の不整円形を呈し、深さは20cm程を測る。覆土は3層に分けられ上面は22号住居址炉によって削平されている。

掘り方は床下全面に及び、ほぼ平坦であるが、僅かに中央部が浅く断面凸レンズ状を呈する。



第61図 21号住居址及び22号住居址掘り方(%)

周辺部には凹凸が認められる。床面からの深さは8~22cmで、掘り方埋土は6層に分けられ、第5層が貼床面である。

出土遺物は少なく、図示したものは一点のみである。

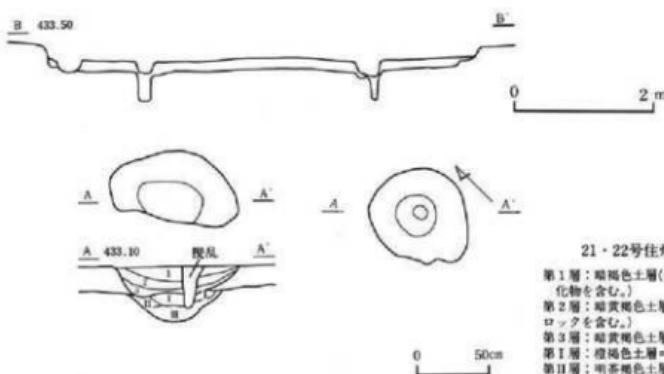
(輪生 隆)

第62図 21号住居址出土土器(1/4)



第34表 21号住居址出土土器観察表

1	台付甕	法量：脚部底径7.93cm。接合部径4.78cm。 調整：外面—接合部付近縦方向主体のハケ。脚下側斜め方向の細いハケ。内面—脚上部。太い横方向のハケ。中位、細い横方向のハケ。脚下側横方向のハケ。胎土：細かな白色粒子を含む。密。焼成：良。色調：赤褐色。
---	-----	---



第63図 22号住居址、同炉址、21号住居址炉址(1/2・1/2)

22号住居址（第63～65図、図版9、第35・36表）

斜面中位の6・7-0・P区に位置する。

21号住居址と重複し、21号住居址の上部に構築されている。

耕作のため西半部を削平されており、床面の遺存状態も悪い。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は6.6×5m弱と考えられる。主軸方位はN-32°-Wにとり、等高線とはほぼ平行する。

掘り込みはローム層まで達しており、覆土は2層に分けられた。壁高は北東壁で31cmを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面は貼床（第3層）で、遺存部は堅緻である。

ピットは7ヶ所検出された。 P_1 ・ P_2 が柱穴で深さはそれぞれ18cm、25cmを有する。貯蔵穴は確認されなかった。 P_3 は深さ18cmを測るが、他のピットは比較的浅いものであった。

周溝は検出されなかった。

炉址は中央部やや北寄りに位置する。南半部は搅乱のため失っているが、90×60cm程の楕円形平面を呈し、深さは20cm程を測る。覆土は3層に分けられる。

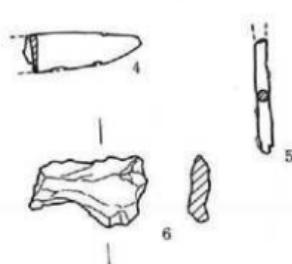
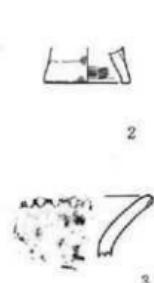
出土遺物は少なく、図示したものの僅かである。1は P_4 上面から、2は炉脇から出土している。刀子4は中央部覆土下層から出土している。他は覆土中からの出土である。

尚本住居址の炉址調査時に、炉址底部より本址炉址に伴うとは考えられない焼土ブロックを検出した。それを平面的に追求したところ、本住居址下部より新たに一軒の住居址を検出し、21号住居址とした。

21号住居址は、22号住居址と同一の平面形を有し、柱穴・炉址の位置、及び主軸方位をほぼ同一にする住居址である。両住居址間の間層（第4層） 第35表 22号住居址出土土器計測表

も、自然堆積とは考えられず、従って22号住は
21号住の拡張住居として理解したい。

表	臺	その他不明
64片	520g	4片 120g 13片 140g



第65図 22号住居址出土土器 (1/4, 1/6)

第65図 22号住居址出土土器 (1/4, 1/6)

鉄製品 4は刀子先端部。現長4cm、身幅1.4cm、棟厚0.3cmを測る。5は棒状鉄器先端。現長4cmで径0.4cmの円形断面を有する。6は不明鉄片。4×2.5cm程で厚さ0.7cmを測る。銷の為肥大化が著しい。3点とも覆土中からの出土である。

(植生 隆)

第36表 22号住居址出土土器観察表

1	壺	法量：口縁部径(11.00)cm。頸部径6.87cm。胴部径17.71cm。現存率：底部を欠く%。 調整：外面一口唇部ナデ。口縁部～頸部縱方向のヘラミガキ。頸部横方向のヘラミガキ及び縱方向のヘラミガキ。胴部上半斜め方向のヘラミガキ。胴部下半横方向のヘラミガキ。内面一口縁部～頸部ヘラケズリの後にナデ。頸部一部ハケを施す。横方向のヘラミガキ。頸部下半指オサエ。胴部上半横方向のハケ。胴部下半斜め方向主体のハケ。胎土：白色粒子を含む。密。焼成：良。色調：明赤褐色。
2	台付甕	法量：脚部底径(5.96)cm。現存率：脚部のみ%。 調整：外面一ナデ。内面一横方向のハケ。磨滅がひどく不明なところが多い。胎土：密。焼成：良。色調：赤褐色。
3	甕	現存率：口縁部%。 調整：外面一口縁部刻み目。タテ方向のハケ。内面一ヨコハケ。胎土：密。焼成：良好。色調：赤褐色。

23号住居址

(第66～68図、図版9、

第37・38表)

斜面中位の緩斜面部、9-N

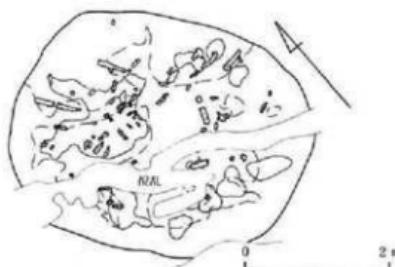
・0区に位置する焼失住居である。

東25mに5号住居址、南30mに25号住居址と距離を隔てて存在し、北西7mには19号・20号住居址が重複して位置する。一部耕作による擾乱が走るが、ほぼ完存する。

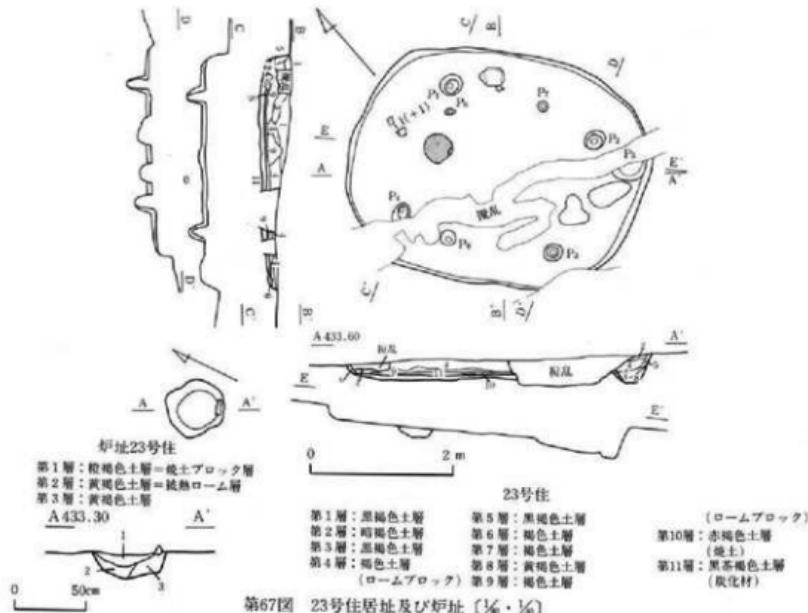
平面形は隅丸長方形を呈し、

規模は4.1×3.3mを測る。主軸方位はN-14°-Wにとり、等高線にやや斜行する。

掘り込みはローム層中まで達し、壁高は東壁で30cm、西壁で10cmを測る。壁は比較的緩やかに立ち上がるが東壁はほぼ垂直に立つ。覆土は11層に分けられ、床面直上層(第10・11層)は焼土・炭化材を主体とする層である。上層(第4・9層)にはロームブロックが大量に混入し、堆積状態からも焼失直後の投げ込みと考えられる。

床面は堅緻な貼床でなだらかな起伏を有する。床面上には大量の焼土・炭化材が認められた。ピットは8ヶ所検出された。P₁～P₄が柱穴で深さはそれぞれ26cm、31cm、28cm、21cmを測る。P₅が貯蔵穴で、東半部に擾乱を受けるが、径50cm程の円形平面を呈し深さは20cmを測る。周溝は検出されなかった。

第66図 23号住居址焼土・炭化材分布図(少)



第67図 23号住居址及び炉址 (A-A'・E-E')

炉址は中央部北寄りに位置する。平面形は不整円形を呈し、径40cm、深さ13cmを測る。覆土は3層に分けられ、枕石が1個検出された。

掘り方は床下全面に及び、中央部がやや深い凹レンズ状断面を示す。底面はなだらかな起伏をみせ、床面からの深さは5~10cmを測る。



第68図 23号住居址出土土器 (A-A'・E-E')

出土遺物は少なく図示したるものも僅かである。1は北壁沿い中央部、床面から出土している。(吉岡 弘樹)

第37表 23号住居址出土土器計測表

	甕	壺	その他不明
	40片 240g	6片 70g	6片 80g

第38表 23号住居址出土土器観察表

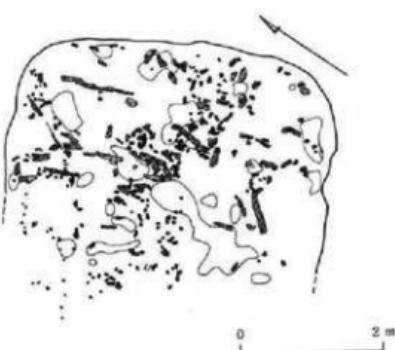
1 台付甕	法量: 口縁部径(16.52)cm。頭部径13.43cm。胴部径16.28cm。現存率: 口縁部~胴部中位 %。調整: 外面一口縁部~頭部斜め方向のハケ。胴部上半斜め方向のヘラケズリ。 胴部中位斜め方向のヘラケズリ。内面一口縁部~頭部ナデ。胴部上半横方向のハケ。 胴部中位横方向のハケ。胎土: わずかに黒雲母を含む。密。焼成: 良。色調: 橙茶褐色。
2 壺	法量: 口縁部径(14.15)cm。現存率: 口縁部のみ%。調整: 外面一口唇部ナデ。口縁部折り返し口縁、指頭圧痕が残りその下方に縱方向のハケを施す。内面一口縁部わずかに横方向のヘラミガキ。胎土: 密。焼成: 良。色調: 暗赤褐色。
3 壺	法量: 口縁部径(15.69)cm。現存率: 口縁部のみ%。調整: 外面一口唇部ナデ。口縁部折り返し口縁、指頭圧痕が残り、その下方に斜め方向のハケを施す。内面一口縁部横方向のヘラミガキ。胎土: 密。焼成: 良。色調: 暗赤褐色。
4 壺	現存率: 脚部上半%。調整: 外面~胴部上半円形浮文を有しその下部に細繩文・S字結節を有する。内面~胴部上半ナデ。胎土: 密。焼成: 良。色調: 赤褐色。
5 甕	現存率: 口縁部~頭部%。調整: 外面一口縁部斜方向のハケ。頭部縱方向のハケ。 内面一口縁部~頭部ナデ。胎土: 白色小粒子をわずかに含む。密。焼成: 良。色調: 赤褐色。
6 甕	現存率: 頭部~胴部上半%。調整: 外面~頭部縱方向のハケの後ナデ。胴部上半横方向の太い横ハケ。内面~頭部~胴部上半横方向のヘラミガキ。胎土: 密。焼成: 良。色調: 淡赤褐色。

24号住居址

(第69~73図、図版10、第39・40表)

斜面中位の緩斜面部、9・10-P区に位置する焼失住居である。北東14mに23号住居址、南東19mに25号住居址、西13mに28号住居址、と他住居址からやや離れて位置する。

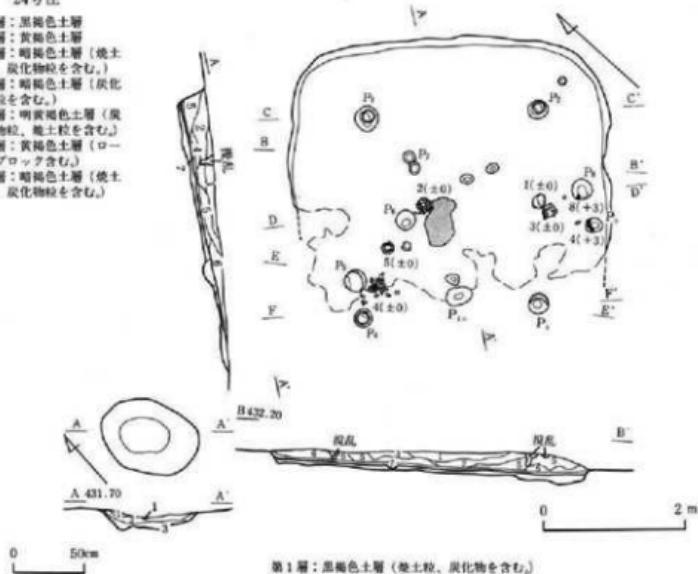
耕作のため南西壁が削平され完存しないが、平面形はほぼ隅丸方形を呈し、規模は柱穴位置からの推定であるが、4.6×4.7mを測る。主軸方位は、N-43°-Wにとり、等高線とはほぼ平行する。



第69図 24号住居址焼土及び炭化材分布図(%)

24号住

第1層：黒褐色土層
 第2層：黄褐色土層
 第3層：暗褐色土層（焼土粒、炭化物粒を含む。）
 第4層：暗褐色土層（炭化物粒を含む。）
 第5層：明黃褐色土層（炭化物粒、燒土粒を含む。）
 第6層：黄褐色土層（ロームブロック含む。）
 第7層：暗褐色土層（焼土粒、炭化物粒を含む。）



第1層：黒褐色土層（焼土粒、炭化物を含む。）
 第2層：棕褐色土層—焼土層
 第3層：灰黃褐色土層（焼土粒を含む。）

第70図 24号住居址及び炉址 [1/2・1/2]

掘り込みはローム層中まで達しており、壁高は東壁で34cmを測る。覆土は7層に分けられ、全体的に焼土・炭化物の混入が著しい。特に最下層（第7層）は焼土・炭化材を主体とする層である。

床面はほぼ平坦で、全体的に堅致である。床面上には多量の焼土・炭化材が認められた。

ピットは10ヶ所検出された。P1～P4が柱穴で深さはそれぞれ、54cm、56cm、59cm、46cmを測る。貯藏穴は確認されず、他住居址における貯藏穴の位置から推定すると、本址には貯藏穴は付設されなかった可能性が強い。P5・P9が梯子穴と思われ各々、13cm、10cmの深さを有する。他は全て5～10cmの比較的浅いピットである。

炉址は中央やや北寄りに位置する。70×50cmの規模で平面楕円形を呈する。深さは9cmを測り浅鉢状断面を示し、覆土は3層に分けられる。

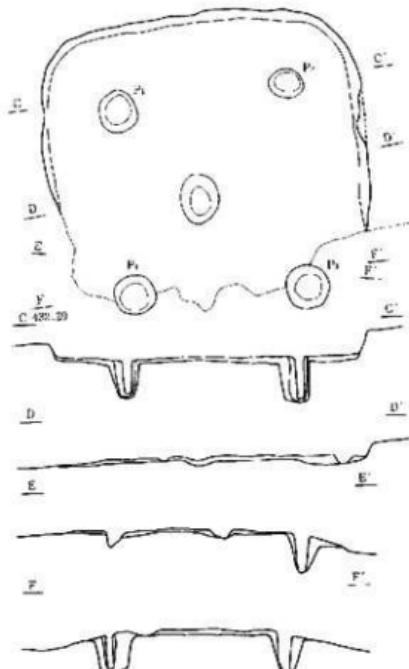
掘り方は床下全面に及び、浅くなめらかで床面からの深さは4～10cmを測る。

出土遺物は炉址脇から自然石が、覆土中から砾石9が出土した以外は土器である。床面上での

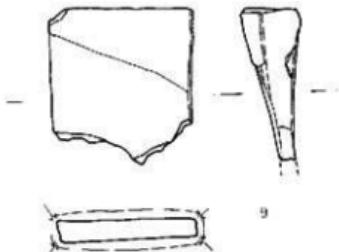
出土位置にはば2つのグループに分けられる。入口部（梯子穴）付近から壺1、甕3が、炉盤から北西隅にかけて甕2・4・5が出土している。他は覆土中からの出土である。

石製品 砕石。灰赤褐色を呈する。5.5×4.9×2.3cmを測り一端を欠落する。5面が砥面とされ、一面はかなり研ぎられし、粗い条痕も認められる。覆土中からの出土である。

(吉岡 弘樹)



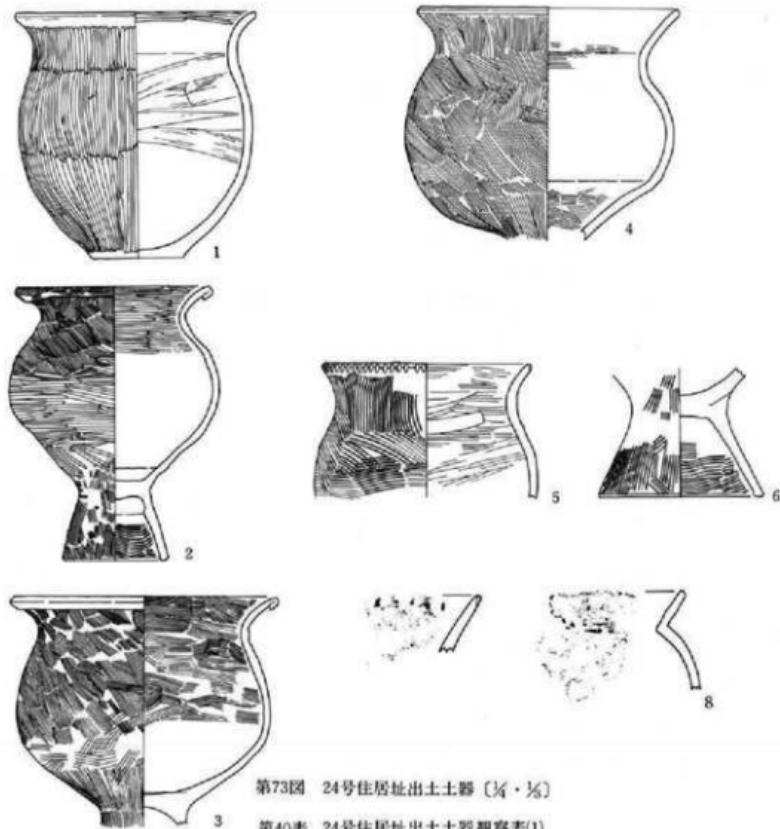
第71図 24号住居址掘り土〔石器〕



第72図 24号住居址出土石製品〔石器〕

第39表 24号住居址出土土器計測表

甕	壺	その他不明
28片	300g	1片 20g 5片 160g



第73図 24号住居址出土土器〔3/4・1/2〕

第40表 24号住居址出土土器観察表(1)

1	広口壺	法量：口縁部径(17.0)cm。胴部最大径16.5cm。底部径6.5cm。現存率：口縁部10%。胴部10%欠損。底部完存。 調整：外面一口縁ヨコナデ。胴部一ヘラミガキ。底部一ナデ。内面一口縁ヨコナデのちヘラミガキ。胴部一ヘラナデのちヘラミガキ。底部一ナデ。胎土：白砂粒含み密。焼成：良。色調：暗赤褐色。
2	台付甕	法量：口縁部径13.6cm。胴部最大径14.9cm。脚接合部5.0cm。脚底径7.4cm。現存率：胴下半一部欠損他はほぼ完存。 調整：外面一折り返し口縁。口唇部、頸部はハケ。胴部ハケのちミガキ。脚部ハケ。内面一口縁ハケのちヘラミガキ。胴部ヘラナデのちヘラミガキ。脚部ハケのちユビナデ。胎土：密。焼成：良。色調：黄褐色。
3	台付甕	法量：口縁部径(18.4)cm。胴部最大径17.9cm。脚部接合部6.1cm。現存率：口縁部10%。胴部ほぼ完存。脚部欠損。 調整：外面一折り返し口縁。ハケ調整を全面に残す。胴部ハケのちナデ。脚部ハケのちナデ。内面一口縁ハケ。胴上半ハケ。胴下半ヘラナデ。胴部底部ハケ。脚部ハケ。胎土：小石を含む。焼成：良。色調：黄褐色。

第40表 24号住居址出土土器観察表(2)

		法量：口縁部径(18.0)cm。底最大径19.0cm。脚台接合部5.6cm。現存率：口縁%。底%。
4 台付窓	調整：外面一口縁ハケのちヨコナデ。脚部ハケ。内面一ハケのちヨコナデ。脚部上位へラナデ。脚部下ハケ。胎土：密。焼成：良。色調：淡赤褐色。	
5 窓	法量：口縁部径(14.4)cm。底最大径(15.8)cm。現存率：光弱。脚下部欠損。 調整：外面一口縁ハケのちヨコナデのちハケ具によるキザミ。脚部ハケ。内面一口縁ヘラミガキ。脚部ヘラミガキ。胎土：白砂粒を含み密。焼成：良。色調：赤褐色。	
6 台付窓	法量：脚底部11.6cm。脚高5.8cm。現存率：脚部光強。 調整：外面一ハケ、内面一ハケ。脚底部内面一ハケのちナデ。胎土：密。焼成：良。色調：黄褐色。	
7 窓	現存率：口縁部%。 調整：外面一割目タテハケのらナデ。内面一ヨコハケのちナデ。胎土：密。焼成：良。色調：赤褐色。	
8 小型壺	現存率：口縁部%。 調整：外面一口縁ナデ。肩ミガキのちナデ。内面一口縁・肩ナデ。胎土：砂粒を含み密。焼成：良。色調：黄褐色。	

25号住居址

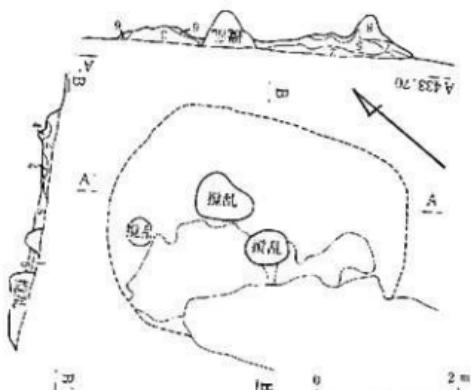
(第74、75図)

斜面中位の緩斜面部、11・12-0
・P区に位置し、集落の南端にあたる。北西19mに24号住居址が存在するのみで、他の住居址からは距離を隔てている。

遺存状態が悪く、全壁が削平され、床面中央部が僅かに残るにすぎない。

平面形は、掘り方では隅丸長方形を呈し、規模は4.2×3.2mを測る。主軸方位はN-28°-Wにとり、等高線とほぼ平行する。掘り込みはローム層中まで達しているが、壁は削平され全く存在しない。床面残存部はほぼ平坦で堅激である。周溝は検出されなかった。

ピットは掘り方で8ヶ所検出された。P1-P4が柱穴で、掘り方底面からの深さはそれぞれ、32cm、37cm、36cm、34cmを測る。P5-P8は三連ピットで、それぞれ、14cm、15cm、31cmの深さを有する。



第74図 25号住居址 [6]

25号住

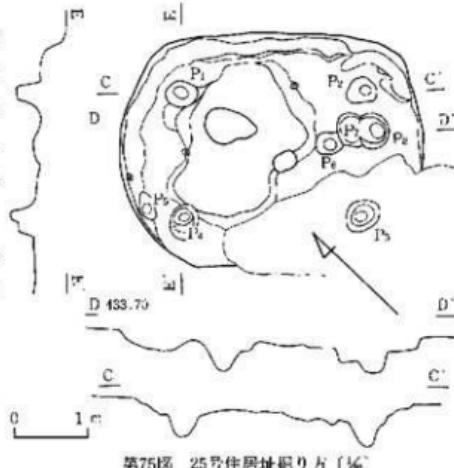
- | | |
|--------------------|------------------------|
| 第1層：茶褐色土層（胎土） | 第5層：黄褐色土層（黒色粒子を含む。） |
| 第2層：灰褐色土層（文化物を含む。） | 第6層：黄褐色土層 |
| 第3層：暗褐色土層 | 第7層：茶褐色土層（ロームブロックを含む。） |
| 第4層：黄褐色土層 | 第8層：暗褐色土層（黒褐色粒子を含む。） |

炉社は検出されなかった。

掘り方は床下全面に及び、中央が浅く周辺が深く掘りこまれ、底面には凹凸が認められた。床面からの深度は14~26cmを有し、壁際は段部をなして立ち上がる。埋土は8層に分けられ、第1層は貼床面で、第2・3層は擾乱の可能性もあるが、炭化物の存在から本住居跡に附属させたものである。

遺物は全く検出できなかった。

(鉛生 隆)



第75図 25号住居址掘り方 [36]

26号住居址

(第76~77図、図版11、第41・42表)

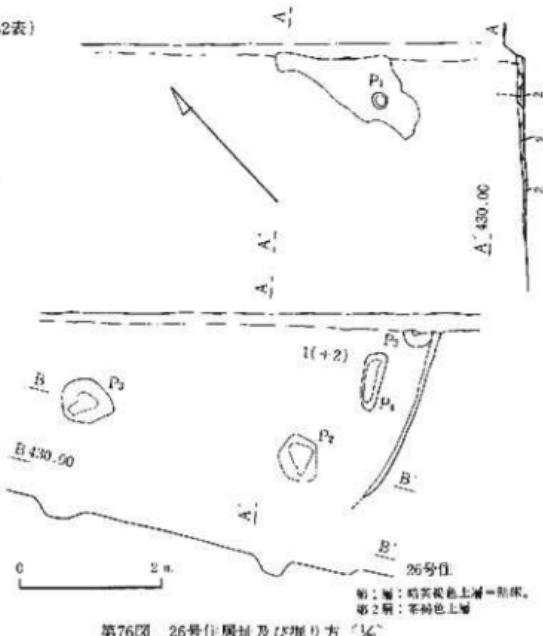
斜面下位の8-Q区に位置する。

西2mに27号住居址が接する。

南10mに28号住居址、南東16mには24号住居址が存在する。

東半部は農道によって破壊され、西半部も耕作による削平を受け南壁寄り床面一部が遺存するのみである。

平面形・規模は不明であるが、掘り方残存部から推定すると、長軸5.5m以上を測り、隅丸長方形を呈するものとも考えられる。主軸方位も不明であるが、柱穴間緯はN-45°-Wにとり、主軸方位もほぼ同一方位を



第76図 26号住居址、及び掘り方 [36]

第1層：暗茶褐色土層+粘土
第2層：茶褐色土層

るとと思われ、等高線とはほぼ平行する。

床面遺存部は僅かであるが、堅紙な貼床で、小ピットが1ヶ所検出された。

ピットは合計5ヶ所検出された。 P_2 ・ P_3 が柱穴で、床推定面からはそれぞれ、44cm、45cmの深さを測る。 P_4 ・ P_5 は位置関係から推して出入口施設に関連する可能性も持つ。

掘り方は床下全面に及んだものと考えられるが

明確でない。床面からの深さは8~10cmを測り、

第41表 26号住居址出土土器計測表

埋土は2層に分けられる。

出土遺物は少なく、図示したのも1点のみ

表	表	その他不明
6 片	50g	

である。

(吉岡 弘樹)



第77図 26号住居址出土土器(1点)

第42表 26号住居址出土土器観察表

1	台付甕	法量：接合部径(5.60)cm。胸部底径(8.96)cm。現存率：胸部のみ%。調整：外面一 胸部ナデ。外面は磨滅がひどい。内面一胸部底ナデ。胸部ナデ。胎土：密。焼成：良 であるが軟質。色調：赤褐色。
---	-----	---

27号住居址

(第78~80図、図版

11、第43・44表)

斜面下位の7・8-Q・

R区に位置する焼失住居で
ある。

東2mに26号住居址、南
3mに31号住居址と近接す
る。南東11mに28号住居址、
北西15mに30号住居址が存
在する。

住居址西半部を削平され、
また床面の遺存も悪い。平
面形は隅丸長方形を呈する
ものと考えられ、規模は柱
穴から推定すると5.9×

4.3m程度であろう。主軸方

位はN-39°-Wにとり等高線にはほぼ平行する。



第78図 27号住居址(1点)

掘り込みはローム層中まで達しており、壁高は削平の為最長で15cmを測るのみである。覆土は6

層に分けられ、床面直上層（4・5・6層）は焼土・炭化物を主体とする層である。上層にはローム・ロームブロックが多量混入し、人為的な堆積を示す。

床面遺存部は堅緻な貼床で上面には多量の焼土・炭化材が認められた。

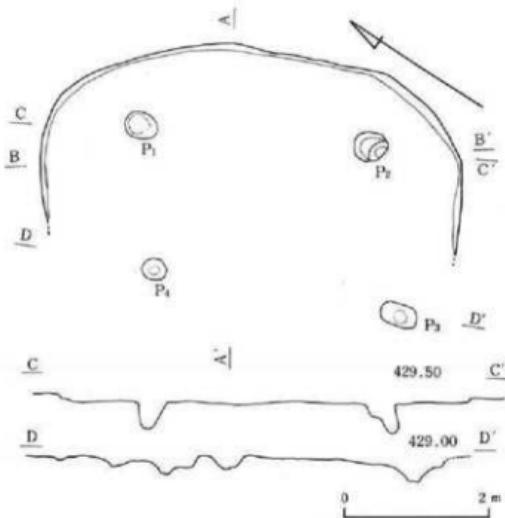
ピットは4ヶ所検出された。全て柱穴で深さは床推定面からそれぞれ37cm、41cm、34cm、45cmを測るが、平行四辺形を呈し、平面形に対して歪みをもつ。

周溝・炉址は検出しえなかった。

掘り方は床下全面に及び、凹凸が激しい。床面からの深さは

5~20cmを測る。

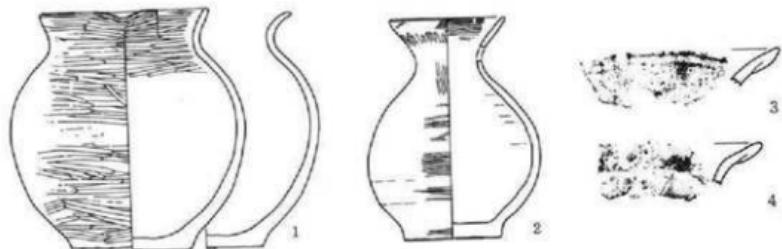
出土遺物は少ない。壺1・2は共に中央部床面、ほぼ柱穴線上より出土している。（吉岡 弘樹）



第79図 27号住居址掘り方 [‰]

第43表 27号住居址出土土器計測表

	壺	壺	その他不明
	30 片 210 g	90 片 350 g	



第80図 27号住居址出土土器 [A, B]

第44表 27号住居址出土土器観察表(1)

1	片口壺	法量：口縁部径12.21cm。接合部径11.16cm。器高17.96cm。胴部径17.52cm。底部径8.50cm。現存率：ほぼ完形。 調整：外面一口脣部ナデ。口縁部密な横方向のヘラミガキ。頸部横方向のヘラミガキ。胴部上中位横方向のヘラミガキ。胴部下半やや斜め方向のヘラミガキ。胴部底付近わずかにナデ。底部ヘラミガキ。内面一口縁部～頸部横方向のヘラミガキ。胴部簡単なナデ、磨減している。胎土：密。焼成：良。色調：暗茶褐色。
---	-----	--

第44表 27号住居址出土土器観察表(2)

2	壺	法量：口縁部径8.43cm。頸部径4.82cm。器高16.51cm。胴部径12.82cm。底部径7.05cm。現存率：%。 調整：外面一口唇部ナデ。口縁部～頸部斜め方向のハケ。縱方向の短いヘラミガキ。胸部ハケ。底部ナデ。内面一口縁部～頸部横方向のハケの後横方向のヘラミガキ。全体に非常に磨滅が激しく整形はよく分からぬ。胎土：密。焼成：軟質。色調：明赤褐色。
3	壺	現存率：口縁部のみ%。 調整：外面一口縁部折り返し口縁ナデ。横方向のハケ。内面一口縁部ナデ。胎土：密。焼成：良。色調：暗赤褐色。
4	壺	現存率：口縁部のみ%。 調整：外面一口縁部折り返し口縁ナデ。内面一口縁部ナデ。胎土：密。焼成：良。色調：暗赤褐色。

28号住居址

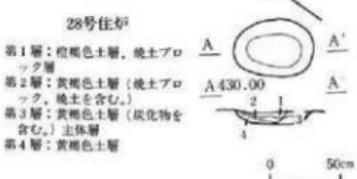
(第81-82図、図版12、第45・46表)

斜面下位の9-Q・R区に位置する焼失住居である。

北10mに26号住居址が^a、南5mに29号住居址が^c、東15mには24号住居址が^b存在する。南西10mには32号住居址と33号住居址が重複して存在する。

耕作による削平のため東壁際部が残存するのみで遺存状態は悪い。遺存している柱穴からの推定であるが、平面形は隅丸方形を呈し規模は3.8×3.7m程と考えられる。主軸方位はN-30°-Wにとり等高線とはほぼ平行する。

掘り込みはローム層まで達しているが削平の為、壁高は10cmを残すのみである。



第81図 28号住居址・掘り方及び炉址 [1/2, 1/2]

覆土は4層に分けられ、床面直上層(4層)は焼土・炭化物を主体とする層である。

上層にはロームブロックの混入が目立つ。

床面は壁際が高く中央へ向うに従い低くなる。全体的に軟弱であるが一部堅硬な部位を残す。床面上には焼土・炭化材が認められた。

ピットは4ヶ所検出され全て柱穴である。床推定面よりの深さはそれぞれ43cm、51cm、55cm、48cmを測る。

周溝・貯蔵穴は検出しえなかつた。

炉址は住居址中央部に位置する。上面を削平されているが、60×40cmの楕円形を呈し深さ10cmを残している。

掘り方は中央部が掘り込まれ、周辺壁沿いは掘り残されるものである。從って床面遺存部は掘り方底面を整地し、貼床したものであるが、中央部にも貼床が施されたと考えられる。床面からの深さは15~20cmを測る。

出土遺物は少なく図示したのも僅かである。1は北東隅壁際床直から出土している。

第46表 28号住居址出土土器観察表

(山崎 和也)

		現存寸: 脚部下半~底部%。 調査: 外面~底部木葉痕。 外面は磨滅がひどく堅形は分からず。 内面: 脚部下半横方向のハケ。 底面縦方向のハケ。 脱土: 密。 燃成: 良。 色調: 茶褐色。
1	壺	20片 90g

29号住居址(第83~85図、図版11、第47・48表)

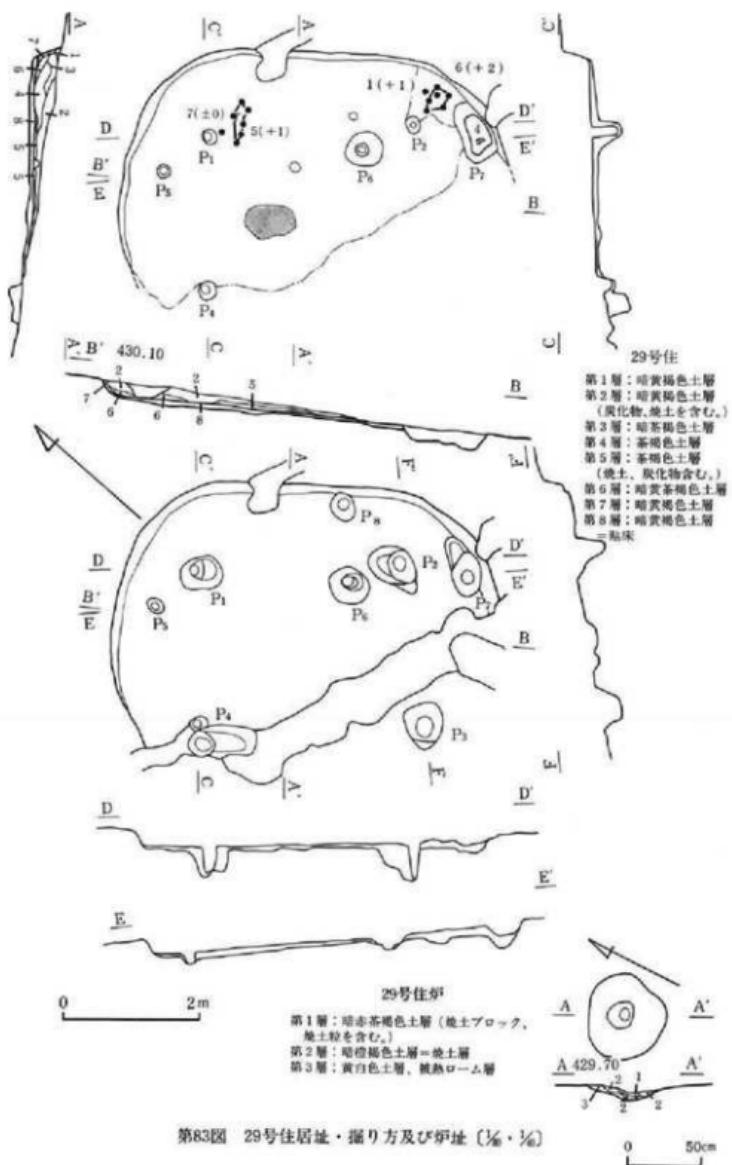
斜面下位の急斜面部、10-R区に位置し扇形に展開する集落の南端にあたる。北7mに28号住居址が、西10mに32号・33号住居址が重複して存在する。

耕作の為西半部に削平を受け、住居址全体の光輝しか遺存しない。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長軸5.5mを測り短軸は4.5m程と推定される。主軸方位はN-31°-Wにとり等高線とやや斜行する。

掘り込みはローム層まで達しており、壁高は東壁で30cm程度遺存する。覆土は7層に分けられ、自然堆積を示す。

床面は平坦であるが、やや軟弱な貼床である。

ピットは8ヶ所検出された。P₁~P₄が柱穴である。深さはそれぞれ、38cm、50cm、52cm、30cmを測る。P₅が貯蔵穴と思われ南北隅壁に接して設けられる。80×50cmの楕円形平面を呈し、深



第83図 29号住居址・掘り方及び炉址 (1/4, 1/6)

は15cmを測る。

炉址は中央やや北寄りに位置する。径50~60cm程の不整円形を呈する。深さは8cmと浅く皿状断面を示す。覆土は3層に分けられる。

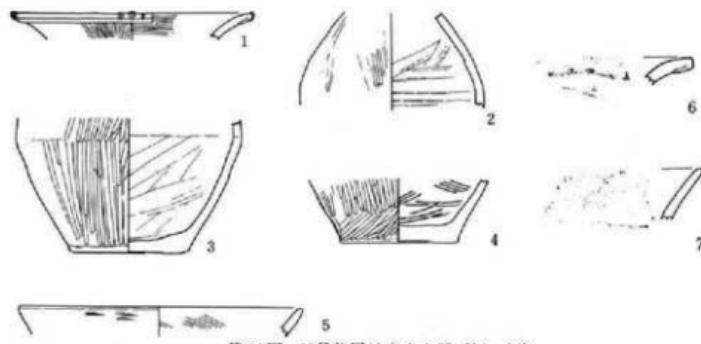
周溝は認められない。

掘り方は床下全面に及ぶ。底面はなだらかな起伏をもつ。床面からの深さは5~8cmを測る。埋土は1層で上面が貼床となる。

出土遺物は細片化が進んでいるが、図示しえたものは全て床面直上から出土している。4は貯蔵穴内から、1・3・6は貯蔵穴脇から、5・7はP1脇からの出土である。

第47表 29号住居址出土土器計測表

表	壺	壺	その他不明
27片	285g	7片	60g



第84図 29号住居址出土土器(1/4・1/6)

第48表 29号住居址出土土器観察表(1)

1	壺	法量：口縁部径(17.88)cm。現存率：口縁部1%。 調整：外面一折り返し口縁、棒状貼り付けを有す。口縁部～頸部縱方向のヘラミガキ。内面一口縁部～頸部横方向のヘラミガキ。胎土：密。焼成：良。色調：暗赤褐色。
2	壺	現存率：胴部上半1%。 調整：外面一胴部上半わざわざに縱方向のヘラミガキ。磨減がひどい。内面一胴部上半斜め方向・横方向のナデ。胎土：密。焼成：良であるがやや軟質。色調：淡赤褐色。
3	壺	法量：底部径8.78cm。現存率：胴部中頃～底部1%。 調整：外面一胴部中頃～下半縱方向のヘラミガキ。胴部底付近縱方向のハケの後にナデする。底部木葉痕。内面一胴部中頃～下半横方向・斜め方向のヘラミガキ。底面ナデ。全体に磨減が激しい。胎土：密。焼成：良。色調：暗赤褐色。
4	壺	法量：底部径8.71cm。現存率：底部のみ、他は欠損。 調整：外面一胴部下半～底部付近斜め方向のヘラミガキ。底部ナデ。内面一胴部下半～底面簡単な横方向のヘラミガキ。胎土：密。焼成：良。色調：暗赤褐色。

第48表 29号住居址出土上器観察表(2)

5	表	法量：口縁部径(20.85)cm。現存率：口縁部のみ%。調整：外面一口縁部横方向のナデ。内面一口縁部横方向のナデ。斜め方向のハケ。胎土：密。焼成：良。色調：明茶褐色。
6	壺	現存率：口縁部%。調整：外面一口縁部折り返し口縁ナデ。口縁部～頸部ナデ。内面～口縁部～頸部横方向のヘラミガキ。胎土：密。焼成：良。色調：淡茶褐色。
7	甕	現存率：口縁部%。調整：外面一口縁部ナデ。内面一口縁部横方向のハケの後にナデ。胎土：密。焼成：良。色調：淡茶褐色。

鉄製品 板状鉄片端部 現長2cm、幅1.8cm、厚さ0.2cmを測り、端部は弧状を呈する。住居址北東隔壁際、覆土中から出土している。

(吉岡 弘樹)

第85図 29号住居址出土鉄製品(%)



30号住居址

(第86~87図、第49表)

斜面下位、急傾斜斜面部の6・7-R・S区に位置し、扇状にひろがる集落の扇端部にあたる。他の住居址とは距離を隔ており、南東15mに27号住居址が存在するにすぎない。

耕作による削平が激しく、平面形・規模・主軸方位等はいっさい明確にしえない。

本址は確認面残在時に土器を伴うピットとして検出されたものである。更に周辺から貼床残在と思われるハードブロックを検出し、下部には浅い落ち込みが確認された。落ち込みの一辺が緩い弧状を呈すること、覆上が本遺跡に於ける振り方埋土と同一であること、更にハードブロックの存在などから一応住居址と認定したものである。勿論、確認した部分は遺構のごく一部であり、他の性格の遺構となる可能性を否定するものではない。

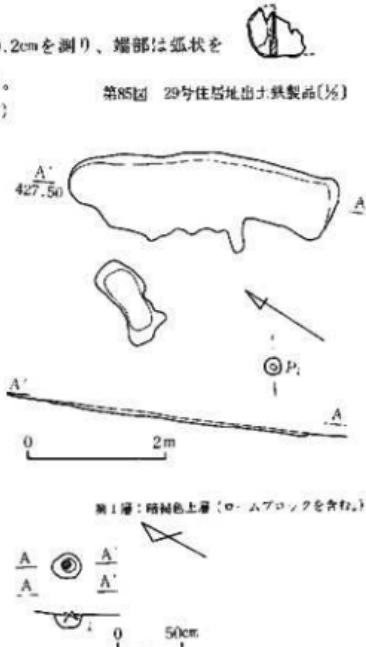
出土遺物は1点で、ピット内から出土している。

(吉岡 弘樹)

第49表 30号住居址出土上器観察表

1	台付罐	法量：脚接合部径5.63cm。脚底径8.38cm。現存率：脚部のみ完存、他は欠損。調整：外面 脚接合部横方向のハケ。脚部横方向のハケ。内面～脚部底面横方向のハケの後に斜め方向をもとするヘラミガキ。脚部上半横方向のハケの後にナデ。脚部下半横方向のハケ。胎土：白色粒子を含む。密。焼成：良。色調：薄茶褐色。
---	-----	---

第86図 30号住居址(%)



第87図 30号住居址出土土器(%)



31号住居址

(第88~90図、第50

・51表)

斜面下位の急斜面部
8・9-R区に位置す
る。

北3mに27号住居址
が近接する。東5mに
28号住居址が^c、南東14
mに29号住居址が存在
し、南10mに32号・33
号住居址が重複して存
在する。

耕作による削平の為
床面及び東壁が僅かに
遺存するのみである。
掘り方及び柱穴からの
推定であるが、平面形は
ほぼ楕円形を呈し、規
模は5×4m程と考え
られる。主軸方位はN
-33°-Wにとり、等高
線とはほぼ平行する。

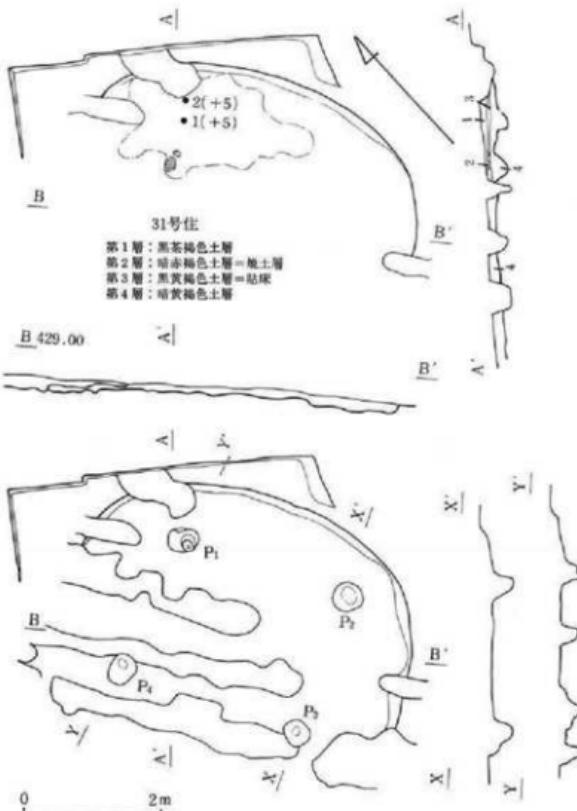
掘り込みはローム層
中まで達している。削平が著しい為、壁高は5cm、覆土も2層を残すのみである。

床面遺存部は堅緻な貼床である。

周溝・炉址・貯蔵穴は検出されなかったが、中央部やや北寄りから焼土溜りが検出されており
炉址の残りとも考えられる。

ピットは4ヶ所検出された。全て掘り方底面で確認されたもので、柱穴である。床推定面から
の深さはそれぞれ、37cm、44cm、54cm、47cmを測る。

掘り方は床下全面に及ぶ。中央部が浅く周辺が深く掘り込まれる様相を示すが、削平が著しく
断定はなしえない。底面はなだらかな起伏を有するものと思われる。床面からの深さは5~25cm
である。掘り方の埋土は2層に分けられ上層が貼床である。

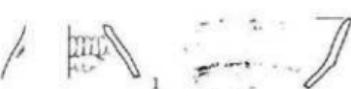


第88図 31号住居址及び掘り方 (3)

出土遺物は掘り方から鉄製品が6点出土した以外は少なく、図示したものも僅かである。

第50表 31号住居址出土土器計測表

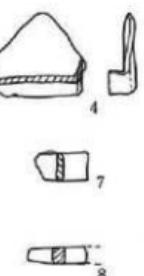
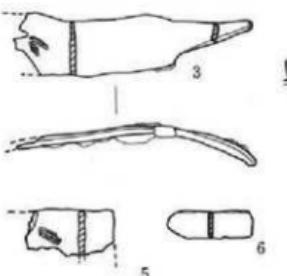
裏	壺	その他不明
40片 140g	7片 60g	4片 50g



第89図 31号住居址出土土器(1・2)

第51表 31号住居址出土土器観察表

1	壺	現存率：胴部上半尾。調整：外面—胴部上半ナデ。内面—胴部上半ナデ。輪積み痕。胎土：白色砂粒子を含む。密。焼成：良であるがやや軟質。色調：赤褐色。
2	高环	現存率：口縁部～胴部1/2。調整：外面—口縁部ナデ。口縁部ナデ。胴部ナデ。内面—口縁部～胴部ナデ。全体的に磨滅が激しい。胎土：白色粒子を含む。密。焼成：良。色調：薄黄褐色。



鉄製品 鉄製品は6点出土している。

3は刀子片、身部先端を欠き現長9cm、身幅1.8cm、茎幅1cm、棟厚0.2cmを測る。棟間は急角度に、刃間は緩やかに立ち上がる。4は五角形を呈する不明鐵器。現寸3×3.5cmを測り、厚さ0.2cmを有する。一端は0.8cm程切りこまれ、ほぼ直角に折り曲げられる。5は板状鐵器端部。現寸3×1.5cm、厚さ0.2cmを測り、木質部が遺存する。6・7は共に板状鐵器端部。6は現長3cm、0.1×0.9cmの方形断面を有し、端部は弧状を呈する。7は現長1.7cm、0.2×1cmの方形断面を示す。8は板状鐵器端部。現長2cm、0.4×0.5cmの方形断面を示す。刀子類の茎尻部か。

第90図 31号住居址出土鐵製品(6)

厚さ0.2cmを測り、木質部が遺存する。6・7は共に板状鐵器端部。6は現長3cm、0.1×0.9cmの方形断面を有し、端部は弧状を呈する。7は現長1.7cm、0.2×1cmの方形断面を示す。8は板状鐵器端部。現長2cm、0.4×0.5cmの方形断面を示す。刀子類の茎尻部か。

6点全て掘り方よりの出土である。

(吉岡 弘樹)

32号住居址 (第91~93図、第52・53表)

斜面下位の急斜面部、9・10-S区に位置する。

本址は33号住居址掘り方検出中に確認されたもので、33号住居址と全く重複し、その下部に構築されていたものである。西半部を耕作の為に失ない、殆どしか遺存しない。

掘り方からの推定では、平面形は橢円形を呈し、規模は5.4×4.4mを測る。主軸方位はN-45°-Wと、33号住居址と同一に見える。

掘り込みはローム層中に達する。上部に33号住居址が構築されるため、壁は10cm程遺存するのみである。覆土は1層で人為的な堆積を示し、33号住居址構築時の埋土であろう。

床面はやや軟弱な貼床である。

ピットは7ヶ所検出された。P₁～P₄が柱穴で深さはそれぞれ、40cm、46cm、55cm、51cmを測る。南東壁に接して位置するP₅が貯蔵穴で、50×55cmの規模で、平面隅丸方形を呈し、深さ28cmを測る。P₆は深さ32cmを有し、入口施設であろう。南北西・北東隅隅で壁を切っているピット及び本址P₂を切っているピットは33号住居址に所属する柱穴である。

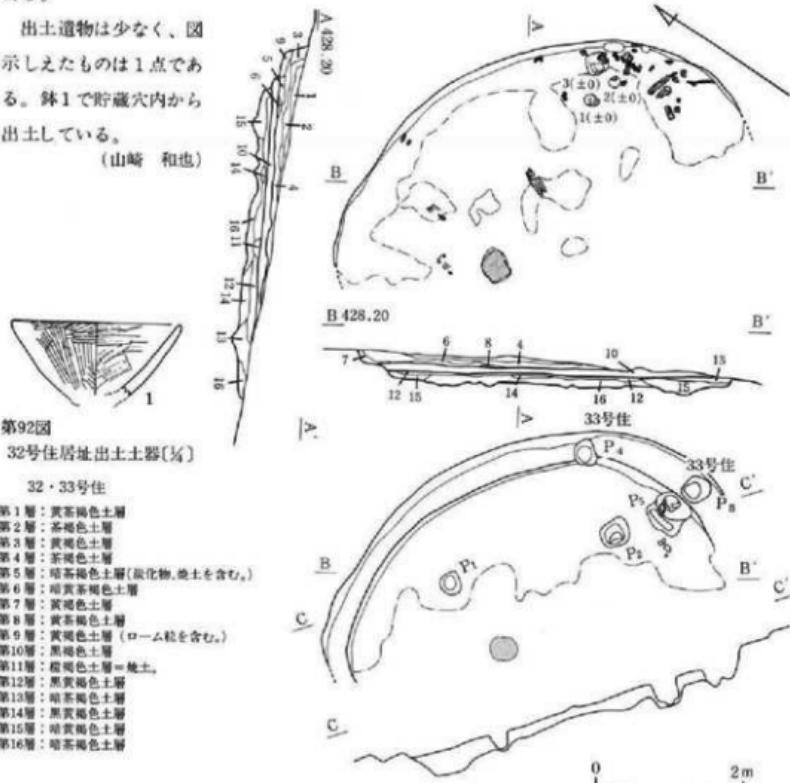
周溝は検出されなかった。

炉址は中央やや北寄りに位置する。削平が激しく焼土及び、炉址と考えられる被熱ロームの一部が検出されたのみである。

掘り方は床下全面に及ぶ。底面は全体的に凹凸が激しく、床面からは15～25cmの深さを有する。埋土は5層に分けられ、第12層が貼床面である。

出土遺物は少なく、図示したものは1点である。鉢1で貯蔵穴内から出土している。

(山崎 和也)



第92図
32号住居址出土土器(1/4)

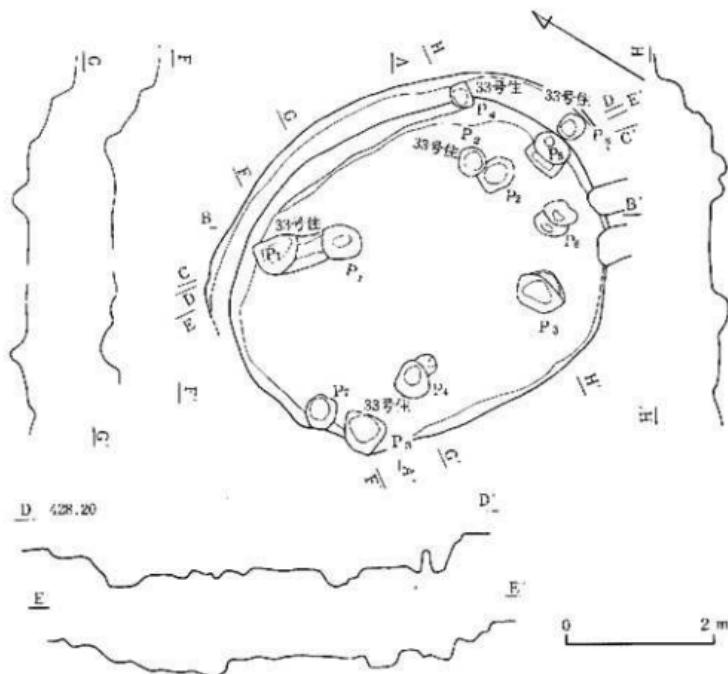
32・33号住

- 第1層：黄茶褐色土層
- 第2層：茶褐色土層
- 第3層：黄褐色土層
- 第4層：茶褐色土層
- 第5層：暗茶褐色土層(炭化物、燒土を含む。)
- 第6層：暗黃茶褐色土層
- 第7層：黄褐色土層
- 第8層：黄茶褐色土層
- 第9層：黄褐色土層(ローム粒を含む。)
- 第10層：黑褐色土層
- 第11層：棕褐色土層=燒土。
- 第12層：黑黄褐色土層
- 第13層：暗茶褐色土層
- 第14層：黑黄褐色土層
- 第15層：暗黄褐色土層
- 第16層：暗茶褐色土層

第93図 32号住居址、33号住居址及び掘り方(1/4)

第53表 32号住居址出土土器観察表

1	鉢	法量：口縁部径(12.04)cm、現存率：上半%。調整：外面一口縁部斜め方向のヘラミガキ。 縁部上半縦方向のヘラミガキ。内面一口縁部～腹部上半ナナ。胎土：密。焼成：良。色 調：暗赤褐色。
---	---	---



第93図 32号・33号居住址掘り込み (36)

33号居住址（第92～94図、図版12、第54・55表）

斜面下位の急斜面部、9・10-S区に位置する焼失住居である。32号居住址と重複し、その上部に構築される。扇形に展開する集落の南端部に位置し、北10mに31号居住址が、東10mに29号居住址が存在する。

耕作のため削平が激しく、東壁と床面の一部が遺存するのみである。柱穴及び、32号居住址平面形から推定すると、平面形は楕円形を呈し、規模は6.2×5.2m程度を測るものと考えられる。主軸方位はN-45°-Wにとり等高線とはほぼ平行する。

掘り込みはローム層中まで達し、壁高は東壁で35cmを測る。壁は直線的でやや開きぎみに立ち

あがる。覆土は9層に分けられ、下層（第7・8層）には焼土・炭化材が混入する。

床面は貼床だが軟弱で、かつ遺存が悪い。残存床面上には多量の焼土・炭化材が認められる。ピットは5ヶ所検出された。 $P_1 \sim P_3$ が柱穴で床面からの深さはそれぞれ、41cm、49cm、54cmを測る。本址の柱穴は4本柱によって構成されるものと考えられるが、南西隅にあたるものは検出されなかった。 P_4 或いは P_5 が貯蔵穴とも考えられ、径40cmの不整円形を呈し、深さ37cmを測る。炉址は中央部北寄りに位置していたと思われるが、削平のため焼土溜りが検出されたのみである。

掘り方は床下全面に及び、なめらかな起伏を有する。床面からの深さは8~15cmを測る。

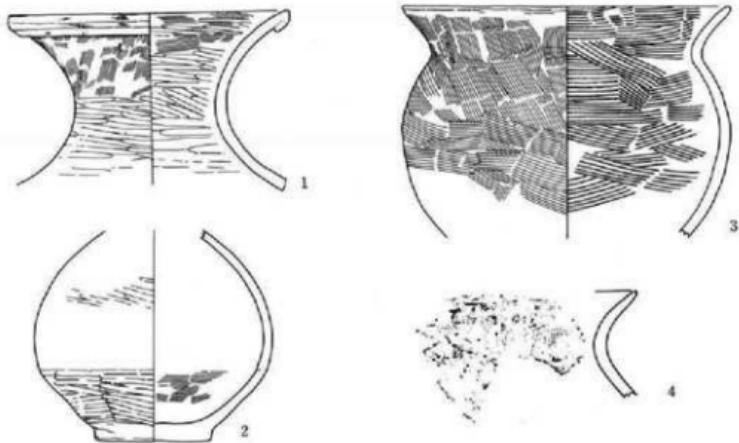
出土遺物は少なく、図示したのも僅かである。1・2は P_1 周辺床面から、3は P_1 内から出土している。

尚、本址掘り方確認時に、住居址中央に本址と相似形の落ち込みを検出した。当初、中央部が掘り込まれるタイプの掘り方であるとも考えた。しかし5~10cm程掘り下げたところ、やや軟弱な床面、及び遺物・ピット等を検出したため、別個の住居址と認定した。本址と、平面形・主軸方位を同一にし、柱穴・貯蔵穴の配置もほぼ相似形をとるものであり、20号・21号住居址の例と同様、拡張住居址として理解しておきたい。

(山崎 和也)

第54表 33号住居址出土土器計測表

表	蓋	その他不明
62片	380 g	12片 90 g 3片 20 g



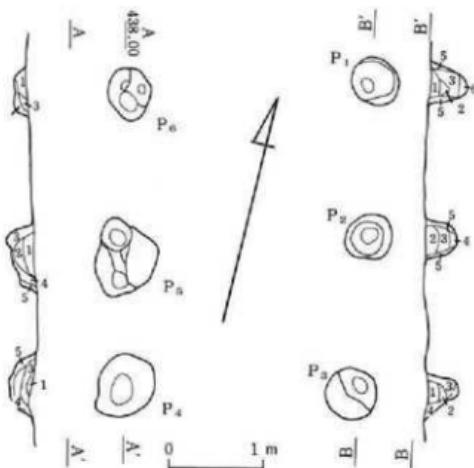
第94図 33号住居址出土土器(1/2)

第55表 33号住居址出土土器観察表

1	壺	法量：口縁部径18.86cm。頸部径10.36cm。現存率：口縁部～頸部完存。他は欠損。 調整：外面一折り返し口縁十ア。口縁部～系部上位縦方向の細いハケ。頸部下位横方向のヘラミガキ。内面一口縁部横及び斜方向のハケ。頸部上半横方向のハケ。横方向のヘラミガキ。頸部中位斜め方向のヘラミガキ。頸部下半横方向の太いヘラミガキ。胎土：白色粒子をやや含む。密。焼成：良。色調：暗赤褐色。
2	壺	法量：胸部径16.08cm。底部深7.90cm。現存率：口縁部～頸部を欠く。胴部以下は完存。 調整：外面一胸部上半やや斜方向のヘラミガキ。胸部中位やや斜方向のヘラミガキ。胸部下半横方向のヘラミガキ。底部簡単なナデ。内面一胸部上半…中頃簡単なナデ。胸部下半横方向のハケ。底面ハケ。密。焼成：良。色調：暗赤褐色。
3	古付甕	法量：口縁部径(21.89)cm。頸部径(18.25)cm。胸部径(22.04)cm。現存率：口縁部～胸部下半分。他は欠損。調整：外面一口唇部ナデ。口縁部～頸部縦方向のハケ。胸部上半斜め方向のハケ。頸部中～下半横方向のハケ。内面一口縁部～頸部横方向のハケ。胸部上半横及び斜方向のハケ。胸部中～下半横及び斜方向のハケ。胎土：密。焼成：良。色調：赤褐色。
4	甕	現存率：口縁部～頸部/6。調整：外面一口唇部ナデ。口縁部～頸部縦及び斜方向のハケ。内面一口縁部～頸部横方向のハケ。胎土：密。焼成：良。色調：淡茶褐色。

2 掘立柱建物遺構

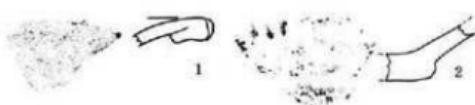
1号掘立柱建物遺構 (第95・96図、図版13、第56・57表)



第1層：明茶褐色土層（粘性やや弱く、しまりは普通。ローム粒・黒褐色粒子を少量含み。赤色スコリア・炭化物を微量含む。）
第2層：黒褐色土層（粘性無く、しまりはやや弱い。赤色スコリアを微量含む。）
第3層：茶褐色土層（粘性普通、しまりも普通。ローム粒を少量。）

第4層：茶褐色土層（粘性普通、しまりも普通。黒褐色粒子を含み。ローム粒を微量含む。）
第5層：暗茶褐色土層（粘性やや強く、しまりは普通。ローム粒・ロームブロックを含む。）
第6層：暗茶褐色土層（粘性やや強く、しまりはやや弱い。）

第95図 1号掘立柱建物遺構 (§6)



第96図 1号掘立柱建物遺構出土土器 (§6)

第57表 1号掘立柱建物遺構、出土土器観察表

1	壺	現存率 口縁部破片 調整：外面一ハケのちナデ 折り返し部に指頭痕 口唇部粗いハケ棒状貼り付け(4本1組)内面一無筋細網文、胎土 密。焼成 良。色調 淡赤褐色。
2	壺	現存率 底部破片 調整：内面粗いハケ 底部ナデ 外面ハケのちケズリ、胎土密。焼成 良。色調 赤褐色。

斜面中央部の10・11-K区に位置し、集落のほぼ南東端にあたる。北側7mに1・2号住居址が、西6mに2・3号掘立柱建物遺構が連なって存在し、西5mに11・12号土壙が存在する。

主軸方位をN-11°-Wにとり等高線にはば平行する。規模は2間(約3.2m)×1間(約2.5m)の坪掘の建物である。柱穴間の距離は東列(P₁~P₃)が、約1.6m・約1.6m、西列(P₄~P₆)が約1.7m・約1.5m、北列(P₁~P₆)が約2.6m・南列(P₃~P₄)が約2.5mを測る。柱穴の平面形は不整円形を呈する。覆土は6層に分けられ、P₅の4・5層には炭化物が微量混入している。

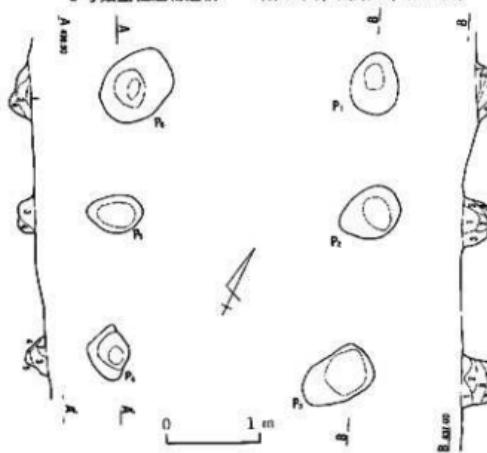
遺物はP₅覆土中から、弥生時代後期に属する土器片2点1・2が出土している。

(吉岡 弘樹)

第56表 1号掘立柱建物遺構柱穴規模

P ₁	53×48 40	P ₄	55×46 15
P ₂	53×49 34	P ₅	84×62 29
P ₃	55×55 32	P ₆	74×60 25

2号掘立柱建物遺構 (第97図、図版13、第58表)

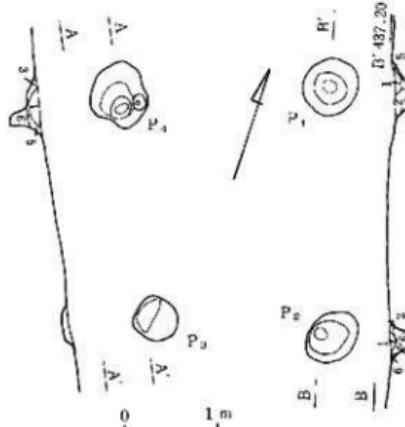


第1層：暗茶褐色土層（粘性質地くしよりはやや強い。ローム粒子、黑褐色粒子を少量含む。）
第2層：暗褐色土層（粘性質地くしよりも普通、ローム粒子を少量含む。）
第3層：暗褐色土層（粘性質地くしよりも普通、ローム粒子、黑褐色粒子を少量含む。）

第97図 2号掘立柱建物遺構(%)

第58表 2号掘立柱建物遺構柱穴規模

P ₁	65×49	23	P ₄	59×44	22
P ₂	65×52	33	P ₅	58×40	18
P ₃	76×53	33	P ₆	86×64	22



第98図 3号掘立柱建物遺構(%)

斜面中央部の10-L区に位置し、集落の南東端にあたる。北7 mに1・2号住居址が存在し、東6 mには4号住居址が近接する。南側には本遺跡と主軸をほぼ同一に3号掘立柱建物遺構が並ぶ。

主軸方位をN-19°-Wにとり等高線にはば平行する。規模は2間（約3.1 m）×1間（約2.5 m）の坪庭の建物である。柱穴間の距離は、東列（P₁～P₃）が約1.4 m・1.7 m、西列（P₄～P₆）が約1.4 m・約1.5 m、北列（P₁～P₆）が約2.5 m、南列（P₃～P₄）が約2.4 mを測る。柱穴の平面形は、不整円形を呈し、西列側は斜面下部に位置する為削平が進んでいる。

覆土は6層に分けられる。

遺物は出土していない。(吉岡 弘樹)

3号掘立柱建物遺構

(第98図 図版13、第59表)

斜面中央部の10-L、11-L区に位置し、集落のほぼ南東端にあたる。北東6 mに1号掘立柱建物遺構が、北西2 mには4号住居址が南西4 mには5号住居址が存在する。北には本遺跡と主軸をほぼ同一にして2号掘立柱建物遺構が並んでいる。

主軸方位をN-18°-Wにとり、等高線に

- 第1層：暗茶褐色土層（粘性質地くしよりはやや強め。ローム粒子、黑褐色粒子を少含む。）
第2層：暗褐色土層（粘性質地くしよりも普通、ローム粒子を少含む。）
第3層：暗褐色土層（粘性質地くしよりも普通、ローム粒子を少含む。）
第4層：暗褐色土層（粘性質地くしよりも普通、ローム粒子を少含む。）
第5層：暗茶褐色土層（粘性質地くしよりも普通、ローム粒子を少含む。）
第6層：暗褐色土層（粘性質地くしよりも普通、ローム粒子を少含む。）
第7層：暗褐色土層（粘性質地くしよりも普通、ローム粒子を少含む。）
第8層：暗褐色土層（粘性質地くしよりも普通、ローム粒子を少含む。）
第9層：暗褐色土層（粘性質地くしよりも普通、ローム粒子を少含む。）
第10層：暗褐色土層（粘性質地くしよりも普通、ローム粒子を少含む。）
第11層：暗褐色土層（粘性質地くしよりも普通、ローム粒子を少含む。）
第12層：暗褐色土層（粘性質地くしよりも普通、ローム粒子を少含む。）
第13層：暗褐色土層（粘性質地くしよりも普通、ローム粒子を少含む。）
第14層：暗褐色土層（粘性質地くしよりも普通、ローム粒子を少含む。）
第15層：暗褐色土層（粘性質地くしよりも普通、ローム粒子を少含む。）
第16層：暗褐色土層（粘性質地くしよりも普通、ローム粒子を少含む。）
第17層：暗褐色土層（粘性質地くしよりも普通、ローム粒子を少含む。）
第18層：暗褐色土層（粘性質地くしよりも普通、ローム粒子を少含む。）
第19層：暗褐色土層（粘性質地くしよりも普通、ローム粒子を少含む。）
第20層：暗褐色土層（粘性質地くしよりも普通、ローム粒子を少含む。）

ほぼ平行する。規模は1間(約2.6m)×1間(約2.2m)の坪塀の建物である。1間×1間の建物である為、主軸方位をN-79°-Eにとる可能性も考えたが、北に連なる2号獨立柱建物遺構との関係から、N-11°-Wを主軸方位とした。柱穴間の距離は東列(P₁～P₂)が約2.6m、南列(P₂～P₃)が約1.9m、西列(P₃～P₄)が約2.3m、北列(P₄～P₁)が約2.2mを測る。柱穴の平面形は不整円形を呈する。尚P₃は、位置・形状から本遺構に所属するものであるか否か疑問が残るものである。覆土は6層に分けられる。

遺物は出土していない。

(吉岡 弘樹)

第59表 3号獨立柱建物遺構柱穴規格

P ₁	60×57 32	P ₃	47×45 8
P ₂	60×45 23	P ₄	70×60 26

4号獨立柱建物遺構

(第99図、図版13、第60表)

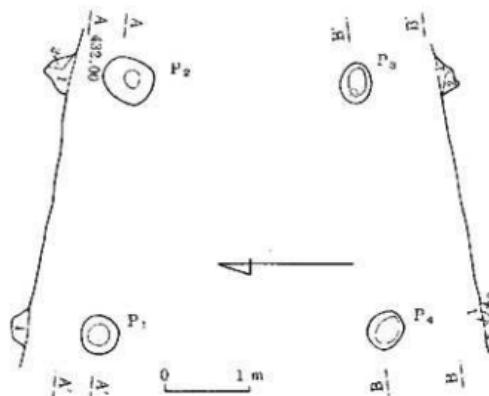
斜面中央の緩斜面部、3-L・4-L区に位置する。西3mに6号住居址と接し、南20mに7・8号住居址が存在する。

主軸方位を、N-1°-E、またはN-89°-Wにとる1間(約2.7m)×1間(約2.7m)の坪塀の建物である。柱穴間の距離は東列(P₂～P₃)が約2.35m、西列(P₄～P₁)が約3m、南列(P₃～P₄)及び北列(P₁～P₂)が約2.7mを測り、平面鉢形を呈する。柱穴はほぼ楕円形を呈し、南列側は削平が進んでいる。

覆土は2層に分けられる。

遺物は出土していない。

(吉岡 弘樹)



第1写真：黒褐色土層（軟化層く、しまりは普通、ロームブロックを少量含む。）
第2写真：黒褐色土層（軟化層く、しまりは普通、黒褐色砂子を含む。）

第99図 4号獨立柱建物遺構(元)

第60表 4号獨立柱建物遺構柱穴規格

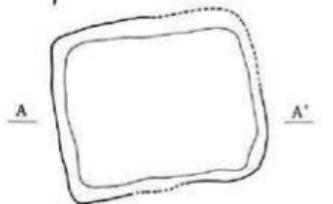
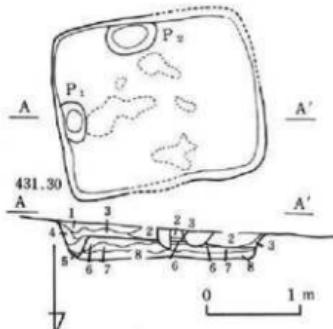
P ₁	42×40	18	P ₃	43×33	20
P ₂	55×48	30	P ₄	42×36	13

3 小堅穴遺構

1号小堅穴遺構 (第100図、図版13)

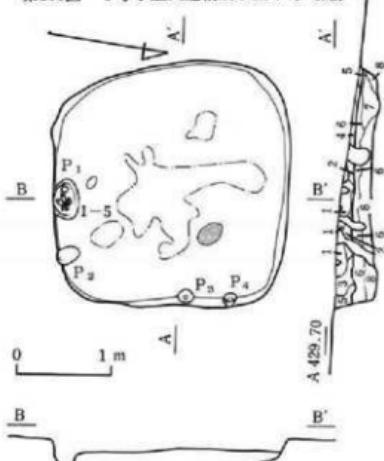
斜面中央、緩斜面部の3-N区に位置する。東1mに9号住居址が南北軸を直交させて並ぶ。南12mには13号住居址が、南西15mには12号住居址が存在する。

長軸方位をN-81°-Eにとる。平面形は長方形を呈し、規模は2.1×1.8mを測る。掘り込み



- 第1層：褐色土層（粘性強く、し
まりは弱い。ロームブロック
や、黒褐色粒子を含む。）
第2層：暗褐色土層（粘性強く、
しまりも弱い。）ロームブ
ロックや、砂質を含む。
第3層：褐色土層（粘性強く、
しまりも弱い。ローム粒、
黒褐色粒子を多量に含む。）
第4層：暗褐色土層（粘性強く、
しまりは弱い。粘土は軟
らかで、黒褐色粒子を含む。）
第5層：褐褐色土層（粘性中強
く、しまりもやや弱い。）
- 第6層：褐色土層（粘性やや弱
く、しまりは強い。ロームブ
ロック、黒褐色粒子を含
む。）一結体化。
第7層：暗褐色土層（粘性やや弱
く、しまりは強い。黒褐
色粒子を多量に、ローム
粒を含む。）
第8層：暗褐色土層（粘性強く、
しまりも弱い。ローム粒、
黒褐色粒子を多量に含
む。）

第100図 1号小竪穴遺構及び掘り方(%)



第101図 2号小竪穴遺構(%)

はローム層まで達し壁高は30~8cmを測り南西隅は削平を受ける。壁は急角度で立ち上がる。覆土は5層に分けられ自然堆積を示す。床面は堅緻な貼り床(6層)では平坦であるが西半部では遺存が悪く軟弱である。ピットは2ヶ所検出され、P₁は45×25cm、深さ21cm、P₂は50×30、深さ18cmを測り共に壁際に設けられる。

炉・柱穴・周溝等は検出されなかった。遺構中央部から東半部にかけ、床面上から焼土が検出されたが、堅穴全面に散っていた可能性が強い。

掘方は床下全面に及び鍋底状に掘り込まれ、床面からは10~20cmを測る。埋土は2層に分けられ、7層は貼り床(6層)とほぼ同様である。

出土遺物は、僅かで図示したものはない。

本址からは、確実な炉址は検出できなかつたが、床

面の状態焼土の存在などから、何らかの居住空間としまりは強い。ロームブロックや、黒褐色粒子を含む。）一結体化して用いられた可能性が強い。また、軸方位を直交させて近接する9号住居との関係も興味深い。

(山崎 和也)

2号小竪穴遺構 (第101~104図)

第61表、図版13)

斜面中央、緩斜面部の1~0区に位置し、集落のほぼ北西端にあたる南東4mに11号住居場が存在し、本址以北には、若干の土壤・ピットが存在するにすぎない。

主軸方位をN-82°-E、あるいはN-8°-Wにとる。平面形は隅丸方形を呈し、規模は2.5×2.5mを測り、南西隅がやや入り込む。

第1層：暗褐色土層（粘性や
く、しまりは弱い。
黒褐色粒子、ローム粒
を多量に含み、炭化物
を含む。）

第2層：暗褐色土層（粘性や
く、しまりは弱い。
黒褐色粒子を多量に
含む。）

第3層：暗褐色土層（粘性や
く、しまりもや
や弱い。
黒褐色粒子、ロ
ーム粒を少量含む。）

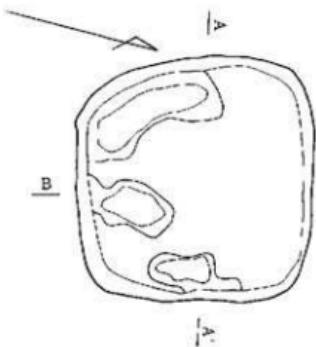
第4層：暗褐色土層（粘性や
く、しまりもや
や弱い。
黒褐色粒子を
少量含む。）

第5層：暗褐色土層（粘性
やや強く、しま
りはやや弱
く。
ローム粒を少
量含む。）

第6層：暗褐色土層（粘性
なく、しまりは弱
い。
ローム粒を多量に
含む。）

第7層：暗褐色土層（粘性
なく、しまりは弱
い。
ローム粒を多量に
含む。）

第8層：炭化土層（粘性
やや弱く、しま
りはやや弱
い。
黒褐色粒子を無
含む。）



掘り込みはローム層まで達し、壁高は30~5cmを測り
西壁は特に削平が著しい。壁は急角度に湾曲しつつ立
ち上がる。覆土は5層に分けられ、自然堆積を示すが、
或あるいは植物根の擾乱が激しい。

B'—
床面は中央部がやや高く構築され、中央部に堅緻な
部位が認められる。ピットは4ヶ所検出され全て壁際
に認められる。P1は貯蔵穴で45×35cm、深さは18cmを
測り、南壁中央際に穿たれる。柱穴・周溝は認められ
なかった。

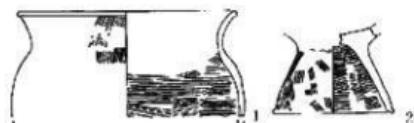
炉は中央部北西寄りに位置し、30×20cmの平面構内

第102図 2号小堅穴遺構掘り方(%) 形を呈する。深さ8cmの皿状断面を有し、覆土は1層で
良好な焼土ブロックである。

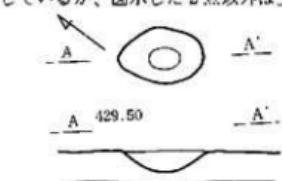
掘り方は深さ20~25cmで、ほぼ平坦であるが東半部壁沿いに3ヶ所土壤状に一段掘りこまれた
部位が認められる。埋土は3層に分けられ、6層は所謂階床である。

遺物は1が貯蔵穴内から、2が南西隅から集中して出土しているが、図示した2点以外は全て
小片である。

(山崎 和也)



第104図 2号小堅穴遺構出土土器(%)



第103図 2号小堅穴遺構炉址(%)

第61表 2号小堅穴遺構出土土器観察表

1	台付瓶	法量：口縁部径15.8cm 脊部径13.4cm 洞部径16.6cm 現存率：胴部～口縁% 調 整：外縁～唇部ナヂ。口縁部ハケのちナヂ、腰～脛部ハケ・内面一口縁～頸ハケのちナ ヂ 脇部 粗いハケ。胎土 密 焼成 良 色調 咸褐色土。
		法量：接合部径4.9cm 底部8.7cm 脚高4.6cm 現存率：脚ほぼ完 調整：外縁 接合部僅かにオサエ。脚部ハケ。内面一粗いハケ。胎土 密 焼成 良 色調 咸茶褐色土。
2	台付瓶	

第2節 集石遺構と土壙

1 集石遺構

1号集石（第106図・図版14）

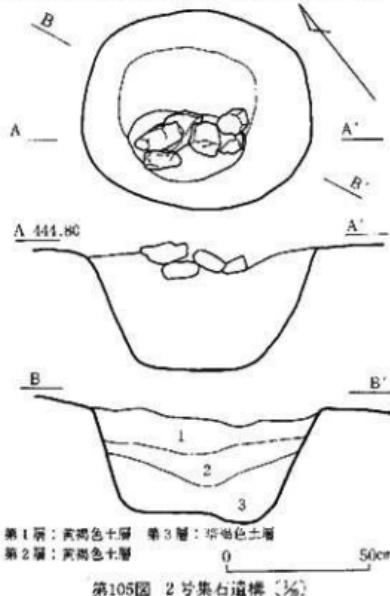
斜面上部の平坦面23-G区に位置する。東西約11m、南北約6mの広い範囲に礫が分布する。礫は全體で約77個を数え、5~15cm程の角礫で構成される。礫中には、火熱をうけたものもあった。礫の分布する範囲からは上塙I・II・IIIが検出されている。丘の頂上部に位置するため、土砂が流失しており、また後世に削平をうけており、遺構の遺存状態は不良であった。

上塙Iは平面橢円形を呈し、規模55×45cm、深さ13cmを測る。断面形は皿状を呈する。覆土は2層に分かれる。礫1点が上塙西側上表部より出土している。

土塙IIは5~6基の土塙の切り合いと思われるが、発掘時に充分にその状態を把握できなかつた。覆土中より礫が数点出土している。

土塙IIIは、平面ほぼ橢円形を呈し、規模52×40cm、深さ23cmを測る。覆土は1層。

遺物について。礫の分布する範囲から、縄文時代早期押型文土器片が数点、他に時期不詳の縄文土器片、および黒曜石が3点出土している。



第105図 2号集石遺構 [16]

2号集石（第105図・図版14）

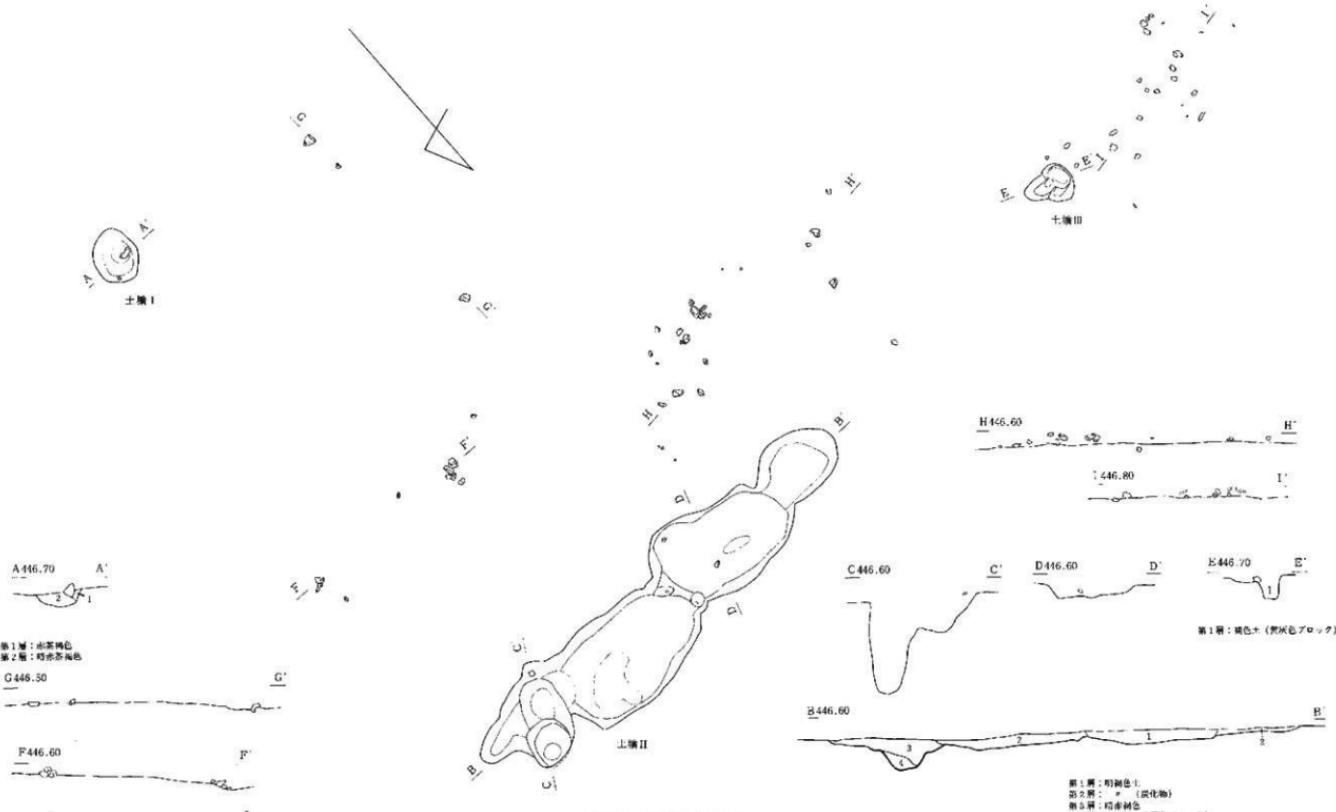
斜面上部の平坦面16-G区に位置する。集石土壙である。礫は土壙の覆土上表部に集中する。礫の数は6個でありすべて火熱をうけている。

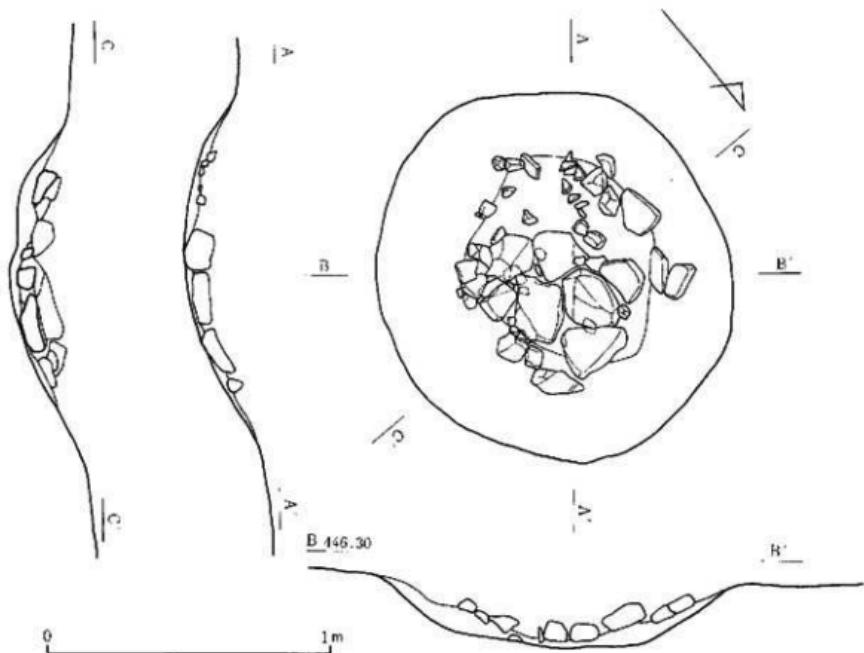
土壙の平面は円形を呈し、規模80×70cm、深さ43cmを測る。壙底はほぼ平坦であり、壁はゆるやかに外開したちあがる。覆土は3層に分かれれる。

遺物は出土していない。

3号集石（第107図・図版14）

斜面上部の平坦面20-H区に位置する。集石土壙である。土壙の平面はほぼ円形を呈し、規模127×126cm、深さ24cmを測る。断面形は皿状を呈する。





第107図 3号集石遺構 (X)

礫は46個を数える。人拳大の礫が多く、また大きなものは20cm強のものもみられる。礫は、土壌底面近くに集中する。また、そのほとんどが火熱を受けている。

遺物は出土していない。

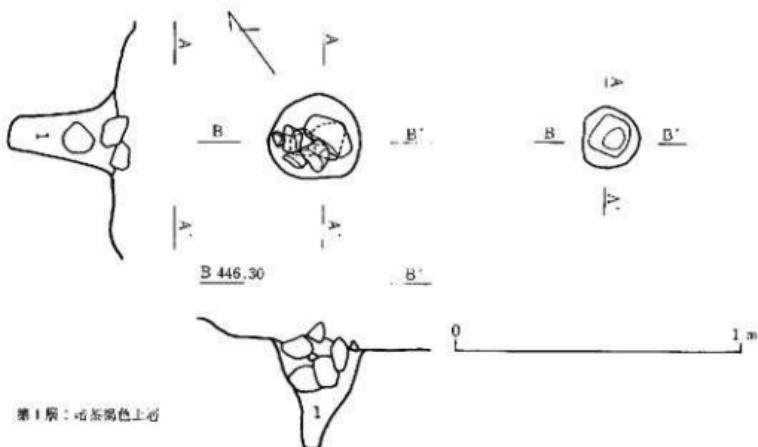
4号集石 (第108図、図版15)

斜面上部の平坦面17-H区に位置する。集石土壌である。礫は土壌上表面より覆土中位に存在し7個を数え、5~20cmの角礫で構成される。礫はすべて火熱をうけている。土壌はほぼ円形を呈し、断面はロート状である。規模は32×30cm、深さ37cmを測る。覆土は1層で、炭化物を少量混入する。

遺物は出土していない。

5号集石 (第109図、図版15)

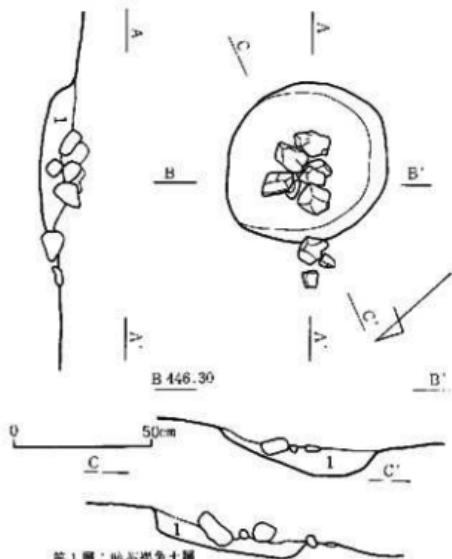
斜面上部の平坦面21-II区に位置する。集石土壌である。礫は10個を数え、10~15cm程の角礫で構成される。すべての礫が火熱をうけている。また礫は、土壌底面より少し浮いて集中する。



第108図 4号集石遺構 (4)

上層は、平面円形を呈し、断面は皿状を呈する。規模 $62 \times 54\text{cm}$ 、深さ 14cm を測る。覆土は1層で炭化物を少量混入する。

遺物は出土していない。



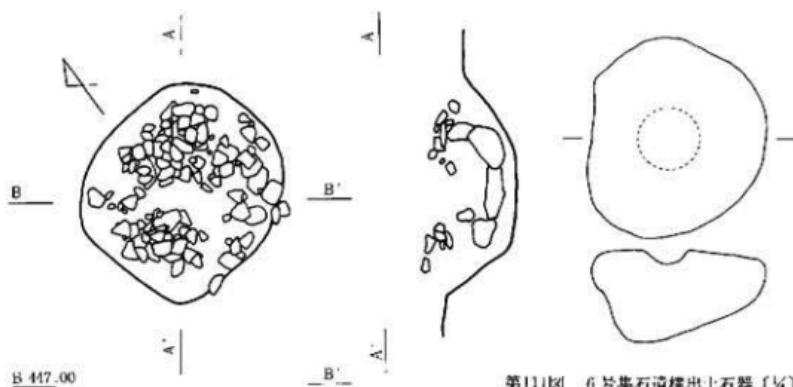
第109図 5号集石遺構 (5)

6号集石 (第110・111図、図版15)

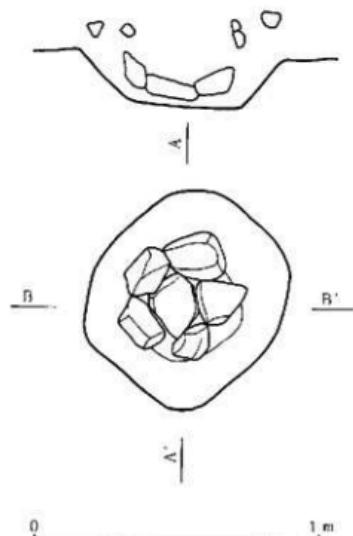
斜面上部の平近面18-J区に位置する。集石上層である。礫は127個を数える。土壇上表部と下部との2ヶ所に礫の集中がみられた。上表部の礫は、5~10cm程の角礫である。下部は20cm前後の角礫6個よりなり、組まれた状態であった。礫の大半が火熱をうけている。

土壇は、平面には円形を呈し、断面は鏡底状を呈する。規模は $78 \times 70\text{cm}$ 、深さ 25cm を測る。壇底は平坦である。覆土は1層で、炭化物を少量混入する。

遺物は、凹み石が1点覆土中位より出土している。



第111図 6号集石遺構出土石器〔弓〕

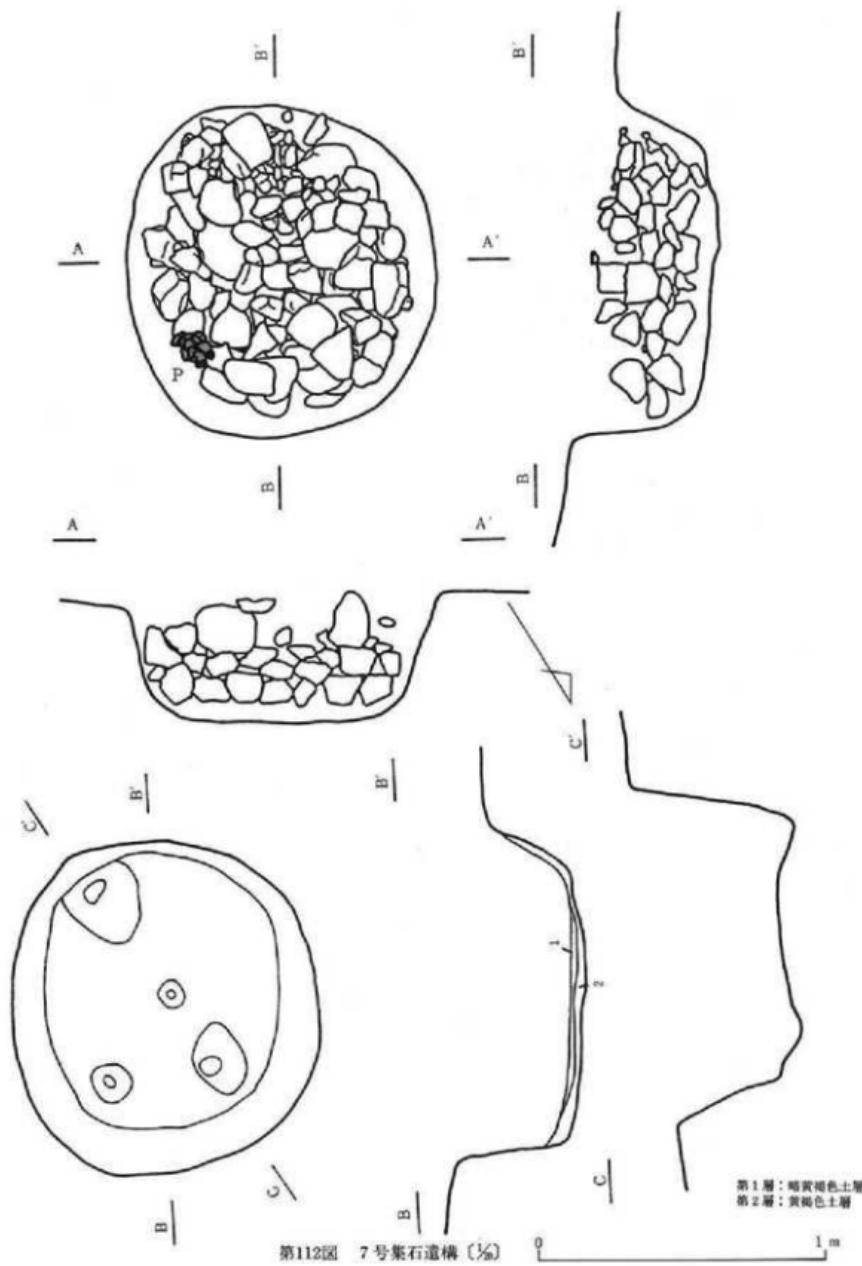


第110図 6号集石遺構〔弓〕

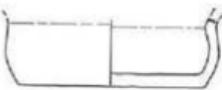
7号集石 (第112、113図・図版16)

斜面上部の平坦面13-J区に位置する。集石上塙である。塙は土壌内にぎっしりつまつた状態で検出された。塙は約230個を数え、5~20cm程の角礫で構成される。そのほとんどが火熱をうけていた。

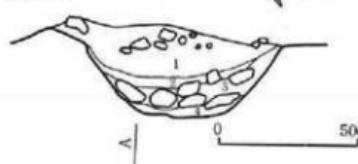
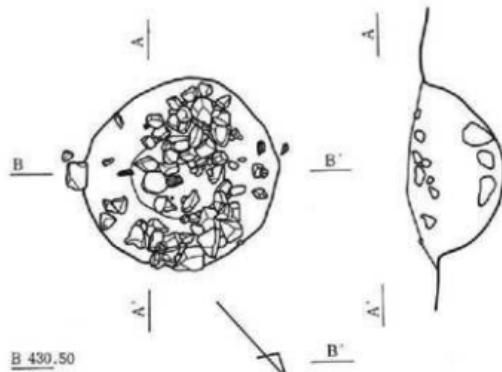
上塙は平面は円形、断面は鍋底状を呈する。規模116×108cm、深さ47cmを測る。塙底には浅い凹みが4つある。塙下の覆土はローム質土であり、2層に分かれる。ともに炭化物の混入がみられる。また、第一層では焼上も観察されている。



遺物は、土壤の北東部より、縄文土器の底部（中期後半以降のものと推定されるが詳細な帰属時期は不明）を出土している。



第113図 7号集石遺構出土土器〔右〕



8号集石（第114図、図版16）

斜面下部1-L区に位置する。集石土壤である。礫は131個を数え、土壤上表部と下部の二ヶ所に集中する。上表部で検出された礫は4~10cm程で下部の礫よりも比較的小さい。下部の礫は10~18cmの角礫が19個使用されており、壙底より4cm程浮いて組まれる形であった。礫はほとんどが火熱をうけている。

土壤は、平面は円形、断面はスリ鉢状を呈する。規模は、70×67cm、深さ28cmを測る。覆土は4層に分かれ、各層とも炭化物が混入している。特に上層からは炭化材片も検出されている。

遺物は出土していない。

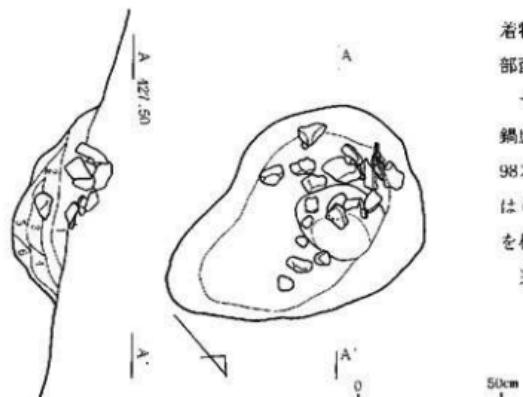


9号集石（第115図、図版17）

斜面下部12-S区に位置する。集石土壤である。礫は22個数え7~20cm程の大きさである。すべての礫が火熱をうけており、うち6個にはスス状の付

第1層：黒色土層 第3層：暗茶褐色土層
第2層：黒色土層 第4層：黄褐色土層

第114図 8号集石遺構〔左〕



第1層：暗茶褐色土層 第4層：暗黃茶褐色土層
第2層：暗黃茶褐色土層 第5層：黃褐色土層
第3層：暗茶褐色土層 第6層：暗黃褐色土層

第115図 9号集石遺構 (3)

集石遺構・まとめ

今回の調査で発見された集石遺構は以上の中の9基である。9基の遺構のうち8基がいわゆる集石土壙であった。これらの集石遺構は、礫と土壙との関係から、以下のとおり類別が可能であった。

I類 土壙内覆土の一部に礫が集中して存在するもの。礫のありようからさらにa～c種に細分可能である。

a種 磚が覆土上表部に集中するもの……2・9号集石遺構

b種 磚が覆土上表部から中位に及ぶもの……4号集石遺構

c種 磚が覆上下部に集中するもの……5号集石遺構

II類 土壙内全体に礫が密につまっているもの……7号集石遺構

III類 土壙内覆土上表部と底面との二ヶ所に礫が集中し、底面の礫が組まれているもの……3・6・8号集石遺構

IV類 磚が広い範囲に分布し、近接して数基の土壙を伴うもの……1号集石遺構

以上である。

集石土壙各類について、さらに礫と上塙との時間的関係をみていくと

I a：本類では、土壙内覆土が自然堆積をなす。土壙の時期と、上表部の集石の時期とは時間差を有する。

I b：本類の上塙の覆土は一層であり、また礫は覆土中位にまで及ぶ。土壙の埋没と集石の時間は近接すると考えられる。

着物が認められた。礫は覆土上表部西壁よりに集中する。

土壙は、平面は橢円形、断面は鍋底に近い形状を呈する。規模は、98×70cm、深さ30cmを測る。覆土は6層に分かれ、中位から炭化材を検出した。

遺物は出土していない。

I c：本類では上蓋の壇底近くに砾が集中する。土壇の掘り込みと集石の時間は近接すると考えられる。

II類 本類は土壤内に密に砾がつまつておらず、上蓋と集石とは同時と考えられる。

III類 壇底に配された石組みと土壤の掘り込みとは同時性が認められる。一方、掘り込みと上表面の集石とは近接した時間の可能性が指摘される。

IV類 本類に類別した1号集石遺構については、砾と土壤との関係は不明である。となる。ここから、砾と土壤との関係は、

- ① 同時または近接するもの……I b類、I c類、II類、III類
- ② 時間差を有するもの……I a類
- ③ 不明……IV類

とすることが可能である。

砾と土壤の時間差を考えることは、相互の有機的関連を述べることになる。したがって今回の調査では、砾と土壤とが有機的連関を持つもの（①のグループ）、不明瞭のもの（②としたI a類）とか、本遺跡でみられたこととなる。

このうち、②（I a類）については、土壤埋没過程に砾が廃棄された可能性を指摘することができよう。一方、①のグループは、それぞれ性格を異にしながら、集石土壇として何らかの機能を有したと考えられる。

さて、從来から集石遺構については、食物病理施設、埋葬・祭祀施設、上器焼成施設、砾廃棄の場などの機能が想定され、論議されてきた。しかしながら今回の調査では、集石の機能を具体的に示す資料は発見されなかった。集石の機能に触れた論考には、近年のものでは、（上田、1983）、（杉山、1981）などがある。ここではそれらをもとに本遺跡発見の集石の機能を整理しておく。

上田氏によれば、「掘り込みの底部に石が配されているもの」（本遺跡例ではIII類）を、「石蒸料理の行われる地炉に非常に類似している」として、調理施設の可能性を指摘している（上田、1983）。

また、「土壤内に砾が密につまっているもの」（本遺跡例ではII類）についても、上田氏は、野外炉としての機能を想定している。一方、杉山氏も、この種の集石（東川原1号集石、愛名島山1号集石などを例示）については、「焼石炉」としてとらえている（杉山、1981）。

いずれにせよ、本遺跡のII・III類は、何らかの「火を介在する機能」を有する遺構とができる。これらII・III類の集石の砾は火熱をうけている。同様に火熱をうけた砾が壇底に集中するI c類の集石遺構についても、やはり「火を介在する機能」を有する遺構とができる。

次に、覆土上表面～中位にかけて砾のみられるI b類について触れる。この種の土壤を杉山氏は、「掘り込みは採られた直後に埋め戻され、その埋め戻した土の上に集石が行われた」と理解し、野外炉とは別の機能を考えようとしている。上田氏も、同様の観点から、「埋納施設、あるいは埋葬施設としての機能を有していた可能性が強い」と考えている。本遺跡I b類も、野外炉

と想定したⅠc・Ⅱ・Ⅲ類とは形態を異にしており、野外炉以外の機能を想定せざるを得ない。とはいって、埋納・埋葬等の行為を積極的に裏づける資料に欠けることも、また、事実である。

次に各集石の配置についてみていいく。丘頂部の平坦面、やや東に寄った区域には、Ⅳ類とした1号集石遺構が位置する。この遺構は、広い範囲に礫がみられること、近隣のグリッドより石棒が発見されていることなどが注目される。1号集石遺構および石棒の占地する空間が、何らかの目的で使われたことは疑いない。しかしながら、遺構の性格は不明である。また、同集石と石棒との時間的関係、有機的連関についても明らかにしえなかつた。

1号集石遺構以外は、西向きの斜面上に点在する。2号～7号集石遺構が斜面上部に、8号、9号集石遺構が、斜面下部に位置する。各遺構の分布からは、特定の傾向は見出せなかつた。

しかし、六科丘遺跡の中における集石遺構のありかたは、別な視点から興味のもたられるものである。すなわち、今回調査した9基の集石遺構は、詳細な時期比定ではなかつたものの、おそらく縄文時代に帰属するものと考えられる。

今回の調査は、六科丘全域に及んだものである。調査の結果では、六科丘では縄文時代の居住遺構は皆無であった。また、一方で周辺地域の表面採集からは、丘の周縁部には集落が営まれた可能性を示唆する資料が収集されている。

こうしたことから、六科丘遺跡は縄文時代に限って言えば、生活空間と離れた性格をもつ遺跡であり、かつ、近隣に集落の存在が想定される遺跡であると言ふことができよう。

生活空間から離れて集石遺構が占地する例としては、本町田遺跡群D地点、柏ヶ谷遺跡などがあげられる。

本町田遺跡群D地点の場合は、本遺跡1b類に似て、野外炉以外の機能を持つ遺構が集中する。一方、柏ヶ谷遺跡の場合は、集石は多種にわたり、本遺跡例に近いものである。

非日常空間に占地した集石は、埋納・埋葬施設と想定されるもののみがみられる本町田遺跡の例と、野外炉を合わせても柏ヶ谷遺跡の例とに大別されよう。これは、遺跡が、近隣に集落をひかえた地にあるか否かによるところから導かれた結果であるかもしれない。

大塚、北川両氏は、柏ヶ谷遺跡の調査を分析し、同遺跡の集石遺構について、「周辺に営まれた集落の共同の調理施設」、「狩猟の場の露営地」を想定している〔大塚、北川1982〕。六科丘遺跡の事例を、ただちに柏ヶ谷遺跡例に短絡させることはさけるべきであろうが、しかし、きわめて示唆に富むものと言えよう。

ただ、集石遺構の分析を通じ、上田氏は、前出の論稿の中で野外炉であれ、埋納施設であれ、各遺構の性格は非日常性を帯びており、祭祀的性格を有するものとしてとらえている。この点については注意しておく必要があろう。氏に従えば、たとえ、集落の共同の調理施設であれ、露営地であれ、そこにつくられた集石は、やはり単なる調理機能を越えた性格——祭祀的性格——を有していたと考えられるのである。

各集石出土遺物についてふれる。本遺跡で発見された各集石遺構のうち、1号集石遺構周辺よ

り、縄文時代早期押型文土器が数点検出されている。発見された上器と集石遺構との関係は不明である。しかし、同遺構内および周囲からは他時期の土器は発見されていない。また、7号集石遺構からは、縄文時代中期後半と推定される土器底部片が出土している。他の遺構からは、時期比定しうる遺物は出土していない。以上のことから、本遺跡の集石遺構については、厳密な時期比定は不可能であり、すでに述べたように、ひろく縄文時代に帰属するものと考えるにとどめた。

なお、III類に分類した底部に石を配する遺構は、県内では、豆塚遺跡1号集石に例を求めることができる。報告によれば、豆塚1号集石は、前期に帰属する可能性をうかがわせるものの、なほその時期は不明とのことである(長沢他・1984)。

(桑折 札子・近藤 実大)

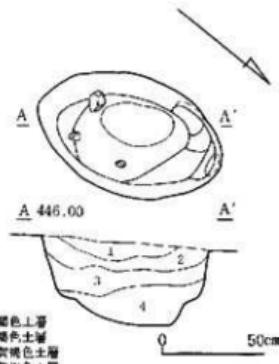
2 土 壤

1号土壌 (第116図)

斜面上部、21-EI区に位置する。平面形は壙口部・壙底ともに楕円形を呈する。規模は壙口部101×63cm、壙底38×22cm、深さ50cmを測る。壙底はほぼ平坦で、壁は段部をなし急傾斜でたちあがる。長軸方向はN-23°-Wをとる。

覆土は4層に分かれ、上位では炭化物が微量検出され、中位にローム質土が堆積し、自然石が3個検出された。

遺物は出土していない。



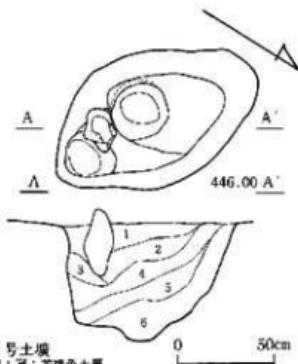
第116図 1号土壌 [分]

2号土壌 (第117図)

斜面上部、21-E区に位置する。平面形は壙口部が楕円形を呈するが2箇所のピットが掘り込まれわずかに平坦面を残すのみとなっている。規模は壙口部118×72cm、壙底90×49cm、深さ平底面まで60cmを測る。壁は急傾斜でたちあがる。長軸方向はN-74°-Wをとる。壙底のピットは東壁下では(25×25cm、深さ7cm)と浅く、西壁下では(35×30cm、深さ40cm)と深く南側で若干オーバーハングする。

覆土は6層に分かれ、上位で炭化物が微量検出された。覆土中位から上位にかけて自然石が1個樹立状態で出土したが、人為的なものかどうか断定はできない。

遺物は出土していない。



2号土壌
第1層：黄褐色土層
第2層：暗褐色土層
第3層：暗褐色土層
第4層：暗褐色土層
第5層：暗褐色土層
第6層：暗褐色土層
第117図 2号土壌 [分]

3号土壤 (第118図)

斜面上部、22-E・F区に位置する。平面形は塘口部・塘底ともに不整円形を呈する。規模は塘口部194×100cm、塘底150×85cm、深さ50cmを測る。塘底は平坦で、壁は南北は急傾斜でたちあがり、東西はほぼ垂直にたちあがる。長軸方向はN-25°-Eをとる。

覆土は5層に分かれ、上位で炭化物が微量検出され、塘底にはローム質土が堆積していた。遺物は出土していない。

4号土壤 (第119図)

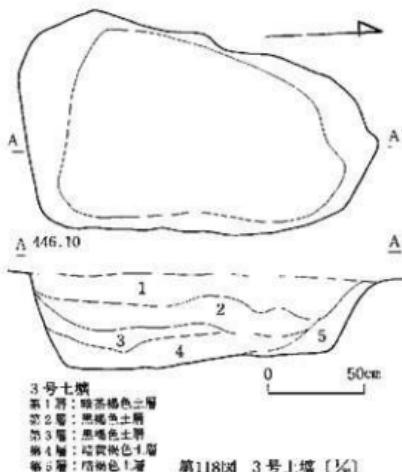
斜面上部、21-E区に位置する。平面形は塘口部がやや不整な楕円形、塘底は楕円形を呈する。規模は塘口部104×74cm、塘底20×7cm、深さ67cmを測る。塘底は中央が凹み、壁は南側では緩傾斜でたちあがり小テラスを有したのちはば垂直にたちあがり、北側は急傾斜でたちあがり緩傾斜を呈したのち中位からやや外反する。西側では中位で2ヶ所オーバーハングする。長軸方位はN-29°-Eをとる。

覆土は6層に分かれ、覆土上位から炭化物が微量検出され、中位から塘底にかけてローム質土が厚く堆積していた。

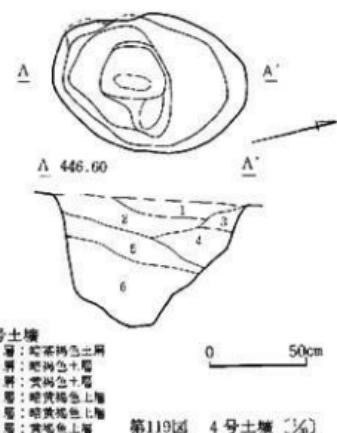
遺物は出土していない。

5号土壤 (第120図、図版19)

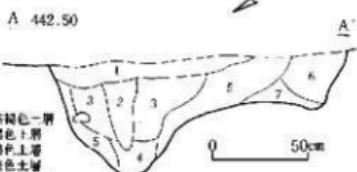
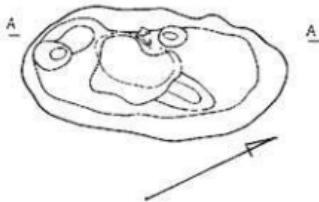
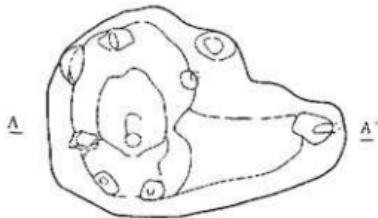
斜面上部、16・17-C・D区に位置する。平面形は西側に大きく張り出しが、断面観察より別の小穴との切り合いと考えられ塘口部は不整円形を呈するものと思われる。規模は塘口部(130)×112cm、塘底47×37cm、深さ75cmを測る。塘底は凹凸が激しく、壁は小テラスを有したのちはば垂直にたちあがる。壁の中位に接して、深さ10cm程の不整形の小ビットが4個存在した。



第118図 3号土壤 (3)



第119図 4号土壤 (3)



第120図 5号土壠(%)



第121図 6号土壠(%)

覆土は4層に分かれ、中位より自然石が2個検出された。

遺物は出土していない。

6号土壠(第121図、図版19)

斜面上部、21-D区に位置する。平面形は壙口部・壙底ともにやや不整な楕円形を呈する。規模は壙口部140×67cm、壙底118×44cm、深さ35cmを測る。壙底は凹凸が激しく、壁は急傾斜でたちあがる。長軸方向はN-41°-Eをとる。壙底には中央に1個、北壁と西壁下に1個ずつ計3個のピットを有する。中央ピット(40×25cm、深さ28cm)は不整形を呈し、北側で若干オーバーハングする。北壁下ピット(15×10cm、深さ10cm)と西壁下ピット(20×15cm、深さ10cm)は両者とも円形を呈する。

覆土は9層に分かれ、中央ピット内とピット上にローム質土が堆積していた。中位からは自然石が1個検出された。

遺物は出土していない。

7号土壠(第122図)

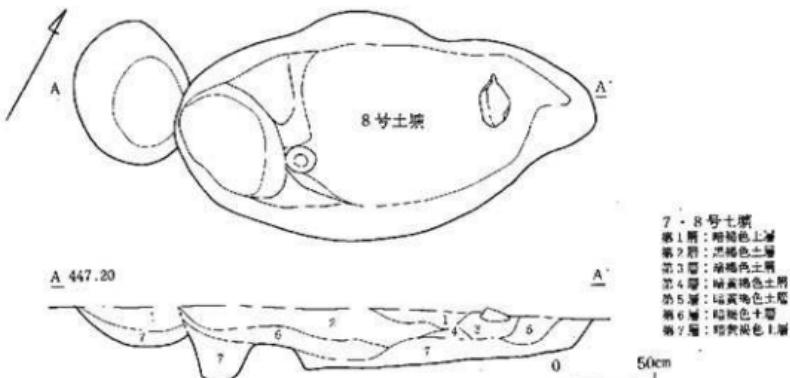
斜面上部、17-G区に位置する。東側を8号土壠に切られる。平面形は壙口部、壙底ともには円形を呈する。規模は壙口部77×62cm、壙底48×(35)cm、深さ20cmを測る。壙底は平坦で、壁はゆるやかにたちあがる。

覆土は2層に分かれる。

遺物は出土していない。

8号土壙 (第122図)

斜面上部、17-G区に位置する。西側で7号土壙を切っている。平面形は壙口部が不整円形を呈する。壙底は7号と切り合う一帯でさらに一段低く掘り込まれており、別の土壙との重複の可能性があるが、断面観察では判然としなかった。その他の部分は平坦で不整円形を呈する。



第122図 7号・8号土壙 (分)

規模は壙口部222×122cm、壙底187×87cm、深さは平坦面までで30cmを測る。壁は全体に急傾斜でたちあがる。長軸方向はN-50° Eをとる。

覆土は7層に分かれ、壁際から壙底にかけてローム質土が堆積していた。上位で自然石が1個検出された。

遺物は出土していない。

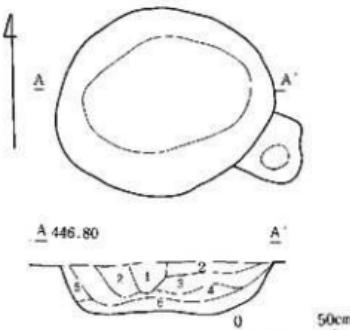
9号土壙 (第123図)

斜面上部、17-G区に位置する。東側で小ピットを切る。平面形は壙口部・壙底ともに楕円形を呈する。規模は壙口部115×92cm、壙底85×58cm、深さ27cmを測る。壙底は中央がわずかに高く、壁は緩傾斜でたちあがる。長軸方向はN-72° Wをとる。

覆土は6層に分かれ、壁際から壙底にかけてローム質土が堆積していた。

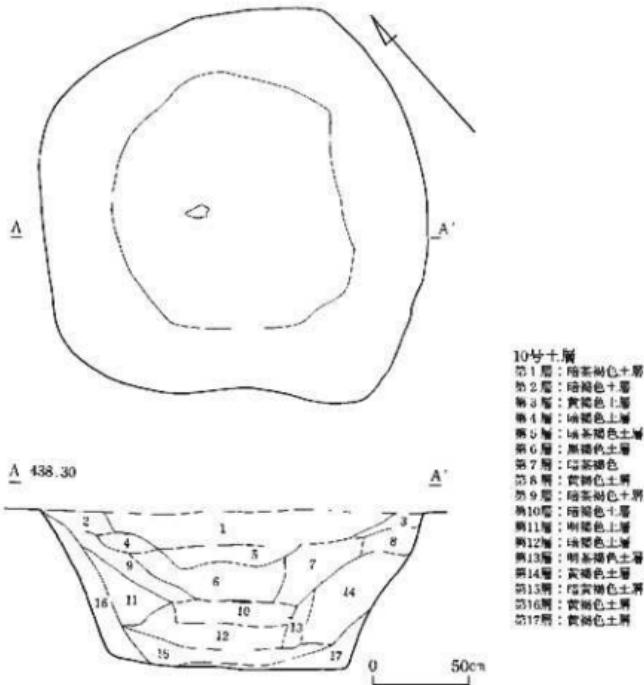
遺物は出土していない。

- 7・8号土壙
 第1層：暗褐色土層
 第2層：暗褐色土層
 第3層：暗褐色土層
 第4層：暗褐色土層
 第5層：暗褐色土層
 第6層：暗褐色土層
 第7層：暗褐色土層



第123図 9号土壙 (分)

- 9号土壙
 第1層：暗褐色土層
 第2層：暗褐色土層
 第3層：暗褐色土層
 第4層：暗褐色土層
 第5層：暗褐色土層
 第6層：暗褐色土層



10号土壤 (第124図、図版20)

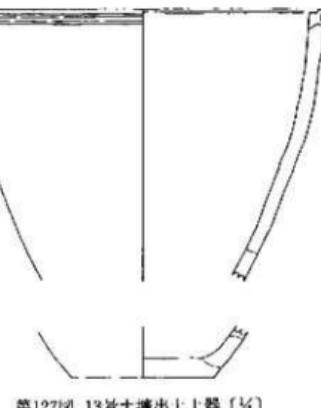
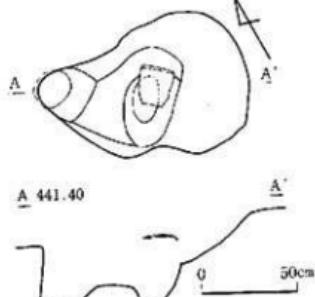
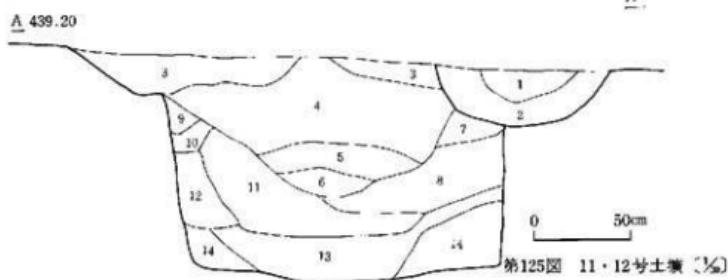
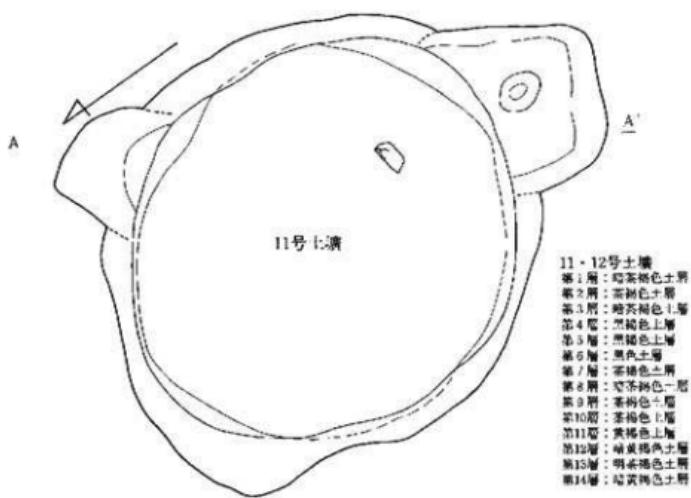
斜面中部、9・10-J区に位置する。平面形は壙口部・壙底とともにやや不整な円形を呈する。規模は壙口部223×210cm、壙底140×120cm、深さ85cmを測る。壙底は平坦で、壁は急傾斜でたちあがり、中位からさらに外反する。

覆土は17層に分かれ、壁際から壙底にかけてローム質土が厚く堆積していた。壙底直上より自然石が1個検出された。

遺物は出土していない。

11号土壤 (第125図)

斜面中部、11-J・K区に位置する。南側を12号土壤に切られている。また東側の1部に張り出しを持ち別の上壙との重複の可能性も考えられるが断面観察では判然としなかった。平面形は壙口部255×224cm、壙底208×188cm、深さ130cmを測る。壙底は平坦で、壁はほぼ垂直にたちあがる。



覆土は12層に分かれ、中位から塘底にかけてローム質土が厚く堆積していた。塘底直上より白石が1個検出された。

遺物は出土していない。

12号土壤 (第125図)

斜面中部、11-J・K区に位置する。北側で11号上塙を切って構築されていることが断面観察より確認された。平面形は塘口部・塘底ともに隣丸方形に近い形を呈すると思われる。規模は塘口部(100)×90cm、塘底70×70cm、深さ30cmを測る。塘底はほぼ平坦で壁は急傾斜でたちあがる。塘底中部に橢円形のピット(25×19cm、深さ20cm)を有する。

覆土は2層に分かれる。

遺物は出土していない。

13号土壤 (第126・127図)

斜面上部、17-L・M区に位置する。平面形は塘口部・塘底ともに不整橢円形を呈するが、塘底は2個のピットにより割り込まれわずかに平坦面を残すのみとなっている。規模は塘口部110×68cm、塘底73×32cm、深さ平坦面まで30cmを測る。壁は東側では緩傾斜でたちあがるが、その他は急傾斜を呈する。長軸方向はN-73°-Wをとる。東壁下ピット(40×25cm、深さ10cm)は橢円形を呈し、西壁下ピット(28×28cm、深さ10cm)は円形を呈する。

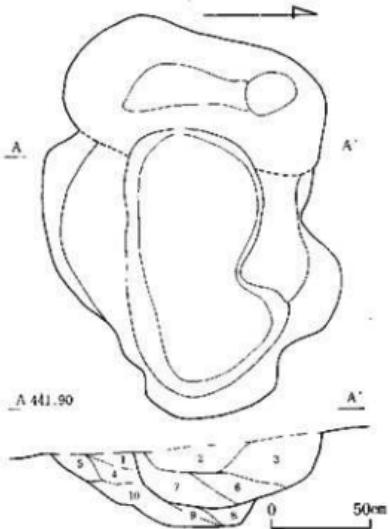
覆土上位より縄文時代後期後葉の無文土器口縁片が出土した。

14号土壤 (第128図)

斜面中部、17-L区に位置する。5号落ち込みを切って構築されていることが断面観察より確認された。平面形は塘口部・塘底ともにやや不整な橢円形を呈するものと思われる。規模は塘口部115×(77)cm、塘底90×20cm、深さ40cmを測る。塘底は北壁下で若干低くなる他ほぼ平坦で、壁は急傾斜でたちあがる。長軸方向はN-5°-Eをとる。

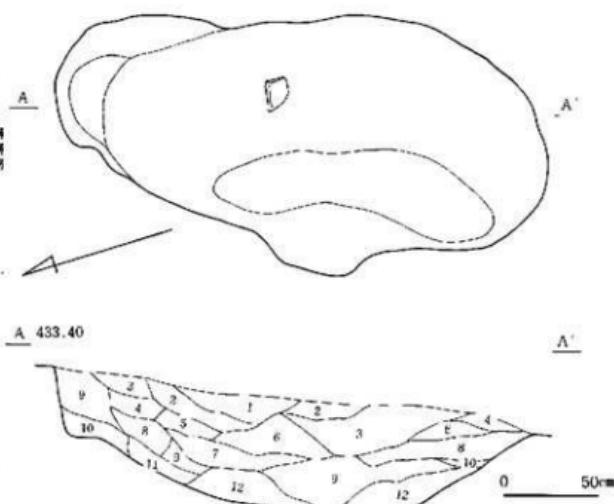
覆土は4層に分かれ上位で炭化物が少量検出され塘底にはローム質土が堆積していた。

遺物は出土していない。



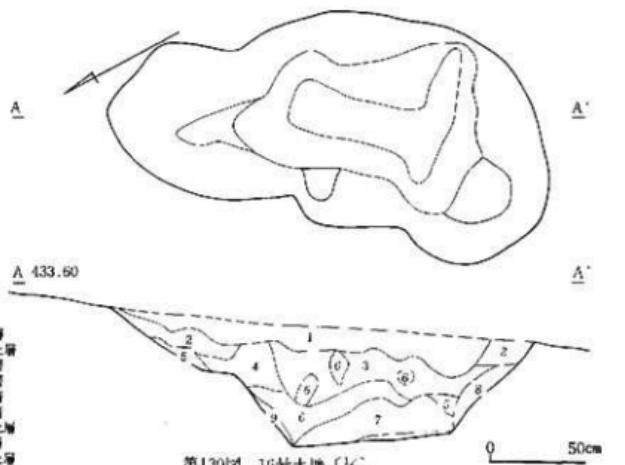
第128図 14号上塙及び5号不整形落ち込み (3)

14号土壠
 第1層：棕褐色土層
 第2層：棕褐色土層
 第3層：棕褐色土層
 第4層：棕褐色土層
 第5層：黃褐色土層
 第6層：棕褐色土層
 第7層：棕褐色土層
 第8層：棕褐色土層
 第9層：棕褐色土層
 第10層：棕褐色土層



第129図 14号土壠 (分)

15号土壠
 第1層：黑褐色土層
 第2層：黑褐色土層
 第3層：棕色土層
 第4層：黑褐色土層
 第5層：黑褐色土層
 第6層：褐色土層
 第7層：棕褐色土層
 第8層：棕褐色土層
 第9層：棕色土層
 第10層：黃褐色土層
 第11層：棕色土層
 第12層：黃褐色土層



第130図 15号土壠 (分)

16号土壠
 第1層：棕褐色土層
 第2層：棕褐色土層
 第3層：黑褐色土層
 第4層：棕褐色土層
 第5層：黃褐色土層
 第6層：棕褐色土層
 第7層：棕褐色土層
 第8層：黃褐色土層
 第9層：棕褐色土層

15号土壤 (第129図、図版20)

斜面中部、8-0区に位置する。平面形は壠口部・壠底ともに不整梢円形を呈する。規模は壠口部263×140cm、壠底145×32cm、深さ68cmを測る。壠底は平坦で、壁は南側の1部ではほぼ垂直にたちあがり、北壁ではおおむね緩傾斜を呈する。長軸方向はN-33°Eをとる。

覆土は12層に分かれ。上位から炭化物が少量検出され、壠際及び壠底付近にローム質土が堆積していた。中位から自然石が1個検出された。

遺物は出土していない。

16号土壤 (第130図)

斜面中部、10-0区に位置する。平面形は壠口部が東側で張り出す不整梢円形、壠底は不整形を呈する。東側の張り出しが別の土壤との重複、あるいは壁の崩れの可能性があるが、断面観察では判然としなかった。規模は壠口部235×115cm、壠底84×20cm、深さ70cmを測る。壠底は平坦で、壁は起伏が激しく、北壁と西壁の中位に1部小テラスを有し外開してたちあがる。長軸方向はN-56°Eをとる。

覆土は9層に分かれ、壠際にはローム質土が堆積していた。

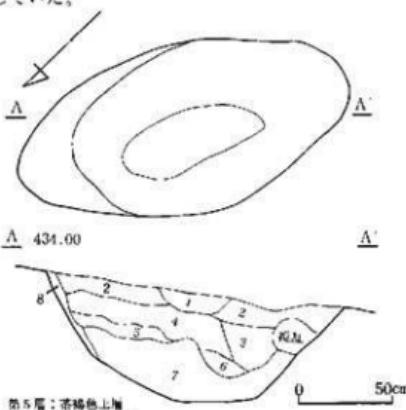
遺物は出土していない。

17号土壤 (第131図)

斜面中部、7-8-W区に位置する。平面形は壠口部・壠底ともに梢円形を呈する。規模は壠口部180×71cm、壠底77×29cm、深さ68cmを測る。壠底は平坦で、壁は一部急傾斜でたちあがるがその他は緩傾斜でたちあがる。長軸方向はN-43°Eをとる。

覆土は8層に分かれ、東壁際及び壠底にはローム質土が厚く堆積していた。遺物は出土していない。

17号土壤
第1層：暗茶褐色土層
第2層：暗褐色土層
第3層：暗茶褐色土層
第4層：暗茶褐色土層
第5層：赤褐色土層
第6層：暗茶褐色土層
第7層：暗黃褐色土層
第8層：黃褐色土層



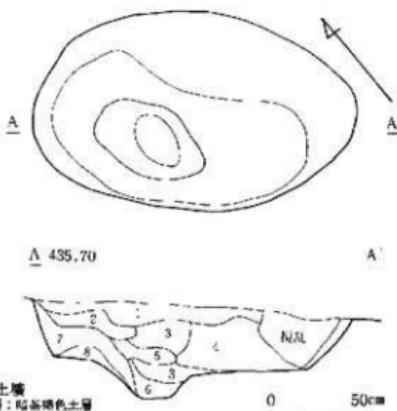
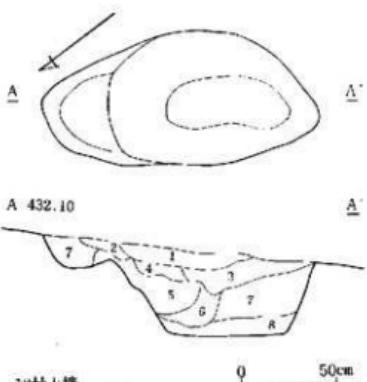
第131図 17号土壤 (3)

18号土壤 (第132図、図版20)

斜面中部、8-P区に位置する。平面形は壠口部が北側に張り出しを持つ梢円形、壠底はやや不整な梢円形を呈する。北側の張り出しが、別の土壤との重複あるいは壁の崩れの可能性がある。規模は壠口部112×72cm、壠底65×25cm、深さ55cmを測る。壠底は平坦で、壁は急傾斜でたちあがる。長軸方向はN-43°Eをとる。

覆土は9層に分かれ壠底にはローム質土が堆積していた。

遺物は出土していない。



第132図 18号土壠 (1)

第133図 19号土壠 (1)

19号土壠 (第133図)

斜面中部、10-N区に位置する。平面形は壙口部が楕円形、壙底は不整楕円形を呈する。規模は壙口部168×104cm、壙底135×60cm、深さ40cmを測る。壙底は平坦で、壁はおむね急傾斜でたちあがる。長軸方向はN-42°-Eをとる。壙底中央に楕円形のピット(50×38cm、深さ18cm)を有する。

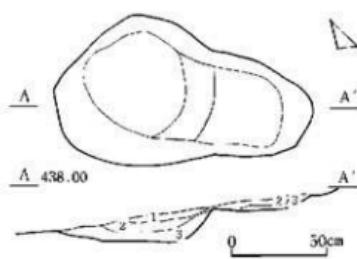
覆土は8層に分かれ、東壁際にはローム質土が堆積していた。

遺物は出土していない。

20号土壠 (第134図)

斜面中部、15-O区に位置する。平面形は壙口部が不整楕円形で、壙底は円形を呈する。規模は壙口部182×80cm、壙底72×68cm、深さ17cmを測る。壙底は平坦で、壁は西側では緩傾斜でたちあがるが東側ではほとんどたちあがりが確認できない。本来、2基の上壠の可能性があるが、発掘時には充分把握できなかった。

覆土は3層に分かれ、上位で炭化物が少量検出された。



20号土壤
第1層：茶褐色土層
第2層：暗褐色土層
第3層：茶褐色土層 第134図 20号土壤 (%)

覆土中より縄文土器・胴部の無文小片2片が出土した。小片の為時期等は明確にできなかった。

21号土壤 (第135図)

斜面下部、1-M区に位置する。平面形は壇口部・壇底ともに楕円形を呈する。規模は壇口部114×72cm、壇底70×43cm、深さ60cmを測る。壇底は平坦で、壁は急傾斜でたちあがり中位より若干外開する。長軸方向はN-53°-Eをとる。

覆土は6層に分かれ、壁際にはローム質土が堆積していた。

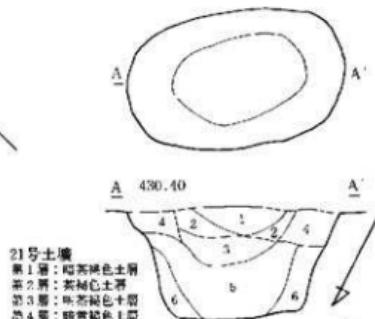
遺物は出土していない。

22号土壤 (第136図)

斜面下部、1-M区に位置する。平面形は壇口部・壇底ともにやや不整な楕円形を呈する。規模は壇口部111×86cm、壇底42×23cm、深さ71cmを測る。壇底は中央が凹む。壁はやや外反して急傾斜でたちあがる。長軸方向はN-6°-Wをとる。

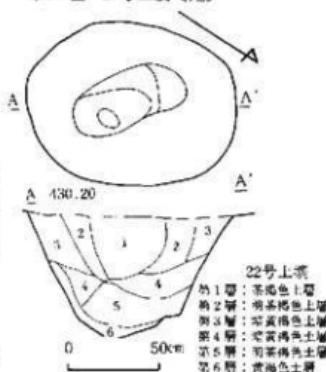
覆土は6層に分かれ、南壁際から壇底にかけてローム質土が堆積していた。

遺物は出土していない。



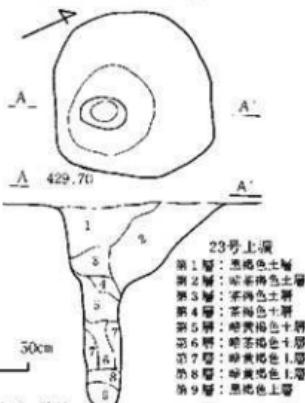
21号土壤
第1層：茶褐色土層
第2層：茶褐色土層
第3層：茶褐色土層
第4層：暗褐色土層
第5層：茶褐色土層
第6層：明褐色土層

第135図 21号土壤 (%)



22号土壤
第1層：茶褐色土層
第2層：茶褐色土層
第3層：茶褐色土層
第4層：茶褐色土層
第5層：茶褐色土層
第6層：茶褐色土層

第136図 22号土壤 (%)



第137図 23号土壤 (%)

23号土壤 (第137図)

斜面下部、0-N区に位置する。平面形は壌口部・壌底ともに円形を呈する。規模は壌口部(92)×87cm、壌底(87)×48cm、深さ48cmを測る。壌底はほぼ平坦で壁は急傾斜でたちあがる。壌底中央に円形のビット (36×30cm、深さ68cm) を有する。

覆土は9層に分けられる。壌底のビット内にはローム土が堆積していた。
遺物は出土していない。

24号土壤 (第138図)

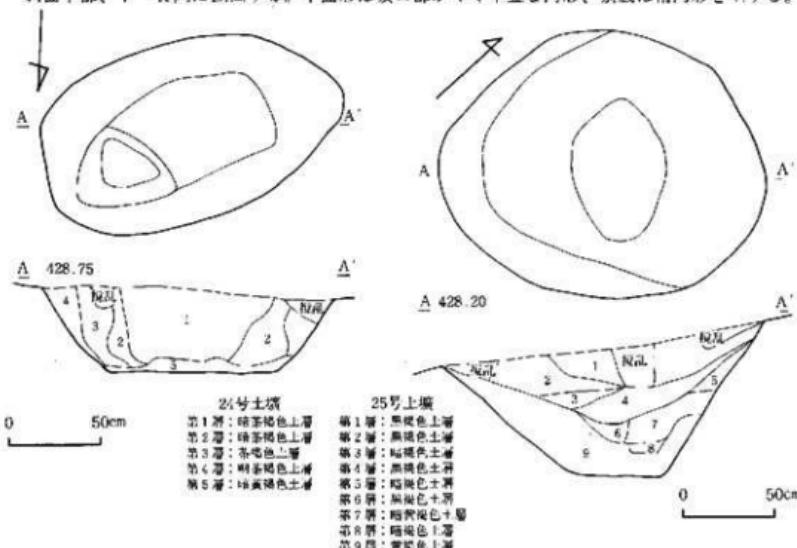
斜面下部、0-P区に位置する。平面形は壌口部・壌底ともにやや不整な梢円形を呈する。規模は壌口部163×96cm、壌底115×54cm、深さ52cmを測る。壌底はおおむね平坦で、壁は急傾斜でたちあがる。長軸方向はN-63°-Eをとる。

覆土は5層に分かれ、東壁側で炭化物が少量検出されている。壌底にはローム質土が堆積していた。

遺物は出土していない。

25号土壤 (第139図)

斜面下部、7-R区に位置する。平面形は壌口部がやや不整な円形、壌底は梢円形を呈する。



第138図 24号土壤 (24号)

第139図 25号土壤 (25号)

規模は壙口部173×140cm、壙底75×50cm、深さ84cmを測る。壙底は平坦で、壁は緩傾斜でたちあがる。

覆土は9層に分かれ、整縫から壙底にかけてローム質土が厚く堆積していた。
遺物は出土していない。

26号土壤 (第140図、図版21)

斜面下部、9-U区に位置する。平面形は壙口部・壙底ともに不整規円形を呈する。規模は壙口部115×88cm、壙底38×30cm、深さ18cmを測る。壙底はほぼ平坦でたちあがりゆるやかに移行し、壁は緩傾斜を呈する。長軸方向はN-82°-Wをとる。

覆土は4層に分かれ、整縫から壙底にかけてローム質土が堆積していた。

遺物は出土していない。



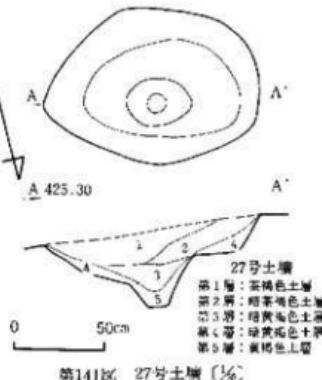
第140図 26号土壤 [図版]

27号土壤 (第141図)

斜面下部、7-T区に位置する。平面形は壙口部・壙底ともにやや不整規円形を呈する。規模は壙口部115×84cm、壙底84×52cm、深さ20cmを測る。壙底は西側では中央に向かって若干傾斜し、壁は緩傾斜を呈するが、その他の部分では急傾斜でたちあがる。長軸方向はN-46°-Eをとる。壙底中央に楕円形のピット(35×25cm、深さ25cm)を行する。

覆土は5層に分かれ。上位で炭化物が少量検出されている。ピット内にはローム質土が堆積していた。

遺物は出土していない。



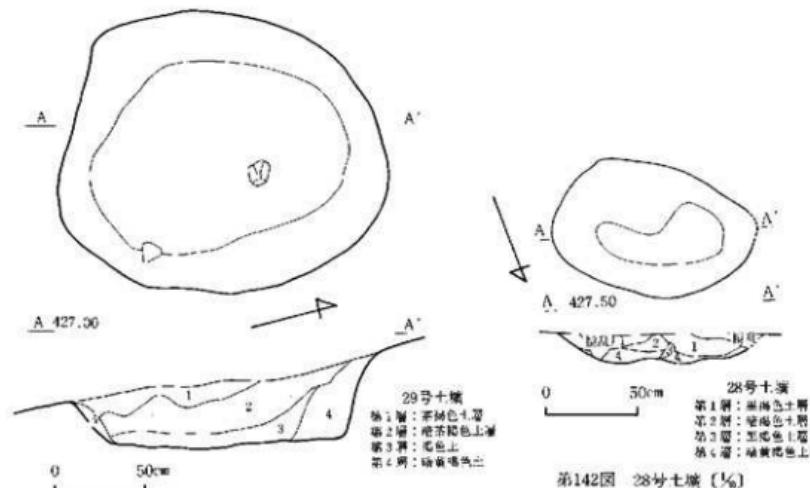
第141図 27号土壤 [図版]

28号土壤 (第142図)

斜面下部、7-S区に位置する。平面形は壙口部・壙底ともに不整規円形を呈する。規模は壙口部108×72cm、壙底67×32cm、深さ15cmを測る。壙底は若干凹凸を有する。壁は緩傾斜を呈してたちあがる。長軸方向はN-71°-Wをとる。

覆土は4層に分かれ、壙底にはローム質土が堆積していた。

遺物は出土していない。



第143図 29号土壌(3)

第142図 28号土壌(3)

29号土壌(第143図)

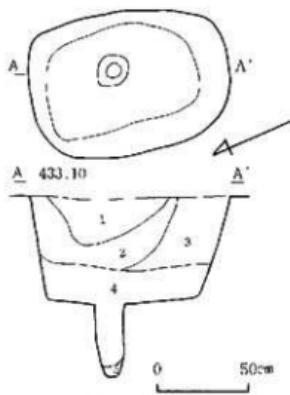
斜面下部、12-S区に位置する。平面形は塘口部が北側に入り込む不規則円形、塘底は西側が直線的な不規則円形を呈する。規模は塘口部183×155cm、塘底135×98cm、深さ52cmを測る。塘底は平坦で、壁は急傾斜でたちあがり中位よりさらに外開する。

覆土は4層に分かれ、北壁際にローム質土が堆積していた。

遺物は出土していない。

30号土壌(第144図、図版21)

斜面中部、5-I区に位置する。平面形は塘口部・塘底ともに隅角長方形に近い梢円形を呈する。規模は塘口部106×76cm、塘底80×53cm、深さ55cmを測る。塘底は平坦で、壁は急傾斜でたちあがる。長軸方向はN-58°Eをとる。塘底中央に円形のピット(19×16cm、深さ40cm)を有する。



第144図 30号土壌(3)

覆土は5層に分かれ、壙底及びピット内にはローム質土が堆積していた。

遺物は出土していない。

31号土壤 (第145図、図版21)

斜面中部、5-Ⅱ区に位置する。平面形は壙口部・壙底ともに橢円形を呈する。規模は壙口部77×61cm、壙底52×40cm、深さ29cmを測る。壙底は平坦で、壁は急傾斜でたちあがり中位より若干外反する。長軸方向はN=62°Eをとる。

覆土は3層に分かれ、上位から中位にかけてローム質土が堆積していた。

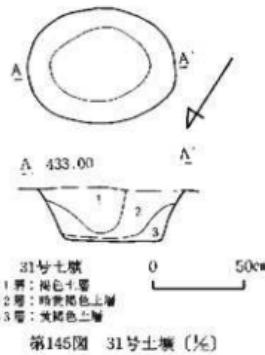
遺物は出土していない。

32号土壤 (第146図)

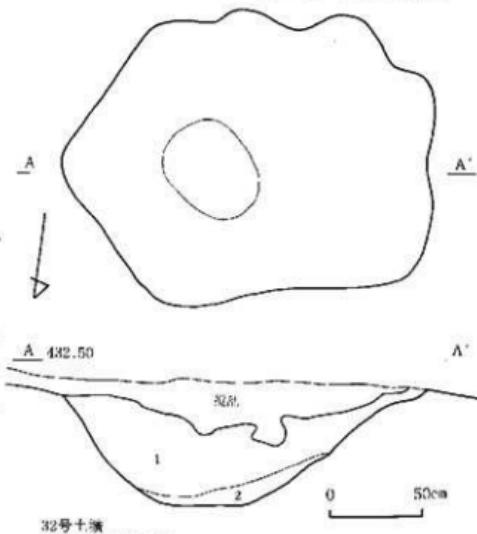
斜面中部、4-Ⅱ区に位置する。壙口部は搅乱を受けており不整円形を呈する。壙底は橢円形を呈する。規模は壙口部193×150cm、壙底55×42cm、深さ65cmを測る。壙底は平坦で壁は緩傾斜でたちあがる。

覆土は2層に分かれ、壙底にローム質土が堆積していた。

遺物は出土していない。



第145図 31号土壤 (3)



第146図 32号土壤 (3)

土壙・まとめ

今回発見した土壙は以上の32基である。分布について。土壙は丘頂平坦部には存在せず、平坦部の縁に一部集中する。さらに西側斜面中部から下部にかけて散在する。次に時期について。土壙の時期比定を可能とする遺物は検出できなかった。為に各土壙の時期は不詳である。

土壙の形状から、他遺跡の例にてらして、その時期・機能をうかがい知れるものが数基ある。すなわち、12号・23号土壙（平面が隅丸方形で、断面逆台形を呈し、壙底にピットを有する）は、多摩ニュータウンNo740遺跡89号土壙、帷子峯遺跡169号土壙などに例を求める事ができる。また27号・30号土壙（平面が滑円形で、断面逆台形を呈し、壙底にピットを有する）は、多摩ニュータウンNo740遺跡71、72号土壙に例が求められる。この種の土壙は、早期末葉の「陥し穴」と推定されている（宮澤・今井、1976）。

斜面中位から、平面円形で断面方形もしくは逆台形を呈する大形土壙が発見された（10号・11号土壙）。これらはともに、壙底より自然石を1個検出している。遺構周辺には礫が無い状況であり、何らかの意図で石が置かれたとも考えられる。10号・11号に形状が類似し、自然石が検出された例としては、柄川遺跡群第IV遺跡S K04土壙があげられる。しかし、10号・11号土壙と、門田例では、覆土の堆積状況が著しく異っており、同じ類型として良いか否かはなお疑問の残るところである。

他の土壙のうち、14号・18号・21号・31号土壙は、底部にピットを有さないタイプの「陥し穴」としうるかもしれない。類例の増加を待ちたい。

（秋田かな子・近藤 美夫）

3 石棒を伴うピット

(第147~148図、図版17)

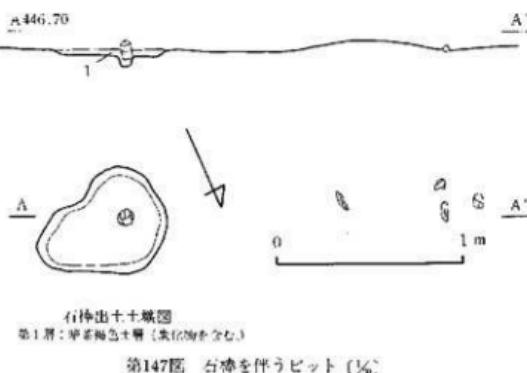
円頂丘頂部、22-H区南西部から検出された。頂部平坦面の中央や東寄りに位置し、東10mに1号集石遺構が、西15~20mに3号及び5号集石遺構が存在する。

石棒は安山岩製で、現長9.8cm、径5.2cmで断面円形を呈する小型品である。先端は円棒のままで無頭であるが、頭頂部には擦痕が残り、僅かに平坦面をみせる。表面の風化が著しく、器面はかなり荒れている。基盤部は欠落しており、原寸は不明である。

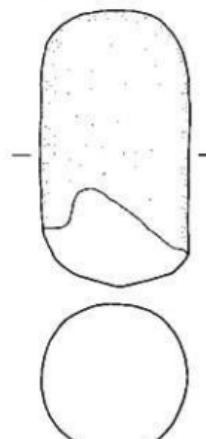
ピットは、平面不整精円形を呈し、規模は70×50cm程度を測る。上面はかなり削平されていると考えられ、現状では5cm程度の深さを有し、浅い皿状断面を呈す。ピット中央部には径10cm程度で深さ8cmの小ピットが設けられ、石棒はその小ピット内にやや斜立した状態で認められた。

石棒から北西方向へ1~2m程離れて長さ10cm程度の角礫が4個程散乱している。本遺跡では基本土層中に礫を含まず、また検出された角礫と石棒はほぼ同一レベル上で確認されているところから、この礫は石棒に伴うものである可能性が強い。

六科丘遺跡における縄文時代遺構・遺物は円頂丘部を中心として分布しているのであるが、その分布状態を更に検討すると、頂部平坦面縁辺部から斜面部にかけての部位に主体として認められ、頂部平坦面には遺構の分布が薄い。本遺構は1号集石遺構と共に頂部平坦面に占地する数少ない遺構である。向者は、勿論その性格内容を異にし、所属する時代も明らかにはしない。更に他遺跡での類例も皆見にふれえないまま、ここで向者の関連に言及することは過言の謗をまぬがれえない。しかし、両遺構が共に他の遺構が認められない、頂部平坦面占地しているという共通性は、両者の内容・性格を考える上で



第147図 石棒を伴うピット (Oc)



第148図 石棒 (石)

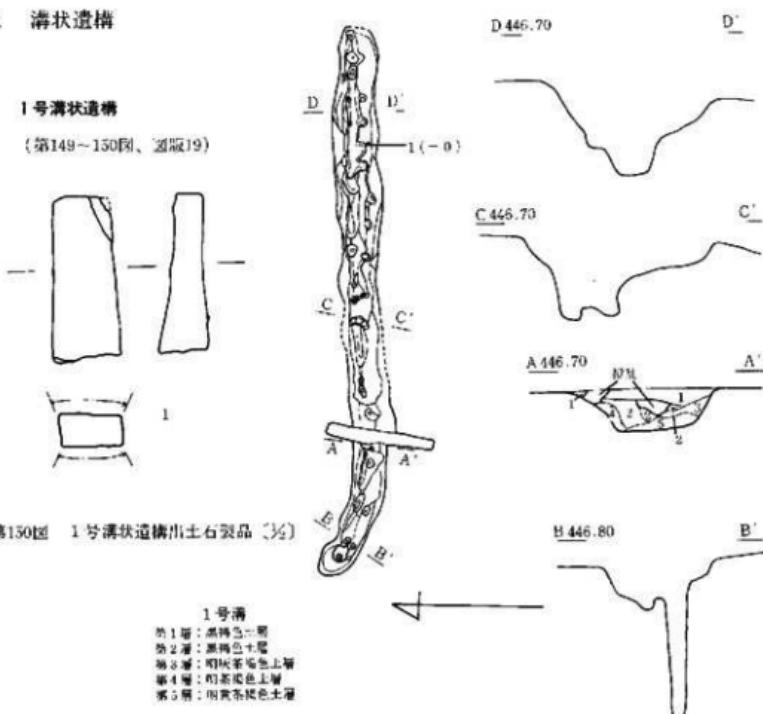
見過しえない事実であろう。

また後に附章で述べる様に、同一台地上に存在しながらも平岡の集落を中心とする台地平坦面と、六科丘遺跡の占地する台地前端部とでは、縄文時代に所属する遺物の内容・量、共に著しい差異を有している。このことは当該期の人々による空間利用・道路測定の結果であろう事は想像に難くない。極言すれば、六科丘円頂丘は彼らにとって決して日常的な居住空間とはなりえなかつた事の表現であろうか。円頂丘上に認められる、石棒、1号集石遺構等の有様はその傍証ともなりえよう。

(百瀬 忠幸)

第3節 その他の遺構

1 溝状遺構

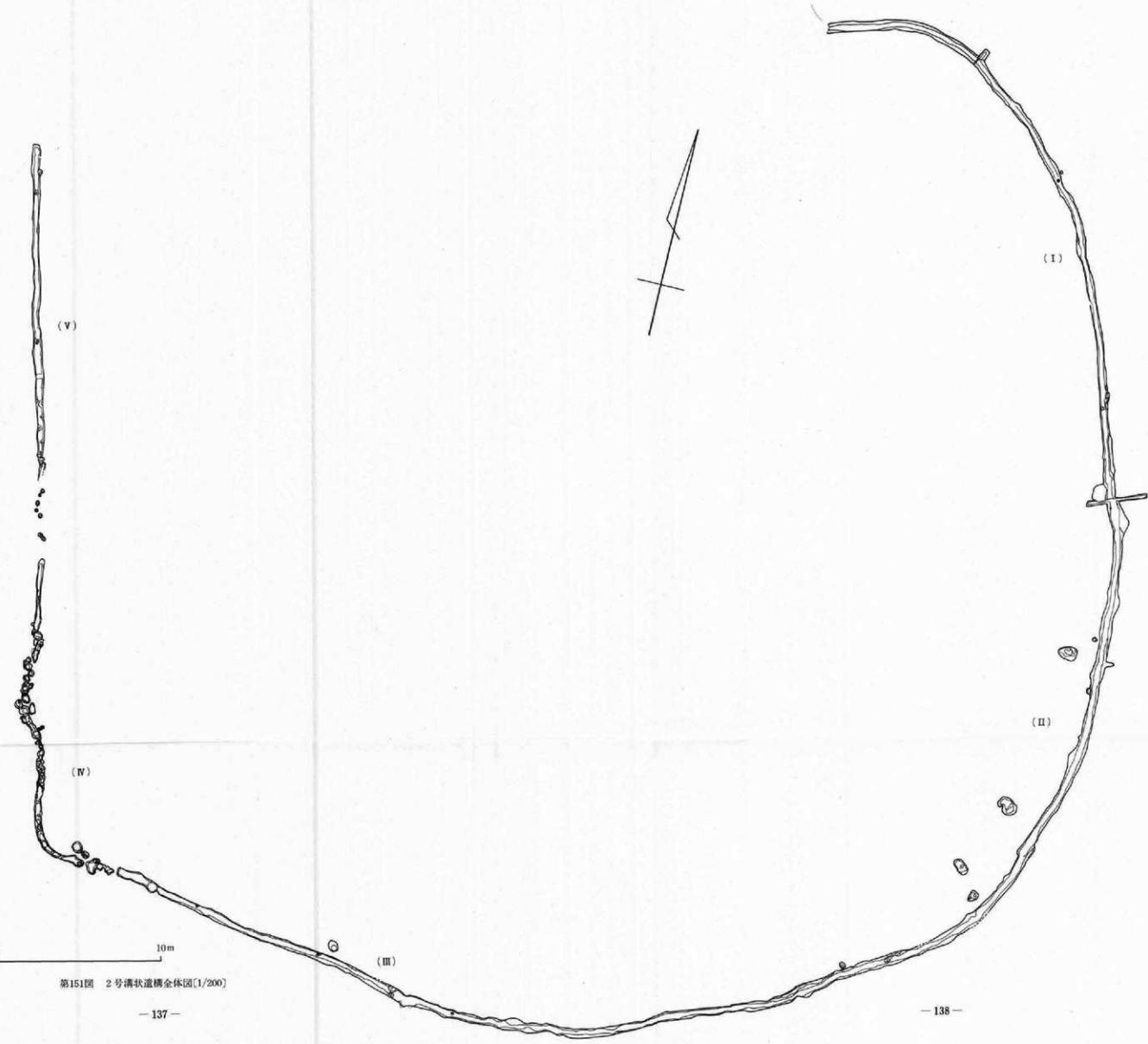


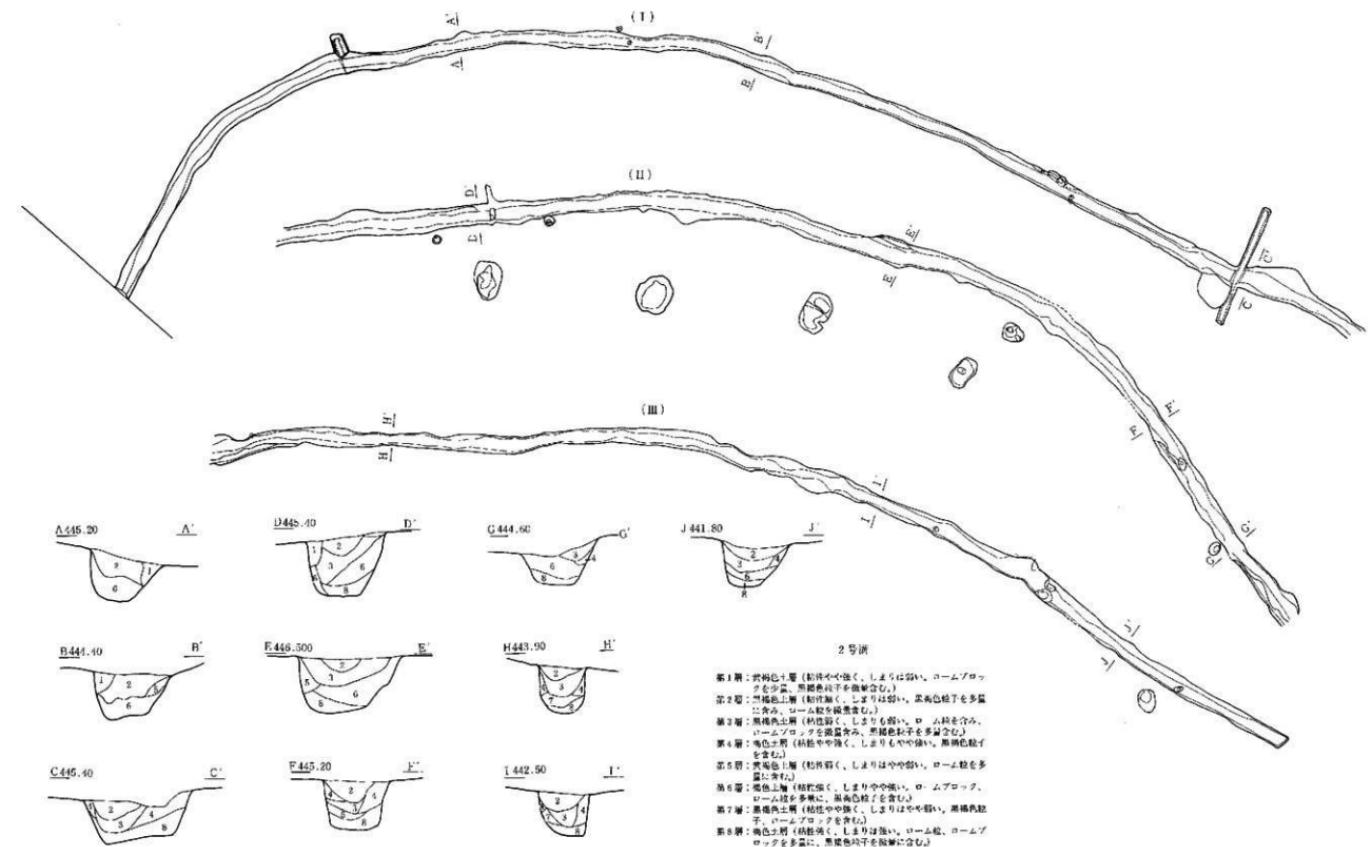
第150図 1号溝状遺構出土石製品 (3分)

第149図 1号溝状遺構 (1/100・3分)

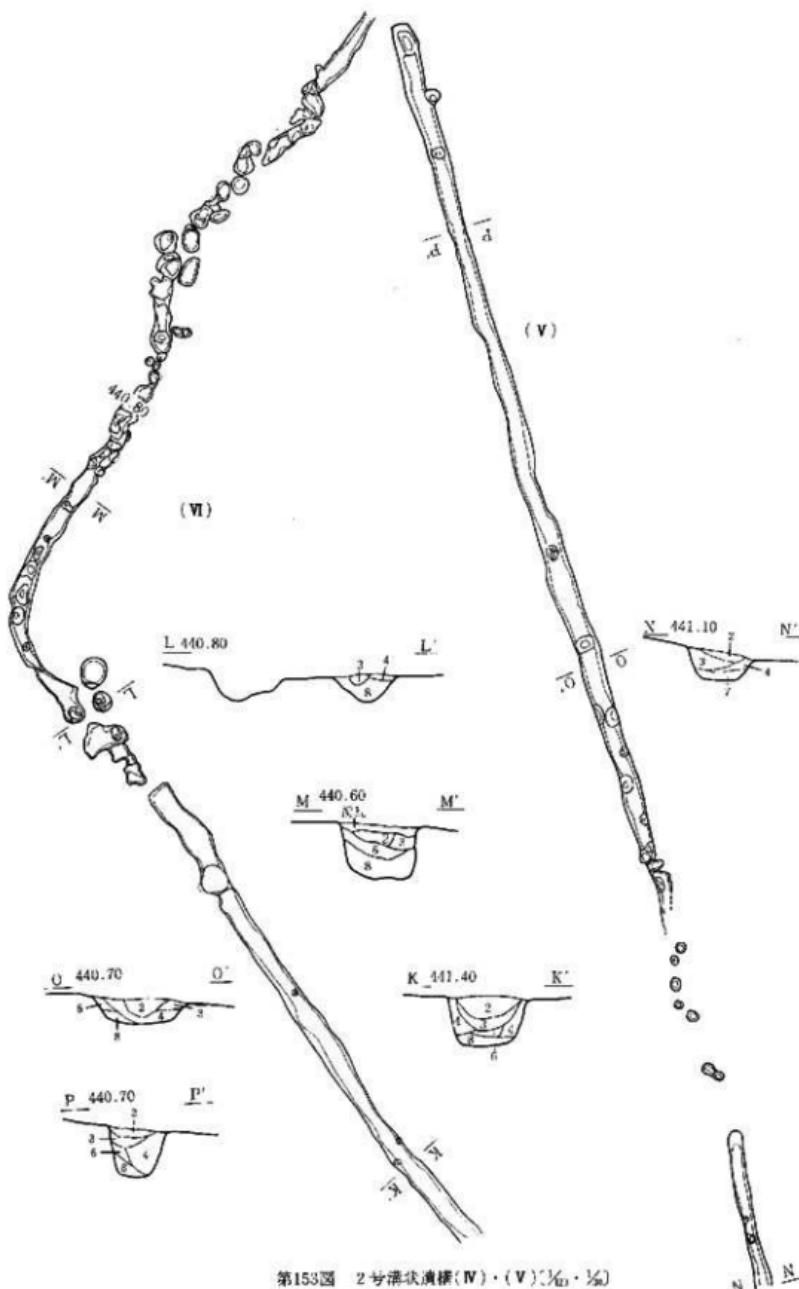
0 10m

第151図 2号溝状道橋全体図[1/200]





第152図 2号海抜査定(I)~(III) (5%, 3%)



第153圖 2號溝狀演標(IV), (V) (右, 左)

円頂丘頂部、23・24-H区に存在する。発表区南端に位置し、周辺の遺構としては、北15mに1号集石遺構が存在するにすぎない。

東一西方に向って走り、現長11mを測る。西へ向い23-H区に入り北へ向きを変えるが削平を受け途切れる。また東端部も削平の為破壊され、原状でどの程度の規模となるかは明らかにしない。幅は70~100cmを、深さは40~80cmを測り、東一西方の溝底比高差は約50cmを有する。断面はロート状を呈し、中央部は1段深く掘りこまれる。底面には多数のビットが掘り込まれるが、規則性は認められない。覆土は5層に分けられる。

出土遺物は砾石が1点溝壁に密着して出土しており、他に須恵器片が1点出土したが、縦片のみで開示しえなかった。

石製品 砥石 明灰白色を呈し、5.5×2.1×2.5cmを測り、一端を欠落する。一面が砥面とされ、一面はかなり疊ぎベリしている。

2号溝状遺構（第151~153図、図版18）

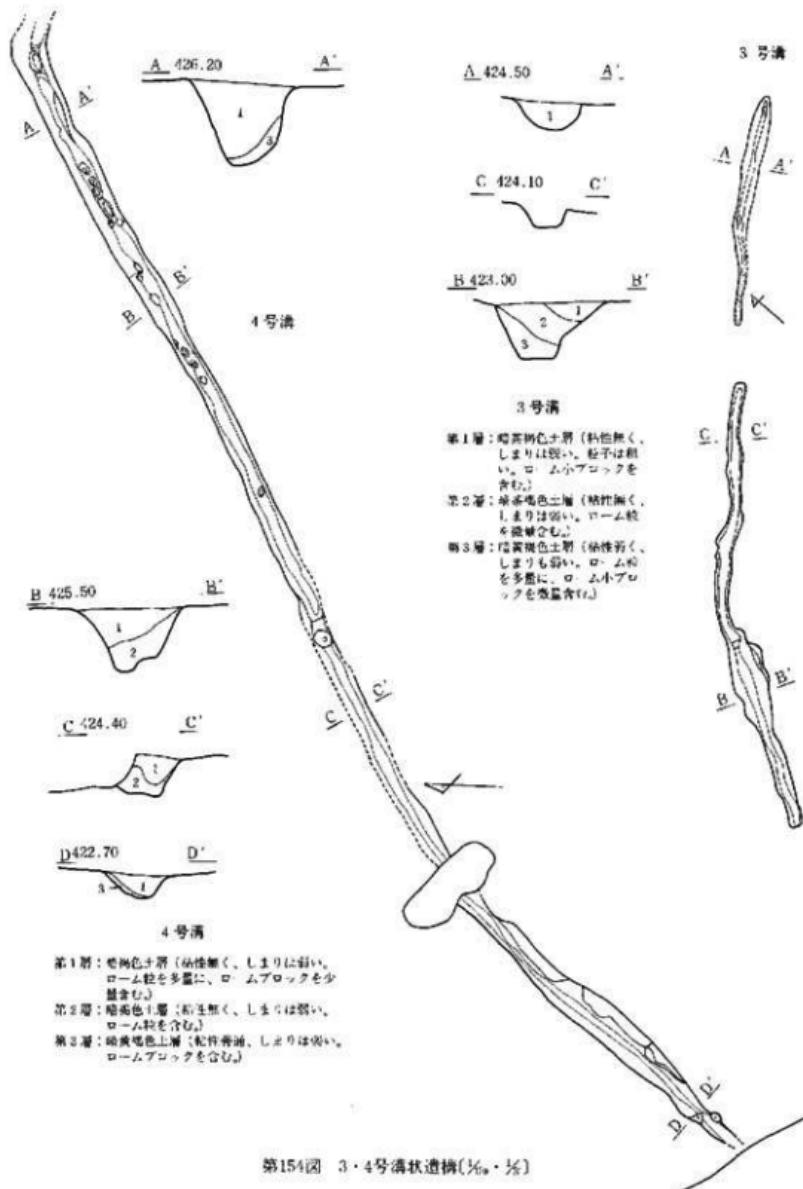
斜面上部の、14・15・16-E、17-F、18-G・H・I・J、17-J・K、16-K、15-L、13-L、13-12-K、12-J、11-J・L区に存在する。北側部は発掘区域外の為、明らかにしえなかったが平面形は一边60mのほぼ隅丸方形を呈する環状の溝と考えられる。14-E区では西から東へ走り、15-E区で南へ方向を転ずる。後約50m程ほぼ直線的に走り、18-H・I区で再び方向を転じ、やや湾曲しながら西方向へ60m程走る。14-L区で三たび方向を転じ、北方向へ直線的にのび、約45mで発掘区域外へ逃げる。幅は0.5~0.7m、深さは0.3~0.5mを測る。断面形はほぼ深鉢状を呈し、覆土は8層に分けられ、上層は黒褐色上層、下層ではロームブロックの混入が顕著である。12-K、13-14-L区では削平の為、遺存が悪い。

溝によって画された内部では、務めて遺構の検出にあたったが、溝と関連する遺構の確認にはいたらず、18-G・H・I~16-K・E、11-I~12-J区で溝に沿って穿たれたビット数ヶ所を検出したのみである。

3号溝状遺構（第154図、図版19）

斜面最下部南端の、11-10-U、10-V区に位置し、北東から南西に向って直線的に走るが、10-V区で僅かに湾曲する。削平の為1部途切れるが現長は約31m、幅は0.3~0.7mを測り湾曲部で幅を広げる。深さは最深部で約50cmを有する。両端部共削平を受ける為、原状はどの程度のものとなるかは明らかでない。断面形は本来ロート状を呈していたと考えられる。北3~5mには4号溝状遺構がほぼ平行しており、何らかの関係を持つ可能性もある。

傾斜に従って走る為かなりの勾配を有し、湾曲部で比高差約15cmの段差をもつ。



第154図 3・4号溝状造構(分・分)

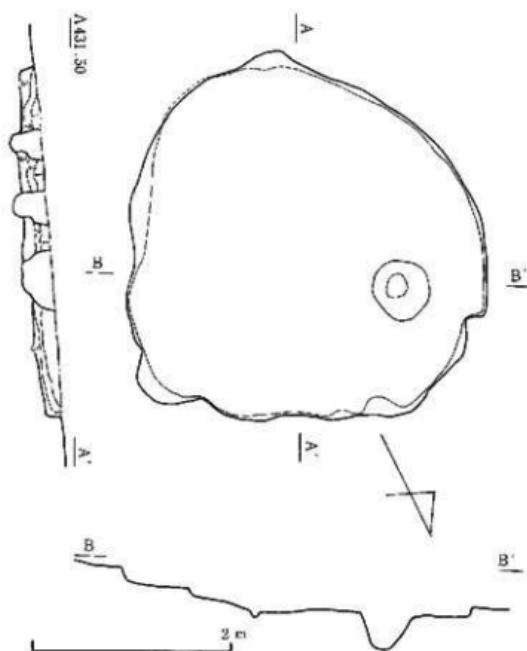
4号溝状遺構(第154図、岡版19)

斜面最下部南端の、11-10-T、10-U-V区に位置する。北東から南西に向って僅かに湾曲しながら走り、現長約52m、幅は0.4~0.7m、深さは11-T区で45cmを測る。傾斜に従って走る為、かなりの勾配を有する。覆土は3層に分けられ、断面形は本来上部が広がるロート状を呈するものと考えられ、11-10-T区では溝底にピットが顯著である。11-T区上端では南東方向に向きを変えるが、以遠は搅乱の為確認しない。

南3~5mには3号溝状遺構がほぼ平行して走る。

(吉岡 弘樹)

2 溝穴状遺構



第1層：暗褐色土層(ロームブロック、礫石片を含む)

第2層：赤褐色土層(炭化物、灰化材、散骨片を含む)

第3層：赤褐色土層(ローム段、無機物質を含む)

第155図 1号溝穴状遺構(36)

1号溝穴状遺構

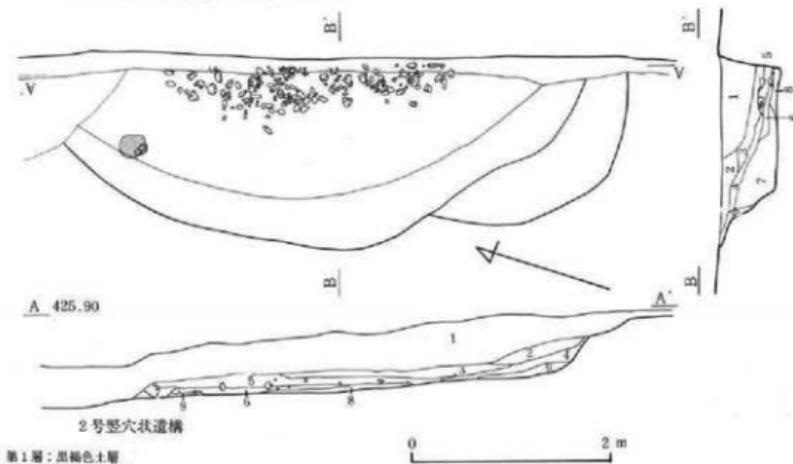
(第155図)

斜面中央、緩斜西部の4-N区に位置する北7mに9号住居址が東15mに7・8号住居址が存在する。北西1mには10号住居址が近接し南壁は13号住居址と接している。

平面形は不整円形を呈し、規模は径4m程を測る。掘り込みはローム層まで達し、壁高は15~20cmをはかる。覆土は3層に分けられ、第2層には獸骨片・炭化物が大量に混入する。底面は中部がやや深く掘りこめられ、非常に軟弱である。北西隅には径30cm、深さ20cmを測るピットが認められる。

遺物は覆土中より2点、確認面より寛永通宝1点が出土している。

2号竪穴状遺構（第156図、図版13）



- 第1層：黒褐色土層
 第2層：暗茶褐色土層
 第3層：暗茶褐色土層（炭化物を含む。）
 第4層：赤茶褐色土層
 第5層：暗茶褐色土層
 第6層：暗茶褐色土層
 第7層：茶褐色土層（炭化物を含む。）
 第8層：黄褐色土層
 第9層：暗茶褐色土層（炭化物、焼土を含む。）

第156図 2号竖穴状遗構(古)

斜面最下部の8-U・V区に位置する。南15mに5号溝状遺構が走り、北東10mに2号ローム土壌が存在する。

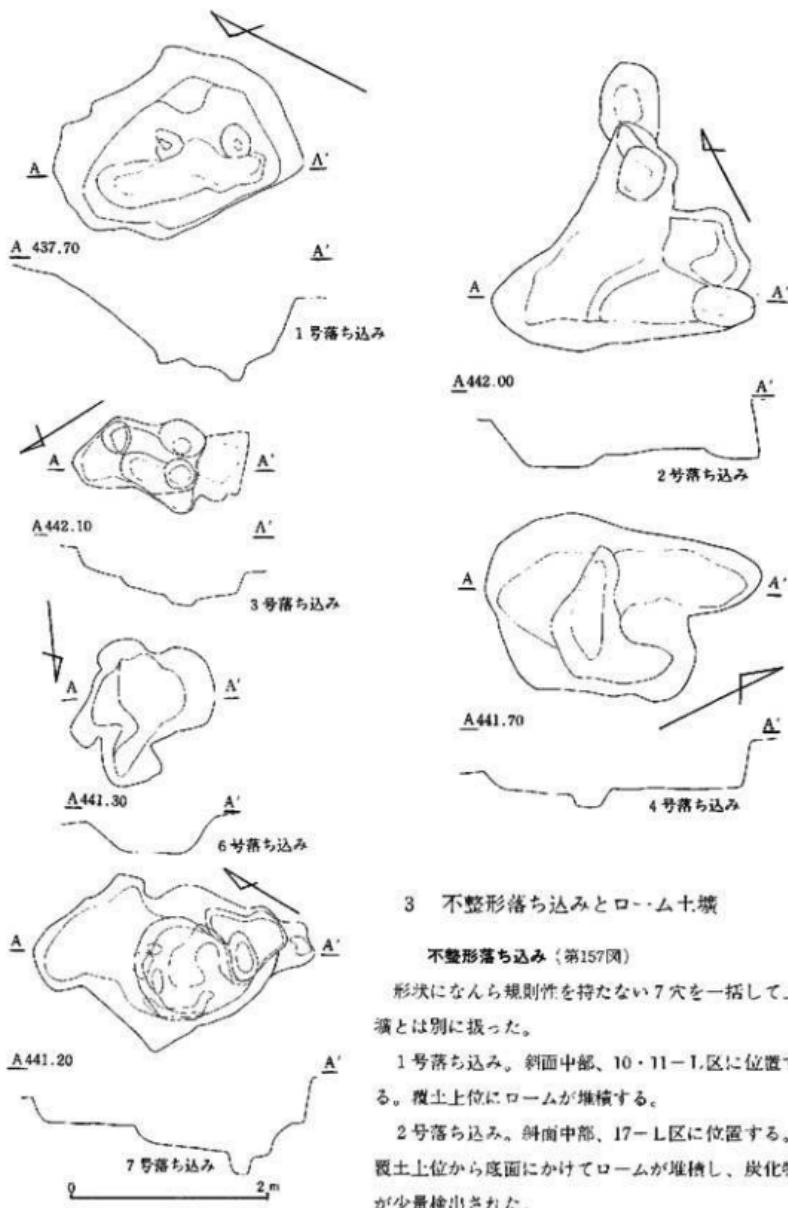
西半部を道路に切られ約15m程しか遺存しない。現長は長軸6m程を測り、本来は直径7m程の不整円形を呈していたものと考えられる。

掘り込みはローム層まで達しており、覆土は9層に分けられる。第1層は耕作・擾乱土で、第9層には炭化物・焼土が混入する。底面はほぼ平坦で硬くしまり、壁はだらだらと立ち上がる。底面から5cm程浮いて5~10cmの小蝶が同一レベルに並べられている。底面には炭化物・焼土が散乱しており、1ヶ所焼土溜りが認められる。

遺物は覆土中より土器数片が出土している。

1号及び2号竪穴状遺構は、調査時には小竪穴遺構として認識し、それぞれ3号・4号小竪穴遺構と呼称していた。しかし、整理作業時の検討の結果、1号・2号小竪穴遺構と、3号・4号小竪穴遺構とはその形状・時期・性格等において明確な差異が認められた。すなわち1号及び2号小竪穴遺構は、弥生時代末の所産で集落に附属するものであり、3号・4号小竪穴遺構とは、時代・内容等を異なる遺構であった。そのため、本報告書においては、1号・2号小竪穴遺構はそのままの呼称とし、同3号・4号遺構に関しては竪穴状遺構として別個に取扱ったものである。

（山崎 和也）



第157図 不整形落ち込み(古)

3 不整形落ち込みとローム土壤

不整形落ち込み(第157図)

形状になんら規則性を持たない7穴を一括して上部とは別に扱った。

1号落ち込み。斜面中部、10・11-L区に位置する。覆土上位にロームが堆積する。

2号落ち込み。斜面中部、17-L区に位置する。覆土上位から底面にかけてロームが堆積し、炭化物が少量検出された。

3号落ち込み、斜面中部、17-L区に位置する。底面上にロームが堆積し、上位から炭化物が多量に検出された。

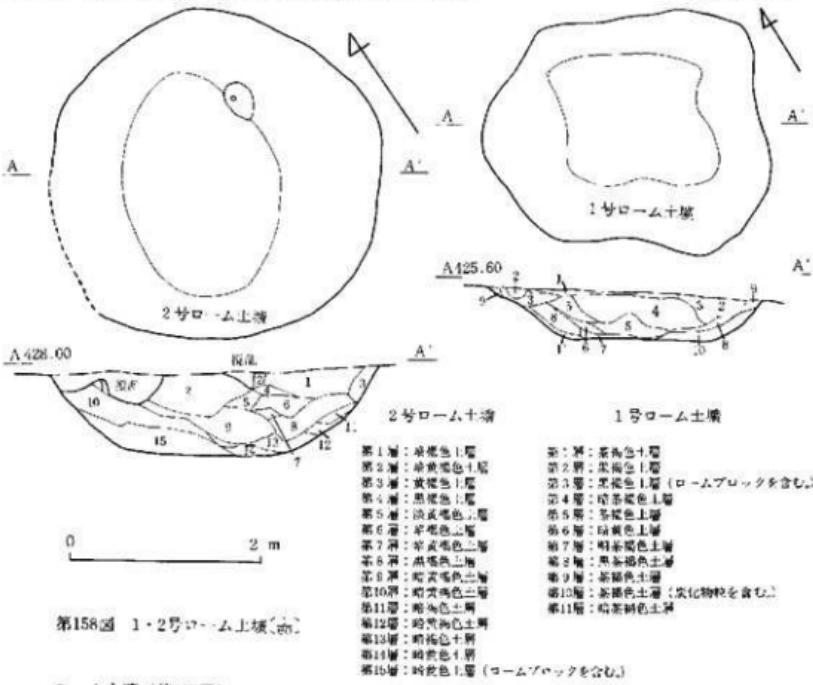
4号落ち込み、斜面中部、17-L区に位置する。

5号落ち込み、斜面中部、17-L区に位置する。西半部を14号土壤に切られる。覆土中位にロームが堆積していた。

6号落ち込み、斜面中部、16-L区に位置する。

7号落ち込み、斜面中部、16-L区に位置する。底面より10cm程浮上し、厚さ5cm前後のブロック状焼土がリング状に堆積していた。焼上ブロックと底面との間層には、焼土粒・炭化物粒が多量に認められた。壁面及び底面には火熱を受けた痕跡は見られなかったがあきらかに1次的な堆積を示す焼土である。7穴とも遺物は出土していない。

(秋田かな子)



第158図 1・2号ローム土壤(赤)

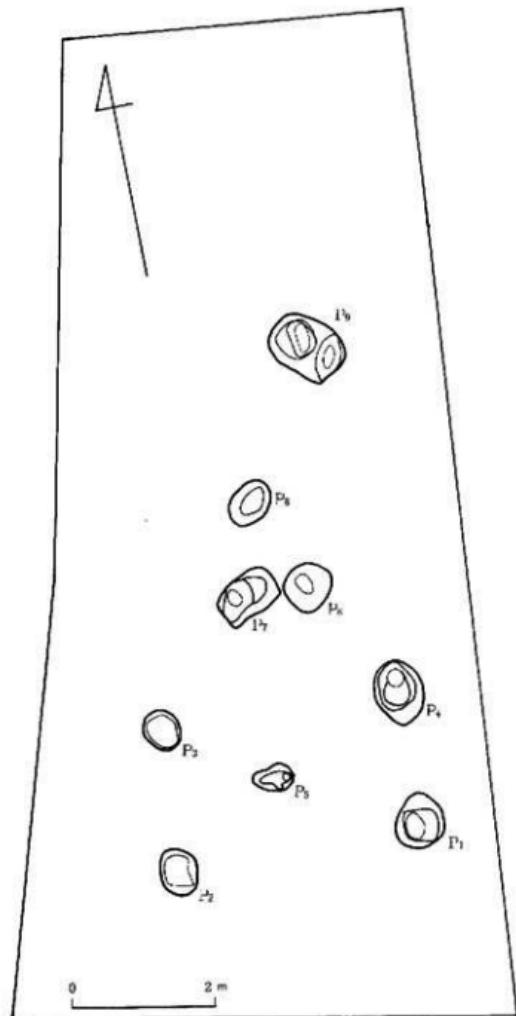
ローム土壤 (第158図)

1号ローム土壤。斜面下部の7・8-S区に位置する。平面形は不整円形を呈し、規模は3×2.4m、深さ50cmを測る。浅鉢状断面を呈し、底はやや硬い。覆土は11層に分けられ、中央部に再堆積ロームを主体とする層が、周囲に黒褐色土が堆積する。

2号ローム土壤。斜面下部の8・9-S区に位置する。平面形はほぼ円形を呈し、規模は径

3.5m、深さ90cmを測る。ホール状断面を呈し底は軟弱である。覆土は15層に分けられる。基本的には、中央部に再造積ロームを主体とする層が周囲に暗褐色土が堆積する。

両者共、所謂「再造積ロームを有する土壤」とされてきたものである。
(田尾 誠敏)



4 II区北拡張区

ピット群(第159図)

本ピット群は、II区北側、斜面下部の表土耕土中に検出されたものであり、同区をII区北拡張区と呼称した。

ピットは計9個検出された。
 $P_1 \sim P_4$ が $3.4 \times 2\text{ m}$ を測る長方形を呈して配列されている他は規格性は認められなかった。 $P_1 \sim P_4$ は形状・規模等の所見から掘立柱建物址とは認めえなかつたが、4穴1組として設計された可能性が強い。

各ピットの計測値は下記の通りである。

P_1	$80 \times 70\text{cm}$	59cm
P_2	$70 \times 55\text{cm}$	21cm
P_3	$60 \times 50\text{cm}$	24cm
P_4	$90 \times 70\text{cm}$	61cm
P_5	$60 \times 30\text{cm}$	20cm
P_6	$70 \times 70\text{cm}$	35cm
P_7	$90 \times 58\text{cm}$	47cm
P_8	$70 \times 50\text{cm}$	32cm
P_9	$110 \times 75\text{cm}$	52cm

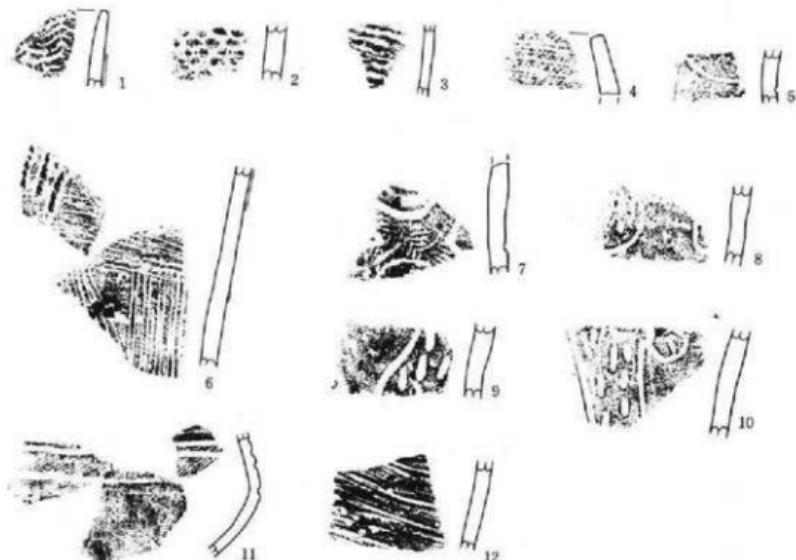
(田尾 誠敏)

第159図 II区北拡張区ピット群(左)

第4節 遺構外出土の遺物

1 土 器 (第160・161図)

縄文時代の土器



第160図 遺構外出土の土器(1) 縄文時代の土器(少)

(1) 早期の土器(1~3)

早期前半、押型文系土器が8片検出された。1は山形文が施された口縁部破片。灰茶褐色を呈し、胎土に砂粒を若干含む。焼成は不良。口唇は先端でやや細まる角頭状をなし、口縁直下をめぐる山形文下には横方向の楕円文が施されるものと思われる。22-I区から出土している。2は粒径 8×5 mmをはかる楕円押型文。茶褐色を呈し、胎土に砂粒・金雲母を含む。23-F区から出土している。3はネガティブな楕円文が施されるもの。粒径 4×3 mmをはかる。色調は茶褐色。胎土は比較的多くの砂粒・金雲母を含むものの、ややかたくなる。23-G区から出土している。

(2) 前期の土器(4~5)

2片が検出されたにすぎない。4は内傾する口縁部破片である。細い斜縄文を地文として、横方向の多条沈線文が施される。胎土に砂粒・金雲母・石英を多く含み、焼成はふつう。前期後半

諸磯式（諸磯b式）に比定される。5は半截竹番による条線を地文として、浮線文やボタン状の貼付け文が施されるもの。胎土に砂粒・石英・黒漆母が多く含み、器壁は全体にザラザラする。外面くすんだ褐色、内面明茶褐色を呈し、焼成はふつう。諸磯c式に比定される。15-L区から出土している。

(3) 中期の土器

中期初頭に属する小破片が1片検出されているが、図示しえなかった。

(4) 後期の上器 (6~10)

図示したものを含めて6片検出されている。6・7は平行する沈線によって曲線的な文様を描き、沈線間に縦文を充満する鶴部破片である。6は原体R L单節縦文。7はL R单節縦文である。明褐色ないしくすんだ褐色を呈し、胎土に砂粒・白色透明粒子を含む。焼成はおおむねふつう。8~10は同様の沈線間に複列の刺突文が施されるもの。明褐色・培茶褐色などを呈し、胎土に砂粒・白色不透明粒子を含む。6・7は後期初頭、称名寺I式、8~10は後期初頭、称名寺II式にそれぞれ比定されよう。6は18-G区から出土している。

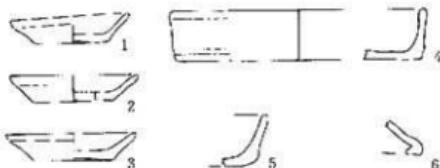
(5) 晩期の上器 (11・12)

条痕文を施されるものの2片、無文のもの2片を含めて6片の晩期土器が検出されている。11は鉢形を呈すると思われる脚部破片。横位にめぐらる沈線文によって区画された胴上半部に、原体L R单節縦文による縦文帯と刺突列点文が施される。外面明褐色、内面赤味をおびた茶褐色を呈し、胎土に砂粒・石英・白色不透明粒子を含む。内面は横方向のナデによる器面調整が行われ比較的平滑である。焼成はふつう。12はヘラ状工具による斜方向の条痕文が施されるもの。胎土に砂粒・石英・黒漆母と白色不透明粒子を多く含み、全体に器壁は粗い。これらは、時間的にやや不明瞭な点を残すものの、おおむね晚唐中葉に位置づけられるものであろう。

(百瀬 忠幸)

中世以降の土器

1~3はカワラケ。1は口径8cm、底径5.2cm、高さ2.1cm、体部回転ナデ、底部は左方向の回転条切り、2は口径9.2cm、底径5.6cm、高さ2.0cm、体部回転ナデ、底部ナデ、3は口径9.6cm、底径5.8cm、高さ2.1cm、体部上半回転ナデ、下半不整方向のナデ、底部左方向の回転条切りのち



第161図 滋賀県出土の土器(2) 中世以降の上器 (16)

ナデ。胎土は共に密、焼成良好、色調、1は茶褐色、2・3は赤褐色を呈す。形状・大きさからいえば三者で「入れ子」となる可能性もあるが、製作技法のうえからは「入れ子」としてあつかえるか否か、疑問が残る。1～3は13-J区から出土している。4・5は盤一部。4は口径18cm、底径17.6cm、高さ3.6cmを測る。体部は内・外両面共に回転ナデ、底部内面はナデ、外側は無調整。胎土密、焼成良好。色調は茶褐色で一部黒斑を有する。4は10-P区から出土している。5は体部内外両面共に回転ナデ。胎土密、焼成良好。色調は茶褐色を呈する。6は縁器片、蓋一部。胎土は密で焼成は堅緻。ロクロ成形後、回転ナデ。内外両面共淡緑色釉が施される。5・6は9-R区から出土している。

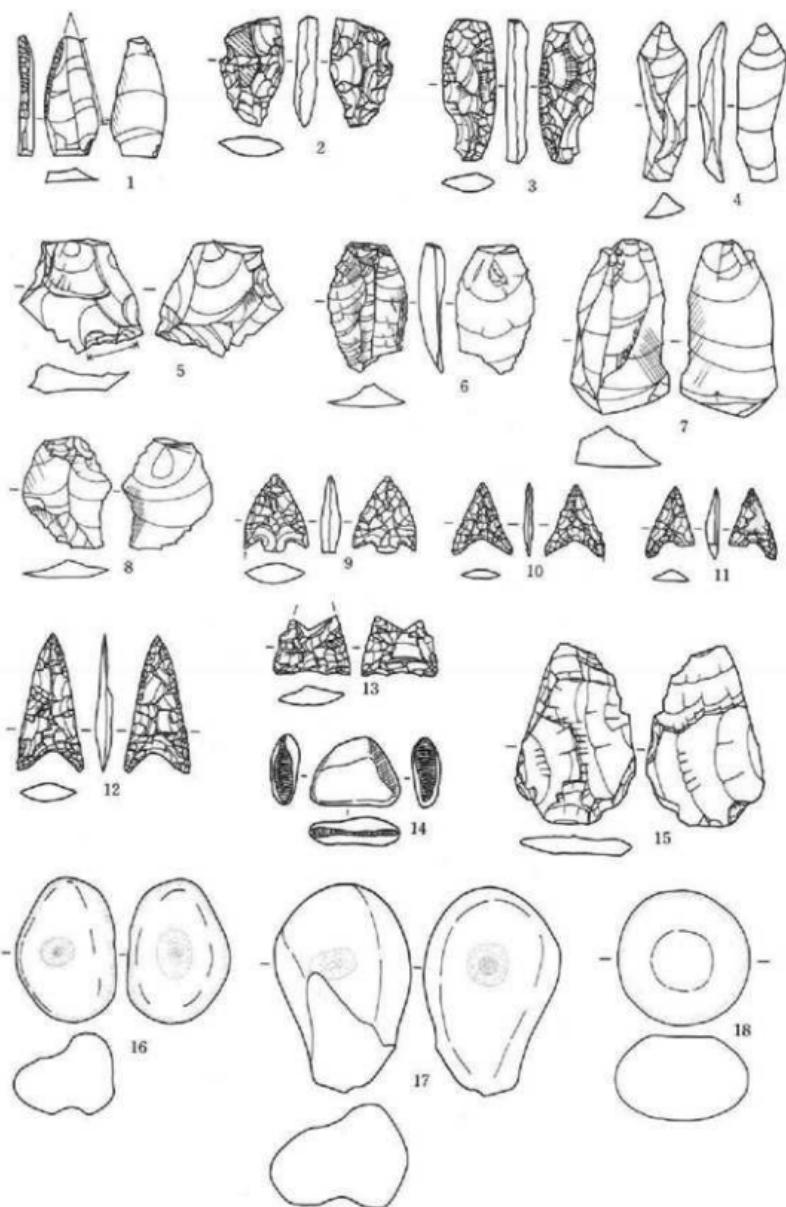
(吉岡 弘樹)

2 石 器 (第162図)

本遺跡から出土した石器類について説明する。ここで取り扱う石器類は、先土器時代の石器類造構外出土の石器類、遺構出土の石器であっても、その遺様に伴なわないと判断したもの、である。

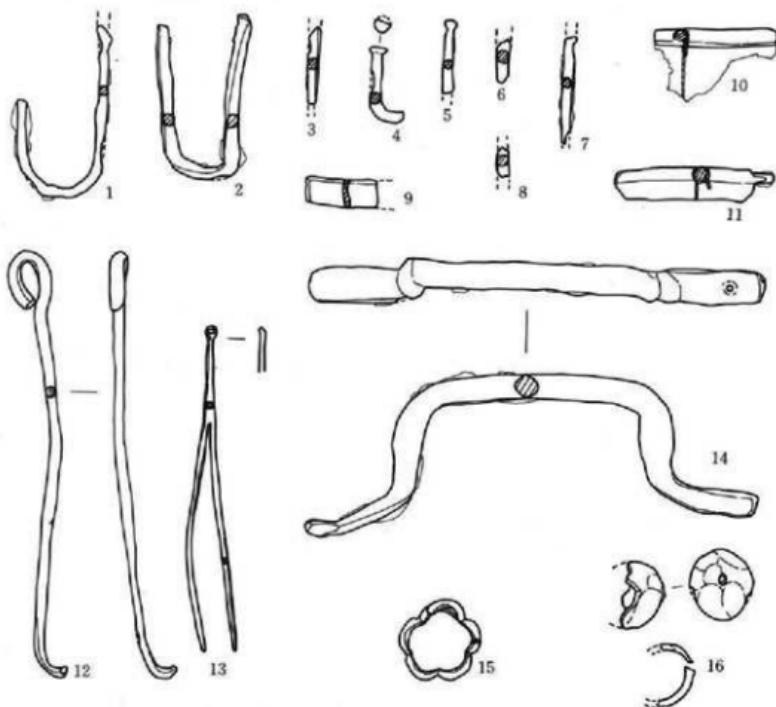
1はナイフ形石器。1号住居址出土。石質は黒曜石。基部及び先端部欠損。素材は複長剣片。刃溝加工は左側にある。また右側下部にもわずかに見られ、本来は両側刃加工であったと思われる。右側縁には刃こぼれがある。図示したものの他にナイフ形石器の破損品が1つある。2は尖頭器、14号住居址出土。石質は黒曜石。先土器時代終末～縄文時代初頭に属すると思われる。基部付近の欠損品で、節理面を残す。3は尖頭状石器。16-K区出土。石質は黒曜石。先土器時代終末～縄文時代初頭に属すると思われる。尖頭部欠損。4は剣片。3号住居址出土。石質は凝灰質流紋岩。先土器時代に属すると思われるが詳細は不明。5はスクレイバー。23-F区表採。石質は流紋岩。素材は残核を利用している。図の右下部に調整がほどこされている。先土器時代の石器と考えられるが、詳細は不明。6、複長剣片、11-L区出土。石質は黒曜石。先土器時代の剣片であると考えられる。7・8は剣片。石質は共に黒曜石。7は22-G区、8は23-H区出土。9～13は石器。石質、12はチャート、他は黒曜石。9は22号住居址出土で基部は欠損している。10は5号住居址出土。11はII区表採で脚部欠損。12は2号小笠穴出土。13は24-H区出土で先端部欠損し、節理面を有する。14は研磨痕を有する礫。1号住居址掘り方出土。ほぼ側面全体に研磨痕を有する。15は打製石斧。3号住居址出土。16・17は凹石。16はII区表採。表面の風化が著しく磨石や敲石との併用の有無に不明。凹部分は表裏1個ずつ認められる。17は24号住居址出土。現存部分の表裏に1個ずつ凹部分がある。磨石・敲石との併用の有無は不明である。18は磨石。13号住居址出土。石質は砂岩。全体によく磨かれている。敲石との併用はない。直徑約3.5cmの円形状の平坦部分がある。磨石の半分以上をスス状の黒色付着物が覆っている。また赤化している部分もある。磨石が何かの理由で、スス状の黒色付着物で覆われたり、赤化したものと考えられる。

(大森 隆志)



第162図 道構外出土の石器〔1~3、9~13- $\frac{1}{2}$ ・4~8、14~18- $\frac{1}{2}$ 〕

3 鉄製品・土製品(第163図)



第163図 遺構外出土の鉄製品・土製品(3)

1～8は棒状鉄製品。1は現長10cmで0.3cm角の方形断面を有する。釣針状に曲げられ一端は完結するが、他端は欠落する。2は現長12cmで0.4cm角の方形断面を有する。平面U字状に曲げられ、両端共完結するが使途は不明である。1は11-K区、2は17-J区から出土している。3は現長2.7cmで0.3cm角の方形断面を有する。4は現長3cm、径0.4cmの円形断面を有し、頭部は径0.6cm程に叩きひろげて作り出している。5は現長2.6cm、径0.3cmの円形断面を有し、頭部は径0.5cm程に叩きひろげて作り出す。6は現長1.5cmで0.4cm角の方形断面を有し、7は現長3.8cm、径0.3cmの円形断面を示す。8は現長1cm、径0.4cmの円形断面を示す。6・7はほぼ釣先端部、4・5は釣頭部である。3～8は14-J区から出土している。9は板状鉄器端部、現存2.5cm、幅1cm、厚さ0.2cmを測る。長軸に沿って僅かに湾曲する。10は異形鉄器。現寸4.3×2.5cmを測る。径0.3cmの鉄棒を、厚さ0.1cm程の鉄板端部にはさみこんだものである。9・10は6-0区から出土している。11も異形鉄器。現寸5.5×1.2cmを測る。10と同様のもので、径0.4cm程の鉄棒を厚さ0.1

cm程の鐵板端部にはさみこんだものである。6-N区から出土している。12は鍵状を呈する鐵製品である。全長15cmを測り、径0.3~0.5cmの円形断面を呈する。一端は 1.5×1 cm程の長圓形を呈する様に曲げられており、他端も1cm程急削している。2-D区から出土している。13は脊状を呈する鐵製品、全長11.5cmを測り、表面に薄く銅張を施す。頭部は耳搔状を呈し0.4cmに膨む。体部は 0.3×0.2 cmの方形断面を、脚部は 0.2×0.2 cmの方形断面を有し、先端へ向うに従い尖状をなして完結する。16-J区から出土している。14は引き金具。平面几状を呈し、全長19cmを測る。引き手部は幅10cmに亘って張り出し状に折り曲げられ、引き手部を為す。引き手部は 1×1.2 cmの方形断面を有し、両端部は 0.7×1.2 cm程の方形断面を示す。鑄の為完全には観察できないが、邊部には径0.2cm程の孔が穿たれており、おそらく両端部に穿孔されたものであろう。14-L区から出土している。15は銅製飾金具。径2cm程を測り5~6棱を有する飾り金具である。断面は 0.2×0.4 cm程のカマボコ形を呈し、内面は面とりされている。岡上では環状を呈しているが完結しておらず、邊部は重なっている。16-J区から出土している。

16は土鈴である。径2.5cmを測るが、光程しか遺存しない。器厚は0.3cmを測る。色調は赤褐色を呈し、焼成は堅鐵。胎土は密である。表面には指痕痕が残り、穿孔は外面から内面へ向けなされている。5-0区から出土している。13号住居址からも土鈴が出土しており、同一個体とも考えたが、接合しなかった。

(吉岡 弘樹)

第V章 弥生時代の成果と課題

第1節 弥生時代後期から古墳時代前期の土器について

本遺跡では弥生時代後期から古墳時代前期に満する土器が検出されており、住居址群はこの時期に該当する集落を形成するものである。弥生時代後期から古墳時代前期については、従来の土器型式による編年の位置づけに困難な点が多く、また各地域の特性についても同様の事が指摘されている。地域の特徴的な土器を横線で結びながら、ある地域の時間的経緯を細分化しようとする方向に現在はある。ここでは山梨県内外の関係資料を参考にして、上器の形態変化にもとづいて分類を行なった。

本遺跡においては一般的に時期分類の根拠となされている壺・器台が認められず、明確に高环形上器と呼べるものも検出されなかった。更に山梨県内の当該期の遺跡には珍しく、S字状口縁台付壺形土器においても、口縁部破片が2片のみ出土したにすぎなかった。また構造文を有する土器に至っては、皆無の状態であった等県内既報告の資料とは様相が異なる点を少なからず見出した。

本遺跡で出土した器種は、壺・小型壺・甕・鉢・蓋の5器種であった。ここでは、主として壺形上器、甕形土器の形態の変化を分類の根拠とし、Ⅰ期からⅢ期に分類を試みた。本遺跡では焼失住居が多くまた床面付近からの出土土器が大半を占めることより、一住居址内出土の上器を一括り一時期として扱い分類を行なった。

第Ⅰ期土器群

第Ⅰ期土器群が検出された住居址は、第1・3・5・29号住居址の4軒である。器種は壺・小型壺・甕・鉢・蓋であった。出土資料数は、少なく、完形品もないが、器種、形状は多様であった。第3号住居址からの出土個体数が最も多かった土器群である。第1号住居址については、第2号住居址との切り合い関係より第Ⅰ期土器群に含まれると判断した。

壺形土器

口縁部は大きく外反し、口縁内面の幅が広くなる。折り返し口縁をなし口縁端部には2から3本を単位とした紐状の貼り付けが施されている。口縁内面に細縄文をめぐらせるもの(3-1、5-1)と、丁寧に磨きを施すもの(29-1)がある。第3号住居址から出土した壺には肩部に細縄文が施されており、第Ⅰ期土器群は3時期区分の中で貼付、縄文と文様をもつ唯一の土器群である。口縁部をみるとかぎりでは岩清水遺跡(森性、1979)出土の壺形上器と類似するものである。頸部から比較的大きく湾曲して胴部につながっていき、最大径を胴部中位に有する。器面外面はハケ調整の後に磨きが施されている。また口縁部内面には、磨きがなされている。

第3号住居址から検出された小型壺形土器は、最大径を胴部中位に有し、口縁が親く外に立ち上がる形状をみせ口縁径、胴部径に対する頸部径が大きい。器厚は比較的厚味があり器面外面と口縁部内面にはヘラ状工具による削り磨きが残る。

壺形土器

脚部と接合した資料はなかったが、すべて台付壺形土器である。口縁部は単純口縁のもの（3-7、8）と口縁端部にハケ状工具による刻目を有するもの（1-2）とがあるが、前者の占める割合の方が多い。また単純口縁のものは、口唇断面が方形を呈し、口縁の長さが長い。最大径は胴部中位にあり、球形に近い形状をなす。器面外面はハケにより調整され、口縁内面にはヘラによる磨き、胴部内面にはナデが施されている。口縁端部に刻目を有する上器は第1号住居址よりの出土のものであり、器面外面に横位のヘラ削りを施している。I期上器群の壺形土器の形状は、脚部から口縁のつながりが緩やかになされている。

小形壺形土器は口縁部に最大径をもち、器面外面にハケによる調整が施されている。第3号住居址より2点出土しているが、形状は異なるものである。

鉢形土器

内湾する形状をなし、器面外面は丁寧なヘラ磨きが施されている（3-17）。第32号住居址からもI期上器に含まれる鉢が出土している（32-1）。II・III期と比較すると、底部径が短かく、大きく外反する形状をなしている。

蓋形土器

蓋部が深く、つまみ部から鋭く内湾し弧状をなしている。つまみ部は内外面とも平坦面をつくり、器面にはヘラ磨きが施されている（1-1）。

第II期土器群

第II期土器群が検出された住居址は、第6・8・12・20・28・33号住居址の6軒である。器種は壺・小形壺・甕・鉢・蓋でありI期土器群と同様であった。I期土器群との漸移的なつながりを示している器種、器形であった。出土数は最も多かった。II期土器群には破片ではあるが、駿河湾地方に分布が多くみられる土器も認められた。

壺形土器

折り返し口縁をなすもので、口唇断面が方形を呈する。口縁部にはハケ状工具による調整を残す他は、文様が認められない。形状は頸部が短く口縁部下半で緩やかに外反する。I期の表に比べて口縁部内面の外反する幅が狭くなる。最大径は胴部中位より下位にある。底径に対する胴部径がIII期の壺と比べて大きく、膨らみをもつが、棱を有するには至らない。器面外面はハケ調整の後にヘラ磨きが施されており、ところどころハケ目を残している。器面内面については、頸部にはヘラ磨きかなされ、口縁部にはハケ調整が入念になされたもの（8-1、2・33-1）と磨きが入念になされたもの（12-1）とがある。第8号住居址で出土した壺のように頸部下半から胴部にかけて指頭圧痕を残すものがあるが、胴部内面には明瞭にハケ調整が施されている。第12

号住居址出土の壺には胴部中位よりやや上に、焼成後穿孔が加えられており、類例に乏しい上器である。

第6・12号住居址からは、幅広の複合口縁の破片が検出された。第6号住居址から出土した口縁片には4本以上の棒状隆帯が貼り付けられており、一城林遺跡（森他、1980）、住吉遺跡（新津他、1981）等に出土例が認められる。第12号住居址より出土した口縁部破片には、細かいハケ調整の後に1から5本の棒状沈線が施されている。更に口縁端部の内側に粘土帯を貼り付け重ね合わせている。粘土に砂粒を含み、他の土器に比して色調に灰色味が強い。このような土器は駿河湾地方（加納、1981）に多く分布するものである。

小型壺形土器が第12号住居址から出土している。最大径は胴部上位にあり口縁部は胴部から「く」の字状に屈曲して付く。底部径が比較的大きく、安定感のある小型壺である。器面外面にはヘラ磨きが施されている。

壺形土器

台付壺形土器である。口縁部は単純口縁のもの（8-4、6-33-3）と口縁端部にハケ状工具により刻目を有するもの（8-5、7-12-7、8-20-5、6）とがある。口縁端部に刻目を有する壺が多くなる。口唇断面は、1期に比べて丸味を帯びてくる傾向にある。頸部の屈曲がきつく、口縁が外反し、またⅠ期よりも口縁の長さが短くなる。最大径は胴部中位から上位にある。脚部については内湾気味に開いていく。器面外面はハケ調整を施すものが大半であるが、その後胴部にヘラ削りを施すもの（8-6-12-8）もある。口縁部には一様にハケ調整が残されている。器面内面については、口縁には磨きあるいはハケ目による入念な調整が施されている。

鉢形土器

第28号住居址より出土している。平面の形状が橢円形をなし片側が片口状に作り出されている。底部よりやや内湾気味に直立して立ち上がり、器面外面の整形はハケ調整後にヘラ磨きが施されている。底部に厚味をおびている。

蓋形土器

蓋部はやや内湾気味であるが直線的に拡がっている。外面ともに入念にヘラ磨きが施されている。つまみ部上面に平坦面を残している。1期の蓋と比べ蓋部が浅くなる。

第III期土器群

第III期土器群が検出された住居址は第9・13・22・24・27号住居址の5軒である。器種は壺、瓶、鉢であった。第III期土器群は完形品を数多く出土しており、一軒の住居内に残された土器も明確であった。にもかかわらず、第9・13・24号住居址からの出土土器に、高環等の器種を欠いていた。第I・II期と比較して、より古墳時代的様相を示すが、一遺跡としての位置づけにとどまる感が強い。第9号住居址からは、本遺跡唯一のS字状口縁台付壺が検出された。しかし口縁部破片にすぎず、その出土の僅少な点に疑問が残される。

壺形土器

広口壺形土器、片口壺形土器等、形状に多様性がみえる。第Ⅲ期の壺形土器はいずれも単純口縁のもので、第Ⅰ・Ⅱ期と比べ、調整が派手で非常に丁寧に磨きが施されている。形態別に分類すると、A類・最大径を胴部中位からやや下位に有し頭部から緩やかに口縁が外反するもの(9-4, 5-13-4)、その中でも胴部上位の径が短く、肩部が緩やかなもの(22-1, 27-2)、B類・胴部最大径と口縁径に差が少なく頭部がさほど収縮しない、いわゆる広口壺と呼ばれるもの(13-1, 2)である。その中でも口縁径が胴部最大径を上回るもの(21-1)と、口縁が片口状に作り出されたもの(27-1)とに分けられる。A類壺形土器は、最大径を胴部中位より下半にもち球形に近い形態をなしている。胴部から口縁部への移行は緩やかで頭部が立ち気味に外反する。底部から胴部への立ち上がりは明瞭である。器面外面にはヘラ磨きが施されている。このような土器は、県内では類例に乏しい。B類壺形土器は、胴部中位に最大径をもち球形を呈する。頭部が短く立ち気味に口縁が外反する、器面外面は丁寧にヘラ磨きが施されている。第9号住居址から出土したものは、京原遺跡(伏原他、1973)4号住居址出土の広口壺形土器、西田遺跡(山崎他、1978)1号方形周溝墓出土の壺形土器に類似が認められる。またいずれの遺跡でもS字状口縁壺形土器を共伴している。第29号住居址出土の片口壺形土器についても京原遺跡、坂井南遺跡(山下他、1984)等に類例が求められる。

甕形土器

いずれも台付甕形土器である、口縁部形態は単純口縁のもの(9-6, 8, 9, 10-13, 11-24-4)、口縁端部が折り返されるもの(24-2, 3)、口縁端部にハケ状工具による刻凹をもつもの(13-9, 10-24-5)の3形態に分類される。最大径は胴部中位にあるものが大半であるが、Ⅲ期に至って頭部に膨らみのある器形が頭者になる。また胴部から口縁部への移行は、急激に外反するものの、頭部が立ち気味になり強く外反するものがある。器面外面の調整は3種類の技法が用いられている。第9号住居址から出土した甕にみられるようにヘラ削りを残すもの、ハケ調整を施すもの、そして甕形土器としては珍しくハケ調整後にヘラ磨きを頭部に施すもの(24-2)である。胴部の形態は、Ⅱ期の段階において内湾して開いていたものが、直線的に聞く傾向になる。Ⅲ期の甕は、胎土も緻密で構造も入念に施されているものが多い。折り返し口縁の甕については、住吉遺跡、一城林遺跡に類似があるが、特異な形態を示すものである。

第9号住居址からS字状口縁台付甕の口縁部破片が出土している(9-11)。口縁部屈曲部の破片であるが、周辺遺跡あるいは県内一般にみられるものとは、作り、胎土、焼成とも明瞭に性格を異にするものである。他遺跡の場合砂粒を多く含み、器面がザラザラした感じを与え、屈曲部の作りも難であるのに対し、本遺跡出土の十器は、胎土、焼成とも良好であり、丁寧に作り出しがなされている。屈曲部上位の立ち上がりは短く、下位の方が長い。器面はナデが施されており上位にはヘラ状工具による列点状の文様が残り、下位にはハケ状工具による縫の調整が残されている。胴部が検出されなかったのでS字状口縁台付甕の分類、編年的位置づけをどこにするか

というには困難があるが、比較的古い段階に位置づけたい。また在地で生産された S 字状口縁台付甕とは区別して考えたい。

鉢形土器

第13号住居址から2点出土している。器形、容量ともほぼ同一のものである。底部より内湾氣味に直立して立ち上がったものが口縁先端部付近で外反する形状をなす。器厚は第I・II期のもとの比較して薄い、器面外面は縱方向に丁寧なヘラ磨きが認められる。

まとめ

第I期から第III期までの変遷をたどってみたわけであるが、県内資料と関連づけ総括をしてみたい。壺形上器の変遷は、口縁部の形態変化が、I期一折り返し口縁をなし装飾がなされるものII期一折り返し口縁をなすが文様を施さないもの、III期一單純口縁となるものとたどることができる。器形の変化は、III期の広口壺の出現と胴部の球形化が指摘される。第I期土器群は、口縁端部への貼り付けと、小壺より岩清水遺跡出土の土器群と同一の時期に位置づけられよう。第II期土器群は、駿河湾地方の影響をうけた住吉遺跡第1号住居址出土の土器群、やや様相が異なるが、城林遺跡出土土器群とはほぼ同一時期と考えられる。第III期土器群は地域性が次第に薄れ県内に広く分布する土器群であり、京原遺跡、西川遺跡、坂井南遺跡等が同時期に該当するものと考えられる。しかし本遺跡からは器台の出土をみなかったことからあるいは、これらの遺跡に先行する可能性も残されている。

壺形上器の変遷は、形態からは明確にできなかった。傾向としては、頸部から口縁部にかけての長さが次第に短くなりその収縮とともに胴部から口縁にかけての移行が大きく外反するようになる。また脚部の形状は内湾氣味に開くものから直線的な開きに変化している。口縁部形態については、口唇部断面が方形を呈するものから丸味を帯びてくるようになるが、単純口縁、刺目を有する口縁は全時期を通してみられた。器面調整についても、ハケ調整、ヘラ削りはIからIII期共通してみられた。口縁形態、器面調整の違いは時期的な変化というより、むしろ一軒一軒の住居のもつ特色として本遺跡ではとらえられる。

第III期土器群には、S字状口縁台付甕が共伴するものと考えられるが、出土資料に欠いたことはIII期がS字甕出現以前の時期に位置づけるという時間的な違いとみなすことができるかどうかむしろ本遺跡では、第III期以降の遺跡の断絶と考え合わせて、S字状口縁台付甕をもつ東海地方の文化流入を受け入れなかつたなんらかの地方性があったように考えられる。

本遺跡周辺では在地生産と思われる同器種の出土があり対峙した丘陵からも出土していることからもこのことが類推される。甲西町住吉遺跡についても同様のことがいえると考える。本遺跡出土の土器を駿河湾地方の年代に位置づけると弥生時代後期の目黒身式以降、大鄭式土器の範疇に属するものと考えられる。また駿河湾地方には高環形上器の出土割合が比較的少ないことが知られている。本遺跡においてもS字状口縁甕の出現直前までこの影響を受けたかの如く、同器種

の出土がなかった。

器台とともに器種の次如については、他器種の土器による代用が考えられるが、今後の課題としておきたい。また、富士川上流域に集落を構成している東海地方色の強い集団が、中巨摩、南巨摩郡地方に集落を残さなかつたかどうか、今後の調査に期待するものである。^{註4}

中部地方の特色を示す箱清水系の土器は、明確ではないが大型の打製石斧を出土した第20号住居址から口縁部片が一片認められた。この一点の他は形状・文様とも同系統の土器は伴出しなかつた。釜無川流域には備播文系土器を多数出土した金の尾遺跡（木本他、1979、1980）が知られているが、本遺跡にはその影響が土器に反映されなかつたようである。

本遺跡からは県内資料の少ない壺形土器を多数出土しており、壺形土器による時間的位置づけに貴重な資料となりえた。壺形土器にみる変遷とともに、山梨県内の編年を地域性と合わせて今後考えていく。

（田居 直之）

註1 六科丘遺跡周辺には曾根遺跡（清水他、1984）、上の山遺跡（清水他、1985）があり近年調査が行なわれた、この2遺跡より出土したS字縁との比較を行ない清水との検討により、明瞭な違いが認められた。

註2 月の輪遺跡群（湯川他、1981）における壺形土器分類のA 2の段階に類似すると考えている。

註3 第3、9号住居址からの壺形土器は単純口縁のものが主体であり、第12号住居址からの壺形土器は刻目の口縁のものが主体であった。また折り返し口縁の壺形土器も第24号住居址から出土しただけである。

註4 壺形土器の頸部より上部が第3、8、33号住居址から出土しているが、これらを器台として使用した可能性もある。

註5 丘陵II「指久保遺跡出土の弥生土器」田代孝、中山誠二が壺形土器の変遷を試みている。

S字口縁の変遷から時間的変遷をたどっているが、山梨県の地域性を考えると壺形土器を慎重に扱う事が必要と考える。

第2節 集落について

1 住居址の様相

六科丘遺跡は、古地前邊円頂丘から古地面にかけて立地するものであるが、なかでも弥生時代末の集落は、古地面へと続く西向逆傾斜面の中位から下位にかけて、標高428m～438mの間に展開している。調査面積約25,000m²から、確実に弥生時代～古墳時代初頭のものとして認定した遺構は、竪穴住居址33軒、掘立柱建物遺構4棟、小野穴遺構2基を数えた。遺構確認面が耕作等によりかなり搅乱・削平を受けていた事や、調査の未熟さ等もあり、遺構の見落としの可能性を否定するものではない。しかし先述した様に調査区域外にあっても抜根、表土排土作業時における立会、遺構確認を実施しており、本遺跡の遺構についてはほぼその全容を把握したものと考えている。

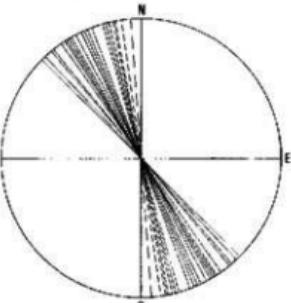
各住居址説明中でも述べた様に、本遺跡の住居址については、そのほとんどが何らかの擾乱を受けしており全体を判然としたものは少ない。その為、主軸方位、規模、平面形等について床面レベルで明確にしたものは少なく、掘り方平面、あるいは掘り方に残された柱穴の痕跡等によって推定せざるをえない部分が多くあった。

主軸方位（第164図）

主軸方位は北～北西方向を指し、N-4°-WからN-45°-Wに集中している。等高線との関係でみると、ほとんど方位を同一にして構築されており、3・6・9・11・14・23・25号の各住居址が僅かに斜行している。しかしこれについても、現在測定された等高線が、集落が機能していた当時の微地形を正確にトースしていたものとは思われず、現在認められる等高線と主軸方位に観察された僅かな相違が往時も存在したか否かは判定しがたい。また45°という主軸方位の振幅の巾も等高線の摆曲に規定されたものと思われ、本来は北北西を中心とするより狭い範囲を指向していたものであろう。

ともあれ、集落全体がほぼ同一に方位をとるという主軸の有り様は、強い齊一性を窺わせ、本集落の特徴の一つともいえよう。この事は、本集落が限定された期間に、また単一性の強い集團によって営なまれた事を示すものであろうか。

平面形態



第164図 住居址主軸方位図

確認した33軒の住居址中、全容を検出したものは僅か2例にすぎない。他は推測に依る部分が多くかった事は否定しないが、2隅部以上を検出した住居址に関しては、遺存した隅部及び辺部の状態、柱穴の配置関係等から、できる限り原形の推定に務めた。その結果27軒の住居址に関しては平面形を明らかにした。内訳は下記の通りである。尚（ ）は可能性が強いが断定しれないものである。

- 1) 柚円形 9軒 (11、02、13、16、17、20、31、32、33号住居址)
- 2) 隅丸長方形 15軒 1、2、3、4、5、6、8、14、18、21、22、23、25、27、29号住居址
- 3) 隅丸方形 2軒 24、28号住居址
- 4) 方形 1軒 9号住居址

柚円形と隅丸長方形に関してはその判別に迷うところであったが、長辺が直状を呈するものを隅丸長方形とし、弧状を呈するものは柚円形とした。またそれぞれの形態に分類したものの中には、形状が歪み不整○の形、としなければならないものも含まれているが、基本的な形態を重視して分類した。

一般的には、関東南部、静岡東部における弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての住居址形態の変遷は、脛張り隅丸形（柚円形）→隅丸（長）方形→方形へ移行するといわれている。しかしこの変化は全体的な傾向であり、1集落内で複数の住居址形態が混在する事は從来から指摘されるところでもあり、その様な有り様自身が集落に於ける社会構成の歴史的表現とも考えられる。

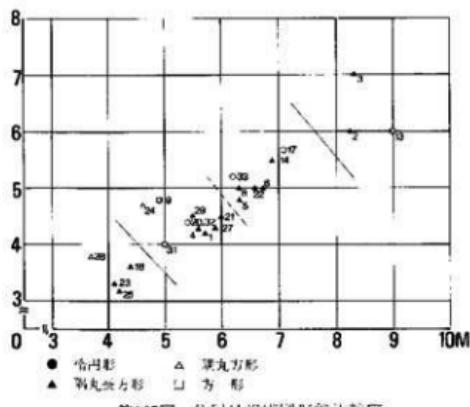
さほどの時間的連続性が考えられない本遺跡にあっても、4者の混在が認められる。隅丸長方形が16軒、柚円形が9軒と両者で25軒を占め、一方の軸に対して他方の袖を延ばすものが、主体を占めるといえるが、時間的連続性の中でその変化を把握する事は不可能であった。しかし唯一「方形」を呈する9号住居址に於ては、本遺跡にあっても比較的新しい様相を示す上器群を持つと共にS字状口縁甕破片を出土するただ一軒の住居址であり、その有り様は非常に興味深い。

ところで、住居址形態と規模との関係をみると、「方形」「隅丸方形」を呈する住居址は小型・中（小）型に所属する。また小型住居址は「方」「長方」にかかわらず全て隅丸形を呈するものである。柚円形を呈するものは、大型に1軒、中型に8軒が認められるが、大型住居址である13号住居址も、長辺は直状に近く、柚円形と隅丸長方形とのいわば中間型であり、従って柚円形平面を呈する住居址は基本的に中空住居址に認められるものであろう。隅丸長方形は全ての規模の住居址に認められる。長・短軸比は小型住居址が、1:0.78、大型住居址は1:0.72を測り、僅かではあるが規模を大きくするに従い、長軸を延ばす傾向が窺える。

規模（第165図）

33軒の住居址中、推測も含め規模を測りえたものは24軒である。そのうち最大のものは8.3×7.0m (58.1m²) を測る3号住居址、最小のものは4.1×3.3m (13.5m²) の23号住居址である。計数的には図（第165図）の様に遷在するが本遺跡に於いては、特に短軸方向を推定値に頼ることが多い為長軸規模を主要な規準として相対的に以下の様に分類した。

- 1) 大型住居址 長軸8m以上。2・3・13号住居址（3軒）
- 2) 中型住居址 長軸4.5以上、8m未満。。更に30m²を境界として（大）（小）に二分した。
（大）面積30m²以上、5・6・8・14・17・22・33号住居址（7軒）
（小）面積30m²未満、1・4・9・20・21・24・27・29・31・32号住居址（10軒）
- 3) 小型住居址 長軸4.5m未満 18・23・25・28号住居址（4軒）



第165図 住居面積別形態比較図

本遺跡における床面積平均値は 28.9m^2 （ $\approx 30\text{m}^2$ ）であり、住居面積分布の中央に位置する値である。計測しえなかった9住居は関しても、その残存部及び、柱穴間距離等から推定すると、ほぼ中型住居の範囲に入るものと思われる。

小型住居としたものの床面積平均値は 14.2m^2 である。23号、25号、28号住居等では他住居例に比し柱穴を壁に近づけて上屋を構築する事によって、実質的な床面積の増大を図っている事がみとれる。単純な一次元的計測値では小型住居と中型住居の床面積平均値の差は 9m^2 程度を有しているが、実質的な居住空間の差はより縮まる可能性も認められる。しかし、この場合物置スペース等としての實際の空間は極端に縮少化されるであろう事は否めない。2組認められた拡張住居は、両者共ほぼ相似形を呈して擴張され、21号・22号住居は 6m^2 、32号・33号住居は 8.5m^2 規模を大きくしている。その際、21号・22号住居はほぼ同位置に柱穴を設けたものと思われるが、32号・33号住居は柱穴間距離を $60\sim70\text{cm}$ 程延長している。床面積の増大に伴って、上屋構造も当然拡大すると考えられ、それに対する対応であろう。

全体的な傾向としては、小型住居は方形に近く、規模を大きくするに従い長軸方向をより延長する傾向が窺える。

住居（内）施設

本遺跡住居に於て、並内施設としては、炉・同溝・柱穴・貯藏穴・出入口施設・壁際ピット・壁外ピット・ベッド状遺構等があげられる。一般的な意味で住居内施設と規定した場合、壁外ピットを除外し、床下土壙のピットを含めるべきであろうが、ここでは、住居面に伴って、つまり住居使用時に同時に利用されたと考えられる諸施設に関してとりあげた。

〈炉址〉21軒の住居から22ヶ所の炉址が検出された。すなわち大型住居である3号住居から2ヶ所の炉址が検出された他は1住居址1ヶ所のがを持つものである。検出されなかつ他の

大型住居址と中・小型住居址との割合は単純計算では1:10の数値がえられる。また便宜的ではあるが、長軸×短軸によって床面積を計測した平均値は大型住居址 53.9m^2 、中型（大）住居址 33.2m^2 、中型（小）住居址 23.3m^2 、小型住居址 14.2m^2 を測る。大型住居址はほぼ $50\sim58\text{m}^2$ の間にまとまり、中型住居址中最大規模である17号住居址の 40.5m^2 に比しても隔絶した規模を有し、普遍的にも相対的にも「大型住居址」の要件を満たしているといえよう。

住居址についても址内に於いてその想定位置に若しく掘乱を受け確認をなしえなかつたものであるが、18・27号住居址に関しては中央部北寄りから炉の検出をなしえず、本来炉をもたない住居址であった可能性を否定するものではない。また15号住居址では中央やや北寄りから焼上溜りが検出された。これは床面への掘り込みを確認しえず焼土の状態史に上面から出土した土製勾玉の存在等からも、炉址と考えるよりも、他の性格である可能性が強い。本遺跡に於ける炉址は、3号住居址に存在する副炉ともいべき小型の炉址を除くと全て住居址中央から、北側の柱穴間線の間にすなわち所詣「内区」の北半部に位置するものである。また3号住居址の副炉についても東側柱穴間線の内側すなわち「内区」内に設けられていた。住居址中央に炉を持つものは、24号・28号住居址の2例であるが、この2住居址は共に隅丸方形を呈するものである。炉は全て地床炉で、平面形は不整円形～円形を呈するものである。炉石の使用が確認されたものは、4・5・13・23号の各住居址であるが、基本的には炉の住居址内部側に使用されている。また炉址に伴うとも考えられる小ピットが検出された例は3・4・9・17・24号の各住居址があるが、これは9号住居址を除くと全て炉石とは逆に、炉の住居址外側に設けられており、炉に伴う施設と、炉の使用状況を物語るものであろうか。いずれにしても本集落に於ける炉址はほとんどが住居址中央やや北寄りに位置し、ほぼ同形態の地床炉であることは、これも強い統一性を感じさせる。

柱穴>33軒の住居址中、柱穴を確認した住居址は28軒である。検出しえなかつた5軒の住居址に於いても、削平が激しく柱穴の存在自身を否定するものではない。すなわち本集落に於いては、基本的には全ての住居址が柱穴を持つものであると考えられる。

柱穴の形態・規模に関しては、掘り方面からの検出が多かった為明らかにしえないが、9号・13号・24号住居址等では柱根の状態がよく窺えた。柱穴の掘り込みは、掘り方底面より更に深く掘りこむものが多く、床面から30～40cmを測るが中には50cmを超えるものが含まれる。柱穴の数、配置は、4本主柱穴のものが大多数を占めるが、5・11・13・16・22・26号住居址は柱穴が2ヶ所しか検出されず全て長方形に配列された一方の列のみの検出であり、また33号住居址は4本主柱穴の南西隅部柱穴を欠いた状態であるが、これらは住居址の造作部等から考えて、本米4本柱であったものが攪乱の為に尖なわれたものとしたい。4号住居址については、33号住居址と同様な状態で北西隅部柱穴を欠いているが、床面の比較的良好な部分でもあり、3本柱であるか4本柱であったのかについて断定しえなかつた。大型住居址である2号住居址は片列で3本の柱穴が確認されており、6本主柱穴の住居址である。また15号住居址は遺存が悪くピットは1ヶ所検出されたのみだが床面造作部等からは柱穴ではない可能性が強い。4、6本柱穴は平面長方形・方形を基準に配置されているが、6・18・21・22・23・27・28・29・32号住居址は矩形・平行四辺形を呈しており、特に小型・中(小)型住居址にその傾向が認められる。以上本集落は数軒を除いて4本柱を基調として上屋を構築されたものと思われるが、上屋構築に關係するものとしては他に壁外ピットが3・4・5号住居址に認められた。規模、形状にさほど規格性がなく、間隔も不定であったが住居址外をほぼ一巡する様に検出された。検出された住居址の規模にバラつきは

あるものの、全て扇形に抵かる集落の扇頂部に位置し、かつて同一等高線上に並ぶ住居址である事は興味深い。

〈貯蔵穴〉一般的に弥生時代後期の住居址では柱の反対側の壁に接してやや大型のピットが設けられ貯蔵穴と呼称されている。その目的・機能に関してはいまだ不明な点が多いが、ここでは「貯蔵穴」としてとり扱った。本遺跡では16軒の住居址から貯蔵穴が検出された。形状は円～楕円形を示すものが主流を占めるが、4号住居址は隅丸方形を呈している。規模も様々で最大は11号住居址の115×85cm、最小は21号住居址の径35cmである。擾乱の為2・7・10・15・16・19・22・26・30号住居址ではその存在を明らかにしえなかった。それら以外の8軒の住居址（5・14・18・24・25・27・28・31号）では貯蔵穴は付設されなかつたと考えられるが、内訳は小型1軒、中（小）型3軒、中（大）型2軒となり全体的に貯蔵穴を持たない住居址は比較的小規模である傾向が認められる。他に貯蔵穴周囲に土堤状盛り上がり（凸堤）を巡らすものがある。3・6・8・13・17号の各住居址で、3号住居址では凸堤内側に小ピットが設けられ、13号住居址では同じく凸堤内にはほぼ同規模の2穴の貯蔵穴が設けられた可能性もある。また3・6号住居址では凸堤内側に、8号住居址では凸堤外周に沿って土器が認められた。凸堤の付設された貯蔵穴を有する住居址は大型（3・13号）が2軒、中（大）型（6・8・17号）の3軒であり、規模の大きな住居址に認められる傾向にある。他遺跡の類例としては、県内では西田遺跡（塙山市）1号住居址・京原遺跡（境川村）4号住居址・久保屋敷遺跡（垂崎市）1号住居址・坂井南遺跡（同）1次調査1・2・6号住居址・同B区2・4号住居址などがある。本遺跡での有り方としては規模の大きい住居址に付設される傾向にあるが、他遺跡例では比較的平均規模の住居址中に散在する傾向にあり、坂井南（1次調査）1・6号住居址などは逆に小型住居址に認められるものである。集落内でのいわば上堤付貯蔵穴を有する住居址の占める割合は、西田1：9、京原1：4、久保屋敷1：4、坂井南5：18、本遺跡5：33である。土堤付貯蔵穴の機能、時期等未だ明らかにされているとはいいがたいが、それを有する住居址が1集落内で占める割合・集落構成上の位置など多様な有り方が窺える。

〈ベッド状遺構〉他に注目すべき住居址内施設として3・21号住居址で認められたベッド状遺構的な床面の盛り上りがある。両者共に不定形を呈し床面からは3～10cm程の高さを有している。3号住居址のものは入口部左側で壁に接して認められたもので、上堤付貯蔵穴と相対して存在し、上面には2～3ヶ所の小ピットが設けられ、床下からは上面が貼床で覆われる床下土城的ピットが検出された。21号住居址のものは北壁（が東）際に設けられ上面に貼床の痕跡が残る。

両者共、形状、位置共に共通性が認められず、上面も一部（21号住居址）に貼床の痕跡が残る程度であり構築もさほどしっかりしたつくりではない。床面からの立ち上がりは緩やかではあるが明確に段差を意識して構築されている。近隣の遺跡例としては、若干時代は異なるが、坂井南遺跡B地区8号住居址に認められ、本遺跡3号住居址例と同様、がと相対する壁の向って左隅部に設けられている。弥生時代の住居址に認められる所謂ベッド状遺構との関連が注目されるが形状・

住居址内での位置等疑問が残るところである。しかし住居址内他部位とは明らかに区画して設けられておりその性格・機能は注目される。

＜出入口施設＞弥生時代住居址の出入口施設は、従来主張には炉に相対する壁の住居址長軸線上に想定され梯子穴とされる斜行ピット、住居址の張り出し部、壁外ピット等がその存在を示すものとされてきた。

本遺跡に於いても同部位にピットが存在する住居址は2・3・6・8・9・20・24・32号住居址と8軒を数える。20、24号住居址は2本1組のピットが認められ、また3号住居址も2本1組となる可能性が強い。他には長軸線上に1ヶ所ピットが設けられている。長軸線上に存在するピットに関しては、棟持柱の機能なども考えられているが、ここでは住居址の規模・炉・柱穴との位置関係等から出入口施設としておきたい。

また4号住居址では、長軸線上で炉の相対する壁中央際にやや大きめのピットが設けられ、薪焼穴の可能性を残しており逆に炉の偏った側の壁（北壁）中央部に3穴1組のピットが設けられ出入口施設の可能性を示している。本址は、壁に沿って内・外にピットを有する住居址で、それらの性格を特定する事は難かしいが、北壁中央に存在するものが出入口施設とするならば、本遺跡にあって特異な例といえ、大型住居址である3号住居址と向いあうかたちとなる。

本集落に於ける住居址内施設の有り方は、基本的には、北西一南東方向に主軸を持ち南東壁中央部に出入口施設を、住居址中央やや奥に炉を構築するものであろう。

配置（第166図）

六科丘遺跡から検出した住居址は33軒にのぼるがそれらは西向傾斜面中位から下位に占地している。全体的には標高438m程の9・10K区を扇頂部とし、428~429mの等高線を扇端縁として80°~85°に披がる扇形を呈して展開しており、この扇形の範囲はグリッド数にして69グリッド、約6,900m²となる。この分布範囲外では住居址の存在を示すと考えられる、落ち込み、焼上、土器窪り等は検出されなかった。従って、六科丘遺跡に於ける集落は、この扇形を示す狭い範囲内には33軒の住居址、4棟の掘立柱建物遺構等によって營なまれていたものと考えられる。

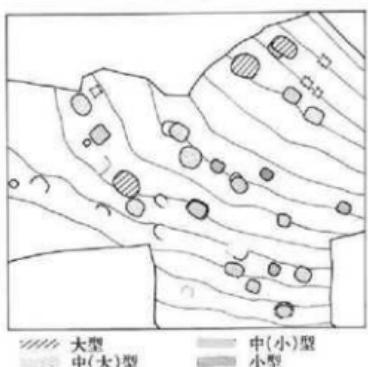
これら33軒の住居址のうち、重複して存在したものは5例10軒（1号・2号、7号→8号、19号→20号、21号→22号、32号→33号）を数える。このうち21・22号住居址、32・33号住居址の2例については拡張住居址と考えられる。これらの重複例は1・2号住居址例をのぞくと、中型住居址として分類した住居址間に認められたものである。6本柱を有すると考えられる大型の2号住居址が、中（小）型の1号住居址上面に重複して構築されている事は2号住居址の性格、1号2号住居址間の関係をとらえるうえで興味深い。

この集落範囲内での住居址等の配置を平面的に観察すると大略次の様な特徴が看破しうる。第1点として、扇頂部で他の遺構と距離を保ちかつ一定程度集中する1群の遺構が認められる。1号~5号住居址及び1号~3号掘立柱建物遺構がそれであり、これら8軒の遺構は更に1m程の比高差を有しながらそれぞれ同一等高線上に並ぶ。3~5号住居址の西には農道が走っており、

住居址の存在した可能性を否定するものではないが、全体的には他の住居址群から直線距離にして20~30m、比高差にして3m程の間隔を保っていると考えられる。この一群は1・2号住居址例でも理解しうる様に全て同時期に存在したものとは考えられないが、この空間が集落内に於て他から隔れていた可能性は否めないであろう。

第2点として、住居址がほぼ同一等高線上に並んで存在している。扇頂部に占地する一群については先に述べた通りであるが、それら以外についても、その傾向が窺われる。すなわち、7・8・17・18・19・20・(23)・25号の各住居址が433mの等高線上に並び、次いで6・9・10・13・(14)・15・21・22号の各住居址が431mの等高線上に並んで構築されている。更に11・12・16・26・28・29号の各住居址が430mの等高線上に、30・32・33号の各住居址が、428mの等高線上に配されている。住居址のこの様な並び方が集落構成上におけるグループのあり方を反映したものであるかについては俄には判断しがたいが、集落内での居住域の選定に集落総体としての何らかの規制が働いていた事を窺わせるものである。

最後に住居址規模との相関関係であるが、まず大型住居址である2・3・13号住居址及び、そ



第166図 規模別住居址分布図

れに次いで40m²台の規模を有する17号住居址が、扇形のいわば放射線上に存在している。次いで、扇形の扇端部側から扇頂部に向って、すなわち斜面に向って右側に比較的小規模の住居址が集中する傾向が認められ、小型住居址(18・23・25・28号)は全てが、また中(小)型住居址はその8割(4・20・24・25・27・29・31・32号)が集落南半部に存在する。中でも一番急斜面を呈する南側扇端部に集中する一群(26・27・28・29・30・31・32・33号)は最大規模の33号住居址をとっても32m²程であり、最小規模の住居址(1・9号)でも24~25m²を測る北半部における住居址とは異った有り方を示している。

掘り方 (第167図)

- A 当該期住居址における掘り方について整理・分析を加えた例としては、「床面の二重構造」として月の輪平・南部谷戸遺跡(静岡県富士宮市)で注目され、次いで向原遺跡(神奈川県平塚市)などでも目的意識的に調査・分析が加えられている。^{註3}
- B 本遺跡にあっても、削平等の為床面に於いて住居址の形態・規模等を明らかにできなかった事もあり極力掘り方の検出に務めた。その結果削平が著しい10・30号住居址を除く他の全ての住居址で掘り方が認められた。そ

第167図 掘り方模式図

のうち、形状を把握しえなかつた7・15・26号住居址及び拡張前の住居址上部に構築された、22・33号住居址を除く26軒の住居址の掘り方をA～Cの3種に大別した。

A類 掘り方が床下全面に及び、底面は平坦或いは凸レンズ状・凹レンズ状を呈するものである。全体的に浅く、底面の凹凸が激しい。(1)・(2)・(3)・6・18・21・23・24・27・29・32号住居址(11軒)

B類 壁沿いを幅1m程に亘って深く掘り込み、住居址中央部が浅く掘られた台状部をつくるものの(B₁類)、壁際を一旦浅く掘り段部を形成するもの(B₂類)とが認められた。

B₁類 (4)・8・9・11・13・14・16・20・31号住居址(9軒)

B₂類 12・17・25号住居址(3軒)

C類 B類とは逆に、壁沿いを浅く中央部が深く掘り込まれるが、壁沿い部は掘り方底面に貼り床土を薄く貼ったのみである。(5)・19・28号住居址(3軒)

尚形状を明確にしえなかつた、7・15・26号住居址もA或いはB類に属すると考えられる。

A類の掘り方を有するものが全体の30%弱、B類のものが39%、C類が10%弱となる。住居址の形態、規模との関係にふれてみたい。まず規模との関係については、ほぼ全ての住居址が掘り方を有しており、住居址の規模と掘り方の有無とには何らかの関係は認められなかつた。しかし掘り方形態別に住居址規模との関係をみると、A類では、大型住居址、2軒(1・2号)中(大)型住居址1軒(6号)中(小)型住居址6軒(1・21・23・27・29・33号)小型住居址2軒(18・23号)となる。次いでB類では大型住居址1軒(13号)中(大)型住居址3軒(8・14・17号)中(小)型住居址4軒(4・9・20・31号)小型住居址1軒(25号)となる。最後にD類は中(大)型住居址1軒(5号)小型住居址1軒(28号)となる。従って資料数の少ないC類を除くと、全体的にA類は大型及び小規模の住居址に、B類は平均的規模の住居址に伴うものといえよう。次いで形態との関係でみると、A類では椿円形1軒(32号)隅丸長方形9軒(1・2・3・6・18・21・23・27・29号)隅丸方形1軒(24号)となる。B類は椿円形7軒(11・12・13・16・17・20・31号)隅丸長方形4軒(4・8・14・25号)方形1軒(9号)となり、C類は隅丸長方形1軒(5号)隅丸方形1軒(28号)である。全体的な特徴として、A類は隅丸長方形を主体とし、B類は椿円形、隅丸長方形が主流を占めるものといえよう。

掘り方の深さについてみると、A類が平均5～15cm程であるのに対し、B類では方台状部が5cm強で、壁沿いでは20～30cm以上掘り込まれている。埋土は1～2層に分けられ、ほぼロームブロックを多量に含んだ弱粘性茶褐色土で、その上面をローム小ブロック・黒褐色土粒及び小礫粒等で構成された貼床土がおおい、強く固められている。従ってB類の方台状部、B₂類壁際部、C類壁沿い部では、貼床層と地山(掘り方底面)との間に僅かに掘り方埋土が間層として認められる程度である。再度平面形態に注意すると、B類としたものの方台状部が、ほぼ各住居址の「内区」と一致することが観察しうる。勿論、13、20号住居址の様に「ズレ」が認められる例も存在するが全体的には方台状部の四隅に柱穴が配置され、その上面が「内区」となっている。

こうした掘り方の機能としては月の輪遺跡群においても、防湿・保溼効果をあげている。確かにローム層の場合、炎夏の乾燥時にはヒビ割れ、逆に降雨時には透水性の悪さの故に表面がベトつく事は我々も発掘時に於いて体験するところである。上部に上屋を持ち、炉で火をたき続けたとしても、こうした自然条件から自由であったとはいい難く、そうした課題を解決する一方策として床下に排水・保水性のよい土を入れ上面を床面とする方法を探ったであろうことは充分頷首しうるところである。

ところで、山梨県内に於て住居址の掘り方を記録した例は少なく、その出現時期をも含めて多くの事に言及する事は慎まなければならない。しかし管見にふれたところを列記すれば、曾根遺跡（櫛形町）で4軒中3軒の住居址から掘り方が検出され、全てA類であった。上の山遺跡（同町）では5軒中4軒の住居址から掘り方が検出され、A・B₁・B₂・C類が各々1軒ずつである。他に久保星遺跡（甲斐市）では「住居構築時の荒掘り」として指摘され4軒中2軒の住居址でA・B（B₂）類が各々1例ずつ確認されている。また西田遺跡（塩山市）では弥生後期から五頭期に至る8軒の住居址中7軒の住居址に掘り方が認められ、詳細は不明だがA・B両類が混在する可能性が強い。以上県内においても極く僅かな例ではあるが、当刻期の掘り方例が知られており、一般的な有り方と同様、掘り方をもたない住居址及び、異なる掘り方を有する住居址が同一集落内に混在する傾向を示しているといえる。

他に3号及び4号住居址から検出された床下土壤的ピットが注目される。共に貼床除去後に検出されたもので、掘り方埋設後に掘り込まれ、上面に貼床が施されている。住居址の構築から使用の過程における、どの時期に伴うものであるかは明確にしえないが床面使用時においてはその役割を終えていた可能性が強い。特に3号住居址に認められたものは、床面がベット状遺構的様相を示していた部位に認められたものでそれとの関係は興味深いところである。

出土遺物

土器については前節にゆずることとし、ここでは特殊遺物について触れてみたい。

本集落から出土している特殊遺物は、磨製石鋤1、土鉢2、土製勾玉1、磨製石製品1を数える。磨製石鋤及び磨製石製品は3号住居址床面から出土し、金の尾遺跡4号住居址例と同様のものである。土鉢は13号住居址覆土、5-0区確認面から出土し、共に土偶体であるが接合しなかった。上製勾玉は15号住居址中央に認められた焼土上面から出土している。3号・13号住居址は共に大型の住居址であり、15号住居址は小規模であるが柱穴の存在に疑問のもたれる特殊な住居址である。5-0区は13・15号両住居址が存在するグリッドで土鉢は両住居址の中間から出土した。

以上の様に本集落に認められた特殊遺物は大型住居址である3号・13号住居址及び、13号住居址を中心とする狭い空間に集中しているといえ、本集落における大型住居址の性格、内容を充明する上で示唆にとむものといえよう。

他に土器以外の遺物としては、砾石、石器数点及び金属製品15点の出土をみた。金属製品の内

訳は鉄製品14点、青銅製品1点である。住居址別にみると4号住居址1点、12号住居址1点（青銅製品）、14号住居址1点、15号住居址1点、20号住居址1点、22号住居址3点、29号住居址1点、31号住居址6点であり、このうち床面に認められたものは14号住居址1点のみで、4号住居址は壁外ヒット覆土、31号住居址は堆方埋土内から、他は住居址面上内から認められた。当該期における出土例としては比較的高い数値を示しており、また住居址が著しく削平を受けている事、出土位置の問題等全てを住居址に所属させる事については検討の余地を残しているといえよう。断定しえない資料での検討は慎まねばならないところであるが概略的には14号住居址を除くと中（小）型住居址に集中している事は留意するに値しよう。

尚12号住居址から出土している青銅製品についても、同様な資料が管見に触れず本址に所属させるべきかについて判断に迷うところであった。しかし出土位置が床面から僅かに浮いて認められた完形土器と床面とに挟まれた状態であった事から一応本址に伴うものとしたものであるが、その類例、性格等については大方の御教示をいただきたいところである。

2 挖立柱建物遺構

六糸丘遺跡からは4棟の掘立柱建物遺構が検出された。1・2号掘立柱建物遺構は6本柱（2間×1間）、3・4号掘立柱建物遺構は4本柱（1間×1間）の建物である。1～3号掘立柱建物遺構は集落の東側部に位置し、2軒の大型住居址等と共に1群を形成している。4号掘立柱建物遺構は北側扇形線中央に位置し、ほぼ集落の北端にあたる。1～3号掘立柱建物遺構は主軸方位をN-11°～19°Wにとり住居址の示す主軸方位とはほぼ一致する。4号掘立柱建物遺構はN-1°～E或はN-89°～Wにとる。1・2号掘立柱建物遺構は約1mの比高差を持って並立し、2・3号掘立柱建物遺構はほぼ同一主軸線上に連なっており同時存在した可能性が強い。本集落の掘立柱建物遺構は、1号掘立柱建物遺構柱穴覆土から弥生時代後期に属する土器片が出土しており、本遺跡では後出する遺物、遺構が認められない事などから、弥生期の集落の一構成要素と認定した。

弥生時代後期～古墳時代初頭に属する掘立柱建物遺構については近年その検出例が増加しつつあるようである。そのいくつかを例示すると、静岡県東部では、登呂遺跡（静岡市）、藤井原遺跡、目黒身遺跡（沼津市）、大間沢横道下遺跡（富士市）、月の輪平遺跡（富士宮市）等がある。次いで長野県南部では高松原遺跡（飯田市）に認められ、関東南部では成増一丁目遺跡（東京都）⁴⁵、根九島遺跡（神奈川県）などがあり、県内では保ノ下遺跡（渡辺、1984）がある。

登呂遺跡では4棟の掘立柱建物址（1間×1間、1間×2間）が検出され倉庫址とされている。藤井原遺跡では古墳時代前期の住居址86軒に対し、9棟の掘立柱建物遺構が検出され、1間×1間、1間×2間、1間×3間、2間×3間と多種に亘っている。集落内での占地は各住居址群に付属する様に散在している様である。大間沢横道下遺跡では住居址6軒に対し1棟の掘立柱建物遺構が検出され、目黒身遺跡では1間×2間の掘立柱建物遺構が1棟検出されている。遺跡全体では32軒の住居址が検出されているが、西ブロックとされた8～15号住居址（大潮期）の中央空間に存在しており、同住居址群に所属する可能性が強く、そうであるとすれば、住居址7～8軒に対

し掘立柱建物遺構1棟の割合となる。片の輪平遺跡では86軒の住居址に対して2棟の掘立柱建物遺構が検出され、それぞれの主軸方位は、住居址のそれのもっとも集中する方向と同一にしている。高松原遺跡は後期前半率光寺原式期を主体とする集落であるが、該期の住居址31軒（続く中島式期を含めて35軒）に対し8棟に及ぶ掘立柱建物遺構が検出され、集落南西部に位置し大型住居址が南北部に認められた事と対称を示す。そのうち5棟はやや中央に偏って1号圓溝址をL字型に開む様に、また他の3棟は集落最西端に位置している。規模は1間×2間のもの4棟、1間×3間のものが4棟となり、大小2型式のものが1対ずつ同時存在した可能性が強く、集落内部における小単位の一構成要素として大きな意味を持っていたものとされている。成増一丁目遺跡では弥生時代から古墳時代初頭に属する住居址42軒に対し3棟の掘立柱建物遺構が検出されている。当遺跡では集落の変遷を8期にとらえ、各期6～7軒の住居址で構成されたと認識し、3棟の掘立柱建物遺構は、IV・V・VI・VII期にそれぞれ伴うものとされている。従って住居址6～7軒に対し1棟の掘立柱建物遺構が存在していた比率となる。根丸島遺跡は弥生時代から歴史時代までほぼ統一的に営まれた集落遺跡であり、700余軒の住居址、8棟の掘立柱建物遺構等が検出されている。8棟の掘立柱建物遺構のうち1棟は確実に弥生時代後期に所属するものとのことであるが、現在資料整理中であり、詳細は明らかでない。

六科丘集落内における住居址と掘立柱建物遺構との構成比率をみると、ほぼ8：1となり日黒身遺跡、藤井原遺跡、天間沢横道下遺跡例と近似した数値を示している。集落内の景観的有り方は、比較的まとまって存在しており、高松原遺跡例と同様といえよう。また該期集落の縁辺部に占地しており、これは高松原・成増一丁目遺跡等と比較的似かよった様相である。更に大型住居址との関係でみると、集落の一部に大型住居址が、他半部に掘立柱建物遺構が存在する、高松原・成増一丁目遺跡例とは相反し両者が近接しかつ一群を形成する有様を示している。また地域的には静岡県東部にその検出例が多い様に見受けられる。これは登呂遺跡での発見以降目的意識的にその検出に務めた結果とも考えられ、他地域においても今後検出例が増加する可能性を否定しえない。

以上、僅かな管見に触れた例ではあるが、弥生時代後期から古墳時代初頭に認められる掘立柱建物遺構は、その出現時期も様々であり、その集落内における占地、他住居址との位置関係も多様性を持つ。集落の主要構成要素である一般的な住居址との関係、また様々な解釈がなされているが集落内において、ある特定の役割を担うものと思われる大型住居址との関係など、決して一樣ではない。これらは弥生時代後期から古墳時代に向い成長しつつあった、それゆえに諸矛盾を拡大させつつあった集団内における諸関係の有様を反映しているものであろう。

更には、当該期に於いて掘立柱建物遺構を有する集落と有さない集落とがみられることは集落を超えた共同体間の歴史的諸様相を表現しているものといえよう。

厳密な意味での歴史的性格については、今後の資料の増加を待つと共により精緻な分析・検討が必要とされようがともあれ剩余生産物の集積の場と考えられる倉庫址（倉庫を掘立柱建物遺構のみ

にもとめるべきではないとしても）の有り方は、該期における剩余生産物そのものの管理・蓄積の諸様相を反映しているものと考えられる。更には、該期における生産力の拡大、剩余生産物の増大を軸とした様々な社会的諸関係の歴史的変動の様相を物語るものといえよう。

3 集落の変遷と構成

以上述べてきた様に六科庄に弥生時代末から古墳時代初頭にかけて営まれた集落は、ほぼ住居址33軒、掘立柱建物遺構4棟、小塙穴通構2基等で構成されている。遺構の主軸方位、内部施設の配置等には強い統一性を窺わせるが、一方住居址の形態、規模などは多様性を示すものといえ、集落の時間的連続性も、伴出する土器から知られる限りではかなり限定されたものといえる。

ここでは、伴出する遺物（土器）、遺構の切り合い関係等によって集落の変遷をたどりつつ、その構成にふれてみたい。尚遺構各説で述べた様に住居址であるか否か確定が難しかった10・30号住居址については、時期決定が不可能であったこともあり、一応除外して考えたい。

集落の変遷（第168～170図・第62表）

伴出している土器を概観すると、六科庄集落は比較的限定された時間幅の中で営まれたものといえる。しかし土器の分析、遺構の重複、位置関係等によれば、すべてが同時に存在したものとは考えられず、ほぼⅢ期に分けることが可能であった。

出土土器の分析によるとⅢ時期に区分しうる。

I期は3・5・29号住居址及び、1号掘立柱建物遺構

II期は6・8・12・20・28・33号住居址

III期は9・13・22・24・27号住居址及び2号堅穴状遺構となる。

他の住居址については、遺物が少なかった事などもあり、出土土器による時期区分は不可能であった。

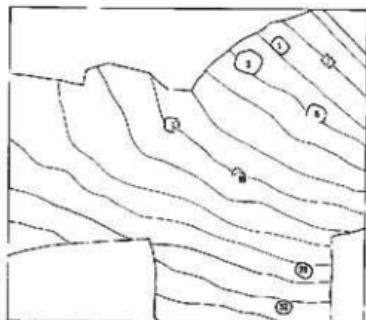
次いで重複等、遺構間の位置関係について検討したい。まず、本遺構で重複関係にある住居址は、1号→2号住居址、7号→8号住居址、19号→20号住居址、21号→22号住居址、32号→33号住居址となる。また位置関係から同時存在が不可能と考えられる住居址は13号→14号住居址、26号→27号住居址があげられる。これらのうち、8号、20号、33号住居址（II期）、13号、22号、27号住居址（III期）についてはそれぞれ土器によってその時期が決定しうるものである。従って、7号、19号、32号住居址はI期、14号、21号、26号住居址はII期といはざりたい。

ところで、今まで土器の様相及び住居址の位置関係によってI～III期まで区分けしてきたのではあるが、ここで掘り方の様相で検討してみたい。まず注目すべき第1点は、I期とした住居址はA・C類を採用し、B類はII期に於いて初めて出現することである。第2点はI期では主体を占めていたA・C類がII・III期では少数となり、しかも2号・6号住居址を除くと中（小）型及び小型住居址に於いてのみ採用されている事である。つまり全体的にはA・C類からB類へ移行する傾向が窺え時期決定をなしえない住居址のうち掘り方の明確にしえなかった15号住居址を除くと、他はII期あるいはIII期の時期をうながすやまりないのであろう。

また焼失住居址のうち6軒は時期が確定されているが、I期に該当するものは見当らず全てII・III期に所属している。従って残り3軒の焼失住居址に対しても、I期とするよりもII・III期の時期を与えた方がより自然であろう。

掘立柱建物遺構は4棟検出された。前記した様に、その位置関係からは1号・2号・3号掘立柱建物遺構は、集落扇端部に認められる一群に含まれる。この一群は、大型の2号及び3号住居址にそれぞれ付属する二期に区分する事ができる。従って1号及び2・3号掘立柱建物遺構についてもそれぞれの時期にあてはめて考へるべきである。出土土器の様相から1号掘立柱建物遺構はI期に該当するものであり、3号住居址に、2・3号掘立柱建物遺構はII期とし2号住居址に、それぞれ組み合わせる事が自然であろう。また4号掘立柱建物遺構は、上記した1・2・3号掘立柱建物遺構が存在する一群から離れて認められるが、これも同様に当該群から離れて存在する大型住居址である13号住居址と、セット関係にあるものと考えたい。

以上、概略的にI～III期に時期区分した訳であるが、いま少し詳しく各期ごとにその変遷を追ってみたい。



第168図 第I期の集落

第I期 第I期の集落は、1・3・5・7・19・29・32号住居址の7軒と1号掘立柱建物遺構で構成される。

その内訳は、大型住居址1軒(3号)、中(大)型住居址1軒(5号)、中(小)型住居址3軒(1・29・32号)、不明2軒(7・19号)であり、小型住居址が存在しない事は注目すべきであろう。櫛の方は△及び○形が認められ、住居址の平面形態は楕円長方形と橢円形を呈するものとが存在する。また焼失住居址は存在しない。炉は確認しうる範囲内では全ての住居址に認められ、大型住居址(3号)からは2ヶ所検出された。片蟲穴は5号住居址には付設されなかった可能

性があるが、他の住居址には全て認められた。

3号住居址は2基の炉とベッド状遺構を有し、更に磨製石器を出土し、3軒の大型住居址の中でもひときわ特異な性格を有するものといえる。

この期の集落は更に3小群に区分できる。

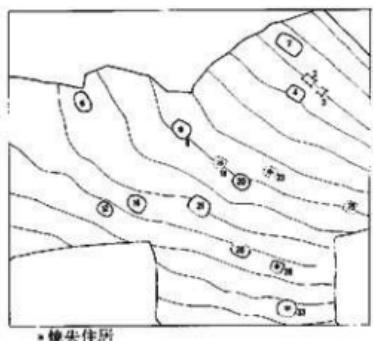
I-A群は集落扇頂期に位置し、大型住居址(3号)中(大)型住居址(5号)・中(小)型住居址(1号)及び掘立柱建物遺構(1号)からなる一群である。

I-B群は433mの等高線に沿って存在する一群で2軒の住居址(7・19号)からなるが、其に遺存状態が悪く詳細は不明である。

I-C群は集落西南部の急斜面に占地する一群で2軒の住居址(29・32号)からなり、共に中(小)型住居址である。

第II期 第II期の集落は、2号・3号掘立柱建物造構と、6・8・12・20・21・28・33号住居址及び、2・4・14・26号住居址、あわせて11軒+ α からなる。前者については先に述べた通りであるが、後者4軒をII期とした事については若干説明を要しよう。

2号住居址は、I期の特徴として、ヒモ状貼り付けを有する折り返し口縁壘破片が出土しているが、その出土位置は覆土上層であり、遺構に伴わない可能性が強い。また1号住居址を切って構築されており、3号住居址に対して1・5号住居址が、2号住居址に対して4号住居址がそれぞれ組みあわされて存在したと解釈した方が正合性があろう。



第169図 第II期の集落

4号住居址であるが、これは扇頂部の一群に所属し、1・3・5号住居址(I期)に統いて2号住居址と共に存在したとするのが妥当と考えた。また14・26号住居址については、それぞれ13・27号住居址との共存が不可能であり、I或いはII期のどちらかに属するものと思われたが、掘り方の形態がB類であるところからII期に所属せしめたものである。

尚、18・23・25号の3住居址についてはII或いはIII期に該当すると考えられるが、そのどちらかに決定する事はできなかった。その為文章中の「 α 」はこの3軒の存在を示すものと考え

ていただきたい。

これらの住居址の内訳は、大型住居址1軒(2号)、中(大)型住居址4軒(6・8・14・33号)、中(小)型住居址3軒(4・20・21号)、小型住居址1+ α 軒(28及び18・23・25号)、不明2軒(12・26号)である。平面形態では隅丸長方形、隅丸方形、稍円形を呈するもの三者が共存し、掘り方形態ではA、B、C類が認められる。焼失住居址は3+ α 軒存在する。炉は不明のものを除くと全てに付設されている。貯藏穴は14・28号住居址には設けられなかつた可能性が強い。この期に出現したD小群に含まれる21号住居址には、ベッド状造構が存在する。

この期の集落もまた、更に4小群に分けることができる。

II-A群 集落扇頂部に位置し、大型住居址(2号)・中(小)型住居址(4号)及び、掘立柱建物造構2棟(2・3号)からなる一群である。

II-B群 433mの等高線に沿って存在し中(大)型住居址1軒(8号)・中(小)型住居址1軒(20号)・小型住居址 α (18・23号)からなる一群である。

II-C群 集落西南部の急斜面に占地し中(大)型住居址1軒(33号)・小型住居址1軒(28

号) 規模不明住居址 1軒(26号)からなる一群である。

II-D群 该期から出現する一群で、集落扇端部中央の430~431mの等高線上に位置する。中(大)型住居址 1軒(14号)、中(小)型住居址 1軒(21号)、規模不明住居址 1軒(12号)からなる。21号住居址はベッド状遺構を持つ住居址で、B、C、D群の中間点に占地しており、孤立して存在するものとも考えたが、拡張後の住居址である22号住居址が、III-D群を構成している事からII期においてもD群に含まれた。

また集落北端に中(大)型住居址(6号)が孤立して存在する。これはD群との間に、後に大型住居址(13号)等が出現する空間地を残して占地しており、大きくD'群ともいえる。

第III期 第III期の集落は、4号掘立柱建物遺

構、9・13・22・24・27号住居址及び、11・15・16・17・31号住居址、あわせて10軒+αからなる。

2号住居址は、I、II期には遺構が存在せず本期になって13号住居址を中心とする一群が出現する。集落西北部の緩傾斜を示す空間に占地している事から本期に所属するものとした。

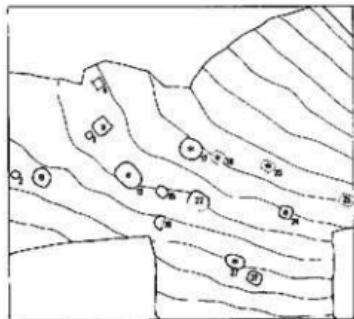
15号住居址については、炉、柱穴が明確にしえず、また土製勾玉を出土する特殊な遺構であり、13号住居址とセットとして考えるのが妥当であると判断した。16・17・31号の各住居址は、掘り方の形態及び、焼失住居であるか否かで検討するとII或いはIII期に該当する事は明らかであるがそれぞれ、B・C・D群とした小群に属しており、各小群の数量的変遷を考えると、III期となる可能性がより強いと思われる。

III期の住居址の内訳は大型住居址 1軒(13号)、中(大)型住居址 2軒、(17・22号)中(小)型住居址 4軒(9・24・27・31号)及び小型住居址 α(18・23・25号)となり、17号住居址が40m²を超す住居址である事を考えると、住居址の規模が二級分離する方向を示しているといえよう。平面形態では、隅丸長方形・隅丸方形・方形・楕円形と、本集落に存在する形態全てが認められ、掘り方の形態はA・B類が存在する。焼失住居は4軒+αであり、該期住居址のはば半数を占める。

炉は27号住居址を除くほぼ全ての住居址に付設されていたと考えられ、貯蔵穴は24・27・31号住居址には設けられていない。

9号住居址は本集落で唯一方形を呈する住居址であり、また該期に出現する小堅穴遺構(1号)と主軸を同一にするものである。また本址は、S字状口縁甕(破片)等他住居址とは若干様相を異にする上器群を出土している事も興味深い。

また、拡張住居址である22号住居址がベッド状遺構を失っている事も興味深い。



*焼失住居

第170図 第III期の集落

この期の集落も3小群に区分できる。

III-B群、433mの等高線に沿って位置する一群で中(大)型住居址1軒(17号)及び小型住居址a(18、23号)からなる。18、23号住居址については両者を共にII或はIII期に同時に所属するとするよりも、II・III期にそれぞれ別個に所属すると考えた方がこのB群とした1小郡の変遷を考える上では理解しやすい。しかし、そのどちらかに決定する事は不可能であったため、ここではB群は、I期・2軒→II期・2軒+a→III期・1軒-aの変遷をとげたものとしておきたい。

III-C群 集落南西部の急傾斜面部に存在する。中(小)型住居址2軒(27、31号)からなり共に貯蔵穴を付設しない。このC群の斜面上位に存在する24、25号住居址も貯蔵穴を伴なわず、集落南西部に存在する住居址が貯蔵穴を伴なわないものであると仮定すると、25号住居址をIII期としうる可能性が強いともいえる。

III-D群 I期において住居址が存在せず、II期に於ても6号住居址と12、14、21号住居址に挟まれた空間すなわち、I・II期には造構が構築されなかった集落北西部の緩傾斜面に占地する一群である。大型住居址1軒(13号)中(大)型住居址1軒(22号)規模不明住居址2軒(15、16号)からなる。この1群は該期に移動してきた大型住居址(13号)や15号住居址などを含み、特徴のある一群である。I・II期に大型住居址を伴っていたA群に替わって大型住居址を持つ1群としての地位を占めるものであるが、掘立柱建物遺構を失なっている事は注目される。

また、集落北西端に11号住居址、2号小堅穴遺構、D群と掘立柱建物遺構(4号)との間に9号住居址、1号小堅穴遺構がやや離れて存在する。両者共、13号住居址を囲う様に占地しており全体でIII-D'群ともいべき有り様を示している。

I期				II期				III期						
住居番号	形状	規模	掘	備考	住居番号	形状	規模	掘	備考	住居番号	形状	規模	掘	備考
1	▲	中(小)	A		2	▲	大	A	空缺	9	□	中(小)	B ₁	
3	▲	大	(W)		6		中(大)	A		13	○	大	(B ₁)	消失
5	▲	中(大)	C		8	▲	中(大)	B ₁	燒失	22	▲	中(大)		
7		○			12	○		B ₂		24	△	中(小)	A	燒失
19		C			20	○	中(小)	B ₁		27	▲	中(小)	A	燒失
29	▲	中(小)	A		28	△	小	C	燒失					
32	○	中(小)	A		33	○	中(小)		燒失					
					4	▲	中(小)	B ₁		11	○		B ₁	
					14	▲	中(大)	B ₁		15	○		B ₁	空缺
					21	▲	中(小)	A		16	○		B ₁	
					26					17	○	中(大)	B ₂	燒失
										31	○	中(小)	(B ₁)	

▲ 隅丸長方形 △ 隅丸方形
□ 方形 ○ 楕円形

第62表 時期別住居址一覧表

更に、I・II期を通じて大型住居址と共に一群を構成していた掘立柱建物遺構が、大型住居址（13号）から分離して集落北縁に孤立して占地している。

最後に視点を変え、各小群（A～D群）の変遷と特徴とを検討しておきたい。

A群 集落扇頂部に位置し、大型住居址、掘立柱建物遺構、及び一般的住居址によって構成され、I・II期と存続するがIII期には消滅する一群である。

B群 433mの等高線に並ぶ一群で1～III期まで存続し、各期平均2～3軒の住居址が認められる。I・II期は平均的規模の住居址からなるが、III期には規模の上では二極分解した可能性が強い。尚、同一等高線上で距離を離てる25号住居址は、本小群には含まれない可能性が強い。

C群 集落南西部に位置し、I～III期に亘って認められるが、比較的小規模の住居址からなり、最大規模のものでも31.2m²（33号住居址）である。また本小群は、III期には貯蔵穴を有さないと考えられ、孤立して存在する24号住居址をも含む可能性もある。

D群 集落北西部の緩傾斜面にII期から出現する1群である。III期には大型住居址（13号）が存在し、同期の掘立柱建物遺構（4号）も巨視的にみると該群の外れに位置するといえる。大きくD'群として把ええる可能性もあり、多様性に富む1群である。

集落の構成

以上述べてきた様に、六科丘遺跡に於ける弥生時代末期～古墳時代初頭の集落はIII期に亘り、それぞれ大型住居址、掘立柱建物遺構、一般的住居址（及び小豎穴構造）の三者によって、構成されるものである。また各期の集落を、3～4の小住居址群に区分したが、これら小住居址群は、その内容からも理解される様に集落内に於いて自立した、すなわち一個の生産・消費単位を示す有り方をみせているので決してありえない。一時期の集落全体が、内部に様々な多様性あるいは矛盾を内包しつつも、一つの単位集団としての様相を有していたものといえよう。

ここでは、各期の集落（単位集団）の構成を概観したい。

第I期の集落は、大型住居址1軒、掘立柱建物遺構1棟及び中型住居址4軒・規模不明住居址2軒からなっており、ほぼ扇形に並がる分布を示している。

これらは先にみた様に、I～A～I～Cの三群に区分できるが、基本的にはI～A群と他の二群との二つに分かれるものであろう。

I～A群は他の住居址から距離を隔てて、集落全体を眺望する位置に存在する一群で大型住居址（3号）と掘立柱建物遺構（1号）などを含む。他の4軒はI～A群の下位に展開しており、それぞれ2軒1組で一群をなしている事は先に述べた通りである。すなわちI～B群は433mの等高線上に、I～C群は集落南西端に位置している。これらは全て中型住居址であり、ほぼ均一の様相を持つものである。

また若干の異同はあるもののI期において集落の南側範囲が決定されているといえる。すなわち、扇頂部には1号掘立柱建物遺構が、扇端部には32号住居址が占地して扇形に展開する集落の南部扇側線を規定しており、25号住居址が僅かにその範囲から逸脱しているにすぎない。

ともあれ、この時期の集落の特徴の第1点は大型住居址と掘立柱建物遺構がセットとして一群を形成し、かつその一群が他の住居址と距離を隔てて占地している事である。第2点は大型住居址を含む一群以外の住居址がほぼ均一な様相をもち、従って小住居址群も、ほぼ同質の内容を示していることである。

第II期の集落は、大型住居址1軒、掘立柱建物遺構2棟、一般的住居址、10軒ト α からなり、これも扇形に展開している。

この期も基本的にはI期とほぼ同様の様相を示し、II-A群と他の三群と人別しうる。扇頂部に占地する、II-A群は大型住居址(2号)掘立柱建物遺構(2・3号)を含む一群でI-A群の延びたと考えられる。他の住居址も、I期と同様にII-A群の下位に距離を隔てており、3~4軒1組で一群をなしている。これらの小住居址群はこの期から出現したD群を除くと、それぞれI期に認められたB~C群の後を継ぐものと考えられる。このD群の出現や、各小群が構成住居址数を増すなど、集落の拡大傾向が認められるが、このD群という新たな小住居址群の出現或いは分離は、集落構成員の単なる数量的増大を示すのみではなく、集落内部に於ける集団構成の変質をも語るものといえ、III期における大型住居址の移動をも準備するものといえよう。

B群は18乃至23号住居址、C群は12号住居址、D群は28号住居址とそれぞれの内部に、小型あるいは比較的小規模の住居址を含んでいる。同時に小住居址群間においても、比較的大規模のD群(面積65m²)と、小規模のC群(面積45m²)^{註7}とか認められ、相対的ではあるがそれぞれの居住空間に面積の差が存在する可能性もある。またI期~II期への変遷過程では住居址の重複例の拡張をも含めて、4例8軒認められたのに対し、II~III期では1例しか認められず、集落内の住居址占地に対する規制のあり方の差とも思われる。

II期の集落はD群の出現によって、その景観にも変化をきたす。つまりI期において扇形の南部に縱長に展開していたものが、6号住居址を北端とするほぼ完全な扇形を呈する様になる。

II期の集落構成の特徴を再度まとめると以下の様になろう。第1点としてはI期と同様に大型住居址と掘立柱建物遺構がセットとなって1群を形成し、他住居址から隔れて占地する。第2点は集落に、確実に拡大傾向があらわれD群に象徴される様に集団内の質的变化をも伴うものである。第3点は小型住居址の出現がある。これは同時に特にB~D群の内部において住居址間の規模の差があらわれる事を示している。更に相対的とはいえ、B~D群の住居址群間においても格差が認められる様になる。

つまり住居址規模の格差を概略的に表現した場合I期にあってはA群→(B+C)群であったものが、II期にはA群→(B+D+C)群と表現できよう。

第III期の集落は、大型住居址1軒、掘立柱建物遺構1棟、一般的住居址9軒+ α 、小窓穴遺構2基からなり数量的な面では、II期とは同様である。しかしII期~III期は、本集落が大きな変化をとげた時期といえよう。まずそれまで扇形を呈して展開していた集落が429m~433mの等高線の幅の中で帶状を呈する様になる。これは扇頂部に占地していたA群が消滅し、それに伴い他

住居址から距離を離れて存在していた大型住居址が集落を眺望する位置から、集落内部へと移動してきた事とそれに伴って、I・II期には大型住居址と組になって存在していた掘立柱建物遺構が集落の北縁部へ移動して孤立して存在する様になった事の結果である。

A群に替って、大型住居址を含むIII-D群はII-D群よりやや北へ移動し從米造構の存在しなかった集落北西部緩傾斜部へと進出する。このIII-D群には、土製勾玉を出土する15号住居址が存在し、またそれまで認められなかった方形平面を呈する9号住居址や小堅穴遺構（1号）などが含まれる可能性もあり、際立った多様性を示している。土製勾玉を出土した15号住居址は、炉、柱穴が検出されない事等、他住居址とは異った様相をみせ、位置関係からも大型住居址である13号住居址と対になる可能性も強い。その推論が認められるならば、I・II期の大型住居址が保持していた祭祀的側面を表現しているものとも考えられる。本遺跡において唯一方形平面を呈する9号住居址はまた1号小堅穴遺構が附属する住居址でもあり、S字状口縁甕破片を出土する等、遺物の面からも他住居址と若干様相を異にする住居址である。III期においてもやや後出的な要素を持ち、異相を感じさせる9号住居址の出現が、本集落の施設直前と思われる事に興味深い。II期にひきつづいて住居址間の規模の差が一層拡大する傾向にあり、小住居址群間の格差もより顕著になる。大型住居址である13号住居址を除くと、17号住居址が約40mと中（大）型住居址中でも最大規模を誇るのに対し、他の住居址はほとんどが中（小）型及び小型住居址となる。更に小住居址群に含めえないと考えられる住居址（24・25号）が認められる。これは小住居址群の分解を暗示すると共に、集落内における住居址占地の拡張を示すものともいえ、先に述べた様にI・II期に認められた重複・切り合い関係が、極端に数をへらす事と軸を同じくするものといえる。すなわち、小住居址群ごとに存在していた住居址規制が弱まった事をあらわしていると考えられる。

ここでIII期の集落構成の特徴をまとめておきたい。第1点は、これまで一般住居址から離って存在していたA群の消滅である。この事の意味は、大型住居址が集落の内部に進出した事（或は集落内部にとりこまれた事）と、大型住居址と掘立柱建物遺構との分離、との二点にあろう。第2点は集落内部で各住居址間の格差が拡大した事、と同時に多様性が認められる様になった事である。第3点は各小住居址群が、分解しつつある事。第4点は、上記3点の結果であろうが、住居址配置の規則性が弱まっている事、などがあげられる。

以上述べてきた様に、六科丘遺跡の弥生時代集落は、各期共大型住居址・掘立柱建物遺構を含む10軒内外の住居址によって構成され、ほぼIII期に亘る変遷をたどる事ができた。なかでもII期からIII期への変化は、集落の景観を一変させるに充分なものであったといえよう。

六科丘の集落を構成した集団をどの様なレベルの共同体として想定するかは一旦おくとしても集落の景観、様相にあらわれたこの様な変化は、当然にも集団（共同体）内部における、また集団（共同体）間における諸関係の変容の表現であることは疑いえない。ここでは最後に集落の様相に顕われた変動の中から何点かの問題点をとりあげておきたい。

本遺跡からは3軒の大型住居址、4棟の擡立柱建物遺構が検出されている。それらはI～III期に亘ってそれが組になって存在していた事はすでに述べた通りである。

大型住居址の機能・性格については、従来議論のあるところであるが、集団内においては「単位集団」・世帯共同体の結合を実現し、維持する場所として機能して」(川中、1979) おり、また集団間にあっては集団それ自身を表現する場であったことはまちがいかないところであろう。擡立柱建物遺構は、登呂遺跡での発見以来、高床式倉庫として理解されている。集団共有の貯蔵施設であり、集団総体による生産物管理の「場」であったといえよう。

本集落では、I・II期に於ては大型住居址と倉庫址とが一群を形成して一般住居址とは隔離されて占地している。この事は、この一群(A群)が、I・II期にあっては、集団の結合を実現する「場」であると同時に、集団総体の生産物管理の「場」としても機能していた事を示すものであろう。しかしながらIII期に至ると様相は全く異なり、それまで一般の住居址からは超越した存在であったA群は消滅する。大型住居址はその周辺に空間を保ちながらも、集落の内部へ移動していく。と同時にそれまで共に一群を形成していた倉庫址が、大型住居址から離脱し、単独で存在する様になる。占地の状態による観察では、それまでA群が担っていた機能が分解したものともいえよう。

さきに概観した様に擡立柱建物遺構と、大型住居址、一般住居址との関係は、時代、地域、集落の規模等によって様々な様相を示しており、機能の分解等は軽々しく口にすべきことでは勿論ない。しかしながら同一集落内における両者間の、或いは両者と一般住居址との位置関係の変化は少なくとも該集団における結合の有り様や、集団総体としての生産物管理の様相の変化を物語っているものとはいえる。

各期10軒内外の住居址によって併なまれた本集落は更にその内部を幾つかの小住居址群に分けることができた。それが集団内に於けるどの様な関係を表現しているのかはともかく、一つの「単位集団」を示すと考えられる六科丘集落の内部に、更に3～4群のグループが継続して存在していた事は確実であろう。この小住居址群もII期からIII期への移行の過程で大きな変動をみせている。すなわち、集落を代表する位置を占めていたA群が消滅・分解して集落内へ移動する。またI・II期においてはA群と対峙する存在であり、ほぼ同質の内容を持って、景観的にもそれぞれまとまりを有していた小住居址群がIII期には各小住居址群間における拉差をみせ、同時に各小住居址群が有していた住居占地規制を弱める傾向を示す。またI期においては、大型住居址を除くとほぼ同規模の住居址で構成されていたものが、II期以降小型住居址の出現に象徴される様に比較的大規模の住居址と、より小規模の住居址とが顕われる。つまり、大型住居址を含む一群と、比較的大規模の、それぞれまとまりをもった2～3群とによって構成されていた集落が、それぞれの小住居址群のまとまりを弱めつつ、より大きな数軒の住居址と、比較的小規模の住居址とに分解する傾向が認められる。これも、大型住居址の変遷に見られた事と同様に、集団内部における、関係性、共同性の変質の表現であろうか。

六科丘の集落はⅠ・Ⅱ期においては、大型住居址、掘立柱建物遺構、一般的住居址とによって構成されていた。Ⅲ期に至ると小堅穴遺構と共に方形を呈する住居址(9号)や一般的居住空間とは性格を異にすると考えられる住居址(15号)などが出現する。この様な集落構成の多様化が、何によってもたらされたものであるかは、僕には論じがたいがこれもⅠ・Ⅱ期からⅢ期への集落内部の社会的変質を窺わせるものであり、特に方形住居址である9号住居址はS字状口縁甕破片及びそれに伴う上器群を出土する住居址で、小堅穴遺構と組になって存在する等、特異性を有するものである。

S字状口縁甕の出現・波及がどの様な歴史的・社会的変動に因るものであるのかは、未だ充分に解明されているとはいがたい。しかし弥生時代末から古墳時代初頭にかけての共同体（おそらくは幾つかの農業共同体によって構成された「政治的結合体」）間の交通関係の変動が、その根底にあることはあきらかであろう。ここで、それらの問題に触れる余裕はないが、山梨県内に於いても、S字状口縁甕の出現・主流化は、該期における生産関係・社会的・政治的諸関係の変容^{註1}を示すものとして理解されている。

僕が数片の土器片によって多くを語ることは、慎むべきであろうが、本遺跡に於いても、S字状口縁甕の出現と、集落の変動期(Ⅱ期→Ⅲ期)とが、ほぼ同時に認められる事は注目すべき点であろう。両者から直接の因果関係を導くことは急にすぎるとしても、S字状口縁甕の波及に象徴される共同体間の交通関係の緊張が、各共同体間に於ける「単位集團」の変容と深く結びついているのであろう事は想像に難くない。

その意味においても、山梨県の一辺境におけるこの小集落が、S字状口縁甕の出現に前後して大きく変容し、更に集落の廃絶を迎えていく事は該期の歴史的・社会的課程を説明する中で、正しく位置づけなければならない。

ともあれ、南西面に臨む谷水田を生産基盤として営なされてきた六科丘集落の成立から終焉までの道程は、甲府盆地における弥生時代から古墳時代へと至る時期の社会的・政治的変容課程の1断面を、我々に示しているものといえよう。

本節は白居との討議にもとづき清水がまとめたものであるが、最終的な文責は清水が負うものである。

(清水 博)

註1 住居址規模の「大」「中」「小」はあくまでも1集落内における相対的な分類であるが、石野博信氏は『考古学から見た古代日本の住居』『日本古代文化の探求一家』の中で、50m²以上を大型住居址と見做したうえで、それが弥生時代中期から古墳時代にかけての集落内に顕著に認められる事を指摘されている。

註2 石野氏は、住居址内部と土柱穴開線によって「内区」「外区」とわけ、それぞれの機能差を指摘している。(註1文献)

註3 ここで本遺跡における掘り方と月の輪平遺跡群、向原遺跡例との対比を示しておく。

本遺跡	向原遺跡	月の輪平遺跡群	向原遺跡では中央方台状部上面、壁際部
A	a	C	上面に貼り床を行なわず、そのまま床面と
B I	c I	A	したものをそれぞれc I・d I類とされている。
B II		B	月の輪平遺跡群では、A・B両頭で中央
C	b I		方台状部が「貼床の有無にかかわらず掘り

方をもたずあるいはわずか数cmほどの厚さのみの、掘り方が認められている。向原遺跡におけるC₂類に近似するものであろう。本遺跡の場合、間層の有無・貼り床の厚さに相違はあるものの全てに貼り床がなされており、基本的に同一のものとして理解した。

本遺跡のB II類は向原遺跡で、本遺跡C類は月の輪平遺跡では認められなかった。

註4 3号（大型）住居址は、遺構断面図の観察では中央部が浅く剥落部が深くなるタイプである。本址は壁面方正面岡が不備であったため、A・B I類どちらとすべきか判断に迷ったところである。しかし、調査時の所見・写真観察等では掘り方で中央部が明確な方台状部をなさず、ダラダラと盛り上るタイプであり、ここではA類として分類した。

註5 岩根博明氏（大和市教育会員会）の御教示による。

尚、中田英氏（神奈川県教育委員会）によると、向原遺跡（神奈川県平塚市）においても精力的に掘立柱建物遺構の検出に務めたが、弥生時代後期に属するものは確認しえず、同遺跡においては、本来存在しなかった可能性が強いとの事である。

註6 本築造はその規模・構成内容から、1箇の生産労働単位として把握しうるものと考えられ、また掘立柱建物遺構一軒穴の有り方から窺える様に、消費単位としても把えうると考えられる。

註7 両群とも、各3軒の住居址となるが、面積を推定しうるのは共に2軒である。従って、ここでは残る1軒はほぼ同程度の規模であると仮定した上で、面積の推定しうる2軒について比較した。

註8 横本博文氏は「甲府盆地その歴史と地域性」（横本、1984）の中で、町耕地の飽和、人口圧の増加、指導者層の折出・技術革新の進展などをあげられている。

註9 初期の集落は大型住居址（13号住）を含めその半数程が複合住居である。従って焼失を直接の原因とする集落の発達を否定するものではない。しかし弥生時代末から古墳時代初期にかけての歴史的変動期に一単位集団の移動によって営なされた集落が、先述した様にS字状口縁甕の出現と前後して変容し廟祀を向える事はその原因を単に焼失に求めるべきではなく、社会的・政治的原因を重視すべきであろう。

補註1 保ノ下遺跡（渡辺、1984）では古墳時代初期の竪穴住居址1軒と掘立柱建物遺構1棟が検出されているが、本来の集落の一部の調査であり、検出数も前記通りであるため、ここでは一定除外して考えた。

住戸	主輪方位	平面形	面積	窓	柱	開口	穴	備考	備考	
									出入り施設	ヘッド状運搬・出入口施設
1	N-15°-W	隅丸長方形	5.7m×4.2m=23.5m ²	中央やや北	C	4	入り口右端	A	出入り施設	
2	N-26°-W	"	8.3m×(5.8)m=48.1m ²	"	○	(6)	入り口右端円、周間に上端	A or (B)	ヘッド状運搬・出入口施設	
3	N-40°-W	"	8.3m×7.0m=58.0m ²	2ヶ所中央部35cm中央	×	4(壁外セッタ)	入り口右端円、周間に上端	B	ヘッド状運搬・出入口施設	柱軒六
4	N-21°-W	"	5.6m×(4.3)m=24.0m ²	中央やや北 (YS)	×	(壁外セッタ)	入り口右端、隅丸九方	C	出入り施設	
5	N..30°-W	"	6.3m×(4.8)m=30.2m ²	"	×	(壁外セッタ)	入り口右端、隅丸九方		出入り施設	
6	N-4°-W	"	6.7m×5.0m=33.5m ²	"	×	4	入り口右端、隅丸九方	○	出入り施設	
7	6号と14号同-	"	×(4.7)m=—	"	—	—	入り口右端不円、周間に土壌	B ₁	出入り施設	
8	N-32°-W	"	6.3m×5.0m=31.5m ²	中央北寄り (P)	?	—	入り口右端不円、周間に土壌	B ₁	出入り施設	
9	N-8-W	方	4.9m×4.8m=23.52m ²	"	—	—	入り口右端不円、周間に土壌	B ₁	出入り施設	
10							南東コーナー	—	出入り施設	
11	N-12°-W	柱 円	5.7m×(?)	中央北寄り	?	—	入り口右端	B ₁	出入り施設	
12	N-15°-W	"	5.4m×(?)	中央北寄り (S)	—	—	n 不円	B ₁	出入り施設	
13	N-14°-W	"	9.6m×5.5m=54.0m ²	中央北寄り	—	—	入り口右端不円(2)周間に上端	(B ₁)	一部壁柱穴	
14	N-11°-W	隅丸長方形	6.9m×5.5m=37.85m ²	中央北寄り (P)	?	—	入り口右端不円	B ₁	中央やや北寄り、地上留り	
15					(X)	—	入り口右端不円	—	出入り施設	
16	N-35°-W	柱 円	(?)×4 m	中央北寄り	—	—	入り口右端不円	B ₁	出入り施設	
17	N-31°-W	"	7.1m×5.7m=40.47m ²	中央北寄り (P)	?	—	入り口右端不円	B ₁	出入り施設	
18	N-23°-W	隅丸長方形	4.4m×(3.6)m=15.84m ²	中央北寄り	—	—	入り口右端不円	B ₁	出入り施設	
19					(X)	—	入り口右端不円	C	出入り施設	
20	N-24°-W	柱 円	5.4m×4.4m=23.76m ²	中央北寄り	○	—	入り口右端	B ₁	出入り施設	
21	N-32°-W	隅丸長方形	6 m×4.5 m=27 m ²	中央やや北	—	—	入り口右端	A	ヘッド状運搬	
22	N-32°-W	"	6.6m×(5)m=33m ²	"	—	(4)	(?)	—	出入り施設	
23	N-14°-W	隅丸 方形	4.3m×3.3m=13.53m ²	中央北 (S)	—	—	入り口右端	A	出入り施設	
24	N-43°-W	隅丸 方形	4.6m×4.7m=21.62m ²	中央	?	—	入り口右端	A	出入り施設	
25	N-28°-W	隅丸長方形	4.2m×3.2m=13.44m ²	—	—	—	入り口右端	B ₁	出入り施設	
26	N-45°-W	計測不能	—	—	—	—	入り口右端	—	出入り施設	
27	N-39°-W	隅丸長方形	5.9m×(4.3)m=25.37m ²	(X)	—	—	入り口右端	—	出入り施設	
28	N-30°-W	隅丸 方形	3.7m×(3.8)m=13.68m ²	中央やや北	—	—	入り口右端	C	出入り施設	
29	N-31°-W	隅丸長方形	5.5m×4.5m=24.75m ²	中央やや北	—	—	入り口右端	A	出入り施設	
30	N-33°-W	柱 円	5 m×(4)m=20m ²	(中央やや北)	—	—	入り口右端	(B ₁)	出入り施設	
31	N-45°-W	"	5.4m×4.4m=23.7m ²	中央やや北	—	—	入り口右端	A	出入り施設	
32	N-45°-W	"	6.2m×(5.2)=31.2m ²	"	—	—	入り口右端	X	出入り施設	
33	N-45°-W	"								

() 内は概定、印の右は代引を有するもの、印はビットを作りうるもの、印は代引を有するもの、印は代引を有するもの、印は代引を有するもの

第VI章 六科丘古墳

第1節 調査に至る経緯

六科山古墳は六科山の丘頂上から北へのびる尾根先端に古地している。この尾根は発掘調査以前は全面が桑園となり、削平が著しかった。その為、本調査に先立って行なわれた遺物の表面採集、及び確認調査においてもその存在を確認しえなかつたものである。勿論本調査団は、工事主体者、工事担当者の理解のもと調査区域外にあっても、拔根・掛け作業時における遺構・遺物の発見に務めた。尾根上の抜根作業に伴い、現場での表面踏査を実施したところ、先端頂部から拔根時に引き出されたと思われる鉄剣一口を採集し、また地形的にも自然状態とは考えられない高まりを認めた。その為、本遺跡調査団は山梨県教育委員会文化課の指導を仰ぐと共に、工事担当者である、柳大木組に当該尾根上での作業の一時延期を要請し、一方山梨県教委、工事主体者、檍形町教育委員会とも急提断後の方針を協議した。その結果、早急に墳丘、地形測量を行なうと共に、墳形・規模等の確認の為の調査を実施し、それらの結果に基き保存等をも含めた最終方針を再度協議する事とした。また確認調査等は六科山遺跡調査団が引き続き担当し、費用については別途、処置を講ずる事としたが、調査期間については、調査団の体制、六科丘遺跡の調査とのかねあいもあり、墳丘測量は83年7月末に、また確認調査に関しては83年秋に実施することにした。

第2節 古墳の立地

六科丘古墳は檍形町の西半を占める市之瀬台地先端に位置している。市之瀬台地は、檍形町上宮地から、甲西町湯沢へと南北に続く高台である。この台地は檍形山の東麓に発達した洪積原状地が地盤変動を受けて形成されたもので、台地上面は標高400m前後でなだらかな起伏をもち東縁は、比高差100~120mの断層崖によって盆地床と両されている。台地は北から深沢川・漆川・市之瀬川・塙野川などによって開析され、幾つかの支丘陵に分けられている。各支丘前端は断層運動に伴って生じた円丘状の高まりを有し、北から六科丘・上野山・塙原山・御殿山等と呼ばれている。そして塙原山には刃塙、上野山には物見塙古墳、六科丘には六科丘古墳とそれぞれの丘陵先端には甲府盆地を一望しうる位置を占めて古墳が築造されている。

六科丘古墳は、標高約435mの高所にその迹を占める。平地部との比高差は約120~140m程度で、甲府盆地を東に一望し、山梨県に於ける古墳出現の地である曾根丘陵を遠く南東に望む地にある。古墳ののる尾根は東・北両面が急峻な断層崖となり、西面は小谷がきざまれ、南は六科丘丘頂へと続いている。

第3節 古墳の形状と規模（附図3）

先述したように確認調査に先立ち7月26日～7月31日まで墳丘及びその周辺の測量を実施した。造成工事用に設定された座標軸を利用して、墳丘上に直交する基準線を設け基準線上に9ヶ所の基準点を設定した。基準線は古墳が前方後円形となる事も想定されたため、その予想される主軸線と同一にN-17°Eとした。そして各基準点から平板測量を行ない現地で直接図化する方法をとった。尚縮尺は1/100とし、コンターラインは原則として20cmをとったが地表面の乱れを考慮して墳丘想定部分は10cmとした。その結果は附図3に示すとおりであるが、コンターラインの平面的観察では、前方後円墳をおもわせる形状であった。すなわち後円部径25～30m、前方部長15～20m程の全长50m級の前方後円墳とも考えられた。しかし前方部の盛り上がりが観察しない事、前方部先端墳裾線を示すと思われる434.2～434.4mのコンターラインが、尾根上部からのびる434.5mのコンターラインの為に方形に完結しえず、尾根両側に逃れている事等から前方後円墳とは断定しえず、調査団内部でも意見が分かれたところであった。視覚的に遺存が良好であった、古墳東・北部のコンターラインを基準にして、434.2～434.4mのラインが墳裾を示すものと考え、また古墳北西部のコンターラインの乱れから造り出し状の施設を持つ可能性も指摘された。また墳丘規模は現状で高さ2m弱を測ると考えられた。

いずれにせよ、削平が激しく地表面の乱れが著しい為、測量のみで墳形・規模を確定する事は難かしく円墳・前方後円墳と两者の可能性を含みつつ確認調査の結果を待つこととした。

第4節 発掘調査

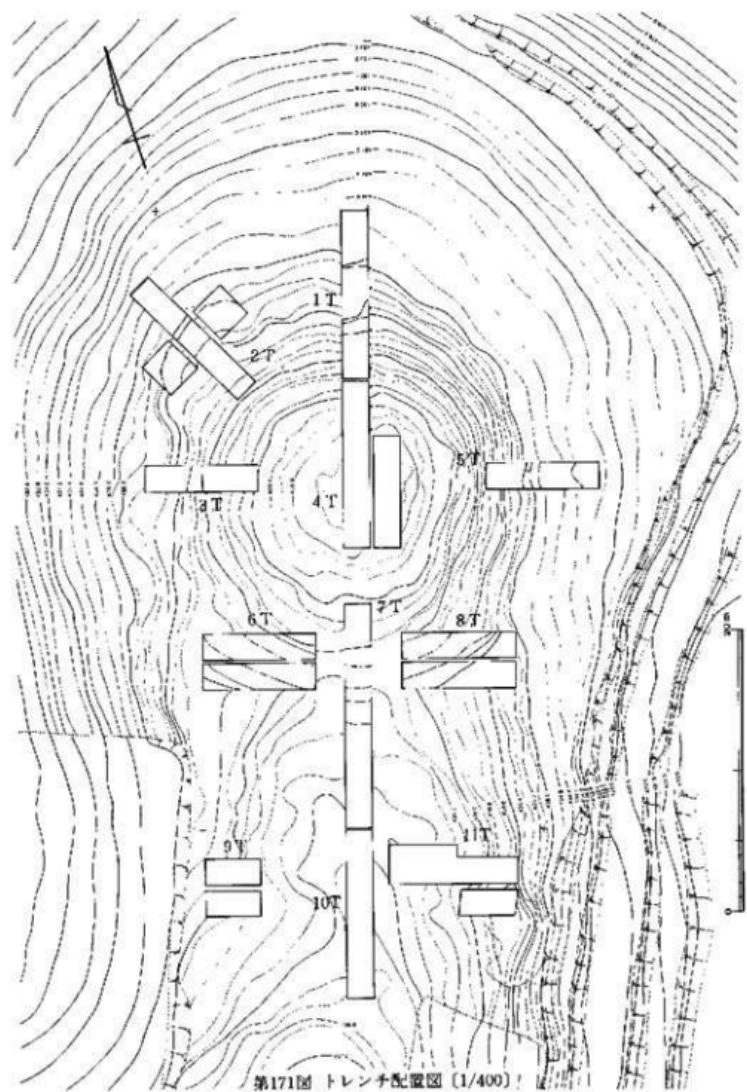
1 調査の方法（第171回）

調査は、六科丘遺跡調査の区切りを待って10月1日から1ヶ月間に亘って行なわれた。今回の調査は、古墳の保存をも含めた爾後の方針決定の資料を得る為に行なわれたものである。7月末に行なった墳丘実測の結果とも鑑み、墳形・規模の確認と、内部主体の構造、遺存状態等の確認を行ない、もって古墳の時期・性格等の概略を知ることを目的とした。

発掘方法はトレンチによることとし、測量時の基準線に従って11本のトレンチを設定、トレンチの規模は原則として2×8mとした。また調査の必要に応じて追加・拡張を行うこととした。

まず墳形を確定する為に、10本のトレンチを設定した。後円部の墳裾を決定するために、1・3・5号の各トレンチを、また前方後円墳であるか否かを判断する為に、前方部先端想定部に9・10・11号の各トレンチを、更にくびれ部と予想されたところに6・7・8号の各トレンチを設定した。また造り出し部を確認するために、基準線に45°の角度で2号トレンチを設けた。

次いで内部主体の確認の為に、墳頂部にも4号トレンチを設定した。今回の調査は主体部そのものの発掘を目的とせず、その位置、構造の種類、遺存度などの確認を行ない、本格的な調査は今後を待つこととした。



第171図 トレンチ配置図 (1/400)



第172図 第1トレンチ [36]

2 発掘調査の概要

第1トレンチ

(第172図 図版24)

後円部北側に設けた $2 \times 12\text{m}$ のトレンチである。調査の結果、円丘部は10層に分けられた。1層は耕作土で5層以下、6・7・8・9・10層は明らかに版築状の盛土であることを確認した。盛土は墳頂部より11~12mで終わっており、2・3・4層は、盛土の流失と思われる。盛土の外周から幅3m強に亘って多数の礫を検出した。礫の下層は調査しえなかつたが、4層の下部に敷つめられた状態で認められた。旧地表面はこの礫の部位で自然傾斜とは明らかに相違したフラット面をみせており、古墳築造における地山整形を示すものであろう。

第2トレンチ

(第174図)

墳丘北西部に認められたコンターラインが乱れをみせる箇所に設けた $2 \times 10.5\text{m}$ のトレンチである。造り出し状の施設である可能性を認めたため、トレンチ中央部の南・北側に $3 \times 3\text{m}$ の拡張区を設け、それぞれ2トレンチ南拡張区、2トレンチ北拡区とした。

円丘部は7層に分けられ、1層が耕作土、5・6・7層が盛土である。盛土は墳頂部より15m程までなされ、2・3・4層は盛土の流失層であろう。盛土の外周からは多数の礫が検出された。この礫帶は幅約2mを有し、約8mに亘って

2 m 程張り出している。墳頂部からの盛土外周の距離、縞帯の形状等から造り出し部と認定した。1トレンチと同様に旧地表面はこの縞帯の部位でフラットな面をみせている。

造り出し部は縞帯の内縁から立ち上がり、墳頂部に比し緩やかな傾斜を示して墳丘部へ連なる。

第3トレンチ (第174図、図版24)

墳丘西側に設けた 2×8 m のトレンチである。撿拾の為底土部の状況は正確には把握得なかつたが、2・3・4・5・6層が盛土の残存で墳頂部から11~12 m の範囲で残っている。は把み得なかつた。

墳丘部の外周はフラットな面をみせ古墳築造時の整地面を最も良好に検出することができた。本来その上面には縞帯が巡る事が想定されるが、裾部のすぐ西側を後世の砂利道が走っており、

縞帯等は削平されている。

第5トレンチ

(第173図、図版23・24)

墳丘東側に設けたトレンチで 2×8 m である。

5・6・7層が盛上で墳頂部から12 m 程まで認められる。墳裾部には比較的大きな礫が3個並んで据えられており、礫石と考えられる。このトレンチでも、墳丘外周に縞が敷かれた状態で検出されたが、他に比し量が少なくなつた。

縞帯と同じレベルで須恵器片が出上している。全て同一個体で、主要な破片は縞帯の内縁から、小破片が縞帯中に点在している。6Aトレンチ出土の物と接合した。

第5トレンチ

基1層：表1層（耕作土層）
第2層：暗赤褐色土層（粘性やや強く、しまりはやや弱い）

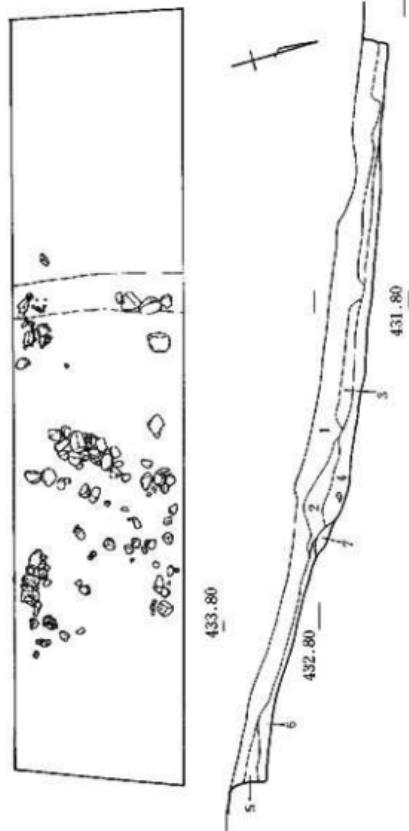
第3層：暗赤褐色土層（粘性やや強く、しまりはやや弱い）。礫を少含む。

第4層：暗褐色土層（粘性強く、しまりは弱い）。黄色素を含む。

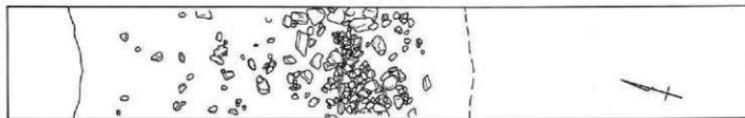
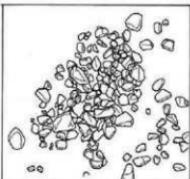
第5層：暗赤褐色土層（粘性やや強く、しまりはやや弱い）

第6層：暗褐色土層（粘性やや強く、しまりはやや強い）

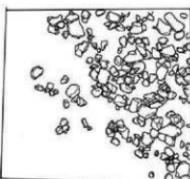
第7層：暗赤褐色土層（粘性やや強く、しまりは弱い）



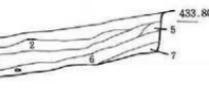
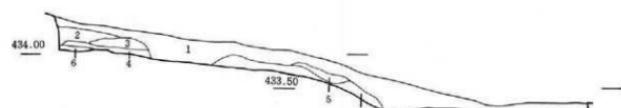
第173図 第5トレンチ (16)



第2トレンチ平面



第3トレンチ平面



第174図 第2トレンチ、同南・北延張区及び第3トレンチ(%)

第1トレンチ

- 第1層：表土層（耕作土層）
- 第2層：茶褐色土層（粘性強く、しまりは普通で、カーボン粒を少量含む）
- 第3層：赤褐色土層（粘性強く、しまりは弱い）
- 第4層：明褐色土層（粘性強く、しまりは弱い、小塊・微粒子を少量含む）
- 第5層：暗茶褐色土層（粘性無く、しまりは弱い、小塊・カーボン粒を少量含む）
- 第6層：赤褐色土層（粘性強く、しまりは普通、微粒子を少量、カーボン粒を微量含む）
- 第7層：茶褐色土層（粘性でや強く、しまりは普通、カーボン粒と小塊を少量含む）
- 第8層：黒褐色土層（粘性強め、しまりも強め、カーボン粒を少量含む）
- 第9層：暗茶褐色土層（粘性でや強く、しまりもやや強め、小塊・カーボン粒・赤褐色粒子を少量含む）
- 第10層：黒褐色土層（粘性でや強く、しまりも強め、赤褐色土とワーカーを含み、小塊を少量、カーボン粒を微量含む）
- 第11層：赤褐色土層（地山）

第2トレンチ

- 第1層：表土層（耕作土層）
- 第2層：赤褐色土層（粘性を少量含む）
- 第3層：茶褐色土層（粘性強く、しまりはやや強い、小塊を少量含む）
- 第4層：赤褐色土層（粘性強く、しまりは強め、礫を多量、カーボン粒を少量含む）
- 第5層：暗茶褐色土層（粘性無く、しまりはやや強い、小塊・カーボン粒を微量含む）
- 第6層：暗茶褐色土層（粘性やや強く、しまりもやや強め、小塊・大粒を含み、礫を少量含む）
- 第7層：赤褐色土層（粘性やや強く、しまりは普通、小塊を少量、カーボン粒を微量含む）

第3トレンチ

- 第1層：表土層（耕作土層）
- 第2層：茶褐色土層（粘性でや強く、しまりもやや強め、小塊・カーボン粒を微量含む）
- 第3層：赤褐色土層（粘性強く、しまりは普通、カーボン粒を少量含む）
- 第4層：暗茶褐色土層（粘性強く、しまりは普通、カーボン粒を少量含む）

- 第4層：暗茶褐色土層（粘性強く、しまりも強め、カーボン粒・小塊を含み、赤色・スコリアを少量含む）
- 第5層：暗褐色土層（粘性無く、しまりは普通でやや強め、礫を少量含む）
- 第6層：暗褐色土層（粘性やや強く、しまりはやややや強め、礫を少量含む）

第6 A・Bトレンチ (第175図、図版21)

墳形確認の為くびれ部西側に2本設定したトレンチで規模はそれぞれ 2×8 mである。北側を6A、南側を6Bトレンチとした。

調査の結果、6Aトレンチで墳丘の立ち上がりを検出したが、墳丘縁部は弧状を呈しており、前方部へのくびれは確認されなかった。6Aトレンチでは1層が耕作上で、7~9層が墳丘盛土2~6層は盛土の流失である。6Bトレンチでは1層は耕作土、4~5層が墳丘方向から、6~8層が墳丘外部方向からの堆積である。他のトレンチと同様墳丘外周から多量の、礫が検出された。このトレンチでは、礫はレベル差によって2層に分けることができ、両者のレベル差は20~25cmである。上層の礫は 20×20 cm以上の大さを有し下層に比し、全体的に一回り大きい。また下層の礫は墳丘外周にそって同一平面上で幅2m程に敷きつめられた状態で検出された。上層のものは乱雑でそれぞれにレベル差も有り転落した状態であった。6Aトレンチ下層礫面から須恵器片が一片出土し、5トレンチ出土のものと接合した。

旧地表面は礫帶の部位で、ほぼ同一レベルに整地され、フラットな面を呈している。6Bトレンチでは礫帶外縁よりやや抜かりをみせつつ整地面からの立ち上がりが確認された。

第7トレンチ (第176図、図版24)

前方後円墳であるか否かを確認するため、基準線に沿ってくびれ部に設定したトレンチである。当初 2×8 mで設定したが後に延長し、第10トレンチと接続した。

調査の結果、墳丘の立ち上がりと溝状の掘り込みを検出し、占墳が円形を呈することを確認した。19~20・21層が盛土で、墳頂部より12~13mまで達している。4~8~16層が墳丘からの流失、11~15・17・18層が墳丘外部からの流入である。

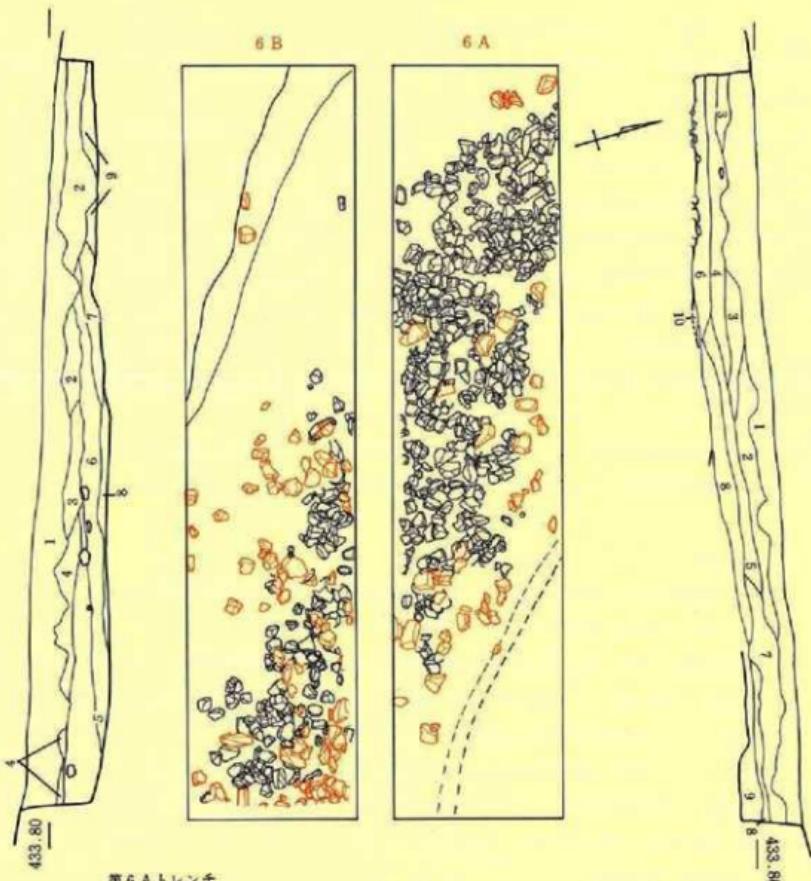
他トレンチと同様、墳丘外周に多量の礫群を検出し、6~8トレンチと同様に上・下の2層に分かれる。下層の礫帶は同一平面上に幅約2mに亘って敷きつめられた状態で検出され、径10cm内外とは大きさが揃っている。上層の礫は、下層のそれに比し一回り大きい角礫で墳丘から転落した状態で認められた。

旧地表面は、この部分で所謂「丘尾切断」されており、現在確認される限りでは、深さ1~1.3m、幅5m程に亘っている。尾根方向からは、かなり急激に掘りこまれ、底面はほぼフラットで緩やかに立ち上がって墳丘に至る。掘り込み底面には墳丘に沿って先述した礫帶が認められ、礫帶の外周は更に一段深く削りこまれている。

礫帶下部及び礫帶外周の削り込みについては今回は調査が及ばなかった。今後の機会を待って更に明らかにしたい。

第8トレンチ (第177図、図版24)

墳形確認の為、くびれ部東側に2本設定したトレンチで規模はそれぞれ 2×8 mである。北側



第6 Aトレンチ

第1層：表土層（耕作土層）
 第2層：明褐色土層（粘性無く、しまりはや
 や弱い。小礫を含み、カーボン粒を
 少量含む。）
 第3層：明褐色土層（粘性無く、しまりは強
 い。礫・小礫を多量に。カーボン粒
 を少量含む。）
 第4層：暗褐色土層（粘性やや強く、しまり
 も強い。小礫・礫粒子・カーボン粒
 を少量含む。）
 第5層：茶褐色土層（粘性普通、しまりも普
 通。礫・小礫・赤褐色粒を多量に。
 カーボン粒を微量含む。）

第6層：暗茶褐色土層（粘性弱く、しまりは
 普通。黄褐色礫を多量に、小礫を含
 む。）

第7層：赤褐色土層（粘性弱く、しまりは普
 通。礫・小礫・礫粒子を多量に。赤
 褐色ブロックを少量含む。）

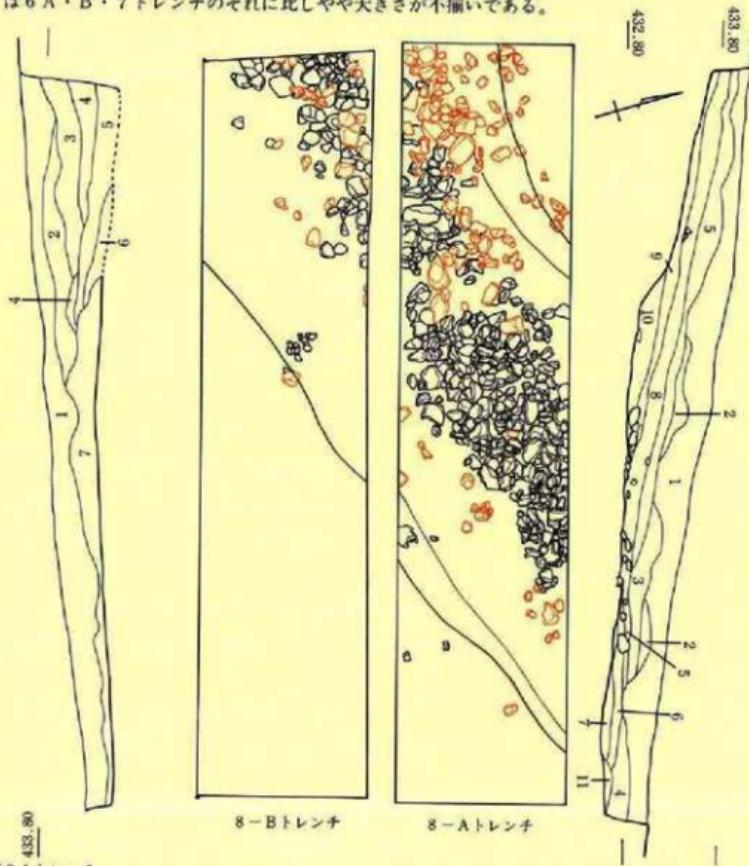
第8層：暗赤褐色土層（粘性普通、しまりも強
 い。礫を多量含む。）

第9層：赤褐色土層（粘性強く、しまりも強
 い。礫を多量含む。）
 第10層：暗黃褐色土層（粘性普通、しまりは
 弱い。礫を含む。）

第175図 第6 A・Bトレンチ [名]

を8A、南側を8Bトレンチとした。

調査の結果は6(A・B)トレンチと対応している。8Aトレンチで、墳丘盛土を、8Bトレンチで整地面の立ち上がりを確認した。砾も2層にわたって検出され、下層の埋帶は墳丘に沿って弧状に敷きつめた状態で検出され、上層は墳丘から転落した状態でみられた。ただし下層の砾は6A・B・7トレンチのそれに比しやや大きさが不揃いである。

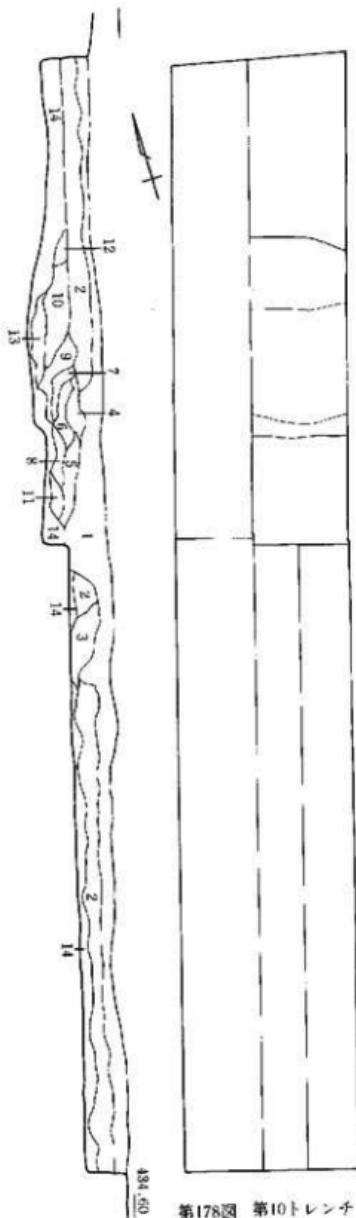


第8Aトレンチ

- 第1層：表土層（耕作土層）
- 第2層：暗褐色土層（粘性弱く、しまりはやや弱い。褐色礫を少量、小砾・カーボン粒を微量含む。）
- 第3層：暗褐色土層（粘性無く、しまりはやや強い。小砾・赤褐色礫を少量、カーボン粒を微量含む。）
- 第4層：暗褐色土層（粘性弱く、しまりはやや弱い。小砾・赤褐色礫を少量、カーボン粒を微量含む。）
- 第5層：褐色土層（粘性無く、しまりは普通。礫を含む。）
- 第6層：茶褐色土層（粘性無く、しまりは弱い。茶褐色土ブロックを含み。砾粒子を少量含む。）

- 第7層：暗赤褐色土層（粘性やや強く、しまりは弱い。カーボン粒を含み、礫・小砾を少量含む。）
- 第8層：暗赤褐色土層（粘性普通、しまりも普通。埋帶粒子を含み、カーボン粒・礫を少量含む。）
- 第9層：暗赤褐色土層（粘性やや強く、しまりは弱い。礫・小砾を含む。）
- 第10層：黄褐色土層（粘性弱く、しまりは強い。小砾粒子を多量含む。）
- 第11層：赤褐色土層（地山）

第177図 第8A・Bトレンチ (3)



第10トレンチ (第178図)

前方部確認の為、第7トレンチの延長上に設けた $2 \times 12\text{m}$ のトレンチである。

表土の下層が地山となり、盛土は確認できなかつた。しかし断面観察では自然堆積とは考えにくい落ち込みが確認され、何らかの掘り込みがあったとも考えられるが、当古墳に附属するか否かは不明である。

なおセクション図における段差はサブトレンチの為で地山の状態を示すものではない。

第9トレンチ

第11トレンチ

前方部確認の為、第10トレンチの両側に設けた。

調査の結果、表土（耕作土）の下層が地山となり、平面的にも断面観察上も、所見は得られなかった。

第4トレンチ (第179図)

内部主体の確認を行なう為に墳頂部に設定したトレンチである。 $2 \times 8\text{m}$ を基本とし東・西に2本設定し必要に応じ、拡張した。また内部にはサブトレンチを設けた。

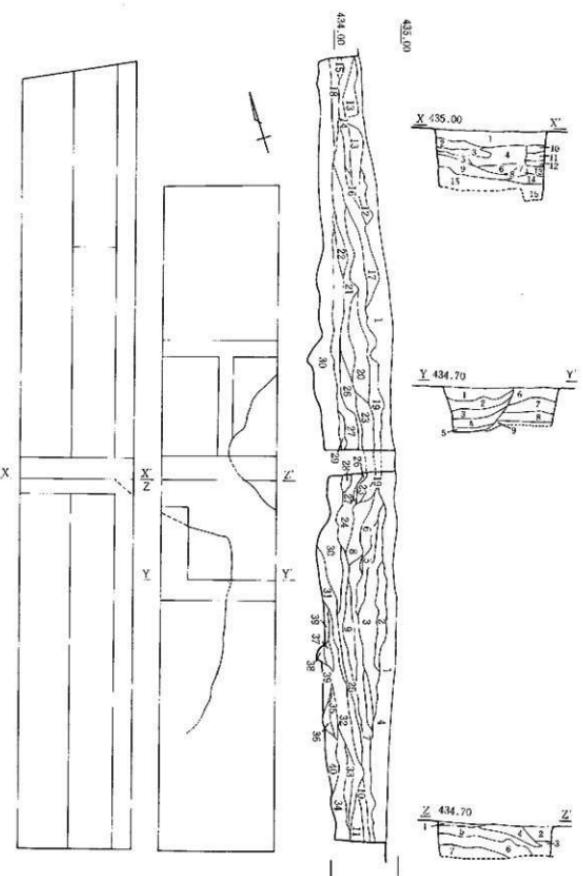
調査の結果、内部主体を検出する事はできなかつたが、断面観察によって墳丘構築方法の大体をあきらかにすることができた。

墳丘は基本的に赤褐色土と黒褐色土（暗茶褐色土）を交互に盛ることによって構築されている。しかし、

第10トレンチ

- 第1層：耕作土層
- 第2層：赤褐色土層
- 第3層：赤褐色土層
- 第4層：赤褐色土層
- 第5層：赤褐色土層
- 第6層：赤褐色土層
- 第7層：赤褐色土層
- 第8層：耕作土層
- 第9層：赤褐色土層
- 第10層：赤褐色土層
(※ リーフ土を含む。)
- 第11層：耕作土層
- 第12層：赤褐色土層
- 第13層：赤褐色土層
- 第14層：赤褐色土層（地山）

第178図 第10トレンチ



第179回 第4トレンチ(%)

第4トレントチ南-北セクション

33層：黄水苔褐色土第（粘性無く、しまりは普通。砂・小礫を含む。）

- 黒毛牛1頭：筋膜無く、しまりはややいい。カーポン
粒を多く、小片を多く含む。

■赤毛牛1頭：筋膜無く、しまりはややいい。赤肉色
がブロッコリ状（小片を多く含む）。

■白毛牛1頭：筋膜や少く、しまりは弱い。赤肉色
がオランダ豆（小塊と小塊、カーポン粒を多く含む）。

■青毛牛1頭：筋膜や多く、しまりは弱い。赤肉色
が細粒（小塊と小塊を多量含む）。

■赤毛牛1頭：筋膜無し。しまりはややいい。小片・カ
ーポン粒を多く含む。

■明毛牛赤肉牛1頭：筋膜無く、しまりもややいい。小片を
少し多く、カーン粒を微量含む。

■明毛牛青肉牛1頭：筋膜無く、こりよりもややいい。細・小
片を多く含む。

トレ東-西セクション X-X'

- 1: **モード** 電話番号に用
 - 2: **モード色** (品目無く、しまりはやせい) 小瓶を多く持つ
 - 3: **モード** (品目無く、しまりはやせい) 無地毛色 ブラック(含む、小瓶を多く持つ)
 - 4: **モード色** (品目無く、しまりはやせい) 小瓶、小細胞(抱き合つ)
 - 5: **モード** (品目無く、しまりはやせい) お赤毛色(黒を多く持つ)
 - 6: **モード** (品目無く、しまりはやせい) 黒毛色(黒を多く持つ)
 - 7: **モード** (品目無く、しまりはない) 猫耳: カボン(少々含む)
 - 8: **モード** (品目無く、しまりはない) 小瓶、小細胞(抱き合つ)
 - 9: **モード** (品目無く、しまりはない) 小瓶を少々持つ

11月 = 23巻

- | | | |
|----|---|----------|
| 1周 | 4 | トレー駆動第3周 |
| 2周 | 4 | トレー駆動第5周 |
| 3周 | 4 | トレー駆動第7周 |
| 4周 | 4 | トレー駆動第9周 |

3月：4トレ観測第7番
1月：1トレ観測第5番

- 5: 水芭蕉色 (水芭蕉く、しまりはやゆめい)。様・様子・様式。或芭蕉色 (或芭蕉くと多喜にむす)。14ト編集版第31回で記載。

6: 水芭蕉馬毛 (水芭蕉く、しらじはやゆめい)。カーブン様・様子・馬毛を含む。

7: 驚・驚愕 (おどき・おどきがく)。驚き (おどき)。或芭蕉馬毛 (或芭蕉くややく、しまりもややく)。小原・馬毛・馬毛馬・馬毛 (或芭蕉ややく、しまりもややく)。カーブン・馬毛 (色彩上部にマップを含み、駆け・馬毛・ややく)。或芭蕉色 (或芭蕉色マップを多喜に含む)。

8: 嘉魚島色 (嘉魚色く、しまりはやゆめい)。或芭蕉島色 (或芭蕉色くと多喜にむす)。14ト編集版第31回で記載。

トレ東西セクション7.-7.

- 1番: 4.5レ 鉢植系第1番
2番: 水苔褐色土色 (粘性強く、しまりはやや強い。硬・小粒、カーボン鉢を少々含む。)
3番: 水苔褐色土色 (粘性強く、しまりはやや強い。黒褐色土ブロックを含む。硬・小粒、水苔色土を多量含む。)
4番: 水苔褐色土色 (粘性やや強く、しまりはやや強い。水苔色土ブロックを含み、小粒・カーボン鉢を小量含む。)
5番: 4.5トレ 鉢植系第19番
6番: 4.5トレ 鉢植系第20番

- 198 -

墳丘全体を詳細に観察すると、その様相は一様ではなく、平面上にも、レベル上にも何回かの段階にわけ構築されている。

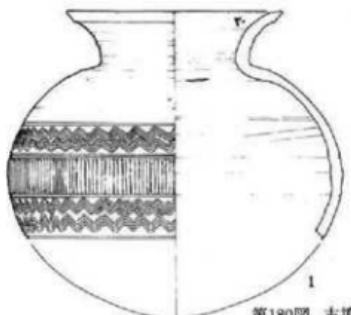
すなわち旧地表面を削りこんだ整地面にまず第30層～40層までと交互に盛り上げ上面を平坦になす。次いで墳丘は中央部に小マウンド（第23層～第29層）を築き、更にそれを核とし盛土を行い、最終的に墳形を整えたものと考えられる。また断面観察中、盛土下部で2ヶ所の小ピットを確認した。サブトレント内であった為、平面形態は把握できなかったが、墳丘構築中に穿たれたものであることは確かである。

内部主体は全く確認できず、炭化物・粘土等も検出できなかった。しかしトレンチ内で平面的に落ち込み様の土層の違いが認められ、また断面観察においても、南北セクションの第3～9・24・25層とそれに対応する東西セクションY-Y'の第1～4層、同X-X'の第2～8層などが確認され、当初内部主体の位置を示すものとも考えた。しかし調査の進展につれ、先述した様に墳丘構築の段階を示すものである可能性が強かった。

本トレンチの排土はすべてふるいにかけ、遺物の発見に務めたが、管玉1、丸玉破片1、鉄製品断片5、土器器細片少量を得たのみにすぎない。

第5節 出土遺物

調査の結果、本古墳からは、須恵器・土器器・鉄製品・玉類が出土した。以下これらについて述べることとする。



第180図 古墳出土土器(1)



1 土器類

(第180図、図版23・32)



須恵器

第5・6Aトレンチ出土の

3 接合資料であり共に疊帶面直
上から出土している。



0 10cm 1は胴部下半が欠失する壺。

胴部からゆるやかに外反する
頭部を有し、口縁部は開いて

立つ。頭部の立ち上がり、口縁端部のつくりはやや甘い。口縁部径14.8cmで胴部中半に最大径をもち23cmを測る。胴部中位には、1～2条の沈線によって区画された横位の文様帯が3帯巡っている。上位の文様帯は、5本単位のクシ状工具による左上がりの波状文が、下位の文様帯は同右上がりの波状文が各々2段施される。中位には5本単位のクシガキ縦位沈線が施される。文様区画沈線は非常にシャープである。整形は右廻り、頭部外面はカキメ、口唇部はナデ、頭部内面は

ナデ、胸部内面はヘラ状工具によるナデである。

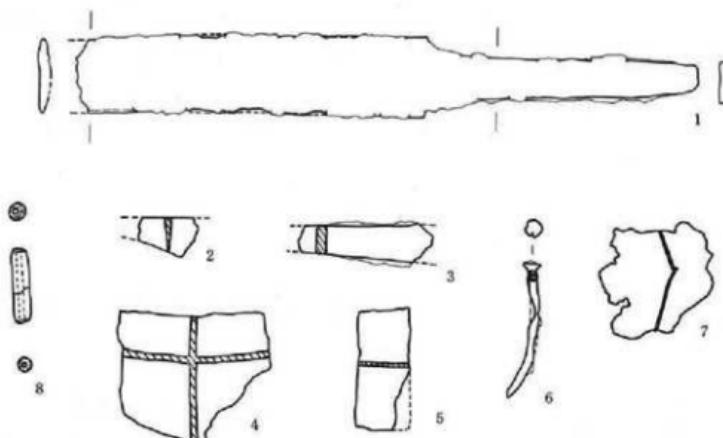
色調は淡灰褐色を呈し、頸部内面に緑色釉の残渣が認められ、融着物も残る。肩部外面には褐色釉もわずかに遺着する。焼成は堅緻、胎土は細かな黒色粒を含み、密である。

土器

おもに第4トレンチから20片あまり出土しているが図示したものは2点である。

2、3共に壺底部残である。共に焼成は甘く、内外面共摩耗が激しい。底部に押えの指痕痕が残る。2は胎土に雲母・石英を含み、色調は橙褐色を呈する。3は赤茶褐色を呈する。

2 鉄製品（第181図、図版32）



第181図 古墳出土鉄製品及び石製品(1/2・1/4)

1は鉄剣である。

墳頂部の抜根時に出土したもので身部上半を欠損している。

現長32.5cm、身部幅4.2cm、基部幅(3.0)~1.4cm、厚さ0.4~0.7cmを測る。鍔の為遺存が悪く肥大化が進んでいる。剣身の断面はレンズ状を呈しており、一面の鍔は確認しうるが他面は明確でない。関部は直角につくられ、基部は茎尻へ向い幅を細める。目釘は確認できない。身部には本質部が遺着しており鞘木とも推定される。

2・3は刀子片。2は現長2cm程の身部片、身部幅1.5cm、棟厚0.3cmを測り、平棟である。3は刀子基部片。現長4.7cmで0.4×1.1cmの断面方形を呈する。

4・5・7は不明鉄片。4は5.2×4.7cm程の鉄板片である。器厚は0.2cmを測り、僅かに湾曲する。用途等は不明である。一面には全体にわたって黒色の附着物が認められるが何であるかは不明である。5は1.9×4.2cmの方形を呈する鉄片で器厚は0.1cmを測り一部欠損する。7は3.7×4.1cm程の鉄板片で遺存が悪い。厚さは0.1cmを測る。

6は全長4.8cmを測る釘である。遺存が悪く断定しえないが、0.3cm程の断面円形を呈する。

2～6は墳頂部第4トレンチ排上内から、7は第1トレンチから出土している。

3 玉類（第181図、図版32）

8は管玉。第4トレンチ排上内からの出土である。全長2.6cm、端部径0.5cm、胴部最大径0.55cmを測り、僅かに中彫みの形状を呈する。孔は両側から穿孔されている。材質は緑色凝灰岩で軟質である。いたみがひどく表面が荒れているが、胴部において縦方向の研磨痕が観察できる。色沢はくすんだ暗緑色を呈する。

他に同一石材からなる丸玉破片が一片出土したが、遺存状態はきわめて不良であり取りあげのさい崩壊した。

第6節まとめ

今回の調査はトレンチによる確認調査であった為、古墳の内容・性格を充分に明らかにしえたとはいえない。しかし墳形・規模等の確認をなしえ、一定程度の目的を果たす事ができた。

以下それについてまとめてみたい。

墳形

当初、墳丘測量図等から、前方後円墳であるとの期待を抱かせたが、調査の結果、北西部に8⁴¹×2mの造り出しを持つ円墳である事が判明した。墳丘規模は径24mで、後述する礫帯を含める28m程の直径を持つ。高さは現状で約2mを有するものである。

墳丘構築

墳丘は旧地表面を削平して整地した後、盛土を行なって構築される。⁴²

第6・7・8トレンチで検出された溝状掘込みで丘尾を切断し、同時に地表面を削平して墳丘構築面の整地を行なっている。丘尾を切断する溝状部は墳丘に比し、径の大きな弧状を呈し墳郭に対し、やや外開きの三日月状をなしている。その後、墳丘を構築するのであるが、その際整地面の外周2m幅程はテラス面として残している。

盛土は赤褐色土と黒茶褐色土を互層として積み重ねているが墳丘全面を覆う各層を一時に積み重ねるのではなく、墳丘を部分的に、また段階的に構築している。

すなわち、第一段階として整地面上に30～40層までを盛り墳丘基盤とし、次いで墳丘中央部に小マウンド23層～29層を築き、それをおおう様に南側・北側からそれぞれ盛土を行なう。最後に更に墳丘全面にわたって盛土を行ない墳形を整えたものであろう。

外部施設

調査では埴輪は発見されなかった。度々述べた様に墳丘がかなり削平されている為、埴輪がすえられた可能性を全く否定するものではないが、その可能性はかなり低いものといわざるを得ない。

い。

葺石については、墳丘に葺かれた状態では検出されなかった。しかし墳丘南側の第6・7・8の各トレンチにおいては礫層を2層に区分する事が可能であり、上層のものについては墳丘からの転落と考えるのが妥当である。逆に第1・2トレンチにおいては、墳丘面から、転落した状態での礫を検出する事はできなかった。第5トレンチにおいては礫の状態がかなり乱雑であり、墳丘からの転落であるか、礫帶の搅乱であるかは明確にしれない。以上の事から、六科丘古墳においては葺石は墳丘南面の一部を中心としてその存在の可能性が強いものの、墳丘全面を巡る状態ではなかったといえよう。また第5トレンチで確認された礫石も、現状からは全面を巡ったものであるか否かは判然としない。

次に礫帶であるが、墳丘の外周に残された整地面上に幅1.8~2mに亘って施され、墳丘を全周するものと考えられる。第1、第2、同南・北拡張区、第6~8トレンチにおいては、よくその状態を観察する事ができた。その様相は、丘尾切断部である第6~8トレンチにおいて理の選別・敷き方等は特に整えられており、造り出し部である第2トレンチに比較しても見事な配列を示している。この事は先述した葺石のあり方と共に、墳丘築造時に、当該墳丘面を、より整えようという意識の反映とも考えられる。

内部主体

調査に於いて内部主体を明確に把握しえず、また断面観察においてもその痕跡をつかむ事はできなかったが先述した墳丘構築時に核とした小マウンドの存在が、内部主体構築と何らかの関わりを持つものである可能性を窺わせる。また現在の段階で内部主体として想定しうるものは、石材類・粘土・炭化物等の検出がない事から木棺直葬の可能性が考えられるが、その位置・規模等は一切明らかにしえず明確な判断は今後の調査に期待したい。

遺物

六科丘古墳の出土遺物は非常に少い。詳細は先述した通りであるが、時代判定の材料となりうるものは須恵器の壺のみであった。¹³現在の所、他の類例は皆見にふれない為、產地・時期等は不明であるが、その文様構成・形状等から、一応5世紀代中葉以降とするに止めておきたい。出土地点・出土状態・接合關係等から、副葬品としてより葬送儀礼に伴う供獻品としての性格を持つものと考えたい。

年代

最後に、六科丘古墳の略年代を推定しておきたい。まず、山上單独墳である事、また墳丘築造にあたって自然地形を最大限に利用している事、また、副葬された剣、玉類等から前期古墳的様相を備えているといえよう。また出土した須恵器からも5世紀代後半の年代を与えるのが妥当であろう。

第7節 山梨県に於ける六科丘古墳の位置

山梨県内では、現在20基を超す前期古墳が確認され、その分布は平府盆地南縁の曾根丘陵を中心として認められ、次いで盆地南東縁の一宮・御坂、同西縁の甲西・鷹形地域に及んでいる。六科丘古墳は盆地西縁域に認められる1群中に含まれるもので、盆地床を見おろす台地前端に、5世紀代初頭から6世紀初頭にかけて築造された5~6基の前期古墳の一つである。中でも鷹形町上野に所在する物見塚古墳（銭塚）は、唯一正式の発掘調査を受けたもので、5世紀代初頭の年代を与えられている。台地先端から僅かに降った尾根中ほどに占地しているこの古墳は、調査報告書（松浦他、1983）によると、現長46mを測る前方後円墳で、後円部溝30m、前方部現長16m、高さ4m強の規模を有するものである。また副葬品として、珠文鏡一面、鉄劍三口、直刀一振、緑色凝灰岩製の管玉12、白玉1が認められた。内部主体は確認されなかったが、幅2.2m、長さ3.5mの墓壙が推定され粘土部を想定されている。また外部には片石を有する周溝・埴輪は認められない。坂本氏は出土遺物の分析から、4世紀終末から5世紀前半の年代を与えられている。次いでその内容の一端が明らかにされているものとして、熊野神社古墳（上野・1973）がある。本墳は山腹からのびた台地前端にあり、明治年間に直刀1振、鉄劍1口、鏡2が出土している。更に口縁径25cmを測る円筒埴輪が出土し、盆地西縁域では確認される唯一のものである。埴輪は、川西編年Ⅴ期にあたり、6世紀初頭に比定される。これら以外に物見塚から西へ約250m程のぼった台地前端に上の東古墳が存在する。本墳は円頂丘上に地形を最大限利用して築かれており、径25~30mを測る円墳である。墳丘からは須恵器小片が採集されているが、詳細は不明である。時期を確定しうる資料には乏しいが、墳形・規模・占地などから、六科丘古墳と同時期あるいは若干後出し、熊野神社古墳よりやや先行する年代を与えておきたい。更に物見塚古墳の南側対岸の台地上には通称「刀塚」が存在したとされる（上野・1973）。物見塚古墳とほぼ同様の立地を示し、本来「刀塚」「銭塚」として並び称せられてきたが、現在は壊滅しその詳細は明らかでない。

また、これらより更に南へ降った増穂町には、仿製鏡二面、瑪瑙製勾玉を出土した法華塚古墳が存在したが、識者によりその年代観は一致していない。^{註4}

これらの古墳は一応、物見塚古墳-六科丘古墳-上の東古墳-熊野神社古墳の相対年代が考えられ、5世紀初頭から6世紀初頭に比定されうるが、熊野神社古墳以外は、未だ不確定要素が多いといえよう。

ところで、県内に於ける前期古墳は曾根丘陵に濃密に分布しているが、その出現は4世紀代中葉とされている。まず、全長52mを測る小平沢古墳-前方後方墳（小林他・1978）が、中道町米倉山の尾根先端に、次いで全長120mを測る大丸山古墳-前方後円墳（仁科・1931）、全長168mの中道鏡子塚古墳-前方後円墳（上田・1930）が4世紀中葉から5世紀初頭にかけて、曾根丘陵中央部に連続して當まれる。5世紀代に入ると墳形は円形・丸山塚古墳へ転じ、5世

紀代前半の天神山古墳（全長132m）（上野他・1975）で再び前方後円墳形を採るもの、5世紀代後半の茶塚古墳一前方後円墳（小林他・1979）をもって、この中道町の造墓集団はほぼ終焉を迎えるものである。

小平沢古墳は全長52mの前方後方墳で、内部主体は木棺直葬あるいは粘土棺、副葬品に船載鏡、勾玉を持ち、墳丘からS字状口縁甕を出土（山本・1980）する。大丸山古墳は有名な上下二重構造の堅穴式石室を有し、船載鏡（三角縁神獸鏡を含む）、鉄製工具、短甲を副葬している。中道銚子塚古墳は丘陵下部に占地し、鏡（三角縁神獸鏡を含む）、碧玉製腕飾類等が副葬された堅穴式石室を持ち円筒埴輪を有する。丸山塚古墳は銚子塚古墳主軸線上に築造され、朱門文を施された堅穴式石室を内部主体とし、船載神獸鏡、碧玉製短刀柄等が副葬され、円筒埴輪を持つ。茶塚古墳は丸山塚古墳の更に東方に位置し、堅穴式石室を内部主体とし、鉄製武器、馬具等を副葬される。報告書では前方後円墳とされるが、疑問をなげかけられている（橋本・1984）。

4世紀終末から5世紀初頭には、盆地内に於ける古墳の分布はその領域を拡大する。まず曾根丘陵を東へ進み、八代地内に全長84mを測り、銅鏡、直刀、剣、勾玉、工具類が副葬された堅穴式石室を内部主体とする八代銚子塚古墳（前方後円墳）が出現し、5世紀前半には更に盆地東南部（御坂町）に堅穴式石室を内部主体とし、銅鏡、管玉、鉄製武器、工具が副葬された亀甲塚古墳（墳形不明）が出現しその分布域をのばす。更に盆地西城、市之瀬台地縁辺には、物見塚古墳をはじめとする1群の古墳が営まれる。

曾根丘陵中央（中道町）～同東部（八代町）に営まれた前方後円墳（前方後方墳）は、初現古墳である小平沢古墳を除くと全て100mを越す規模を誇り、副葬品も豊富な内容を持ち、おそらく盆地全域に亘る政治的結合体の首長墓であったことが窺われる。これに対し、他域の古墳が規模、副葬品共に圧倒的に貧弱であることは、両者間の隔絶した力量差を感じさせる。とはいっても、5世紀代前半の中規模古墳の出現は、盆地内に於ける中小首長層が政治的発言力を得つつあることを窺わせ、特に前方後円墳（物見塚）の盆地内他地域への波及は、中道首長家の相対的弱体化と、更には各政治的共同体間の交通関係の変質をも予感させるものである。

次いで、5世紀代の後半～6世紀初頭に至ると、曾根丘陵西端地域でも古墳の築造が開始され分布域を更に拡大する。

盆地西縁、市之瀬台地では先に述べた通りであるが、曾根丘陵西端域では、三塙町に赤鳥元年銘鏡等が副葬された烏居原孤塚古墳が存在する。6世紀初頭前後には、合掌式石室に桂甲、眉庇付青等が副葬された壬塚古墳が、全長46mの大塚古墳等がある。後二者は、三星院古墳と共に、帆立貝式古墳である。丘陵東端では、境川村地内に箱式石棺等を内部主体とする馬乗山1号墳（円墳）、全長40～50mの馬乗山2号墳（前方後円墳）が存在し、丘陵下へ降りて、堅穴式石室を内部主体とし円筒埴輪を持つ表門神社古墳に続く。馬乗山2号墳は、疑問の投げかけられている茶塚古墳を除くと、盆地最後の前方後円墳である。八代地域に入ると5世紀代後半に、八代孤塚古墳（全長26cm、剣、直刀、鉢が出土）、乳文鏡、玉類、直刀等が副葬された团栗塚古墳が認めら

れ、両者共に帆立貝式古墳である。

全長100mを超す前方後円墳の築造が大神山古墳で終末を迎えたのに前後して5世紀代後半には、盆地西縁から東南縁にかけて中型の古墳が顕著に認められる様になる。また、5世紀末～6世紀初頭にかけて帆立貝式古墳が目だって築造されている。茶塚古墳、表門神社古墳、また六科丘古墳も帆立貝式古墳の可能性が指摘されている（橋本、1984）。もしもその指摘が正しいとするならば5世紀後半～6世紀初頭にかけ、その年代に若干の差を有しながらも盆地内に存在した主要な古墳築造集団の全てが帆立貝式古墳を築造し、ほぼそれをもって前期的様相をおえている事は注目に値しよう。これら盆地内に存する帆立貝式古墳の形態等の分析（小林他、1985）等が必要とされる所以でもある。5世紀代における古墳規制論（小野山、1970）はひとまずおくとしても、平府盆地内においても、中道首長家の衰退と中小首長層の顕在化という政治的地域集団の相対化が確実に進展しているものといえよう。この様な相対化は同時に前期古墳から後期古墳への変化にみられる様な地域政治集団内・集団間の変質をも伴って、盆地社会の政治的・社会的再編へと進むものであろう。

ところで六科丘古墳を円墳系の古墳とした場合、5世紀代に盆地内他地域で認められた古墳が前方後円墳、帆立貝式古墳を主体とするのに比し、六科丘古墳を含む市之瀬台地縁辺に築造された古墳は、その初現である物見塚古墳を除くと、ほぼ円形を基調としている。これは他地域政治集団との単なる力量差であるのか、或いは中央政治集団を含めた他集団との関係のとり方の問題であるのかは興味深い。

ともあれ、今回調査された六科丘古墳の存在は、古墳時代前半に於ける盆地内社会の複雑な政治課題を示しているものであり、最近調査が進められている集落遺跡、生産遺跡などの解明と合わせ本県の古墳時代研究に一石を投じたものといえよう。

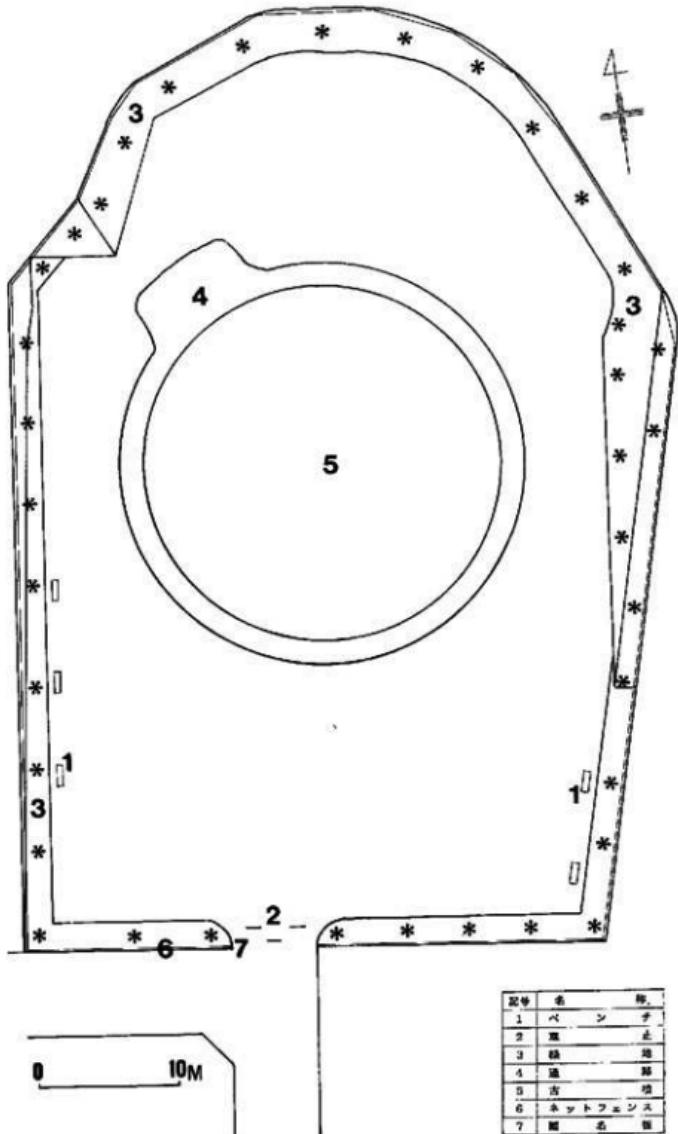
おわりに

今回の六科丘古墳の発掘調査は墳形、規模、内部主体等の確認の為に行なわれたものである。その成果は以上述べた所であるが、保存し活用すべきであるという、町文化財審議委員会の答申を受け関係者協議のうえ、公園化し保存、活用すべく決定がなされた。

既に保存整備がなされつつある物見塚と共に地域の文化財として保存され、歴史的資料として活用される様期待するところ大なるものがある。

最後に保存決定に関して御協力、御尽力いただいた町内各位、山梨県考古学協会の方々に感謝の意を表すと共に、特に今回の設計変更、公園化に際してはセキスイハウス（株）、（株）大木組の方々の文化財に対する深い御理解、御協力の賜物であり、心よりの敬意を表する次第あります。

（第1、7節 清水 博 第2～6節 小口妙子）



第182図 古墳公園(案) [本図は(株)大本組の御好意によるものである]

- 注1 本墳を帆立貝式古墳とする指摘がある（橋本、1984）。帆立貝式古墳と造り出しを有する円墳の概念規定については、（遊佐、1980）、（石部、1980）等がある。ここでは第2トレンチの断面観察により、方形部が墳丘の一要素となりえるかを基準とし「造り出し付円墳」とした。尚、「造り出し付円墳」とした場合、遊佐氏分類（遊佐、1982）のII類型にあたる。
- 注2 今回の発掘で確認した円丘部坡下層は黒褐色土であり、また墳頂部とのレベル差からも、墳丘表面には到達していない可能性が強い。
- 注3 守屋寺一氏（板橋区教委）にご教示いただいた。
- 注4 橋本氏（橋本、1984）は帆立貝式から5世紀後半の年代を、坂本氏（坂本、1973）は勾玉から7世紀の年代を与えられている。
- 注5 本墳については帆立貝式古墳であるとの説（小林他、1985）もある。また坂本氏の御教示によると、形状、規模は不明なもの、西隣する鏡子塚古墳方向へ、張り出し部が付設されている可能性が強いとの事である（坂本、1985）。
- 注6 紙文では5世紀代（第3四半世紀）の年代を与えられている。坂本氏も最近の研究（坂本、1985）ではほぼ同年代を考えられている。
- 注7 報告書では、発達した前方部に竪穴式石室を有する前方後円墳であるとされている。しかし像文に接する限りでは、墳形・形状ともその根柢は脆弱の様に思われる。また墳形決定の根拠とされた「横断面よりの観察」も一部しか公表されておらず、墳形の確定には若干のとまどいを感じるところである。尚、橋本氏は本墳に帆立貝式古墳の可能性を指摘（橋本、1984）しておられる。
- 註8 坂本氏（県産文センター）の御教示による。径5m程の円文が施されるが、不確定要素も認められるとの事である（坂本他、1985）。
- 註9 小林秀夫氏の分類（小林、1978）では金鐘山形式である。
- 補註 硫黄帯（敷石帯）について考察を加えた例としては三池平山墳（静岡県清水市）がある。（内藤・大塚、1961、杉山他、1983）。三池平古墳で認められた「敷石帯」は墳基部（墳丘末端部）を全周し、幅1.7~3.7mを測るもので径10~15cmの円錐を主体として構成され1~2~3段に積み重ねている。敷石帯上位の墳丘面からは礫が検出されず、敷石帯との境界には右列が認められ、また敷石帯外周は自然礫層と接続している。この敷石帯は埴輪を作りうるものと考えられ部分的ではあるが、敷石帯の更に外側に周溝が巡っている。
- 1961年度の像文で、内藤氏は、後藤守一氏の調査時の所見として「堀底帯」としての意味を持ち、「古式古墳に伴う周溝も同じアイディアで発生したと解すべきではないか」という見解を紹介されている。しかし、墳丘調査報告書（1983）で杉山氏は、自然礫層との接続、周溝の存在などを根拠に、後藤氏の見解に対して「古墳を外域から区画するという敷石の役割もあながち否定できないが、むしろ……封土の流出を防ぎ埴輪を整える目的を併せもった施設」と考えておられる。
- これに対し本墳の場合は、①墳丘末端ではなく墳丘外周のテラス面上に設かれている事、②部分的ではあるが敷石の存在した可能性が窺える事、③丘尾を切断した部位を除くと周溝の存在が認められない事、等、三池平古墳の場合と若干趣を異にしており、古墳を外域から区画する機能をもっていたと思われ、後藤氏の提起された内容により近いものと思われる。

第VII章 結語

はじめて六科丘を訪れたのは、昭和57年の秋であった。(株)大本組野瀬、松田尚氏の強い要望があつて同氏らに同行したのである。六科丘は、東に甲府盆地を広く見下し、遠く富士山を望む絶佳の地であった。当地は、既に県教育委員会木本健氏らの調査・指導があつて遺跡の所在が予測されており、その確認が急がれていたのである。その調査の要請がわれわれにあることにより、早速に柳形町教育委員会と協議をもち、昭和57年11月末より2週間に亘って試掘調査を実施して、同遺跡の時期、性格を明らかにし、遺跡の範囲を把握することに努め、その後に資することとした。この結果、遺跡の状況の一端が明らかになり、あらためて県教育委員会、町教育委員会と工事主体のセキスイハウスとの間に協議がもたれ、本調査が企図されたのである。

本調査に当っては、われわれは地元での調査体制と善処を要望し、直接の担当を辞退したのであるが、小林喜男前町長、上田幸吉前教育長らの懇意を黙り離く、地元での調査主任の任用を不可欠のこととし本調査をも担当することとなったのである。発掘調査は、清水博主任調査員をはじめ、地元関係各位の多大な労苦があつてはじめて遂行されたものであり、また当地に不案内なわれわれには木本健、新津健、坂本英夫氏らをはじめとした山梨県の研究者各位の適切なご助言があつて無事調査が終了したものである。ここに厚くお礼申し上げる次第である。

さて調査の結果については、既述のごとく各調査員により委細がつくされており、あえて蛇足の要もないが、若干のとりまとめを行い、いささかの私見をそえておこう。

試掘調査により、六科丘遺跡は大きく丘頂部周辺と、丘麓部とに区分しえる地形上の特徴をもち、合せて、発見された遺構・遺物の時期や性格も異なることが判明した。そこで前者をI区、後者をII区と区分して本調査にとりかかった。しかし本調査では、結果的には工事対象約35,000m²の全地域を調査実施地としたことになる。

(先土器時代) 発見された遺物の中には、ナイフ形石器、尖頭器、その他剥片類に先土器時代に属せしめるものが検出されたが、遺憾ながら、その出土の状況や相当すべき遺構等は確めえなかつた。主に丘頂から西斜面の住居跡覆土、基土中から発見されたものである。しかし、本遺跡形成にかかわる最も古い時期のものとして重要である。

(縄文時代) 縄文時代に相当する土器片が僅かに発見されている。早期から晩期にまで亘るが、晩期のものがII区に属する以外は、その殆んどはI区にあって、丘頂部及びその周辺部に限られる。この時期に帰属すると考えられるものに集石遺構・土壙があるが、土壙の大半はむしろ時代が決定し得ないとすべきであろう。集石遺構は縄文時代に所属することを妥当とするが、詳細な時期まで定めることは少い。しかし最高頂部に所在した立位の石棒は注目される。

この場の眺望の良さと相俟って、若干の空隙と周囲に配された集石、上塙は、同時性の決定しえぬとはいへ特殊な雰囲気を醸し出し、祭場を想定するにふさわしい。既に察せられたようにⅠ区の縄文時代の遺構は、日常的な生活空間を構成したものとは見做し難い。今後の周辺遺跡に関連した調査・研究が期されるところである。

(弥生時代後期、古墳時代前期)

六科山遺跡の土体を占めるのが弥生時代終末から古墳時代前期に亘る住居跡群である。この時期の遺構は、六科丘の中腹、標高439mより下位(Ⅱ区)に展開している。調査面積は約11,000m²であり、なお西側には若干の遺跡の抜かりを予想しえぬこともないが、北側・南側は限界とみてよく、集落のほぼ全貌を調査したといつてよい。竪穴住居跡33軒、竪穴遺構4ヶ所、掘立柱建物跡4棟がこれである。

分担者による出土土器の分析より、凡そ3期に分類されその変遷が考えられている。何分遺跡の擾乱が著しく、一括の資料に恵まれたとはいへ難く、十分な検討が行き届いたとは限らないが観察とりくみ、一つの見解が示されたいえよう。總じて変化に乏しく、時間的にはかなり限定された所産と考えられるが、時期の細分と位置づけは、現在集積されつつある県内資料の公表と相俟って今後の検討が必要である。なお一、二の点を付言すれば、僅少資料ではあるが、他地域との対比可能な上器片が検出されたことは重要である。第37図10、11、第9図11である。前者は、12号住居跡に関わり、概ね駿河湾地方に多くみられ、大型壺Bと呼称される大廓式土器の特徴を示すものとされる(加納、1981)。遼く奈良県經向遺跡の辻土壙4下層(石野・関川、1976)の組成中にも管見する。この種の土器の型式変化は適確には把えられていないが、本遺跡資料は他器種との共伴関係において月の輪新(加納、1981)、長野県下蟹河原(藤森、1939)より先行する段階に相当するのは間違いない。一方、9号住居跡で検出された2片のS字口縁甕は、その良質で定型化した器型、口唇内面に軽く面を有し、頸部内面に粗く削毛目を残す手法とともに、安達・木下氏のII類(安達・木下、1974)、湯川・加納氏のA₂類(植松他、1981)に相当し、古相を示している。この点でも經向3式、東海西部の元屋敷式等との時間的な親近性をうかがわせる。先の大型壺Bとともに本遺跡土器群の一端は駿河湾地方の大廓式に相当し、かつ古い段階にふさわしいと考える。しかし、高環、小型精製土器群の欠如は、なお問題を残している。一方、当方でS字口縁甕が盛行し、小形高環、小型精製土器を含む器種構成を示している京原遺跡、坂井南遺跡、西田遺跡の出土資料に比較すれば本遺跡は先行することが予測しうるが、27号住居跡の片口付広口壺(第80図1)は、全くの同類が京原、坂井南に出上例があり、さほどの時間的懸隔は考え難いとせねばならない。

本遺跡の古相の段階をいかに比定すべきかは、なお解決がつかないと云うべきである。やはり駿河湾地方に系類をもつ二重口縁を有する菱形土器(24号住居跡)は古い様相を示すし、5号住居跡出土の口縁部(第20図2)は、壺形上器と同定されたが、高環形土器とする可能性をも有する。とするならば、これも同様に古相の要素となろう。この古相の段階は当面、甲西町住吉遺跡

(新津健他、1981)が比較の対象としうるが、当遺跡の資料はやや特異である。彫刻文を多様に用いた土器群は、その系類の多くを遠江地方に求めることができ、横彫横線文と波状文をもつ高环、扇形文や有段羽状刺突文を有する壺などの存在は複雑である。しかし、これを弥生時代後期後半に一定点を求める(坂本、1984)のは妥当であろう。あえて六科山遺跡と比較すれば、住吉遺跡の壺はなで肩で胴下位に棱をもち装飾性が強く、先に推測した本遺跡の高环との比較等は、住吉遺跡を先行する位置おくことが可能である。しかし、本遺跡と指呼の間にある住吉遺跡が、若干の時間差を考慮しうるとはい、何故にかかる系類を異にした土器相を示すかは興味ある問題であり、本遺跡ならびに周辺遺跡に関連して今後の大きな検討課題となろう。いささか賛言を費したが、六科山遺跡は、駿河湾東部地域と深い関連つつ当地方のS字状口縁甕の波及期の直前、直後の短期間に形成され、廃絶した集落遺跡とすることができる。

集落の構成と変遷は、詳細に分析され、一つの論説が提示された。出土遺物が十分に揃わない各遺構に時期を比定し、群構成を考察することは至難である。住居規模に相応して構成を考慮するのは筆者も試みたことがあるが(間根、1974)、地域の集団構成の動向をふまえた今後の検討が必要である。また焼失住居に関連して、ほほ相い近い高位と空間を占める住居群が、2期に亘って災厄に相遇したかどうかは、なお問題を残していいよう。一方、集落の構成要素として掘立柱建物跡が検出されたことは特筆されよう。4棟分が発見され、いずれも居住地域の限界域に所在しているのは注意される。恐らく集落員の共同の用をなす倉庫跡と推定されるのであるが、一概に蓄積庫とするには問題がある。なぜなら本遺跡の占める地がかなり高位の山丘にあり、同時期の遺跡の所在が推測される古地下の遺跡群とは区別される。現在谷水川として利用される高地は、往時の利用は考慮し難い。むしろ水稻耕作とは異なる生産活動基盤を考えるべきではなかろうか。ここで、I区に検出された2号溝状遺構は注意されてよい。幅50~70cmの溝が約60mの範囲で一辺が直線状に、他の三方が弧状に一定空間を閉塞している。これに帰属すべき他の遺構や遺物が検出されず、その時期や性格を定めることができなかったが、住居群は掘立柱建物跡をその末端として上位の2号溝状遺構に及ばず、それぞれの遺構の空間配置が考慮されていると思われること。西側の直線状溝は、掘立柱建物跡をはじめ住居群の展開を意識していると解されること。本遺跡の遺構構成上からみた年代推定も、住居群形成の時間軸に溝遺構を推定することが妥当であると考える。これがいかなる機能と役割を果したかは明言し得ぬが、この溝に囲繞された空間に墓域を想定するよりは、何らかの生産活動に関連した遺構とみたい。やはり今後の類例をもっての検討が必要である。こうした集落の性格に関連しては次の点をも留意しておきたい。先に本遺跡の形成の時期の一端を、大崩式と時間を共有するとした。しかし、大崩式を規定する最も重要な要素としての小型精製土器群を欠き、高环をも殆どみない。これを時間的に先行するとするよりは、本遺跡の特性と見たのである。何らかの意味で先進的要素が強いと考えられる小型精製土器群、ないしは高环類を含まず、きわめて単純な器種組成を示す本遺跡の土器群に示される生活様態は、いささか停滞ぎみであった感を抱かしめる。こうした土器相が本地域に一般化しうるかどうか

は、今後の検討をまたねばならないが、小型精製土器群の流入に際して、駿河湾、南関東諸地域では小型丸底土器に先行して、小型器台の盛行する段階が広く認められているが、当地方では小型器台、古相のS字口縁腹はきわめて少く、小型器台の出現は、小型丸底土器やS字口縁腹III類以降の流入とは、あまり時をおかなかつたように思える。このことが妥当であるならば、こうした古式土師器生成期の齊一的要素の出現相の地域性が、この後展開する古式古墳形成に示される地域社会の動向といかに関連しているかの検討は重要である。いささか懐疑を重ねたが今後に残された問題は多い。

(六科丘古墳) 事前に確認されていなかった古墳が、土地造成時になって検出された。急遽その保護対策がせまられたが、県、町の行政当局、町文化財審議会および山梨県考古学協会（代表椎名慎太郎氏）らのご尽力、セキスイハウス、大本組のご理解により古墳公園として保存されたのは幸いであった。当初、円墳か前方後円墳かの物議を醸したが、調査の結果は、径約24mの円墳で、付り出し部を有することが判明した。残念ながら調査では主体部が検証されなかつたが、造成時に採集された鉄剣、調査時に発見された須恵器等により5世紀後半代に位置づけられる。したがって六科丘遺跡の集落とは、時間的には直接関連しない。しかし本地域では、物見塚古墳（松浦、1984）に次いで出現した古墳であり、曾根丘陵の古式古墳群と対比される貴重な資料である。

以上いささか冗長に過ぎたが、とりまとめと私見を述べた。ともかく拙いわれわれが、調査を無事完了し、ここに報告書をまとめたのは、関係各位のご理解とお力添えのあったことに尽きる。重ねて厚くお礼を申し上げる次第である。調査によって明らかになつたことも多いが、また新たな問題を生じ、今後に残された課題も多い。しかし本調査が、今後の当地域の研究に少しでも益するところがあれば喜びこれに過ぎるものはない。

(関根 孝夫)

(付) 本文中、分担執筆者の見解と異なる部分もあるが、あえて統一していない。

〔付〕周辺採集の遺物

1 はじめに

六糸丘遺跡は市之瀬台地の先端に位置している。市之瀬台地上には平岡・上市之瀬等の集落が存在し、平岡から東に広がる平坦面には縄文時代を中心として多くの遺跡が確認され、土器・石器が多数採集されている。

今回調査箇所事務所が、平坦面のほぼ中央にあったこともあり、発掘調査の合間をぬって事務所周辺の表面採集を行なった。主要には事務所前面の桑畠及び事務所から発掘現場へ至る道路沿いからであるが、片手間的に行なった事もあり、その精度は非常に粗いものであることはいうまでもない。しかし從来当地域における採集資料等の紹介がその予想される遺跡の存在に比し少なかつた事なども考え、今回資料として紹介することにした。本遺跡の報文と併わせ、活用していただければ幸いである。

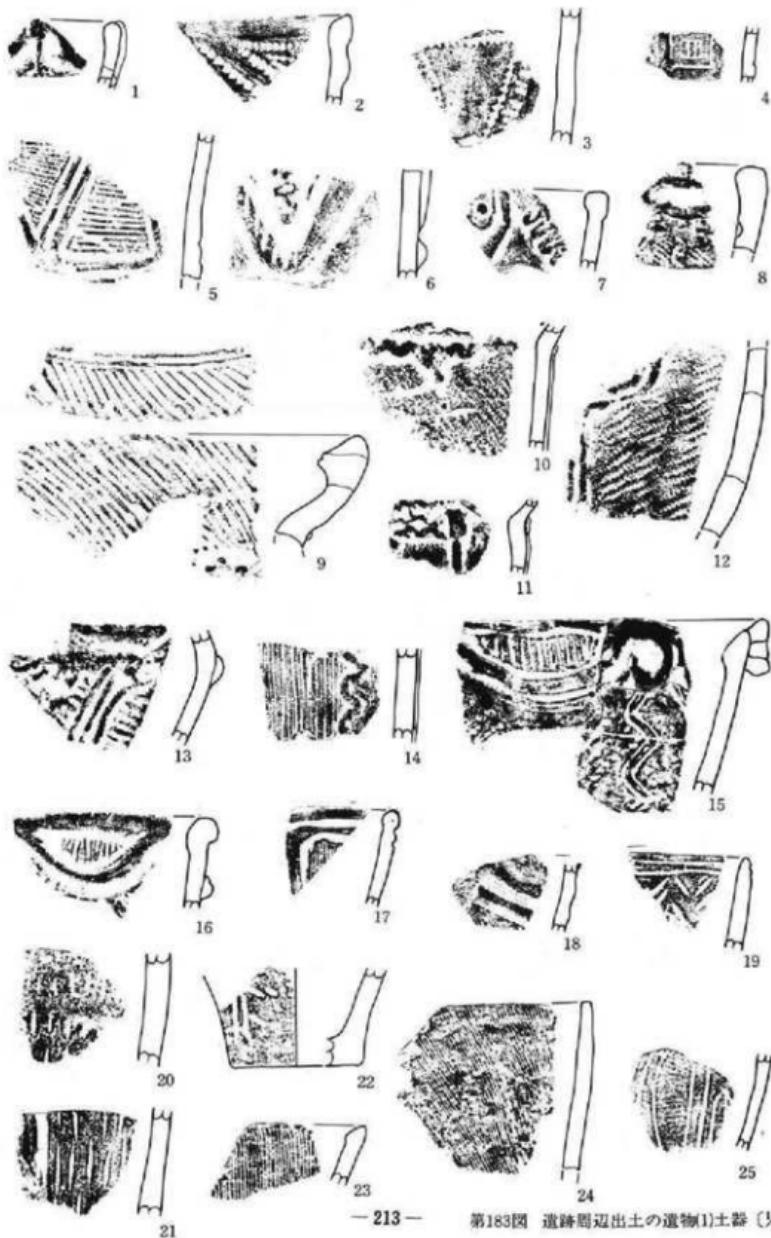
2 土 器 (第183図)

1は波状を呈する口縁部破片。口縁上部は一条の隆帯がめぐり、波状部からも短い隆帯が垂下する。茶褐色を呈し、胎土に砂粒・白色不透明粒子・石英を含む。器厚は6~7mmとやや薄手のつくりであり、早期末葉・神の木台式に相当するものと思われる。

2・3は三角押文(クサビ状文)が施されるもの、2は平縁の口縁部破片であり、三角形状に区画された隆帯に沿って角押状の押引文や三角押文が加えられる。外面茶褐色、内面くすんだ褐色を呈し、器面は横方向を中心とするていねいな調査が行なわれている。3は同様の胸部破片であり、三角押文とキャタピラ状の押文が併用される。ともに、中期前半・新道式に比定される。

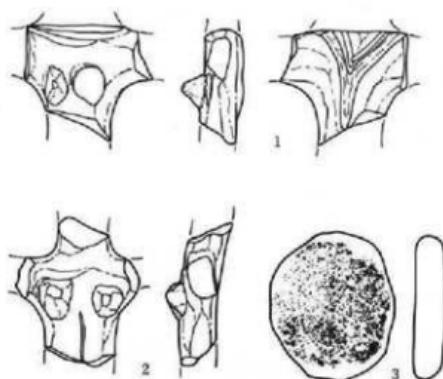
4~7は主に隆帯によって文様が構成されるものであり、4・5は区画文、6・7は曲線的な文様がそれぞれ施される。くすんだ褐色・暗茶褐色などを呈し、胎土に砂粒・白色不透明粒子を多く含む。器面は全体にザラザラするものが一般的であるが、4は内面を中心に研磨が加えられる。すべて中期前半・新道式に比定されよう。

8~24は中期後半・哲利式に比定されるものである。8は大きな突起状をなす口縁部破片であり、突起部に細かい粘土紐が貼付けられるほか、胸部には原体LIP単節繩文による結節繩文が施される。9はいわゆる「重弧文」が施された口縁部破片であり、頸部には細い粘土紐による波状文が加えられる。外面くすんだ褐色、内面明茶褐色を呈し、内面の横方向のていねいな器面調整が行なわれる。15は二条一組の細い隆帯により、弧状・渦巻状の区画文が施される口縁部破片。区画内に、継位の平行沈線が密に施されるほか、腹部には擦りの粗いRL単節繩文を施文として半段竹管による蛇行懸垂文が施される。色調は明茶褐色を呈し、胎土に砂粒・白色不透明粒子を含む。16・17も同様の口縁部破片であるが、17は沈線により区画文が描かれ、区画内には細かく



浅い条線が縦位に充填される。19は口縁上部に二条の沈線文がめぐり、胴部には「は」の字状の短沈線文が施される。くすんだ明褐色を呈し、胎土に砂粒・白色不透明粒子を含む。22は底径6.7cmをはかる底部破片。23・24は平縁の口縁部破片であり、彫状工具による縦位・斜位の条線文が密に施される。くすんだ褐色・暗褐色を呈し、胎土に砂粒・石英・金雲母・白色不透明粒子を多く含む。焼成はおおむねふつう。8~12は曾利II式、13・14は曾利II~III式、15・16は曾利III式、17・18は曾利IV式、19~22は曾利V式にそれぞれ相当する。23・24は曾利式の粗製的な土器であろう。

25は斜位に施されたLR単節縦文を地文として、多条の沈線による弧状の文様が描かれる胴部破片。沈線間の繩文は磨消される。色調は茶褐色、胎土に砂粒・石英・金雲母・白色不透明粒子を含む。焼成は良好とはいがたい。後期前半、堀ノ内式に比定される。
(百瀬 忠幸)



第184図 遺跡周辺出土の遺物 (2) 土製品(1分)

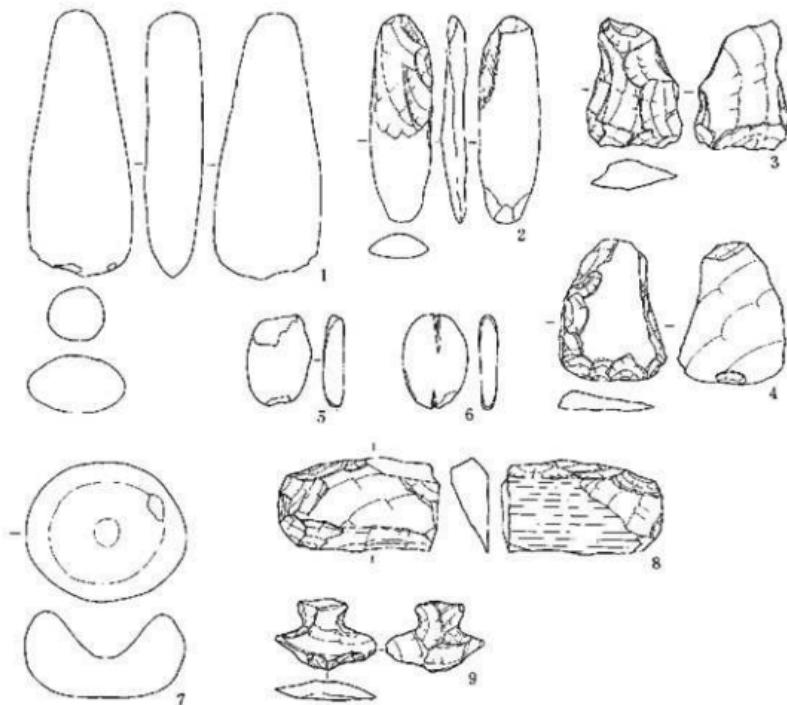
3 土製品 (第184図)

土偶2点が表掲されている。1は現在長4cm、最大幅4.6cmをはかる「胴部」破片。正面に乳房状の突起が貼付けられているほか、背面には「Y」字状の細い隆脊が施される。2も「胴部」のみを残す土偶片であり、最大長5cm、最大幅4.4cmをはかる。正面に乳房状の突起とともに「正中線」を表わすと思われる縦位の鋭い沈線文が施される。共に茶褐色・茶灰褐色を呈し、胎土に砂粒・白色不透明粒子を多く含む。焼成は良好とはいがたく、全体に粗くザラザラする。3は土製円盤である。径5cm弱で厚さ1cmを測る。縄文時代中期後葉に属するものである。
(百瀬 忠幸)

4 石 器 (第185図)

1. 磨製石斧、石質：緑色凝灰岩。器面全体に敲打痕がわずかに見られる。基部及び、その周辺は磨かれてはいない。刃部には刃こぼれがある。2. 打製石斧、石質：粘板岩。短冊形を呈し、全体に風化激しく剥離の状態が不鮮明なところが多い。3. 打製石斧、石質：砂岩。撥形を示す。4. 打製石斧、石質：砂岩。撥形を呈し、自然面を有する。5. 石錘、片面のみから長軸方向に縦かけのため打ちかきを入れている。6. 石錘、切目石錘。両面から切りこみを入れている。表面ともよく磨かれている。7. 凹石。8. 横刃形石器、石質：砂岩。節理面を有する。9. 石匙、石質：安山岩。

(大森 隆志)



第185図 漢跡周辺出土の遺物 (3) 石器(36、7一品)

5まとめ

以上、六科丘遺跡周辺で採集された、土器・石器等について簡単に説明した。採集品は図示した以外にも数多く、数回の表面採集でコンテナ2箱弱の遺物を採集した。採集品の時期は縄文時代中期中葉から中期末に至るもののが主流を占め、弥生時代以降のものはわずかに土器片数点である。

これは從来から指摘されてきた様に、市之潮台地上に於ける縄文時代遺跡の分布の濃密さを裏付けるものでもある。また六科丘遺跡から出土した縄文時代に属する遺物が、ビニール袋で数袋を数えたにすぎないことに比し、著しい差異を持つ。六科丘遺跡が自然条件・耕作等によって土砂の削半・流失が激しかったであろうことを考慮に入れても、当該期に於ける人々の遺跡選地の結果に因るものであろう事は想像に難くない。今回、採集された大量の遺物は台地平坦面に於ける遺跡の存在を示すと共に、台地前端円頂丘頂部に位置する、六科丘遺跡の縄文時代遺跡・遺物を検討するうえでも興味深い有り様といえ、その性格を逆に照射するものともいえよう。

註 萩原氏は六糸丘遺跡と同様、古地先端に位置する御料平遺跡を「御料平遺跡における……調査地点はいわゆる精神的な空間とみなされていた事を強く感ずる」と述べられている。(萩原他、1977)。また山本氏は牛石遺跡(都留市)・平須遺跡(中富町)・千居遺跡(静岡県富士宮市)などをあげられ、富士山を対象とする信仰を考えられている(山本、1984)。その当否は別として、六糸丘遺跡の縄文時代遺構を考えるうえでも魅力ある考え方である。

(百瀬 忠幸)

引用・参考文献

7

- 安達厚三・木下正史 1974 「飛鳥地域出土の古式土師器」 『考古学雑誌』 60-4 日本考古学会

石野博信 1975 「考古学から見た古代日本の住居」 『日本古代文化の探求一家一』 社会思想社

石野博信・鴨川尚功 1976 「御向」 奈良県教育委員会

 - 〃 1985 「貯蔵施設の三形態」 『古墳文化出現期の研究』 学生社
 - 〃 〃 「高倉の管理」 〃 〃
 - 〃 〃 「前期古墳周辺区画の系譜」 〃 〃

板橋区成増一丁目遺跡調査団 1981 「成増一丁目遺跡」 板橋区教育委員会

上田典男 1983 「縄文時代焼集落遺構の形態的把握」 『物質文化』 41 物質文化研究会

上田三平 1930 「銚子塚古墳附丸山塚古墳」 『文部省史蹟調査報告』 5 〔『中道町誌』に再録〕

上野晴朗他 1975 『中道町史』

植松章八・馬飼野行雄・渡井一信 1981 『月の輪遺跡群』 富士宮市教育委員会

大塚靖夫・北川吉明 1982 「集石遺構について」 『柏ヶ谷遺跡』 (江藤他) 海老名市柏ヶ谷遺跡調査団

大參義一 1967 「S字状口縁土器考」 『いちのみや考古』 13 宮考古学会

大參義一 1968 「弥生式土器から土師器へ」 『名古屋大学文学部研究論集』 47 名古屋大学文学部

小野山節 1970 「5世紀における古墳の規制」 『考古学研究』 16-3 考古学研究会

小野亮一 1968 「目黒身」 沼津市教育委員会

小堀一夫 1979 「縄文時代における焼石遺構」 『小田原考古学研究会会報』 8 小田原考古学研究会

加納俊介 1981 「月の輪遺跡群出土の土器」 『月の輪遺跡群』 (植松他) 富士宮市教育委員会

木下正史 1985 「高床倉庫の系譜をめぐって」 『日本史の黎明一八幡一郎先生頌寿記念考古学論集』 六興出版

橿原町誌編纂委員会 1966 「橿原町誌」 橿原町教育委員会

「橿原山の自然」編纂委員会編 1976 「橿原山の自然」 山梨県立巨摩高等学校

甲西町誌編纂委員会 1973 「甲西町誌」 甲西町教育委員会

神戸市教育委員会事務局社会教育部文化課 1975 「史跡五色塚古墳復元・修復事業概要」 神戸市教育委員会

小久保徹 1977 「弥生時代の大形住居について—南関東地方の実態と諸様相一」 『埼玉考古』 17号 埼玉考古学会

小坂井孝修他 1982 「多摩ニュータウン遺跡・第4分冊 No759遺跡」 (財) 東京都埋蔵文化財センター

小林広和 1978 「甲斐小平沢古墳の埴形と編年の位置」 『信濃』 30巻2分 信濃史学会

内

- | | | | |
|---------------------|------|-------------------------------|-------------------------------|
| 加納俊介 | 1981 | 「月の輪遺跡群出土の土器」 | 『月の輪遺跡群』(植松他) 富士宮市教育委員会 |
| 木下正史 | 1985 | 「高床倉庫の系譜をめぐって」 | 『日本史の黎明一八幡一郎先生頌寿記念考古学論集』 六典出版 |
| 攝影町誌編纂委員会 | 1966 | 『攝影町誌』 | 攝影町教育委員会 |
| 『櫛形山の自然』編纂委員会編 | 1976 | 『櫛形山の自然』 | 山梨県立巨摩高等学校 |
| 甲西町誌編纂委員会 | 1973 | 『甲西町誌』 | 甲西町教育委員会 |
| 神戸市教育委員会事務局社会教育部文化課 | 1975 | 『史跡五色塚古墳復元・修復事業概要』 | 神戸市教育委員会 |
| 小久保徹 | 1977 | 「弥生時代の大形住居について—南関東地方の実態と諸様相一」 | 『埼玉考古』17号 埼玉考古学会 |
| 小坂井孝修他 | 1982 | 「多摩ニュータウン遺跡、第4分冊 No759遺跡」 | (財) 東京都埋蔵文化財センター |
| 小林広和 | 1978 | 「甲斐小平式古墳の埴形と編年の位置」 | 『信濃』30巻2号 信濃史学会 |

- 〃 他 1979 「甲斐茶塚古墳」 山梨県教育委員会
- 〃 1980 「上の平」 山梨県教育委員会
- 〃 他 1981 「曾根丘陵の占墳群」 『一探訪 日本の古墳 東日本編』 有斐閣選書
12 有斐閣
- 〃 1985 「山梨県」 『古代学研究』 第105号 古代学研究
- 小林秀夫 1978 「合掌形石室の諸問題」 『中部高地の考古学』 I 長野県考古学会
- 近藤英夫他 1984 「椎子峯遺跡」 横浜新道三ツ沢ジャンクション建設予定地区遺跡調査報告書一 横浜新道三ツ沢ジャンクション遺跡調査会
- サ**
- 斎藤 進他 1983 「多摩ニュータウン遺跡・第5分冊 No740 遺跡」 (財)東京都埋蔵文化財センター
- 坂本美夫 1973 「山梨県内各地占墳出土遺物集成図」 『甲斐考古』 10-3 出梨県考古学会
- 〃 1978 「山梨県・曾根丘陵周辺地域の前期古墳等について」 『甲斐考古』 別冊
2号 山梨県考古学会
- 〃 1980 「川久保古墳の出土遺物」 『甲斐考古』 17-1 山梨県考古学会
- 〃 1983 「古墳よりみた古代甲斐國の成立と展開」 (発表要旨)
- 〃 1984 「山梨県」 『古墳時代土器の研究』 古墳時代土器研究会
- 〃 1985 「木心鉄板張輪轂」 『甲斐考古』 22-1 山梨県考古学会
山梨県埋蔵文化財センター第10集 「国指定史跡、銚子原古墳附丸山塚古墳一保存修理事業第1・2年次概報」 山梨県教育委員会
- 佐々木麻雄・鴨原靖彦 1985 「物見塚遺跡」 塙川村教育委員会
- 清水 博他 1984 「曾根遺跡」 椿町教育委員会
- 静岡県考古学会 1983 「弥生後期の集団関係」 『静岡県考古学会シンポジウム5』 静岡県考古学会
- 木木 健他 1979 「出梨県中巨摩郡敷島町金の地遺跡発掘調査中間報告」 『長野県考古学会誌』 33 長野県考古学会
- 〃 1980 「山梨県敷島町金の尾遺跡調査略報」 『長野県考古学会誌』 36号 長野県考古学会
- 杉山博久 1981 「東田原八幡遺跡」 東田原八幡遺跡調査団
- 杉山 誠他 1983 「三池平古墳丘発掘調査報告書」 清水市郷土研究会
- 瀬川裕一郎他 1978 「森井原遺跡発掘調査報告書1」 沼津市教育委員会
- 間根孝夫他 1974 「諏訪原遺跡」 松戸市教育委員会
- タ**
- 田代 孝・中山誠二 1984 「熊久保遺跡出土の弥生式土器」 『丘陵』 11 甲斐丘陵考古学研究会
- 田中義明 1979 「弥生期における耕地と集落」 『日本考古学を学ぶ(3)』 有斐閣
- 都出比呂志 1970 「農業共同体と首長権」 『講座日本史I 古代国家』 東京文学出版会
- ナ**
- 中田 美他 1982 神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告1 「向原遺跡」 神奈川県教育委員会
- 内藤 光・大塚初重 1961 「三池平古墳」 施原村教育委員会
- 長沢宏昌他 1984 山梨県埋蔵文化財センター調査報告第4集『豆塚遺跡』 山梨県教育委員会

会

- 永峯光一 1951 「古墳と環境—甲府盆地の場合—」 『国史学』 56
新津 健他 1981 「住吉遺跡」 甲西町教育委員会
仁科義男 1931 「大丸山古墳」 『山梨県史蹟名勝天然記念物調査報告』 5 (『中道町誌』に内録)
日本考古学協会 1954 「登呂」 日本考古学協会
能登 雄 1974 「発掘調査と遺跡の考察—いわゆる「性格不明の落ち込み」を中心として」
『信濃』 26-3 信濃史学会

八

- 橋本博文 1979 「甲斐の須恵器(1)・(2)」 『丘陵』 6・7号、甲斐丘陵考古学研究会
〃 1984 「甲府盆地の古墳時代における政治過程」 『甲府盆地: その歴史と地域性』
地方史研究協議会
萩原三雄他 1974 「京原」 山梨県教育委員会
〃 1977 「御料平遺跡」 早川町教育委員会
樋口清之他 1980 「土墳について」 『藤野台遺跡II』 藤野台遺跡調査会
藤森宗一 1939 「信濃下賀河原における土師器の様式」 『考古学』 10-11 東京考古
学会
文化庁・文化財保護部 1981 「全国遺跡地図 山梨県」 国土地理協会

マ

- 松浦有一郎他 1983 「物見塚」 柳形町教育委員会
御堂島正 1977 「集落にかかる諸問題」 『高松原』 (宮沢他) 長野県立飯田高等
学校
宮沢 寛・今井康博 1976 「縄文時代早期後半における土壙をめぐる諸問題—いわゆる落し
穴について—」 『調査研究集録』 第1冊 港北ニュータウン埋蔵文化
財調査団
森 和敏 1975 「六代町誌」
〃 1979 「岩清水遺跡」 山梨県教育委員会
〃 1980 「一城林遺跡」 山梨県教育委員会
百瀬忠幸 1985 「縄文時代の遺構と遺物」 『上の山遺跡』 (清水他) 柳形町教育委員会

ヤ

- 山田香代子 1978 「土壤」 『門田遺跡群 1978年度調査概報』 八王子門田遺跡調査会
山本寿々雄 1969 「山梨県の考古学」 吉川弘文館
〃 1984 「日本の古代遺跡 14 山梨」 保育社
〃 1980 「小平沢古墳(前方後方)と近在の方形周溝墓を考える上に」 『甲斐考
古』 17-1 山梨県考古学会
山本暉久 1979 「再堆積ロームを有する陥ち込みについて」 『上浜田遺跡』 神奈川県埋蔵
文化財調査報告15 神奈川県教育委員会
山下孝司他 1984 「坂井南遺跡」 五崎市教育委員会
山崎金夫 1978 「西田遺跡」 第1次調査報告書 山梨県教育委員会
遊佐和敏 1980 「所謂「帆立貝式古墳」の形態的分離について」 『古代』 68 早稲田大学
考古学会
〃 1982 「造り出し付円墳について」 『史学』 第52巻・第2号 三田史学会

湯川悦夫 1981 「月の輪遺跡出土土器」 「月の輪遺跡群」（植松他） 富士宮市教育委員会

米田明訓・保坂康大 1984 「久保原遺跡発掘調査報告書」 山梨県教育委員会

ワ

和島誠一・田中義昭 1966 「住居と集落」 「日本の考古学」 III (和島編) 河出書房

渡辺誠一 1984 「保ノ下遺跡」 山梨県教育委員会

写 真 図 版



六科丘遺跡遠望
(西から)



六科丘遺跡遠望
(東から)



2区 北東部の調査



2区 南西部の調査



作業風景
(3号住居址)



1号・2号住居址



3号住居址



4号住居址



5号住居址



6号住居址



右：8号住居址
左：8号住居址
遺物出土状況



9号住居址
1号小竪穴造構



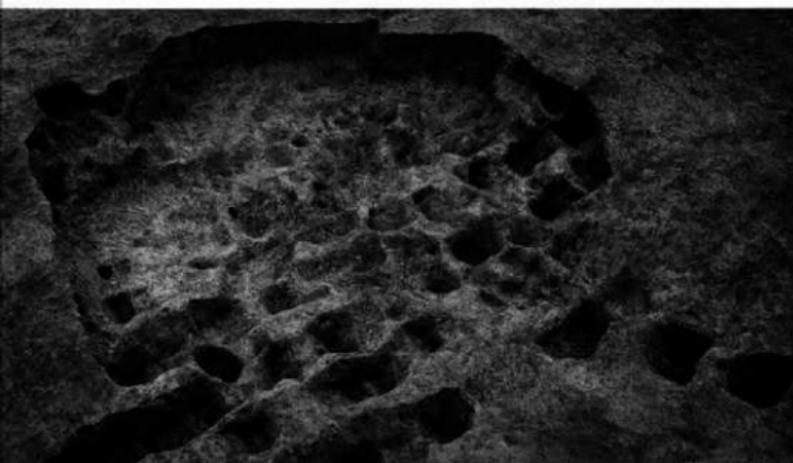
11号住居址



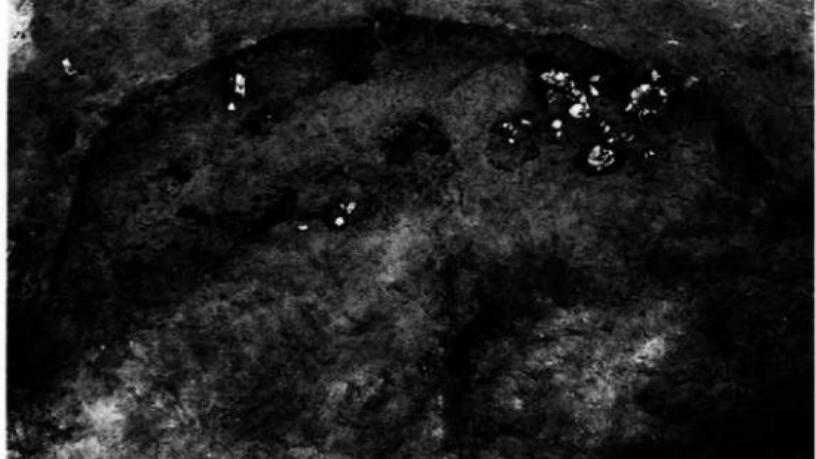
13号住居址



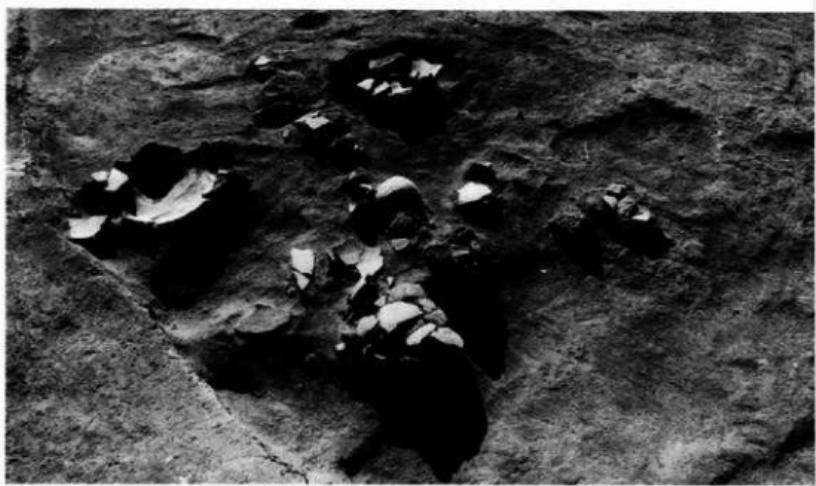
13号住居址
遺物出土状況



15号住居址崩り方



12号住居址



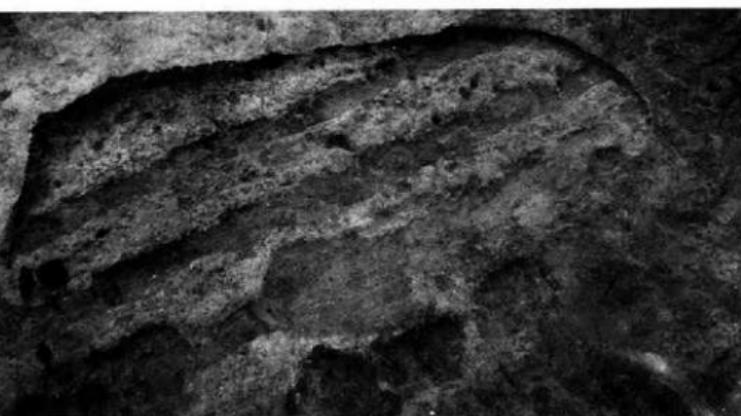
12号住居址
遺物出土状況



16号住居址



17号住居址



18号住居址



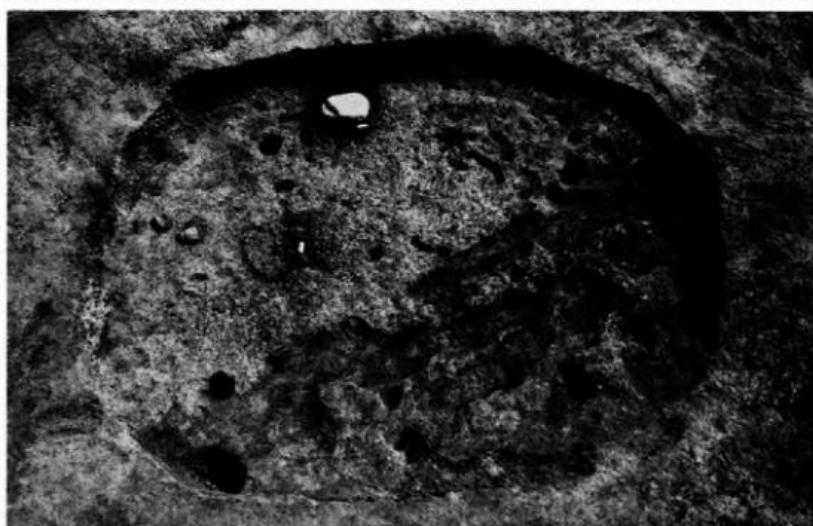
19号・20号住居址



21号・22号住居址



右：23号住居址炉
左：22号住居址
遺物出土状況



23号住居址



24号住居址
炭化材および
遺物出土状況

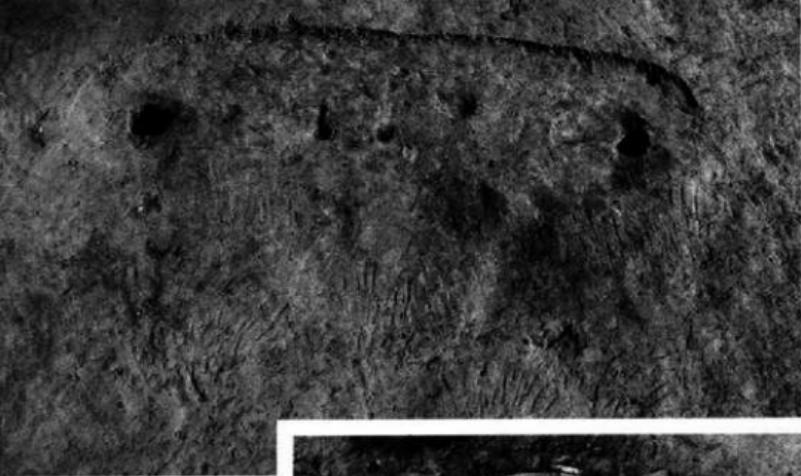


24号住居址
遺物出土状況



24号住居址





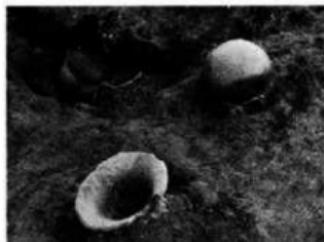
28号住居址



28号住居址
遺物出土状況



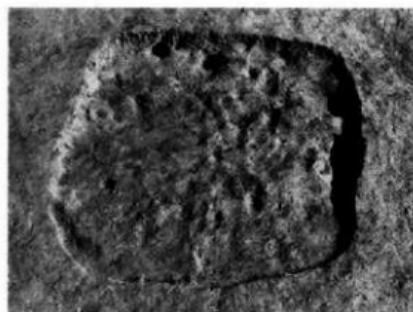
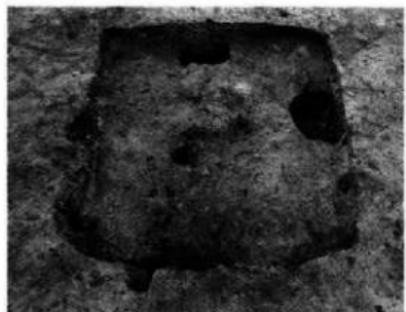
33号住居址
炭化材および
遺物出土状況



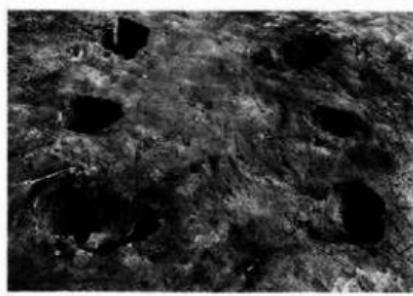
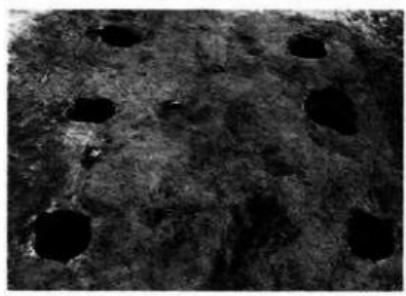
33号住居址
遺物出土状況



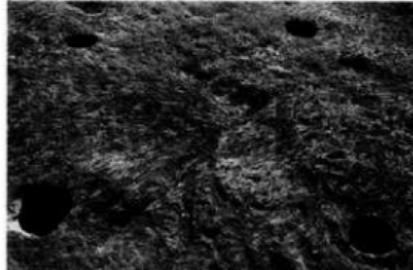
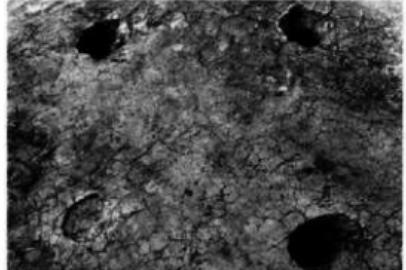
豊穴状造構
礫出土状態



左：1号豊穴造構
右：2号豊穴造構



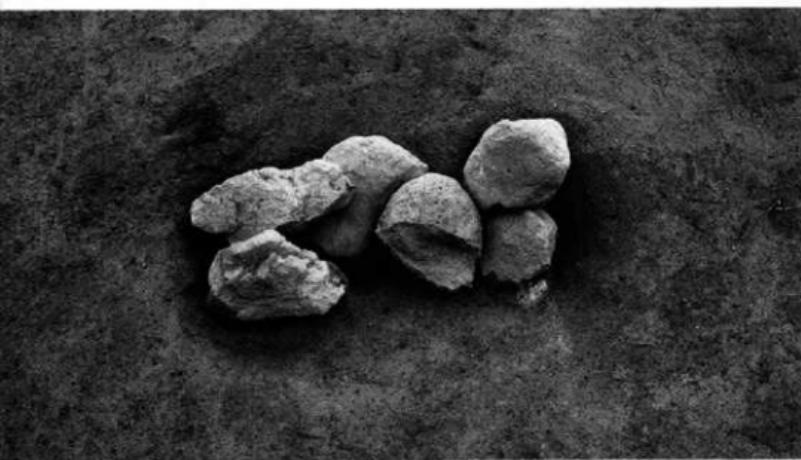
左：1号掘立柱造構
右：2号掘立柱造構



左：3号掘立柱造構
右：4号掘立柱造構



1号集石造構



2号集石造構



3号集石造構

4号集石遺構



5号集石遺構

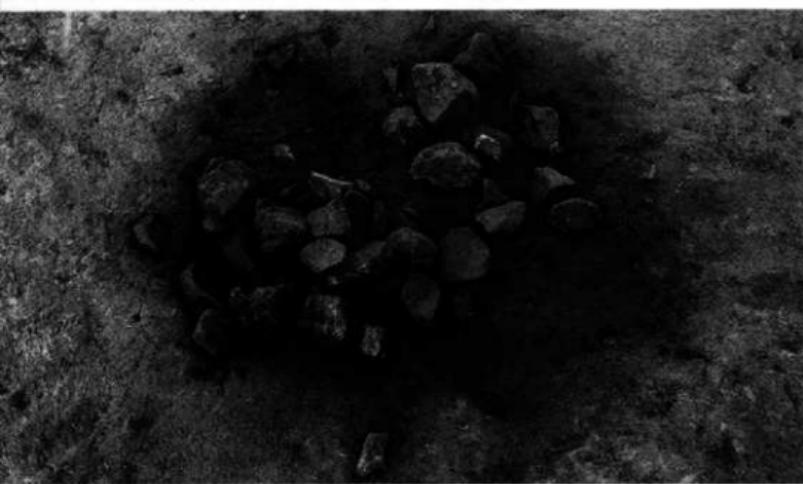


6号集石遺構

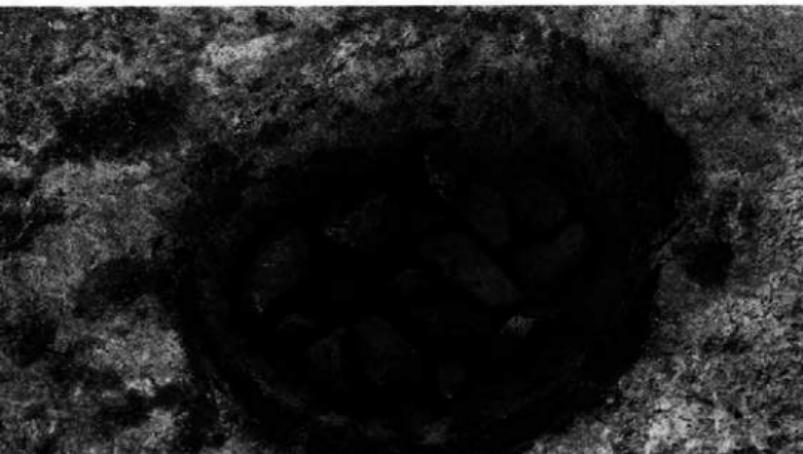




7号集石造構



8号集石造構上部



8号集石造構下部



9号集石遺構



石棒出土状況



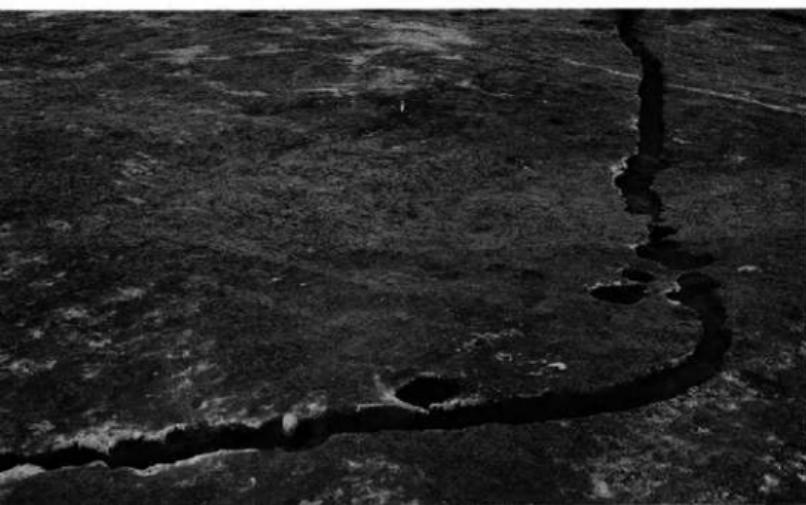
II区擴張区ビット群



2号溝状造構



2号溝状造構



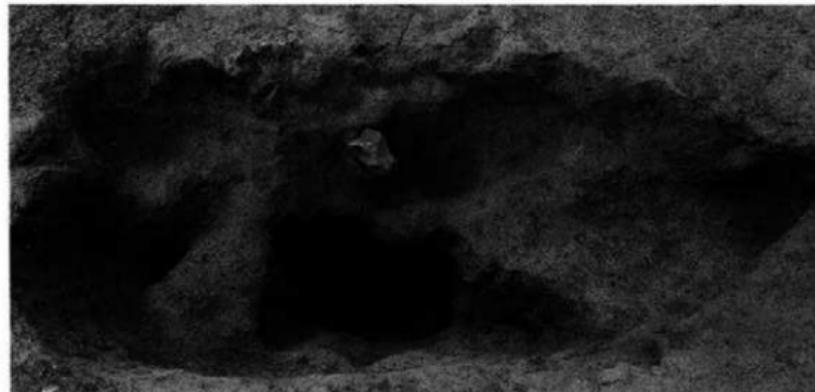
2号溝状造構



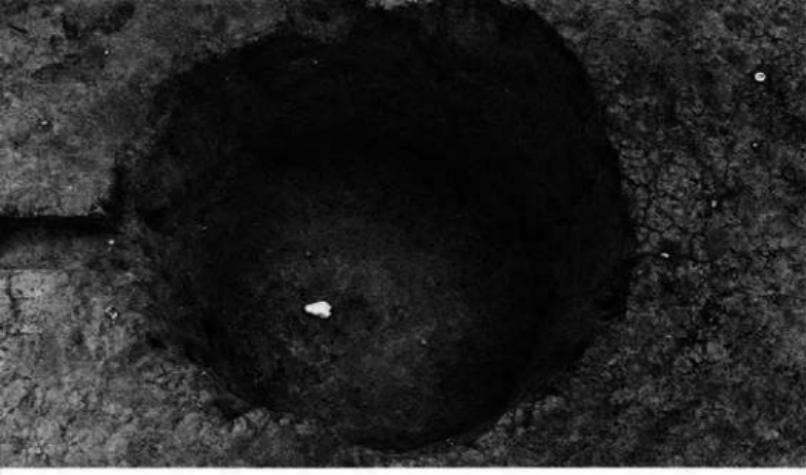
左：1号溝
右：3・4号溝



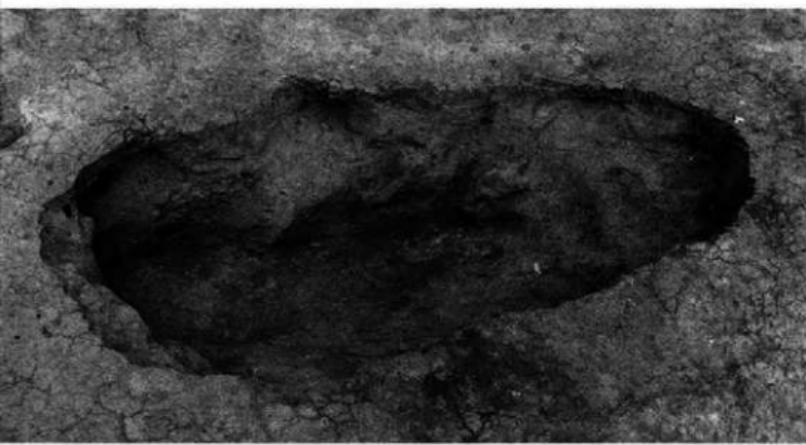
5号土壤



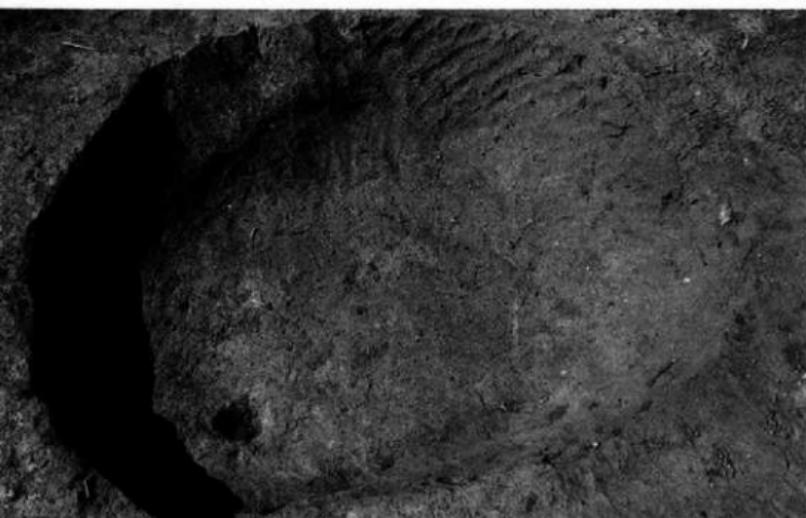
6号土壤



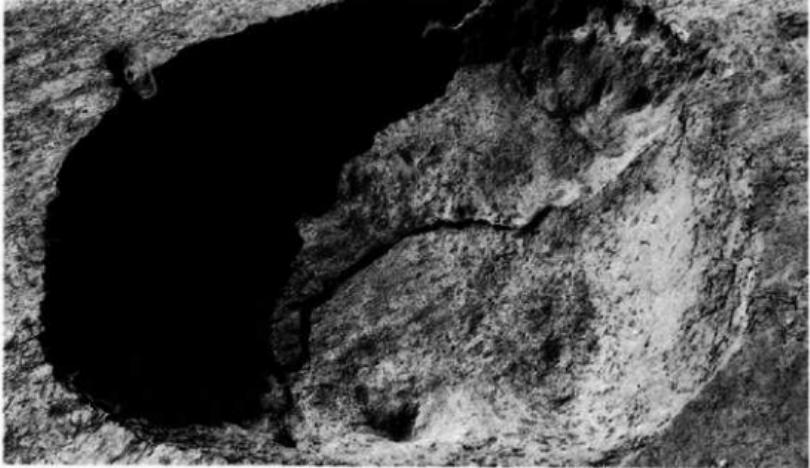
10号土壤



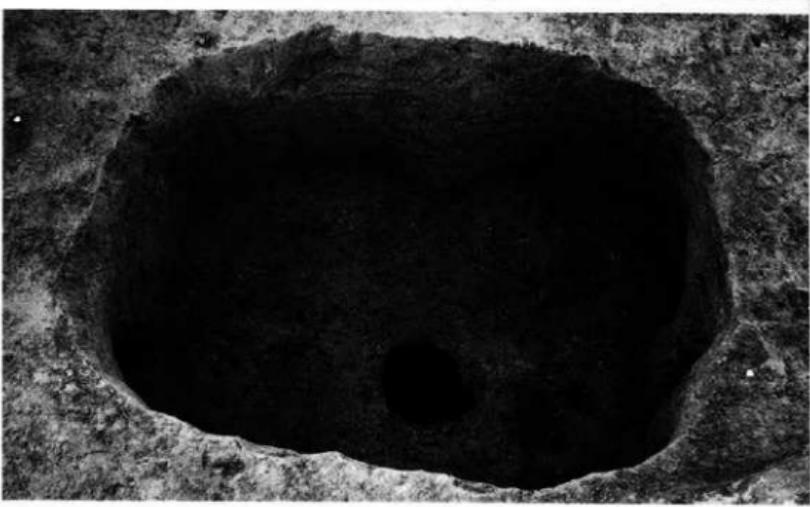
15号土壤



18号土壤



26号土壤



30号土壤



31号土壤



六科丘古墳
(南東から)



六科丘古墳
(南から)



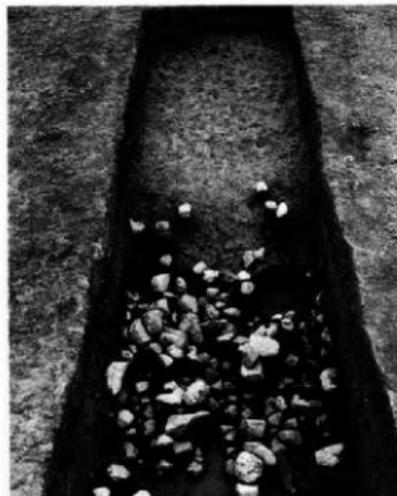
左1号トレンチ
右3号トレンチ



左5号トレンチ
右6号トレンチ



左7号トレンチ
右8号トレンチ





1



2



3



4



5



6

壺形土器：1，2—9号住居址，3—12号住居址，4，5—13号住居址，6—22号住居址



壺形土器：1～4—3号住居址，5、6—8号住居址，7—13号住居址，8—33号住居址



1



2



3



4



5



6

小形壺形土器：1—3号住居址，2—12号住居址，3、4—27号住居址，6—33号住居址
広口壺形土器：5—24号住居址



1



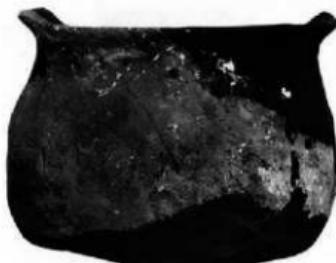
2



3



4



5



6



7



8

圆形土器：1—1号住居址，2—3号住居址，3、4—8号住居址，5、5—9号住居址，7、8—12号住居址



1



2



3



4



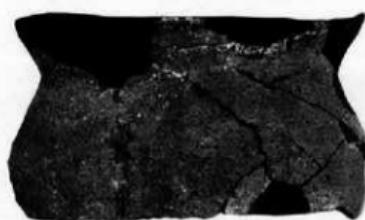
5



6



7



8

夔形土器：1, 2—13号住居址，3～7—24号住居址，8—2号小竖穴道構



1



2



3



4



5

ミニチュア土器：1—3号住居址，2—4号住居址，3—13号住居址，4—20号住居址
蓋—5—8号住居址



6

6—13丁区出土土器（カラワケ）

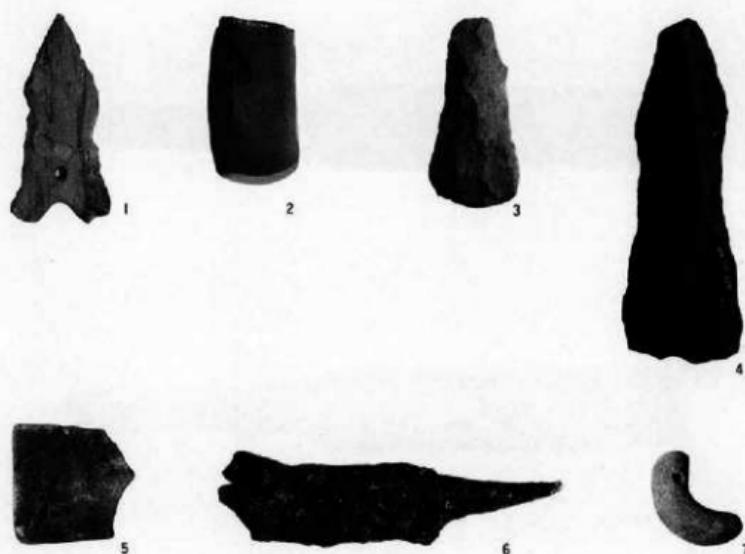


7



8

右—7号集石造構出土土器：左—27号土壤出土土器



弥生時代遺物 石器：1・2—3号住居址，3—6号住居址，4—20号住居址，5—24号住居址

鉄器(刀子)：6—31号住居址

勾玉：7—15号住居址



縄文時代遺物 石器：8—11L区出土，9—16K区出土，10—11—12—周辺地城より表採



1



1

古墳出土遺物

1. 鉄劍
2. 頸壺器・壺
3. 管玉



2



3

南形町文化財調査報告 No.3

六科丘遺跡

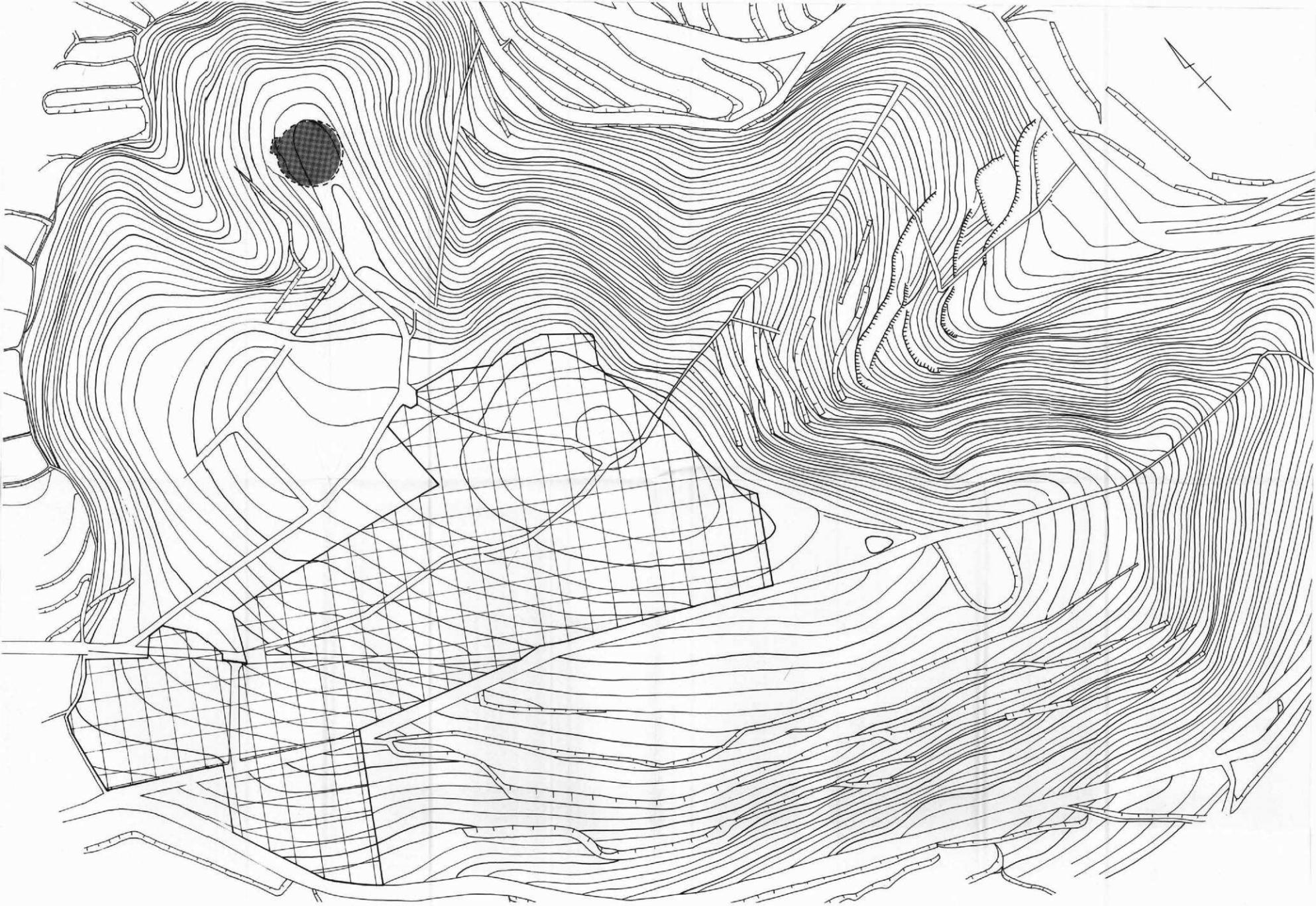
山梨県中巨摩郡南形町六科丘遺跡発掘調査報告書

昭和60年6月1日 印刷

昭和60年6月10日 発行

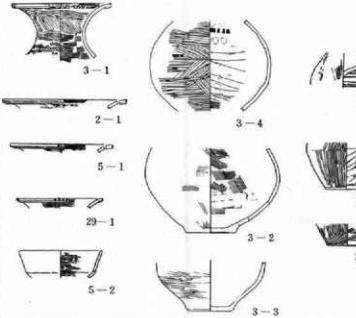
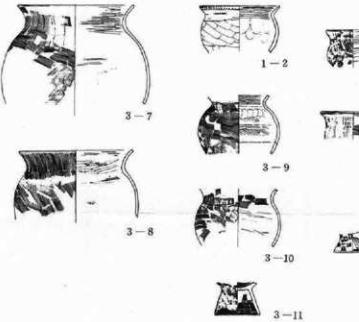
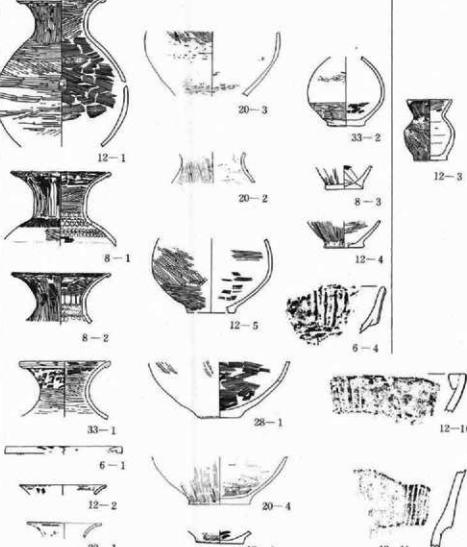
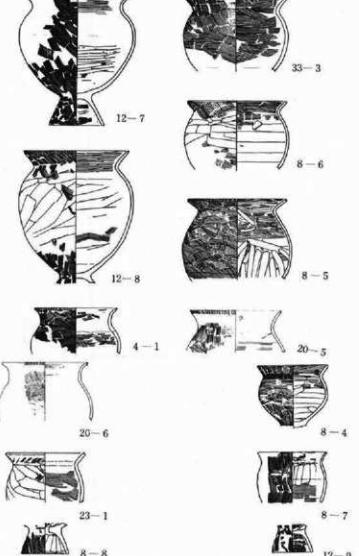
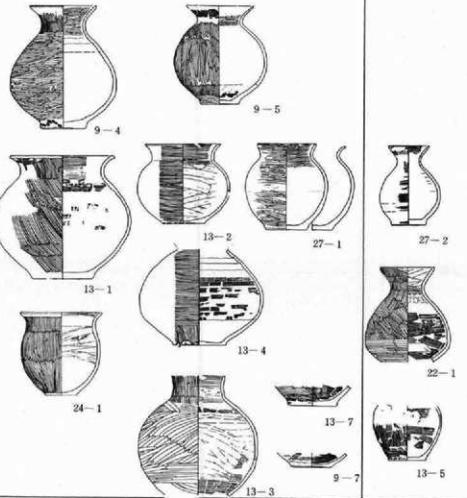
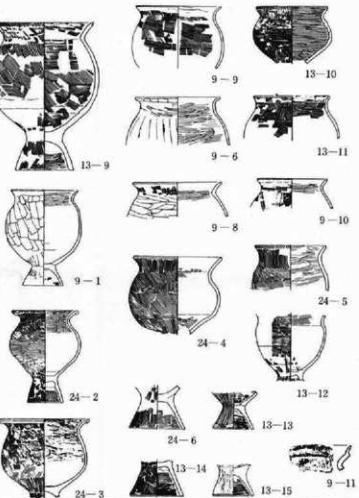
編集・発行 楠形町教育委員会
印 刷 ほおづき書籍(株)

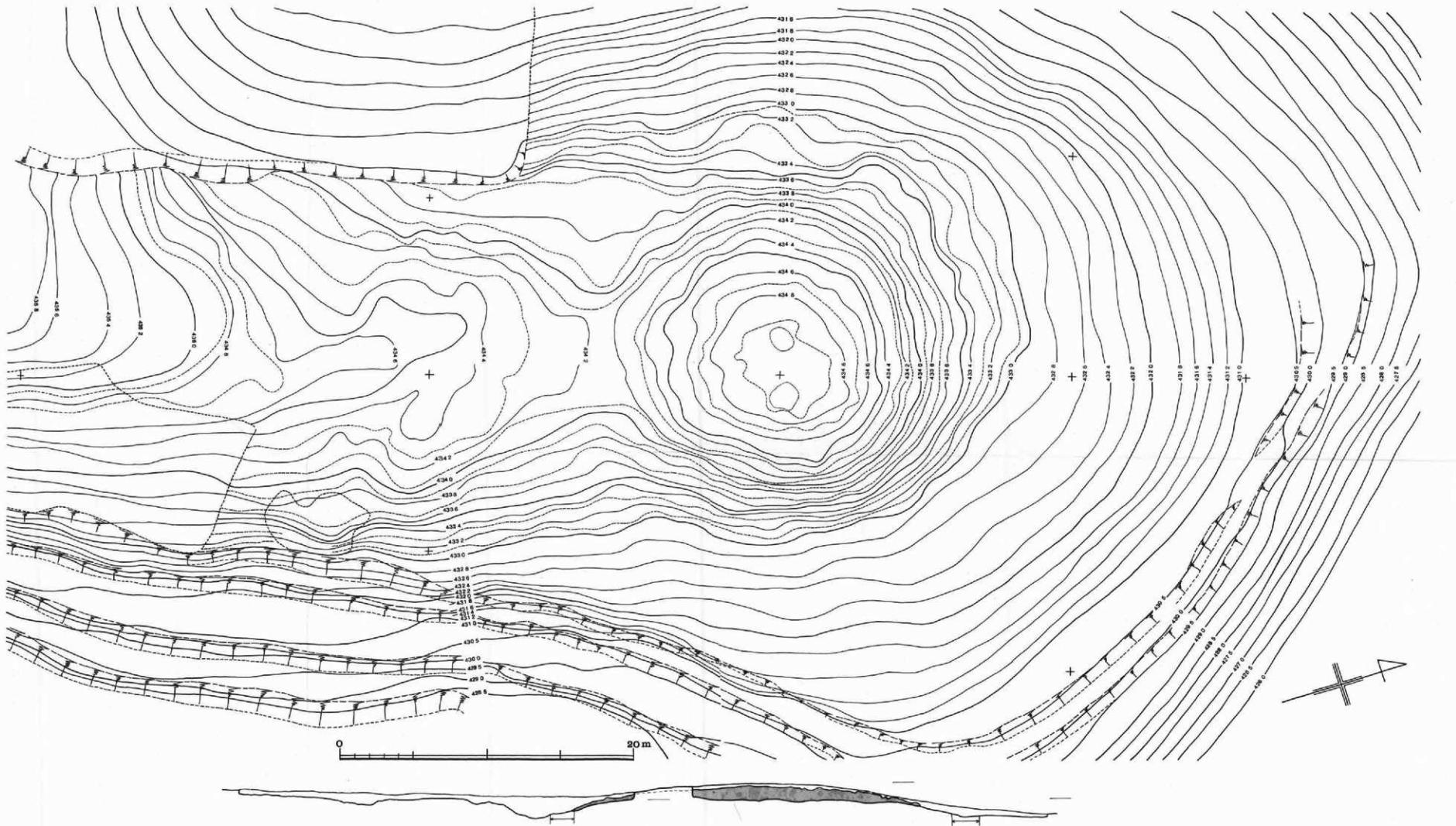
六科丘遺跡 附図



附図1 六科丘遺跡全体図〔1/1000〕

附図2 六科丘遺跡土器変遷図(%)

	蓋	小型壺	壺	鉢
I	 3-1 2-1 5-1 29-1 5-2 3-3 3-4 29-2 29-3 29-4	 3-5 3-6	 3-7 3-8 3-9 3-10 3-11 3-12 3-15 3-16 3-17	 32-1
II	 12-1 12-2 8-1 8-2 33-1 6-1 12-3 20-1 20-2 12-5 28-1 20-4 12-6 12-11	 12-8	 12-7 12-8 4-1 20-6 23-1 8-8 33-3 8-6 8-5 20-5 8-4 8-7 12-9	 8-10 20-7 4-2
III	 9-4 13-1 24-1 13-3 9-5 13-2 13-4 27-1 27-2 22-1 9-7 13-5	 22-1	 9-9 13-9 9-6 9-8 9-1 24-2 24-3 9-11 13-10 13-11 24-5 13-12 13-13 13-14 13-15	 13-16 13-17



附図3 古墳全体図

